

自律型学習者を育てるために 学校教育ができること

報 告 書

東京／自由が丘開催

開催日： 2021年 8月22日(日)

会場： 産業能率大学 自由が丘キャンパス

主催： 産業能率大学

後援： 東京都教育委員会 神奈川県教育委員会 埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会

岡山開催

開催日： 2021年 8月 8日(日)

会場： 三木記念ホール（岡山県医師会）

主催： 産業能率大学

後援： 岡山県教育委員会 広島県教育委員会 香川県教育委員会
島根県教育委員会 鳥取県教育委員会

はじめに

本報告書は、2021年8月8日（日）岡山、8月22日（日）東京・自由が丘で開催したアクティブフォーラムの各セッションを講演録としてまとめたものです。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により東京での開催を見送るという残念な年になりました。今年度は、東京と岡山での開催を企画し、企画立案時よりオンラインとのハイブリッド開催を視野に検討して参りました。4月以降終息の気配もないまま、実施時期に近づき、7月からは再度緊急事態宣言が発表されるなど予想以上に環境は悪化しました。

今回の企画は、このような事態を想定し、本学のフォーラムでは定番となる教科研究ワークショップを企画せず、メイン会場での講演と事例報告というレクチャー中心としました。結果として、当初は会場参加のみと考えた岡山開催がハイブリッド開催となり、自由が丘については会場参加を取りやめ、オンラインのみの開催としました。

今年度のアクティブフォーラムのテーマは、昨年度に引き続き「自律型学習者を育成する」であり、そのために学校や教員は何ができるのかを問い、考える場としました。石井先生（京都大学大学院）の講演で問題提起をお願いし、最後は工藤校長先生（横浜創英高等学校）による麴町中学校での実践例を踏まえた講演で締めました。

岡山開催は、急遽ハイブリッドでの実施としたのですが、音声も途切れることなく、ブレイクアウトルームでの話し合い含め、ストレスなく参加できたと称賛の声を頂けました。これも講演者とファシリテーター、参加者のフォーラムへの参画意欲が一つに繋がった成果だと理解しております。当日夜には Facebook に「神会」だったと投稿してくださる先生もあり、企画者としてこれほどの賛辞はありませんでした。この場を借りて心より感謝申し上げます。

また、自由が丘開催では、東京地区の感染者急増により急遽オンラインのみの開催としました。結果、登壇者もご自宅から参加となり、大学ではスタッフのみがこじんまりと画面を見守り、スケジュールの調整をするという実施となりました。これまで多くの先生方とフォーラムでお会いするのが「当たり前」と思っていたのが、とてつもなく「偉大な」ことであったと痛感した次第です。

フォーラムにご登壇下さいました石井英真先生、和田美千代先生、吉本悟先生、山下真司様、荒井優先生、小野澤信一先生、工藤勇一先生、本当にありがとうございました。また、ファシリテーターを引き受けてくださいました三浦隆志先生、皆川雅樹先生、米元洋次先生、心より御礼申し上げます。そして何よりも会場およびオンラインでご参加くださいました先生方あるいは教育、行政の関係者の皆様には感謝の念を禁じえません。深く感謝申し上げます。

次年度は長崎と自由が丘で開催する予定です。現時点では、会場・オンラインとのハイブリッド開催とし、教科研究ワークショップも復活したいと考えております。終了後の懇親会も実施できるような環境となっていることを切に願うばかりです。皆様とお会いできることを心より願っております。

最後に、本報告書が教育改革の一助となることを祈念しております。これからも教育現場に寄り添えるフォーラムとなるよう努力して参ります。

産業能率大学 入試企画部長
林 巧 樹

教育改革推進フォーラム 自律型学習者を 育てるために 学校教育ができること

in
岡山
8/8

教師が教えることに頼った学校教育から、生徒の主体性を育み、自律型学習者となるためには何が必要なのか？生徒が不透明かつ多様な社会で生きていく力を身に付けるための学校教育のあり方について皆様と考察したいと思います。自律型学習者に育てるには、生徒の学びたいという気持ちを信じる必要があります。そして、学校そのものが自律した教員集団となる必要があります。また、GIGAスクール構想により、1人1台の端末と高速通信環境が整備されつつあり、「個別最適化され、創造性を育む教育」の実現が期待されてもいます。今回のフォーラムでは、「考える力を育てるために何が必要か、ICTにより学校教育は何を変え、何を变えてはいけないのか」について皆様と一緒に考えていきたいと思います。

日程 2021年8月8日(日)
時間 12時30分～18時
会場 三木記念ホール(岡山県医師会)
岡山県岡山市北区駅元町19-2
参加費 2,000円
※事前のクレジットカード決済または銀行振込となります。

定員 会場参加：130名 ※定員を超えた場合、オンラインでも開催します
主催 産業能率大学
後援 岡山県教育委員会 広島県教育委員会 香川県教育委員会
島根県教育委員会 鳥取県教育委員会 兵庫県教育委員会
(申請中)

Program

プログラムの構成は、基本的に講演－参加者討論－質疑という流れで構成しています。なお、安全に配慮し、1回の討論時間は15分以内とします。

講演 01 session	学校ですべきこと、できることは何か？ ～真に考える力を育てるには～	【講演者】 京都大学 大学院教育学研究科 准教授	石井 英真 先生
講演 02 session	ICTの船を編む ～福岡西陵高校での実践から～	【事例報告】 福岡市立福岡西陵高等学校 教諭 【コーディネーター】 福岡市立福岡西陵高等学校 校長	吉本 悟 先生 和田 美千代 先生
講演 03 session	キャリアガイダンス7年6か月の編集を通じて、改めて伝えたい。 ～未来の学校は“今日”の中にある～	【講演者】 リクルート Ed-tech 総研所長 前キャリアガイダンス編集長	山下 真司 氏

Facilitator

(セッション1～セッション3)

【会場ファシリテーター】

授業デザイン研究所代表
元岡山県立林野高等学校 校長

三浦 隆志 先生

【オンラインファシリテーター】

産業能率大学 経営学部 准教授

皆川 雅樹

※プログラムのテーマ等は変更になる可能性があります

※今後の新型コロナウイルスの状況によっては、開催方法を全てオンラインに変更する可能性があります

**お申込み
お問い合わせ**

お問い合わせ

産業能率大学 フォーラム・セミナー事務局(企画課)

TEL.03-3704-0731

Email: kikaku@hj.sanno.ac.jp

〒158-8630 東京都世田谷区等々力6-39-15

お申込み

ホームページよりお申し込みいただけます。右のQRコードからアクセスしてください。

【申込締切】8月3日(火)15時まで



<https://www.sanno.ac.jp/teachers/okayama2021.html>

第14回キャリア教育推進フォーラム

自律型学習者を育てるために 学校教育ができること

8/22 (日)
12:30～18:30

<ねらい>

教師が教えることに頼った学校教育から、生徒の主体性を育み、自律型学習者となるためには、何が必要なのか？

生徒が不透明かつ多様な社会で生きていく力を身に付けるための学校教育あり方について皆様と考察したいと思います。

日本の先生方の教える力は世界に誇れるものです。しかし、これから子供たちに求められる力は間違いなく「自分で考える力」です。

今回のフォーラムでは、生徒が自ら考え、学ぶ力を育てることをテーマとし、事例を参考に講演者、参加者と一緒に考える機会としたいと考えます。

<プログラム>

【セッション1】 教員集団の自律とチームビルディング

講演者 荒井 優 先生

学校法人札幌慈恵学園 副理事長・法人本部長、札幌新陽高等学校 前 校長

【セッション2】 都立高校の挑戦！コラボ授業で変わる授業、 “ごっこ”が“リアル”になる瞬間 ～格闘英語の実践から～

事例報告 小野澤 信一 先生 東京都立富士高等学校・附属中学校 教諭

【セッション3】 自律する子の育て方

講演者 工藤 勇一 先生 横浜創英中学・高等学校 校長

【セッション4】 リフレクション

オンラインファシリテーター 皆川 雅樹 産業能率大学 経営学部 准教授
米元 洋次 産業能率大学 経営学部 講師

セッション1～3は各100分を想定。基本的に講演－参加者討論－質疑という流れで構成します。

セッション4は20分程度を予定しています。

※感染症対策として、1回の討論時間は15分以内とします。

<開催概要>

- 日時 2021年8月22(日)12:30～18:30
- 会場 産業能率大学 自由が丘キャンパス
- 定員 オンライン：120名程度
- 参加費 2,000円

申し込みはコチラ



<https://www.sanno.ac.jp/teachers/jiyugaoka2021.html>

■お問い合わせ先

フォーラム・セミナー事務局（企画課） **TEL03-3704-0731** 受付時間 9:00～17:00（土日祝日を除く）



視点をつくる、提言する

産業能率大学

経営学部／自由が丘キャンパス
■経営学科 ■マーケティング学科

情報マネジメント学部／湘南キャンパス
■現代マネジメント学科

講演者プロフィール（敬省略）

■石井 英真 京都大学 大学院教育学研究科 准教授

日米のカリキュラム研究、授業研究の蓄積に学びながら、学校で育成すべき資質・能力の中身をどう構造化・モデル化し、それらを実質的に実現しうるカリキュラム、授業、評価をトータルにどうデザインしていけばよいのかを考えている。小・中・高の教育現場の先生方と一緒に、授業づくりや学校改革にも取り組んでいる。日本教育方法学会理事、日本カリキュラム学会理事、文部科学省「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員。「未来の学校 ポスト・コロナの公教育のリデザイン」（日本標準）など著書多数。

■吉本 悟 福岡市立福岡西陵高等学校 教諭

福岡市 ICT 教育特別研究員

福岡市立中学校の国語科教諭、国立大附属中学校の研究主任、教頭を経験後、現任校へ着任。「教える」から「自ら学ぶ」への学習のパラダイムシフトと生徒主体の授業を求めて ICT 活用を始め、2017 年にアップルが認定する教育分野のイノベーターである Apple Distinguished Educator (ADE) に認定される。GEG Fukuoka City 共同リーダーも務め、20 年 3 月に全国一斉休校になった際は、ウェブサイト「休校を乗り越える ICT のある学び」を立ち上げ、全国の多くの教員から実践例などが寄せられた。20 年度の文部科学大臣優秀教職員表彰を受け、受賞者代表挨拶を行った。

■和田 美千代 福岡市立福岡西陵高等学校 校長

平成 6 年福岡県立城南高校で、生徒主体の進路学習ドリカムプランを企画開発、キャリア教育の先進事例として全国的注目を集める。城南高校には教諭教頭校長として計 21 年勤務。文部科学省のキャリア教育関係の委員を務め、学習指導要領特別活動の解説にも携わる。平成 27 年から 2 年間、福岡県教育指導部長として、新たな学びプロジェクトチームを率い、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の普及啓発の仕事をする。福岡県教育庁高校教育課主幹指導主事を経て、平成 30 年度から城南高校校長。ラストの年に ssh3 期の指定を受ける。福岡県教職員を定年退職後、福岡市立福岡西陵高校校長。着任 2 日目にオンライン学習開始を宣言、全国に先駆けて公立高校でのオンライン学習をスタート、多くのメディアで報道された。西陵の職員からは黒船と呼ばれている。現在は校内の ICT 化を推進中。

■山下 真司 リクルート Ed-tech 総研 所長

(前・キャリアガイダンス編集長)

1967 年大阪府生まれ。1990 年（株）リクルート入社。

『就職ジャーナル』編集企画、「リクルートナビ」編集長、人材採用ソリューション営業、「リクルート進学ネット（現・スタディサプリ進路）」ならび「リクルート進学ブック（現・スタディサプリ進路 進学事典）」編集長、メディアプロデュース部部長、事業企画室長、進路サポート部部長などを経て、2013 年 10 月～2021 年 3 月まで「キャリアガイダンス」編集長。2021 年 4 月より現職。

■荒井 優 学校法人 札幌慈恵学園 副理事長・法人本部長

1975 年札幌市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。株式会社リクルートなどを経てソフトバンク株式会社社長室配属。東日本大震災を機に、孫正義氏が行う復興支援活動の責任者を任される。2016 年 2 月に札幌新陽高等学校校長に就任。

就任以降、「本気で挑戦する人の母校」を掲げて札幌新陽高校に ICT の導入、探究コースの設置や働き方改革の実践などを行い、札幌のみならず日本全国の高校教育界に新しい風をもたらしました。2021 年 4 月より現職。

札幌新陽高等学校 前 校長 / 学校法人 東明館学園 東明館中学校・高等学校 理事長 / 情報経営イノベーション専門職大学 超客員教授 / 札幌大学・札幌大学女子短期大学部 評議員 / 株式会社シーラクス 社外取締役 / 特定非営利活動法人キッズドア アドバイザー / 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会 委員

■小野澤 信一 東京都立富士高等学校・附属中学校 英語科主任

グローバル・スマート開発部主任

ドイツ生まれ、韓国人の父と日本人の母をもつ日韓のハーフ。小中を日本で過ごし、高校から渡米、現地校を卒業。大学から日本に戻り、在学中オーストラリアへ短期留学。多様性が当たり前の環境で育った後に縁あって日本の公教育に従事。

現場で遭遇した昔と全く変わりのない画一的な教育スタイルに強烈な違和感を抱き、教育界にこそ破壊的イノベーションが必要だと考え、現場の最前線で日々孤軍奮闘。

4 択を当てる受験英語ではなく、自分の意思を力技で伝える格闘英語を生徒に届け、「英語」が理由でナメられない日本人の育成を目指す。

直近のプロジェクトは「コラボ授業」。オンラインで他県や世界の学校の生徒同士を繋げることで、生徒による「学びの自動運転」を仕掛けている。コロナという外圧でようやく原始的から電子的に変わり始めている教育現場のデジタル化を追い風に、全都立高校を繋ぐ「メガ都立構想」で都立高校のリバイバルを狙う English Educator。

■工藤 勇一 横浜創英中学・高等学校 校長

学校法人堀井学園 横浜創英中学・高等学校 校長 2020 年 4 月から現職)

東京理科大学理学部応用数学科卒業、公立学校教員、東京都教育委員会、新宿区教育委員会教育指導課長、千代田区立麴町中学校 校長 (2014 年 4 月～ 2020 年 3 月)

麴町中学校在職中、学校運営に全教職員、生徒・保護者を当事者として巻き込みながら、形骸化した教育活動をスクラップし、再構築した。

宿題や定期考査の全廃、固定担任制の廃止、服装頭髪指導の廃止などを行う。

内閣官房 教育再生実行会議委員

経済産業省「未来の教室と EdTech」研究会委員

主な著書

- 学校の「当たり前」をやめた。-生徒も教師も変わる！(時事通信社)
- 麴町中学校の型破り校長 非常識な教え (S B 新書)
- 麴町中学校長が教える 子どもが生きる力をつけるために親がで きること (かんき出版)
- きみを強くする 50 のことば (かんき出版)
- 学校の未来はここから始まる 学校を変える、本気の教育論議 (共著 教育開発研究所)
- 最新の脳研究でわかった！ 自律する子の育て方 (共著 S B 新書)

もくじ

- 『よい授業』をデザインするためのツボ
～ICT 活用でも深い学びを実現するには～」・・・・・・・・・・ 9P
京都大学 大学院教育学研究科 准教授 石井 英真
- 「ICT の船を編む ～福岡西陵高校での実践から～」・・・・・・・・ 39P
福岡市立福岡西陵高等学校 吉本 悟
福岡市立福岡西陵高等学校 校長 和田 美千代
- 「未来の学校は“今日”の中にある
～キャリアガイダンス 7 年 6 か月の編集を通じて、改めて伝えたい～」・・・・・・・・ 67P
リクルート Ed-tech 総研 所長 山下 真司
- 「教員集団の自律とチームビルディング」・・・・・・・・・・ 101P
学校法人札幌慈恵学園 副理事長・法人本部長 荒井 優
- 「都立高校の挑戦！ コラボ授業で変わる授業 “ごっこ” が “リアル” になる瞬間
～格闘英語の実践から～」・・・・・・・・・・ 125P
東京都立富士高等学校・附属中学校 小野澤 信一
- 「自律する子の育て方」・・・・・・・・・・ 157P
横浜創英中学・高等学校 校長 工藤 勇一

教育改革推進フォーラム岡山 Session1

京都大学 大学院教育学生研究科 准教授

石井 英真 先生

「よい授業」をデザインするためのツボ
～ICT 活用でも深い学びを実現するには～

- 1 自己紹介
 - 2 これまでの政策の動きと、ブレないための捉え方
 - 3 コロナ禍が投げかけているもの
 - 4 改革に踊り揺れる「授業」、二項対立の裏で進む手法主義
 - 5 授業をめぐる二項対立図式の落とし穴
 - 6 「探究」するとはどういうことか？
 - 7 ICT はどのように溶け込めるのか？
 - ①GIGA スクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点 その①
 - ②GIGA スクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点 その②
 - 8 「個別最適な学び」をめぐる論点
 - 9 ICT で学びの質を追求していく
 - ①ICT で学びの質を追求するために その①
 - ②ICT で学びの質を追求するために その②
- 【質疑応答】

「よい授業」をデザインするためのツボ
～ICT 活用でも深い学びを実現するには～
京都大学 大学院教育学生研究科 准教授
石井 英真

1 自己紹介

京都大学の石井です。よろしくお願いします。今日はトップバッターということで、「**よい授業をデザインするためのツボ ～ICT 活用でも深い学びを実現するには～**」というタイトルでお話しさせていただきます。今回この「ICT 活用でも」ということですが、「ICT 活用だからこそ」深い学びというふうに考えていただけたらいいんじゃないかなと思っています。基本的にはこのスライドに沿って、でも限られた時間ではありますので、ポイントを絞ってお話ししていこうと思っています。私のこのスライドはかなり字も多いですし、さらに枚数も多いので、これを全部さらっていく感じというよりも、復習用の教材ぐらいに思って、後で見直していただけたらと思います。ポイントになるスライドに立ち止まりながらやっていこうと思っていますのでよろしくお願いします。

はじめは私の自己紹介ということで、教育方法学が専門でして、「何のために何をどのように教え学ぶのか」、そして「どう評価するのか」ということをやってきました。特に「学力」という言葉にこだわっているのは、学校でこそすべきこと、できることですね。まさにこのコロナ禍の中で学校の機能とか役割とか、強みも弱みもその辺も問われているところかなと思いますので、学校って万能ではないけども、だけど「たかが学校、されど学校」というふうに思って研究しています。お医者さんでいうと私は専門医であると同時に町医者でありたいというふうに思ってやってきました。いろいろと現場の先生方とも一緒にやってきて、会場にいらっしゃる先生方にも何人かは力添えをいただいていた、現在『高等学校 真正（ホンモノ）の学び 授業の深み』という本をつくろうと準備しているんですが、すんでのところでストップしています。もう少ししたら出そうと思っていますので、出版されたら手にとっていただけるとありがたいと思います。

基本的には専門医としての顔というのは『現代アメリカにおける学力形成の展開』というテーマの書籍でまとめているような内容です。それこそパフォーマンス、評価とか、ルーブリックとか、最近だと国際バカロレア（IB）で注目されている概念型カリキュラムとか、最近は中学受験では思考コードに基づく何か新しい尺度があります。それはブルームのタキソノミーに基づいていると言われているわけですが、そのタキソノミーなどを全部『現代アメリカにおける学力形成の展開』では検討しています。私は日本でも多分唯一と言っていいタキソノミー、目標分類学の研究者なんですね。目標と評価に絡んで、まさに最近いろんな流行り言葉で出てきているもののルーツや、その意義と課題については、だいたい比較検討してきました。後は全国の先生方と授業づくりを軸にしながらの学校改善をやってきたということで、『授業づくりの深め方』、つま

り授業づくりの暗黙知を言葉にするような仕事もしてきました。

今回の「よい授業デザインをするためのツボ」というのは、この『授業づくりの深め方』という本のサブタイトルから取っているわけですが、今回はこの本の内容というよりはむしろ『未来の学校』という本の内容がメインです。この本は1年ほど前に出しましたが、要はこのコロナ禍の中で個別最適化やICTなどいろいろ言われるわけですが、このコロナ禍の先の学校の在り方をどう考えていけばいいのかということを書いています。その他、学習評価に関しても『ヤマ場をおさえる学習評価』という本が小学校編も中学校編もありまして、これは漫画付きで観点別評価をどう考えるのかといったことを書いています。興味があれば見ていただきたいと思います。

そういうことで、今日はこの「授業づくりのツボ」と言いながら、でも基本的にはICT活用の先にどういった学校と学びの在り方を考えていけばいいのか。その時にICTを深い学びに、それは私の言葉で言うと「本物の学び」「真正の学び」になりますが、そこにつないでいく上でのポイントを話していければと思っています。

2 これまでの政策の動きと、ブレないための捉え方

まず、スライド1はこの間の政策の動きを示したものです。GIGAスクールと言ってみたり、それで一人一台端末が整備されるとなってみたり。そしたらそれを踏まえてどういう学びをつかっていけばいいのかというときに、「令和の日本型学校教育」（スライド2）なんていう中央教育審議会の答申が出てきて、そこでは「個別最適な学び」「協働的な学び」（スライド3）が言われていて、また「〇〇な学び」というのが新しく出てきたと思われたかもしれません。

（スライド1）

令和元年12月19日

GIGAスクール構想の実現パッケージ ～令和の時代のスタンダードな学校へ～

1. 環境整備の標準仕様例示と調達改革

- 「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策」の考え方に基づく、学習活用端末の標準仕様を例示
- 「GIGAスクール構想」に基づく、高速回線に向けた校内LAN整備の標準仕様を例示
- 容易に大規模な調達が行えるよう、標準仕様書を基に都道府県レベルでの共同調達を推進

➢ 学校ICT環境の整備調達をより容易に

3. 学校ICT利活用ノウハウ集公表

教師や学校、教育委員会等が、情報教育やICTを活用した指導、ICT環境整備等を行う際に参考となる様々な情報をまとめた「教育の情報化に関する手引」を公表。特に「第4章 教科等の指導におけるICTの活用」においては、ICTを効果的に活用した学習場面の10の分類例を示すとともに、

- 小学校、中学校、高等学校については各学校段階における各教科等ごとに
- 特別支援教育については学習上の困難・障害種別ごとにICTを活用した効果的な学習活動の例を提示。

➢ 全ての教職員がすぐに使えるように

2. クラウド活用前提のセキュリティガイドライン公表

各教育委員会・学校が情報セキュリティポリシーの作成や見直しを行う際の参考とする、『教育情報セキュリティポリシーに関するガイドライン』（平成29年策定）を、クラウド・バイ・デフォルトの原則を踏まえて改訂

- 整備の硬直化を避けるための位置づけや構成の見直し
- クラウド・バイ・デフォルトの原則追記
- クラウドサービス事業者が留意すべき事項の追加

➢ クラウド活用により使いやすい環境へ

4. 関係省庁の施策との連携

- 総務省：教育現場の課題解決に向けたローカル5Gの活用モデル構築
- 経済産業省：EdTech導入支援事業、学びと社会の連携促進事業

➢ ローカル5Gや教育コンテンツも活用して未来の学びを実現

5. 民間企業等からの支援協力募集

将来のICT社会を創造し、生きていく子供達に向けた社会貢献として、民間企業等から学校ICT導入・利活用に対するあらゆる協力を募る。

- 校内LANなど通信環境の無償提供
- 新品、中古問わず十分なスペックの端末の学習者への提供
- ICT支援員として学校の利活用の人的サポート 等

公表し、文部科学省から教育委員会へ随時募り、

➢ 民間等の外部支援により導入・利活用加速

(スライド2)

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個性に富んだ学びと、協働的な学びの実現～(答申)【概要】

令和3年1月26日
中央教育審議会

第1章 総論

1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

● 社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来
● 新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」

新学習指導要領の重要な変化
ICTの活用
一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化に乗りこえ、誰か一人を切り抜き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

2. 日本型学校教育の成り立ちと成果、直面する課題と新たな動きについて

成果

● 学校が学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、児童生徒の状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子供たちの知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」は、諸外国から高い評価
● 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、全国的に学校の臨時休業措置が取られたことにより再認識された学校の役割
①学習機会と学力の保障 ②全人的な発達・成長の保障 ③身体的、精神的な健康の保障【安全・安心につながるができる居場所・セーフティネット】

課題

子供たちの意欲・関心・学習習慣等や、高い意欲や能力をもった教師やそれを支える職員により成果を挙げた一方、変化する社会の中で以下の課題に直面

- 本来であれば家庭や地域でなすべきことが学校に委ねられることになり、結果として学校及び教師が担うべき業務の範囲が拡大され、その負担が増大
- 子供たちの多様化（特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒等の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校児童生徒数の増加等）
- 生徒の学習意欲の低下
- 教師の長時間勤務による疲弊や教員採用倍率の低下、教師不足の深刻化
- 学習場面におけるデジタルデバイスの使用が低調であるなど、加速度的に進捗する情報化への対応の遅れ
- 少子高齢化、人口減少による学校教育の維持とその質の保証に向けた取組の必要性
- 新型コロナウイルス感染症の感染防止策と学校教育活動の両立、今後起こり得る新たな感染症への備えとしての教室環境や指導体制等の整備

教育振興基本計画の理念（自立・協働・創造）の継承
学校における働き方改革の推進
GIGAスクール構想の実現
新学習指導要領の着実な実施

必要な改革を躊躇なく進めることで、従来の日本型学校教育を発展させ、「令和の日本型学校教育」を実現

(スライド3)

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

①個別最適な学び（「個に応じた指導」「指導の個別化と学習の個性化」を学習者の視点から整理した概念）

● 新学習指導要領では、「個に応じた指導」を一貫重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを通じて活用した学習活動の充実を図ることが必要
● GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
● その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

● 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、
・支援が必要な子供に重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

● 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

● 「個別最適な学び」が促される中、これまで以上に子供の成長やつまづき、悩みの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる

● その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、個別な新情報等を活用することや、教師の負担を軽減することが重要

それぞれの学びを一体的に充実し
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

②協働的な学び

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要

集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよき点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出す

知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の価値や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通して学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる

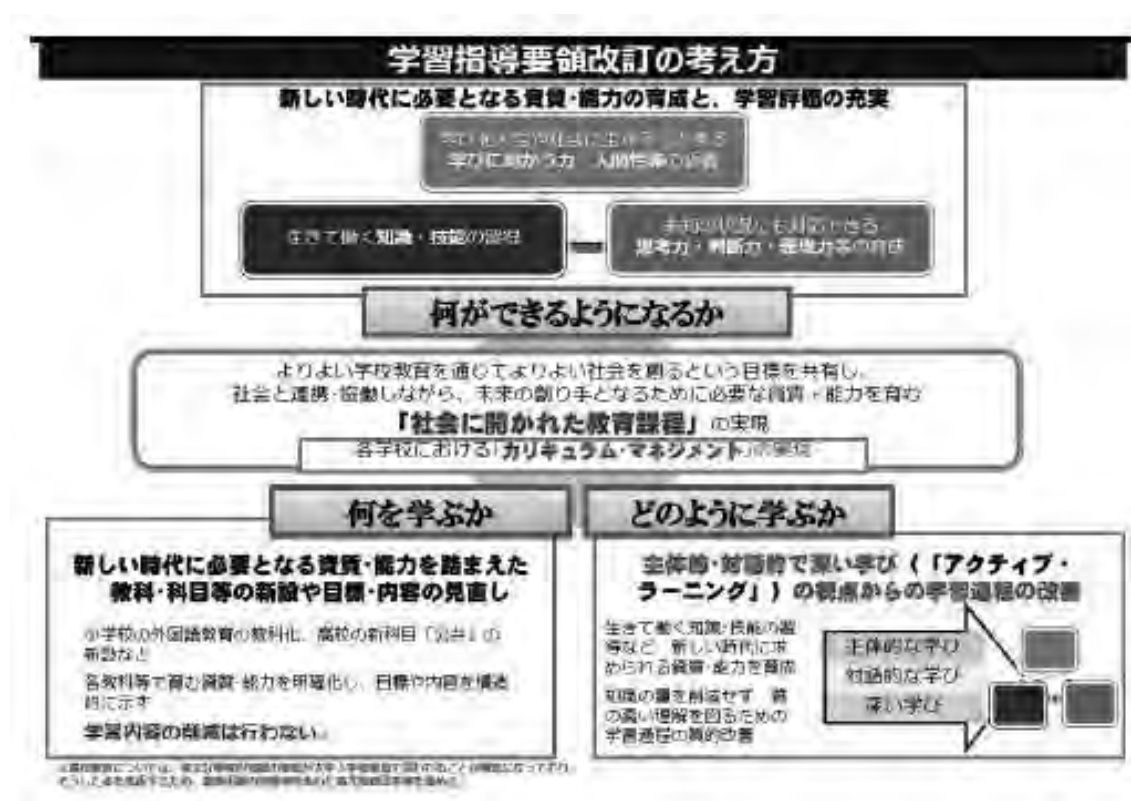
同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

2

高校でいうと、新しい学習指導要領が実施される前に、「あれ、主体的で対話的で深い学びとかって言うってたやん、次もうまた違うのが出てくるの?」「次は個別最適?」と思われるかもしれませんが、ここで変にブレてしまっただけだと思います。今回のこの中央教育審議会の答申（スライド2）はあくまで新しい学習指導要領を補完するものと捉えることがまず大事です。

だって、この間も「アクティブラーニング」と言ってみたり、「主体的で対話的で深い学び」って言うてみたりとか、散々議論してきたわけですよ。そこの延長線上にちゃんと捉えていくことが重要です。だから改めて「個別最適」云々とかって言われていますが、中軸は「主体的で対話的で深い学びを通じて資質・能力を育てていくこと」です。この新しい学習指導要領の趣旨をもういっぺん考えていくことが重要だと思います（スライド4）。

（スライド4）



なんでそんなことを言うのかというと、実は今言ったような新学習指導要領の趣旨を踏まえた上で、それを補完するものとしての「個別最適」だというのは、よくよくいろんな教育政策を見ておきますと、平成30年ぐらいに大体の方向性が出ています（スライド5）。この辺は、今日はそんなに詳しくは話しませんが、興味があればこの辺を見られるといいと思います。この先の流れがよくわかります。

(スライド5)

文部科学省 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース「Society 5.0 に向けた人材育成 ～ 社会が変わる、学びが変わる～」(平成 30 年 6 月 5 日)

1. Society 5.0 の社会像・求められる人材像、学びの在り方

(Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会の議論を踏まえて)

Society 5.0 の社会像

A I 技術の発達 → 定型的業務や数値的に表現可能な業務は、A I 技術により代替が可能に
→ 産業の変化、働き方の変化

日本の課題

A I に関する研究開発に人材が不足、少子高齢化、
つながりの希薄化、自然体験の機会の減少

人間の強み

現実世界を理解し意味づけできる感性、倫理観、
板挟みや想定外と向き合い調整する力、責任をもって遂行する力

Society 5.0 における学びの在り方、求められる人材像

A I 等の先端技術が教育にもたらすもの (学びの在り方の変革へ)

(例) ・スタディ・ログ等の把握・分析による学習計画や学習コンテンツの提示
・スタディ・ログ蓄積によって精度を高めた学習支援 (学習状況に応じたコンテンツ提供、学習環境マッチング等)

学校が変わる、学びが変わる。 → Society 5.0 における学校 (「学び」の時代) へ

・一斉・一律授業の学校 → 読解力など基礎的な学力を確実に習得させつつ、個人の進度や能力、関心に応じた学びの場へ
・同一学年集団の学習 → 同一学年に加え、学習到達度や学習課題等に応じた異年齢・異学年集団での協働学習の拡大
・学校の教室での学習 → 大学、研究機関、企業、NPO、教育文化スポーツ施設等も活用した多様な学習プログラム

共通して求められる力: 文章や情報を正確に読み解き対話する力

科学的に思考・吟味し活用する力

価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力

新たな社会を牽引する人材: 技術革新や価値創造の原となる飛躍知を発見・創造する人材

技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材

様々な分野において A I やデータの力を最大限活用し展開できる人材 等

つまり Society 5.0 のような政策上のアイディアに対応するような学校や学びの在り方を考えましようということで、平成 30 年の段階でこういうものが出ています (スライド 5)。これが「GIGA スクール構想」の元でもあるし、あるいは経済産業省の「未来の教室」のようなものとも関係しますし、今回の「令和の日本型学校教育」とも関係するわけです。これ見るとだいたい今言われたようなこと全部出ているんです。一斉・一律授業をどうするか、同一学年集団をどうするかなど、いろいろ出ているんです。さらにスライド 6 を見たら公正に個別最適化された学びがこの段階で出ているんです。この文章が実はこの間の改革の一つの拠り所になっています。

こんな図があります (スライド 7)。社会がこんなに変わってきています。変化の捉え方も単純ではありません。でも確かに今は第 4 次産業革命という言葉がありますが、そういう産業革命期だろうということは間違いない。そうしたときに学校の在り方もバージョンを変えていく必要があるんじゃないですかという図ですね。これ自体いろいろと議論の余地はありますが、この中にぱちりと「主体的で対話的で深い学び」と「個別最適」の関係が描かれているんです。

わかりやすくするために私の方でスライド 7 に矢印をつけましたけども、要は「勉強の時代から学習の時代へ」、さらに「学びの時代へ」とバージョンアップしていこうみたいなことを意味してるんですね。要は「アクティブラーナー」、あるいは「主体的で対話的で深い学び」っていうのは、いわゆる「勉強の時代」を超えて「学習の時代」に入っていくためのきっかけを目指しているということです。

(スライド6)

3. Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト①

I. 「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供

○学習の個別最適化や異年齢・異学年など多様な協働学習のためのパイロット事業の展開 ※全国の小中高各学校で実施（学校数は今後増加）

- 児童生徒一人一人の能力や適性に応じて個別最適化された学びの実現に向けて、スタディ・ログ等を蓄積した学びのポートフォリオ（後述）を活用しながら、個々人の学習傾向や活動状況（スポーツ、文化、特別活動、部活動、ボランティア等を含む）、各教科・単元の特徴等を踏まえた実践的な研究・開発を行う。（例：基礎的読解力、数学的思考力の確実な習得のための個別最適化された学習）
- また、異年齢・異学年間での協働学習（例：英語力に応じた異年齢・異学年の協働学習）についても、実践的な研究・開発を行う。
- 「チーム学校」を進める観点からも地域の人材等と連携し、体験活動を含めた多様な学習プログラムを提供する。
- 生徒・学生の学習環境がより個別最適化されるよう、アドハンス・プレイスメント、飛び入学及び早期卒業等の活用促進を図る。また、学生の様々な学びの意欲を実現させ、学習の個別最適化を進める観点から、各大学におけるギャップファイヤーや学外での幅広い学びのための休学の活用を促進する。

○スタディ・ログ等を蓄積した学びのポートフォリオの活用

- EdTechを活用し、個人の学習状況等のスタディ・ログを学びのポートフォリオとして電子化・蓄積し、指導と評価の一体化を加速するとともに、児童生徒が自ら活用できるようにする。そのため、CBTの導入を含めた全国学力・学習状況調査の改善、学びの基礎診断の円滑な導入により、個々の児童生徒について、基礎的学力や情報活用能力の習得状況の継続的な把握と迅速なフィードバックを可能とし、評価改善のサイクルを確立する。

○EdTechとビッグデータを活用した教育の質の向上、学習環境の整備充実

- EdTechとビッグデータの活用を推進するために必要なガイドラインの策定、データの収集、共有、活用のためのプラットフォームの構築に関する検討を行う。
- デジタル教科書、デジタル教材、CBT導入等を進める観点からもICT環境の整備やICT人材の育成・活用を加速する。

(スライド7)



これについて言うと、良心的な現場の先生は勉強文化みたいなものを超えて真の学びを追求することはこれまでもやってきたわけです。そう考えると「主体的で対話的で深い学び」というのは、日本の学校教育の蓄積を活かしたものになるということです。ある種、授業づくりの不易みたいなものを確認していくという作業が、この「アクティブラーニング」や「主体的で対話的な深い学び」につながってくる。それはいわば「脱勉強」と考えたらいいいと思うんです。

それから、さらにこの ICT や AI の進歩、そして、このコロナ禍で学校依存が改めてクローズアップされていく中で、加速しているのは学校以外にもいろんな学びの場が出てくるんじゃないかということです。そうすると教育は学校の専有物ではない。独占物ではない。そこからユートピアが出てきて、生徒たちが自分で学ぶ場や学ぶ機会を選んでいけるようにしたらいいんじゃないという発想も出てくるんですね。

多かれ少なかれそれに近いようなことは少しずつ進んでいくんだろうと思います。そういったときに、学校はどういう役割を担うかということ、ラーニング・オーガナイザーと書いてありますが、その生徒のニーズに応じた学びを提供していくということが、これまで以上に大事になってくるということです。

そこから個別最適という言葉がクローズアップされてくるのは間違いないです。ただ、そのときに「令和の日本型学校教育」でも問われたことだと思いますけども、それが脱学校というか、学校を単純にスリム化すればいいかどうかってことは実は別問題です。いろんな学びの場が出てきたときに、そっちの方を主として学校をスリム化して生徒たちの自由に委ねてしまったら、生徒たちが本当に主体的に学び始めるかとなると、これまた別問題です。この脱学校とかラーニング・オーガナイザーというような発想は、昔の社会思想家にイヴァン・イリイチという人がいて、この人は『脱 学校の社会』で有名ですが、その中で「deschooling」という言葉を使っています。この「deschooling」をどう捉えるかってことが大事ですね。イリイチが一番言いたかったことは何かというと、学校でやっているのは非常に特殊な学びだということです。教わらなければ学ばない。

これは脱学校と脱病院というのが一緒です。病院化された社会、学校化された社会が問題で、文明病としてとらえています。そこを超えていくために「deschooling」と言ったんです。教わらなければ学んだ気になれない。病院で言えば、病院に行かないと治した気にならない、ということですね。そうすると自分で学んでいくとか、自分で治していくという発想が弱くなっちゃう。そこが一番の問題点です。

そう考えたときにどうでしょう、この間のコロナ禍もそうです。学校がストップして生徒たちが自分で学び続けられなかったという状況をどうみるか、ということですね。それは単に学ぶ力がついていないということじゃなくて、それ以上に学校の外側が、大人ががんじがらめのパッケージにしている可能性がある。それこそほったらかしたら、商業主義みたいなものが学校の外にたくさんあるわけですよ。そしてスマホ漬け、ずっと YouTube を見ている、こんなふういろんなシステムに囲まれているんですよ、特に都市部において。それが嫌な親御さんは何をするかというと塾に行かせるんですよ。これは両方とも大人の都合です。だからほったらかしたらええって話と違いますね、逆に言うと、それぐらい学べなくなっている。まさに学校化された社会が

広がっているんです。それこそ学校らしくない学校をつくっていくことが一番なんですが、学校の外側は実はものすごく学校臭い学校になっちゃうという状況があるのかもしれない。

そうしたときに、単に学校をスリム化するという発想で考えるのは十分ではない。むしろ卒学校、卒教育となりますが、学校らしくない学校、そういったものを学校の中でやっていく、つくっていく。それこそ学校や先生、あるいは教育というものを学び、超えていくような、本当の意味で学校で学んだからこそ、より主体的になって自分の当たり前にいろいろと疑問を持ったり、立ち止まっていく。そういうことをたくさんつくっていくことによって、学校の外側のいろんなシステムに絡めとられて知らず知らずのうちに大人の都合に動かされることから超えていけるんじゃないかなと思います。

結局、自律的な学習者という今回のテーマは、まさにここと絡んできます。deschooling が単に学校のスリム化ではなく、本当の意味で生徒たちが主人公になるかどうか、ここがポイントだと思います。

ICT 活用に関して、まさにこの間の状況で言うと、「脱勉強を超えて学びの時代へ」と自分で自律的に学び続けていくということにつながっていけばいいんだけど、スライド7にも出ていますが、もう一回勉強の時代に逆もどりになっていないか、ということに注意が必要です。一見、最新のテクノロジーに見えて、中身はドリルか一斉授業かレクチャーか。そういうことになっていないかどうかを改めて考えていく必要があるんじゃないかと思います。なので、大きな政策上の見通しを考えるとときに、スライド7などをしっかりと批判的に検討していくことが大事かと思います。

3 コロナ禍が投げかけているもの

そこで改めて考えると、学校での学び、授業、その在り方が問われているということなんです。さらにそこでは ICT をどう使っていくかという話があるんですが、ICT の活用に関しては私はテクノロジーの質以上に授業観が重要だと思います。それこそもう先生方はスマホを当たり前に使いますでしょ。多少機能の使い方やバージョンアップやバリエーションがあるとは思いますが、基本的にテクノロジーや ICT はいずれそういった当たり前のものになってくると思います。そういったときに学習観や授業観は重要になってくる。

もっと言うと、この休校期間中の状況を見ても、テクノロジーの質以上に授業観がまず大事だったと思います。例えばオンライン授業、オンライン学習がありましたね、休校期間中に何が起こったかということです。多くの公立小学校や高校もそうかもしれませんが、起こったことは「もうオンラインとかできません、そやからもうプリントを投げます」、あるいは「ちょっと動画をつくって投げます」、そして投げっぱなし。ドリルをつくって渡しっぱなし。動画をつくって渡しっぱなし。これでは通信添削にもなっていませんね。結局投げたんやったら、そのところで学びを支援するシステムがセットでなかったら、その学びは保障できないわけです。これは通信添削の基本ですよ。だから投げるだけでなく、課題の質もさることながら、投げてそれを基にどうフィードバックを返すのか。そういうこともセットで考えて初めて学習を保障したことになる

わけです。

逆に進学校といわれているような私学でよくあったのは、「うちはオンライン授業をやっています」と。でもその中身を見るといろいろです。例えばこんな状況はなかったでしょうか。普段だったら 30 人、40 人を 1 クラスでやりますが、オンラインだからいっぺんにやっちゃおうと。100 人ぐらい一度に 3 クラス合同で、やれちゃう。衛星予備校状態ですね。画面の向こうには保護者もいますから変な授業を見せるよりもエース投入でね。それで実際にギャラリービューで生徒を見たら、ちゃんと聞いているな、と見られるわけです。保護者からすると子どもが画面にかじりついていたら、学びの中身はあまり関係ないからそれで勉強しているように見えて安心する。それで平日は授業をやって土曜日にテストをやって確かめる、といった無茶なことをやっていなかったですか。これはわかりますか、ドリルをつくって投げっぱなし、衛星予備校のように授業を進めっぱなし。両方とも圧倒的に何が足りてないかというと、学習者目線が足りない。だから結局オンライン授業にしても、授業を進めるばかり。後はドリルにしても学習課題とかドリルとか授業とか投げっぱなし、渡しっぱなし。コロナ禍以前はアクティブラーニングや、主体的で対話的で深い学びなどで、要は学習者主体の授業をつくりましょうということだったはずですが、なのに、そんなにも学習者目線がなくなっている、ってことです。いかにこの間の状況が形だけで、改革が芯まで火が通り切っていないんだなと思わせるような出来事でした。

そういう面でも改めてこの新学習指導要領や、そこで議論したことの趣旨、そこに立ち戻って考えていくことが大事だと思います。

4 改革に踊り揺れる「授業」、二項対立の裏で進む手法主義

高校は最近のことですが、小学校・中学校ではまず「言語活動の充実」と言われてみたり、「アクティブラーニング」と言われてみたり、「主体的で対話的で深い学び」と言われてみたり、そして今度は個別最適。いろんな言葉に踊らされてきた部分があるんです、これも程よくやってたらいいいんですけど、あまりにも次から次へとと言われると何が起こるかということ、「もう考えるのしんどいわ」です。「せっかく考えてもまた次にご破算にされるんやったらもうやり方を教えてよ」ということになるんですよね、結局。「何やってたらいいいんですか」と。そこで生まれるのは手法主義です。だから「アクティブラーニング」や「主体的で対話的で深い学び」だったら、「何をやったらええんですか？」そして次は ICT となったら「どのアプリを使うたらええんですか？」と、そんな話になりかねないと思います。でもそれは本末転倒だし、どんどん授業像が揺れてしまうんです。だから改めてこの段階において授業とか学ぶことの原点をしっかりと確認していくことが大事だと思います。

スライド 8 では「旧来型の授業」という言い方でバツサリと切りますが、そんなふうには二項対立で物を見たら見えなくなることもあるといったことを書いています、後で資料をご覧ください。

(スライド 8)

「旧来型の授業」という語りで見落とされているもの

- ・日本の伝統的なよい授業のイメージである、クラス全体での創造的な一斉授業は、つまずきを生かしたりしつつ、一人一人の考えをつないだりゆさぶったりして思考を練り上げていく質の高さをめざしてはいるが、子どものつぶやきにアシストされながら、教師が想定する流れや結論を押し付ける授業になりがち。
- ・新しい時代のよい授業とみなされがちな学び合いの授業は、学習者が主人公の生き生きとした姿や、アイデアの創発をめざしてはいるが、学びを深める指導もなく、学習のめあてと手順を示して子どもを動かすだけの授業になりがち。
- ・「（演習問題を）解く、進める」ことに重きを置く塾的な勉強文化が学校にも影響を与えるようになり、それが「理解する」ことや「考える」ことだと生徒たちは誤認し、学校も「立ち止まり」や「回り道」という理解や思考に誘う強みと矜持を見失ってはいないか。

5 授業をめぐる二項対立図式の落とし穴

結局、「従来の授業から新しい授業へ」と言うのは大抵、「教えることから学ぶことへ」というのをずっと繰り返してきたんですね、だいたいその型です。これを延々とやり続けることはあまり生産的ではない。なぜかと言うと、教えるか、学ぶかというのは、教師主導か学習者主体かということですが、これは授業論の基本を外しているからです。結局授業とは、教師と生徒、生徒と生徒の一般的コミュニケーションではありません。そうではなくて、教材を介した教師と生徒、生徒と生徒のコミュニケーション、これが授業なんです。

「教材を介した」がなければ授業でもないし、さらに言うと、「学ぶ」ということもありません。その原点をきっちりと確認することが大事です。

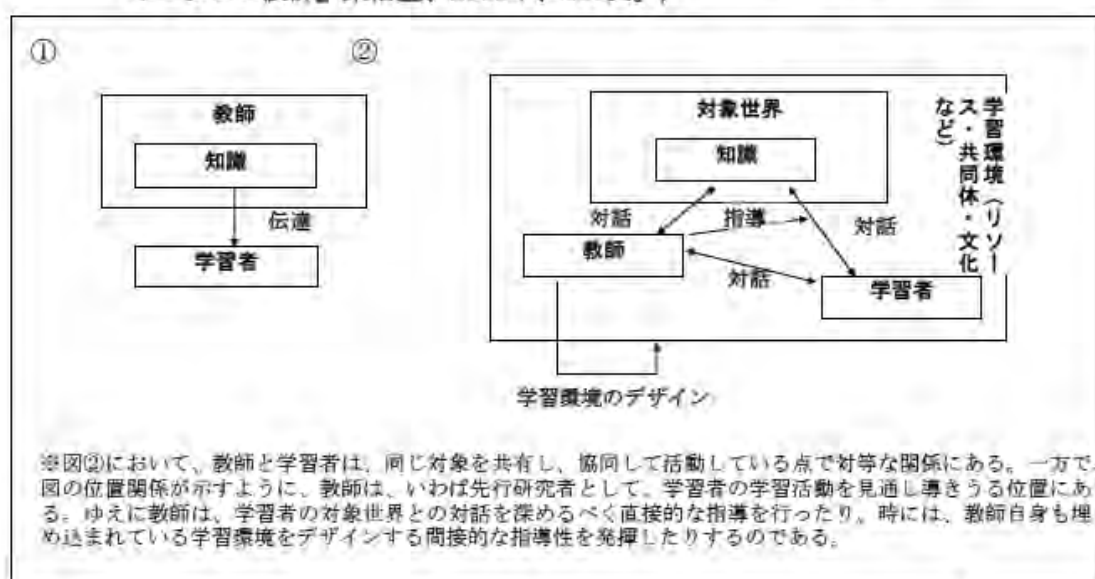
そもそもから言えば、今回「ICT を使って深い学びを」と言いますが、深い学びってどうなのか。「主体的で対話的で深い学び」というのがありますよね、それをどうイメージするかです。それこそ今は密を避ける必要があるのでグループ活動をガッツリとするってわけにはいきませんが、まあ仮にできたとします。「主体的で対話的な学び」の姿ってどんなものかということ、例えば小学校だったら『ごんぎつね』、高校だったら『羅生門』でもいいですね。この『羅生門』のある場面の読み取りですね。それで拡大した教科書のコピーみたいなものをホワイトボードに張り付ける、今だったらタブレットで見るのもいいですね。それで、生徒がああでもないこうでもない、書き込みやタブレットだったら指で何かを書きながら頭を突き合わせて、「これはこういうことなんじゃないか」と議論している。その姿を見たときに先生方は「主体的で対話的」ってたぶん言うと思うんです。でもそのときの生徒たちの目線の先に何がありますか。それは先生ですか？ 違いますね、仲間ですか？ 多分そうでもない。では何か。それは教材ではないですか。つまり「主体的で対話的な学び」の正体というは対象物、つまり教材を介してまなごしを共有し合っている

生徒たちの姿ということです。そのときに先生が教えるか、引くか、といったそんなちやちな話じゃないんです。みんなで一丸となって一つのものに向かい合っている瞬間というのは、もう先生なんて out of 眼中なんです。だから本当にグループ学習とか生徒たちが主体的に学んでいる瞬間って、先生は手持ち無沙汰ですよ。だからなんか仕事がないな、と思っちゃうんです。でもそんなときこそ生徒たちと一緒に学ばいいんです、先生も。先生は教える、指導をする上での主体性もあるけれど、学び手としての主体性もあるわけです。だから一緒に学ばいいんですね。この関係性が持てるかどうかが決定的に重要だと思います。要は教材を介した教師と生徒、生徒と生徒のコミュニケーション、これが授業の本質ということですね。

そこで「材」と向い合うというのは、授業だけでなく学ぶことの本質です。どういうことかと言うと、小さい子が大人と一緒に学び始めるときにどういうことが起こるかということ、小さい子がお父さんやお母さんに抱っこされています、空には月や星があつてそれを見ながら小さい子が「あれ、ナニ？」とか言います、大人が「あれは星だよ」「あれは月だよ」と一緒に物を見て、指さして、名づける。これが学ぶことの原点です。そこで関係も生まれてきます。もっと言うと、幼児教育を見るとシンプルですよ。「ツルピカ泥団子」ってわかりますか。泥団子のくせにめっちゃ光るんですよ。ピカピカと金属みたいに光るんです。それで夢中になるんですね。『光れ泥団子』なんて番組もありましたけど、ほんとにめっちゃ光るんです。それを作るために子どもが必死になって、まさに対象物、材と子どもは向かい合うんですね。「こんなんできた、見て見て」と友だちに見せる、あるいは先生に見せる。こういったところから関係が出来てくる。だから人と人の関係をつくっていくときに、この三角形みたいな関係、特にスライド9の②のような関係が大事です。

(スライド9)

図. 「真正の学習」における教室の関係構造 (出典: 石井英真『現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2011年、183頁。)



そのときに学びが成立するんです。泥団子を通じていろんなもの、豊かな文化に触れていたり、人とつながっていたりする。活動の中で泥団子の質感などそういったものを味わうことで育っていくということですね。では学校の多くの授業はどうなっているか。それはスライドの①のような関係です。簡単に言うと、これは教師の胸の内を付度するような関係。実は生徒たちは、教師を見ている材を見ていない。つまりさっきの『羅生門』で言うと、『羅生門』の読み取りをしているんだけど、教材研究で先生が解釈した範囲のことだけを生徒たちは探ろうとする。先生は生徒に「いろんな読み取り方を言ってごらん」と促して、生徒の読み取りに先生は「あ、いいね」「いいね」「いいね」「それ！」とかっていうふうに自分に近いものがあつたら指名を止めるんですね。だったら結局授業は付度すればいいんだと学ぶんです。もう生徒は賢いですから。その瞬間って、全然『羅生門』と向かい合っていないんです。

それこそ学問が成立することの土台でもあります。物事って完璧にわかりきることなんてないんです。先生がいくら教材研究をやったところで完璧じゃない。若い感性で読んだときに、先生とは違う読み方でけっこう深い読み方をしている可能性があるんです。深くなくても「こういう着眼点で読んでいったらまた違う解釈が広がるわ」、という気づきもあつたりするわけです。そういうふうにやっていけると授業が楽しくなる。そういう関係性が②です。生徒たちはちゃんと材と向かい会えていますか、ということです。教師ばかり見ていませんか。

それでいうと、先生って完全フラットではなくて、完全垂直でもなく、斜め前ぐらいですね。なぜなら先生は教材研究をやっていて、先行研究者の位置にあるからです。それである程度自分で場面を設定して、教室を整え、教材を設定し、生徒たちを自分を通して、材の世界に導き入れていくわけです。だから導入場面だったら先生の位置は斜めのもうちょっと上ぐらいですね。だんだんとそれでやって入っていくと生徒たちとフラットになってきます。それでも生徒たちの斜め前ぐらいです、だいたい。でもちょいちょい生徒に超えられます、高校ぐらいならあると思います。②が理想のような感じで言っていますが、日常にちょいちょいとあるんですよ。だから生徒が言ったことに先生は「はあ、なるほど」「面白いことを言うな」って思う瞬間が、実は②です。つまり生徒に付度されていないんです。そういう関係が実は日常に生まれていて、そこに気づけるかどうか重要。そういう関係が生まれてくるように、そしてもっともたくさんさんの時間に生まれてくるようになると、授業というのは生徒たちはどんどん考えていくようになって、先生もやっていて楽しい、ってことだと思いますね。

もっと言うと、この先に待っているのは、生徒たちと一緒に学んでいくということです。それで学び超えていくということがもっとももっと進んでいく。探究においては、生徒たちは学び超えていくんですね。それが重要だと思います。そのときは教師だけの関係じゃなくて、学校の外側に一緒に追求する人を持つとか、学校の外側に師匠を持ったりすると学び超えていくわけです。

つまるところ、「学ぶ」ってことを支援する基本の構図は、①から②へどうやって導くか。これは教科であろうと、「総合的な探究の時間」でも一緒だと思います。なぜなら②は今自分のゼミの関係性をモデルにつくっていますが、研究室における指導教員と学生の関係は②です。今私は指導教員ですが、私には師匠もいます。師匠は私からすると斜め前にいるんです。でも同じ研究対象をやっていることからいうと横並びです。その関係が学問的関係の基本です。まさに②の関係

は、授業の関係でもあり、もっと言うと探究的学びにおける関係です。

そう考えるとつまるところ授業で大事なものは、「共同注視」の関係（スライド 10）、それがまず一つですね。それをつくっていくために教師の仕事は、その教科の「うまみ」を得られる材を考え抜くことです。教科書とかの教材は、だいたい教材化すると偽物になるんです。もともとの作品を短くするから、改作します。価値が落ちます。理科とか数学とかは現実の問題はノイズがありすぎるから単純化します。それで面白くなる。社会にしてもノイズがあります、だからそれを切ります。だから面白くない。パッケージ化しすぎておいしさがありません。例えば高野豆腐っておいしいんですが、あの絶妙な味が出ればいいんですが、それが行き過ぎてしまうとおいしくないんです。ほんとにカピカピで。それをもう一回みずみずしくして戻しているのが、先生方が教材研究をやっていることの意味だと思います。本物にできる限り戻していく、そしていい塩梅を考える。

（スライド 10）

教材を介して教師と子ども、子ども同士が向かい合い、ともに教材に挑む共同注視の関係性を、学びや活動への子どもたちと教師の共同責任の先に、授業や学校の学び超えを

- ・ 教師の仕事は、その教科のうまみを得られる材を、できるだけ本物のナマのそれを考え抜き（教材研究）、材と子どもたちとのいい出会いを組織し（導入）、子どもとともに横並びでその材と対話し、時にはナナメの関係に立ちながら、うまみを感じられる入り口をさりげなく指さし続けることである（発問とゆさぶりによる展開の組織化）。さらに、「まだやめたくない」「じゃあ〇〇はどうなっているのかな」「大人たちがいろいろ言っていた〇〇ってそういうことだったのか」「これって授業で習ったことと関係あるんじゃないか」といった具合に、授業の先に、子どもたちが、授業外、学校外の生活で引っかかりを覚え、立ち止まり、学びや追究を始めるような、生活場面や生きることを豊かにしていくような、そんな子どもたちの姿を願い目指し続けることであろう（学ぶことへの導入としての授業）。
- ・ 教材を介して社会や文化のホンモノやその深みへと誘う、共同注視の関係性を軸にした、触発的で媒介的な指導性こそ、AIでは実現しえない、子どもたちと日々生活を共にし、子どもたちと学びや生活の物語を共有しうる教師の役割の強みである。それは、ICT活用において、伴走者的でコーチング的な教師の指導性として重視されるものであろう。
- ・ 授業・単元が終わっても学びは終わらない。興味・関心の幅を広げ質を高めて、個性的な学びを触発していく。さらに、授業外でも学校生活（総合や特活、あるいは、オンラインのもう一つの教室も含む）を共にしながら、子どもたちの学びの空間を見守り支援すること。c.f. 日記指導と生活綴方

本物ってパッと見はその価値がわからないですよ。それこそ大学時代の読書会って、難しい本ほど読書会に使うんです。1人じゃ読めないから。だから皆で読む。さらに言うと、指導者がいたらもっといい、ということですね。そしてガイドブックとかを示してくれる。「この辺を攻めていったらいいよ」ということを指さしてくれるのが導入。さらに言うと、入って行けば行くほど、本物のおいしさみたいなものを追求していこうと思うと、「なるほどここまでは読めている、でもここは読み飛ばしているよね」といったようにプロとアマでは見えているものが違います。プロ目線で見たら「ここを読み飛ばしているよ」と指をさす、これが「発問」です。あるいは「ゆさぶり」。だから要は授業でやっていることは、常に教材のおいしいところを指さし続けている、ということだと思います。

そうやっていくと、どんどんと教材に没入する。さらにさっきの自律的な学びということでは、

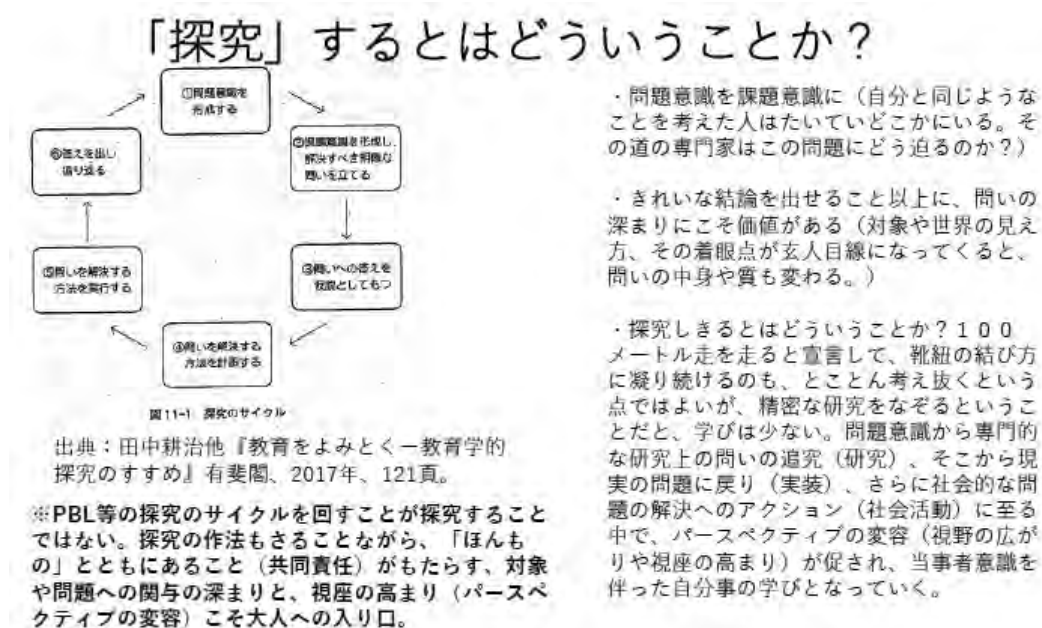
授業の中で言えば、「授業は学ぶことへの導入」だと、あるいは「生活への導入」だと考えていくとさらにいいかなと思います。先生方が授業をやっていて一番手ごたえを得るときは、授業時間が終わる瞬間「え、もう終わるの?」「あっという間やった」と生徒に言われるとめっちゃ嬉しいですね。さらに言うと、授業が終わった後も、なんかその辺でさらに話し合っているとかね、教師としてめっちゃ楽しいわけですよ、「やった!」と。これ何かわかります? 授業で終わっていないんですよ。授業が生徒たちの追究心に火をつけている。だから授業は学ぶこと、あるいは生活への導入。学んだ結果「あ、これって親が言うてたこと、こういうことかな。なんか大人たちが騒いどったな」、あるいはニュースを見ているときに「これって学校でやったことやな」と、ぼそっと心の中でつぶやきが起こる。これは学びの成立ですよ。社会に開かれた教育過程というのはまさに、学ぶことへの導入、生活への導入として授業を考えることだと思います。

さらに「総合的な探究の時間」とかそういったものを考えると「共同注視」だけでなく、その同じ問題、例えば地域社会の問題をなんとかしたいといったら、その問題を地域の人、先生や地域の人や仲間たちと一緒に考えていく。これは「共同責任」ですね。「共同注視」の先に同じものについての「共同責任」が出来てくると、そこからグッ、グッ、グッと自分たちで学んでいくということにつながっていくわけです。だから「共同注視」から「共同責任」の関係。ここにどう転化していくのかってことが、これが「総合的な探究の時間」や「探究」のポイントじゃないかなと思います。

6 「探究」とはどういうことか?

「探究するとはどういうことか?」のスライドをつくりました(スライド11)。スライドの左下にありますが、最近、探究でPBLのサイクルを回すことを自己目的化していませんか? サイクルを回すことは手段です。もともと堀川高校の探究科って何のためにやったかわかりますか? 学問的なことと違うんです。あれは脱エリート主義です。お勉強だけだったらあかんでしょ、もっとしゃきっとしてほしいんですよ、一人前に育てていきたい。だから堀川の探究は私からしたら特活なんです。ほぼね。伏見工業高校のノリと言いますか、そういう部分があります。昔『スクールウォーズ』ってありましたよね。ああいうのに実は似たノリがあります。それでいうと、結局探究の作法もさることながら、確かにそういったものも最初は必要です。でも最終的には本物と共にあることが重要。探究というと本物から学ぶことがよくあるんですよ。でもお偉い人のレクチャーなんて何回か聞くと飽きます。そうじゃなくて、本物と一緒にやることが、「共同責任」です。手を抜けませんし、手ごたえがあるわけです。そして自分の甘さも突きつけられます。そういった中でこそ、一気に問題にグッと入っていくし、その中で視座が高まっていく。これが大事だと思います。

(スライド 11)



大人の学びにおいてパースペクティブが変わる、風景が変わる、そういうことが言われます。これに該当することが高校生にも起こっている、一皮むける経験です。たぶん探究とかやっている先生の面白さって、そこと違いますか？生徒がなんか一皮むけていく感覚。単にきれいな研究結論が出るということよりも、それを通じて一皮むけていくような感じがたまらんのだと思います。それが結局、視座が上がってくると、不思議なもので認知能力が高まってきたりもするんですね。そういうことにつながってくるといいんだろうな、と思います。それが成熟とか大人への入り口ということなんですね。

7 ICT はどのように溶け込めるのか？

①GIGA スクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点 その①

ということで、基本的なところで学びの質を追求するとか、授業とか、あるいは探究の在り方ということを書いてきました。そこに ICT はどのように溶け込みうるのか、ということを残りの時間でお話ししようと思います。

まず、「授業が終わっても学び続けていく」ということと、ICT は相性がいいところがあります。授業、単元が終わっても学びは終わらないんです。通常は授業や単元が終わったらそこでストップですね。でもその先に学び続けていくためのプラットフォームをこの ICT やオンラインはつくるかもしれない、ということがひとつのヒントとしてあるんです。

オンライン学習とされていますが、本日ここでやっていることをよく考えてください。これ、3つくらい多層的な教室があると考えられるんです（スライド 12）。ここで対面でやっているのがまず一つ。この 1 本だけだったら学びは保障できないですね。もう一層あるでしょ、それが二つ

つめの教室。オンライン双方向です。この二つめの教室と今つないでいます。これにもう一つ、オンラインのプラットフォームみたいなものが一つでもあれば、ここでシステムが全部ダウンしても、そこに行ったら一応資料はありますね。なんならプラットフォームと同時双方向の間に、共同編集機能の Google のスライドでも入れてたら、一人ひとり別々にいるけれど、皆でやっている感覚が生まれますね。そのように直接対面でみんなでやるのと、家庭なりで個人でやっているのと、その間のバリエーションがすごく広がるんです。

(スライド 12)

GIGAスクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点①：

- ・ ICT活用、修得主義、個別最適化された学び、働き方改革。これらは「学校のスリム化」を招きがち。学校の丸抱え体質は問題だが、捨ててはいけないうものを極める必要がある（生活の場としての学校、成長につながる学びの保障）。
- ・ 「オンライン学習」は、「授業」と「自学」の間の「遠隔学習支援機能」（クラウド上のもう一つの教室）の増設問題として捉える。対面とオンラインの「多層的な教室」を前提とした授業や学校生活と表現してもよい。教室での対面でのコミュニケーション（一つ目の教室）が難しくなっても、zoom等を使えば顔も見ながらオンライン同時双方向でやり取りできる（二つ目の教室）。さらに、それが落ちてしまったとしても、学校HPやGoogleクラスルームなどのオンラインのプラットフォーム（三つ目の教室）があれば、課題のやり取りを通して、文通的、通信添削的なやり取りで学びを支援できるし、共同編集機能を使えば、顔は見えないけれど、リアルタイムで他の子どもたちとつながりながら一緒に学んでいる感覚を持つこともできる。
- ・ 単元や授業が終わっても、オンラインの教室があれば、さらに学びや追究を続けたい子どもたちでグループを立ち上げて学び続けていくことができる。そして、時に教師も伴走しながら、オンラインのもう一つの生活世界（健全な裏サイト）で子どもたちが自主的に学びを続け、そこでの追究から、授業という対面の公共世界（教育的な舞台）で教師の指導の下で対話し深めていく問いや素材が生まれてくることもあるだろう。一人一人の日記や学級日誌の中から、クラスの課題が生まれてくるように。

②GIGA スクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点 その②

だから登校と不登校、この間のバリエーションが結構生まれる。そしたらより多くの生徒たちを救っていけるだろうなと思いますし、もっと言うとまさに休校期間中、生徒たちは確かに学校とはつながりが無かったかもしれないけど、友だち同士だったら結構つながっていたかもしれないね、LINEとかで。それを上手く活かしていけないかなと思います（スライド 13）。学校裏サイトではないですけど、子どもたちはネット上でずっとチャットしたりして、つながっているんですよ。あれを学習に使えないことはないですね。興味があれば自分たちでそういうグループをつくって、学び続けていくというのはあり得る。だから、この夏休み期間中にしてもこういう 3 つの教室があると考えれば、家庭で一人でさびしく自習をする、宿題をする、という発想ではなく、オンライン登校日のようにゆるい感じで「ここに来たら皆がいるよ」と設定しておいたら、自分たちでそこに来て学ぶことができるかもしれない。だからいろんな形で教室が 3 つあると考えると、なんやかんやと知恵が出てくると思います。

もう一つ言うと、学校という場もコロナ禍の中で見えてきたと思いますが、そんなにガッツリ授業をしなくても、ゆるく自習室的な感じでもいい部分があるかもしれないと考えると、そこはフレックスにやれるかもしれない。自習的なものを単元のどこかに組み入れるとか、あるいはそれが自習室という発想もあるし、自主ゼミみたいな、例えば大きな大会とか試合の前や総合の発

表の前は、各自パート練習というか、自分たちで集まって練習や準備をするじゃないですか。あれが自主ゼミです。だからフレキシブルにやるっていう場合も、自習室があれば自主ゼミもある。だから全部をガッツリと皆でペア、グループ、一斉でやるのではなくて、フレキシブルな部分が単元の中にもうちょっと組み入れられるかもしれない。それこそ単元末だけ習熟度別のようにやっていたら、そこをデジタルドリルみたいなものをうまく活用して柔軟に運用していくこともできるかもしれないですね。そう考えると、このオンラインというのは授業と自習の間を生み出していると考えられると思います。

(スライド 13)

GIGAスクール構想の先に学校の当たり前を問い直す視点②：

- ・ **オンライン上の教室**は、学校外のSNS上の私的なやり取りの場を、もっとパブリックな形にしたものとも考えることもでき、時にモラルを欠いて傷つけあうことにもなってしまうネット上での私的なコミュニケーションのあり方を、より成熟したものへと組み替えるための練習の場と捉えうる。
- ・ オンラインでも教室に参加しているという状況は、「通学」や「不登校」の観念も変えていくだろう。さらに、**学校という場におけるフレックスな学習の時間**（ドリル的な勉強は授業というよりも寺子屋的にやれる）、**家庭における支援付き自学**（オンラインで仲間や学校や社会とつながりながら自由研究や宿題に取り組む）というオプションを想定すると、子どもたちの自律的で協働的な学びの時間を拡大する手立ても考えられるだろう。
- ・ 「**小さな修得主義**」（知識・技能の習得を軸にした検定試験的なカリキュラム）と「**自習室**」（**個別化・早修・寺子屋的**）の方向性か、「**大きな修得主義**」（知識・技能を総合的に使いこなす挑戦的な課題を軸としたプロジェクト型のカリキュラム）と「**自主ゼミ**」（**個性化・拡充・大学的**）の方向性か。

8 「個別最適な学び」をめぐる論点？

「個別最適な学び」も言われていますが、これについてもいろいろと考えることがあります。

「個別最適」「個別化」「個性化」といったときに大事になってくるのは、一人ひとりの違いを量的に捉えるのか、質的に捉えるのか、という点を頭に置くのがいいと思います（スライド 14）。

つまり発展的に一人ひとりに応じるというときに、「早い、遅い、できる、できない」、これに対応するのは「量的」で垂直軸、縦軸、個別化です。それに対して、生徒なりの持ち味やキャラを大事にするのは「質的」であり水平軸、横軸、個性化です。だから同じく一人ひとりに応じるというときに、発展学習みたいなものを先々に進めていくというだけが能ではない。むしろいろいろな生徒たちで学び合うことで、その生徒なりの良さが発見されていく。これはエンリッチメントと言います。また、1つのことを掘り下げることで深く学ぶということもあります。だから「個別化」「個性化」というのはどんどんと先取学習として狭くとらえるのではなく、むしろ多様性につなげていくことを考える必要があると思います。

(スライド 14)

「個別最適な学び」をめぐる論点

- 個別化（量的差異・垂直的価値）／個性化（質的差異・水平的価値）

と、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指す』にある「指導の個別化」と「学習の個性化」の対比は、教えることと学ぶことという別の軸が付け加わっていて、本質的な論点が見えにくくなっている。

- 目標の個別最適／方法の個別最適

- 従属的主体（選ばされる）／自律的・自治的主体（選ぶ・見出す・決める）

- 個人主義（人それぞれ・点）／公共社会（自立した個による対話と協働・ネットワーク）／集団主義（みんなで一斉に・面）



その水平軸の「質的」違いで言うと、協働の中でこそ個性は光るということがあります。このように「個別化」「個性化」「個別最適」を先取学習だけで考えるべきではありません。目標までバラバラにするのと、方法を個に応じたものにするのではまたレベルが違ってきます。この辺のことが「個別最適な学び」といったときに十分整理されていないところがありますので、そこは気をつけながら見ていく必要があります。

今の日本社会において一人ひとりに応じていくことは大事ですが、最終的にこの社会の様子を見たときに、なんで息苦しいのか。それは先取学習とか「早い、遅い」だけの序列化ですね。窮屈です。さんざんこれまで中学も高校も先取学習をやってきていませんか、ということです。そうではなくて、その生徒なりの、価値やかけがえのなさ、本当の意味での多様性を認め合っていくことが大事だし、それが認め合えたときに、人々はもっと楽になれる、ということだと思う。そこも考えながら、この「個別最適な学び」を考えていく必要があると思います。

9 ICTで学びの質を追求していく

① ICTで学びの質を追求するために その①

次は、「ICTで学びの質を追求していく」ということで言いますと（スライド 15）、先ほども言いましたように最新のテクノロジーを使っても中身が旧式ということもあつたりしますから、そこは見極めたい。ポイントは、ICTは確かに便利でスマートにいきます。だから基本的にICT活用は快適な教育を目指しがちです。でもその快適な教育がはたして人を育てるものになるかどうかということを考えたい。「快適」を具体的に言うと、例えば通販サイトで「あなたはこれが好きでしょ」と推薦してきますね。あれは自分が好きな物しか推薦してきません。気持ちいいものですね、自分の価値観に合わない嫌なものは推薦してこないんです。それに慣れていくと自分

の好きな物しか見えない、ということになります。でもこの間、高校生を見ていて感じませんか？似た者同士で集まることが多いと。「自分にとって価値観が違うものはどうも我慢がならない」「なんか嫌」「ちょっと匂いが違うから嫌」みたいな感じですね。その結果、多様な他者に対する寛容性が逆に失われていないか。

改めて、このスマート化で快適な教育に行きがちだけど、むしろ ICT は人々をフラットにしていますよね。そういう部分もあるから、むしろこのノイズを切り落とすのではなく、本物と出会っていく機会として使っていくことが重要ではないかと思います。例えばこの休校期間中に地域学習がやりにくくなったという意見がありますが、まったく逆の意見もあります。むしろ対面だったらここまでしか無理だったのが、「オンラインだったらこのパソコンを奥まで持って行って搭載カメラで見せてあげるよ」といったこともあります。実際にフラット化を活かしていくと、ICT を使って本物と一緒に学ぶことができやすい。もっと言うと、先生を飛び越えて本物とつながりは始めるんですね。私もこの 1 年間ぐらひは、高校生や中学生からのアポが増えました。それもいいことかなと思います。そういったことがやりやすくなるということです。私はそんなに優しくないところもあるので、厳しく言うときは言いますが、「自分がちょっと甘かったな」ということに気づいてもらえたらいいなと思います。このように割り切れなさとかノイズと、むしろ ICT を通じて出会っていくことができるかもしれない、ということです。

だから、本物の学びは ICT を使うとやりやすくなるというふうに、考えていくことが大事ではないかと思います。本物とつながれる。理科や数学ではナマを扱いやすくなります。数学で図形の問題をやるときに、三角定規にある 30 度、45 度、60 度、90 度、この辺りは扱えるんですが、中途半端な 23 度とかは扱わないでしょ。でももし電卓みたいなものが使えたら、実際にパソコンでいろんなソフトが使えたら、ノイズがあつたって大丈夫なんです。むしろ ICT 環境が整うことによってノイズを扱いやすくなることがあると思います。むしろ、そういう方向で使っていくのが、社会に開かれた教育過程につながっていきますし、真正の学びにもつながっていく。

(スライド 15)

ICTで学びの質を追求するために①

最新テクノロジーで実装して、旧式の学習観に基づく教育（大人数の一斉授業、行動主義的で個人主義的で機械的なドリル学習）を展開することになっていないか。ほどほどのハイテク感がちょうどよい。ペダゴジー・ファースト、テクノロジー・セカンド（pedagogy first, technology second）をこそ実現すべき。

ICT活用については、仕事や作業の効率を上げるための便利さやスマートさを追求することよりも、教育的価値を高める上では、フラット化を生かして、ホンモノの世界や研究や活動のように、より複合的で、割り切れなさやノイズを含んだ学習や活動にアクセスする機会を拡大する方向性で実装がなされる必要がある（真正の学び（authentic learning）へ）。

ICTでカラフルでアクティブで見栄えのするプロジェクトは組織しやすく、真正性を演出できる。「ハリボテ」（ホンモノっぽい活動）をまず作って、そこから学びの本番が始まる（中身の吟味と質の追求につなげ、活用から習得に降りていく）。

一活動としての成功が学びとしての成功を意味するわけではない。活動の中に一人一人の学びや成長を見取る教師や子どもに関わる大人たちの目の重要性。

入試改革との絡みで言いますと、真正の学びは、今の入試改革を見ていると、その方向に向かっていることがわかります。例えばうちの京都大学の特色入試もそうです、産業能率大学もスマホ持ち込み入試があるそうで、見た目は両方とも違うんですが似ているんです。何が似てるかというと、大学入試がずっと先の大学を終わった後の出口を見始めている。うちの特色入試でいうと、大学院入試みたいになってきているんです。産業能率大学は就職試験みたいになっているんですね。大学が、大学の出口を見始めている。その出口の先にあるのは本物の活動ですね。だからそういう面でも、今の入試改革の共通テストがどうこうというのは私からしたらマイナーな問題で、それよりも高大接続の観点で見たときに間違いなく動いてきている。

その方向性は大学の先の出口、そこへの準備性みたいなものを大学入学段階で見ようとしている。それがこの間強くなってきていると思います。

やはり最終的に学校で育ててきたものと、社会でモノになるために必要な実力とがずれてきている。そこをなんとかしようというのが、この間のコンピテンシーベースとか、資質・能力ベースの改革の基本的考え方で、そこからすると本物の学びというのは大事になってくるし、そこでICTをうまく使っていけばいいということです。

もうひとつ言うと、ICTを使うと張りぼてはつくれます。一見すると、もっともらしいプロっぽいものがつくれるんです。「小学生でもこんなプログラムがつくれるの!」と。でもこれ張りぼてが多いです。手順通りにやったらきれいにつくれるんですよ。それこそ小学校3、4年でもまとまったレポートめいたものをつくれるかもしれません。でも、なんかコピーで貼り付けたみたいで中身はない。逆に言うと、本物感は演出できますから。ICTの良さは、一度つくったものを基に編集ができることです。だからリライトします。一度つくったものがあったら、編集して書き直す。

英語でいうと「英語なんてぜんぜん無理」って思っている生徒が、ALTの人に手紙を書こうとする。「ぼく無理や」「私無理やし」って言ってるんだったら「翻訳ソフトを使っていいよ」とまずやってみてもいいかもしれない。やってみると翻訳ソフトなんて完璧とは違うんですよ。だから、「そこをもういっぺん、ちゃんとした文章にしていこうか」と英語の学習につなげていく。まず張りぼてをつくる、つまり活用から習得へと降りていくことで、このICTのカラフルでアクティブで見栄えのするものがつくりやすい点を活かしていくことができるかもしれないと思いますし、実際にやっている取り組みもあります。

むしろICTを活用することで、張りぼてを経験することで、次にそれを超えて真正の学びに挑戦していくこともできるようになる。そこでは、「そこにちゃんと学びがあるか」ということを見てとる目が重要です。それが改めて問われてくると思います。

それこそ、学びの質を考えていこうと思うと、タブレットやパソコンを使うときに、「これは一体何の代わりをしているのかな」ということを考えていくことが重要です(スライド16)。ICTというのは、びっくりするくらい言うことを聞かんのです、ほんとに。「いつもだったらこのプロジェクターがちゃんとつくのに、今日はつかへん」というのがあります。機嫌が悪いんですね。ICTは必ず機嫌が悪いときがありますからそれを前提で考える。そういうことを生徒たちと一緒に、トラブルがあってもうろたえずに「どうやったらええか一緒に考えようや」ぐらいのノリでやっ

ていくのがまずは大事。それで最後の最後はやっぱ先生が責任をとらなきゃなりませんから、そのときのポイントは、同じ機能が果たせるならばよりローテク、原初的なものに戻して考える。

「これは今何の代わりかな」ってことを考えるわけです。今のこのタブレットはドリルの代わりをやっているかな、ホワイトボードの代わりかな、ワークシートの代わりかな、資料集の代わりかな。この辺を考えていたら、いざトラブルになったときでもそこにスイッチすればいいんです。だから ICT を使うときのポイントの一つは、機能で考える。ロイロノートの使い方といった個別のアプリではなく、「これは何の機能か」と考えるんですね。それでローテクだったら何かな、と常に考えておくと間違わないと思います。

さらにいうと、そこで学力の質を考える。「知ってる、できる」「わかる」「使える」と3層で学力を捉えています。どの学力の質を目指すのか、どういう学びを保障するものになっているか、を機能の先に考えていくことが大事だと思います。つまり学力の質という観点で「これは何の代わりをしているのかな」と考えることが大事だと思います。

(スライド 16)

表. 学力・学習の質的レベルに対応した課題例、および適合的な教具とメディアの使用法

	教具とメディアの使用法	国語	社会	数学	理科	美術
「知っている・できる」レベル	問題集とドリルプリント AIによる個別最適化学習のためのタブレット	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計量の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りをする。
「わかる」レベル	教科書、黒板とノート、ホワイトボードとワークシート 電子化された教材パッケージ 電子黒板、ノートやホワイトボードやワークシートとしてのタブレット	論議文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテキストの記述から想像する。	現状地に幸福度が低い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起ころか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適用問題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で表現する。	教科書の本文で書かれている内容を把握し読み取る。 設定された場面、定型的な表現などを使って簡単な会話をし、発表を行う。
「使える」レベル	史・資料、ホンモノの物や人や文庫 情報収集・分析・表現やコミュニケーションのツールとしてのタブレット	特定の課題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえて自分の考えを論議文にまとめる。そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論議する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前どこに店舗すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万円当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題を作り、進捗の過程と結果を数値新聞にまとめる。	ガラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けず、その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読み、ポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分析して話し、発表を行う。

※同じ機能が果たせるのであれば、より原初的な教具に戻して考えてみる。

テクノロジーを生かしたイノベーションというとき、効率性志向の既存の作業や生活のスマート化のみならず、教科の専門性と結び付けて学びの質を高めたり、社会的活動と結び付けてフラット化や民主化につなげたりする視点も重要だろう。

② ICT で学びの質を追求するために その②

ICT のゴールをどこに持っていくか、という話です。生徒たちはこの休校期間中もそうですが、デジタル社会を既に生きているんです。学校の外側でも、先生がつながれと言わなくても LINE とかでつながっているんです。そして延々と YouTube を見ているんですよ。だけどそれは消費社会的でプライベートなデジタル環境です。その結果、時間泥棒にやられている。デジタル環境っていろいろです。パソコンのメールとスマホのメールは違いますよね。スマホでやり取りするときはそれこそワンフレーズで OK。「今日野球いこう」、「OK」、「おけ」。それは文章にしくたっていいわけですよ。でもパソコンだったらどうですか？ 仕事でパソコンのメールを使おうとし

たら、ちゃんと文章にしないといかんわけです。デジタルでメールを使うといったときでも、プライベートとパブリックは違うんですね。そこでいうと、生徒たちはもう今までも言われていますが、消費社会的でプライベートなゲームをようやるんです。だけどそれ以外のデジタルとの付き合い方は全然学んでいない。成熟した知的で文化的でパブリックなデジタル環境との付き合い方、ここを生徒たちにちゃんと手渡していくことがこれから大事になってくると思います（スライド17）。

（スライド17）

ICTで学びの質を追求するために②

- ・「電子黒板、タブレットといった機械が教師の指導や子どもの学習をどうスマートに便利にできるのかということ以上に、デジタルメディアが世界や社会や仕事や生活のあり様や人々の発想にもたらしている革命的な変化のリアル（可能性とリスクの両面）をどう子どもたちに経験させるか、まさに学校の学習の真正性の追求という観点から考えることで、テクノロジーの活用は、効率性、個別性、私事性と結びついた教育の機械化ではなく、学校の学習の文化性、共同性、公共性の再構築につなげることもできるだろう。消費社会的でプライベートなデジタル環境ではなく、職業人や専門家がアクセスしているような、子どもたちの日常生活ではふれる機会の少ない、知的で文化的でパブリックなデジタル環境をこそ学校において保障し、デジタルメディアとのより成熟した付き合い方を学ぶことが大切である」（石井英真「『未来の学校』をどう構想するか『大きな学校』と『小さな学校』の狭間でー」『教育展望』717号、2020年、56頁）。

それでいうと例えばバスに乗っている大人たちを見ていて、かたやずっとスマホゲームをやっている、まあゲームもいいですけどそればかりじゃもったいない。かたやオンラインでネット記事を見ている。全然違うんですね。同じくデジタルとの付き合い方といったときに、知的で文化的でパブリックなデジタル環境との付き合い方って、なかなか学校の外側では学べない。だから学校で学ぼうということなんです。

最終的に ICT を使っていくときのゴールとは、大人においてもこの1年ぐらいで仕事や学びの場において、ICT やデジタル環境がものすごく溶け込んでいるんです。本日もそうです。高校生も中学生も小学生もその学びの姿をみたときに、大人の仕事の姿と子どもの学びの姿がけっこう重なって見える。そういうことが重要かと思います。大人の世界に ICT やデジタルはどんどん入って来ていますよね、それと同じぐらいのことが学校でもできた方がいいでしょ、ということです。今はあまりにも段差があるのでそこを埋めて、大人の学びや仕事の姿と、子どもの学びの姿がつながってくる、重なってくる。そこが重要なかと思います。そう考えると「一人一台端末の活かし方」といったときに、それはこのパソコンをずっと真ん中に置いておくということではなく、例えば今実際に私がやっているのはパソコンを端に置き、真ん中に資料を置き、書きながら学んだり、仕事をするわけです。こういう姿が学校の中にも生まれてきたらいいな、ということです。

そう考えると最終的に一人一台端末は one of them、文具の中の一つ（スライド 18）。そのバリエーションとして、机の隅っこ、斜め前あたりに置いておいて、必要に応じて真ん中にくる。そういう感じかと思います。そこをスイッチできるようになることが、この一人一台端末のゴールになってくるし、この一人一台端末というのはさっきから言っていますが、先生方を学び超えていける力を持てる文具です。学び超えるのはなぜかと言うと、ネット社会で web 上では子どもを子ども扱いしないということがあります。ネットの先の膨大な情報や知見やホンモノとつながれる。それはメリットにもなるがリスクにもなる。彫刻刀の扱い方を教えるのと同じように、そういったリスクをちゃんとマネジメントしていくことも合わせて大事にしていくことが必要かと思います。

（スライド 18）

一人一台端末を生かす視点

- 教師が授業で活用する教具としてよりも、**学習者が日常的に学びにおいて活用する文具**としての意味。端末の先の膨大なデータやつながりにアクセスすることは、**アカウントをもって自分のデータを管理する主体（デジタル市民）**となる第一歩であるし、**教師を学び超えていく可能性**を広げる一方で、**切れすぎる刃物のように、保護膜なく web 上の社会にさらされることのリスク**も考えておかねばならない。
 - 「**自治**」の指導（つながりや道具を自ら治めること）の重要性（教師による指導的な管理を学習者による自己管理・自治へと発展的に解消させるような足場かけ）
- PCは、日常的には机の上で左上か右上の端を占める程度で、PC以外の文具がおろそかにならないことが肝要。PCが机の真ん中に来る頻度は学校階梯や教科・領域等によって異なる（**状況に応じて文具をスイッチできることが大事**）。タブレットへのタッチペンでの書き込みは、入力はできても、聞き書きなどは手描きのノートの意味があるし、逆に、まとまった文章を作成する（思いや考えを綴れているとは限らない）のにタイピングでの文書作成は適している。「書字」の発達の意味も問われる。PC上で手早く操作していても**思考が空転していないかを見極める必要性**。
- 既存の集団やつながりから個を切り離し、関係をつなぎ変える可能性。

最終的に「一人一台端末」を活かしていくときに、「自治」と表現しましたが、彫刻刀のようなリスクがあるものを使っていくときには、「このときは使えよ」「このときは使えな」といったことを大人が言うのではなく、自分でスイッチしながらやっていきますね。このように道具を治めていくという発想で、「一人一台端末」の指導を考えていく必要があると思います。時間オーバーなのでそろそろ終わりにします。残りのスライドは質問があればそこで話していこうと思います。まずはこの辺で私の話は終わりにします、どうもありがとうございました。

（講演終わり）

【質疑応答】

—三浦— それでは石井先生に質問からお答えいただこうと思います。石井先生、お願いします。

・学びを止めないためにとりあえず動画を流したクチです。ダメだったとは思いますが、より良くするためには何が必要だったのでしょうか？

—石井— そうですね、本当に苦渋の決断だったと思います。それも本当にその状況次第だったと思いますが、受け手側との文通感覚のような感じ、それから通信添削もそうですが、投げたら子どもたちがどうやって学びを進めていったらいいのかなあと、そこをどれだけ想像できていたかどうか、と言うのがあるかなあとは思いますが。投げたらその往復みたいなことができるかどうかを考えたかどうか、というのがあります。おそらく考えられたんでしょう。ある種そのときも「学びのつながりが子どもたちの学びを止めないということに関係した」というデータも出ていますが、きれいな動画はいろんな所に載っているんですよ、いまどきは。高校、大学入試とかの準備ならよくできたものが。それでいうと、他ならぬ担任の先生や自分が教わっている先生の動画にビデオレター的な意味があったと思います。そうでなければちゃんと、きっちりつくられた動画に勝てないんですね。あの時点で生徒も不安を抱えていた時に知っている相手との文通感覚のようなものが必要でしたし、学び手目線で動画をつくるなら、手元をもうちょっと映すとかがあってもいいと思います。顔を見ているだけだったら対面の関係。でも手元を映すと、低学年向けの映像にあるんですが、横に寄り添っている感じになるんですね。学びを保障していこうという観点からすると、提示することよりも、「こうやっていくんだよ」と手元の部分を映していくと、全然寄り添い感の印象が変わってくる、ということがあります。そういったことも含めて、工夫していかれるのもいいかと思います。

—三浦— はい、ありがとうございます。次の質問ですが、

・学校の外の人の授業を見ることができる意味では、ホンモノに出会うことができるかもしれないが、それ以外のホンモノに出会うということがなかなかイメージできない。なぜ、休校の中でもICTを使ってできた学校があるのかが気になります。

休校期間中にICTを使って、うまくできた要因には何が考えられますか。またそういうケースをご存知であればお話いただけますか。

—石井— はい、結局これはいろんな条件もありますよ。条件が揃っていないとできないということもありますが、「失敗、挑戦を恐れない」というのがありますね。校長先生のリーダーシップがでかい。さらにいうと、教育委員会のリーダーシップもでかいですね。熊本などもそうですが、挑戦する教育委員会が挑戦する学校現場を生むという、いくつかそういうケースが出ています。高校でいうと、長野県の校長先生ですが、学校名は忘れてしまったんですが、「今やっていることは無駄にはならない、引き出しを増やしているんだ」という発想でした。結局、やっても全部がご破算になっていく状況だったんですよ、あのときの今年の3月、4月、5月の状況って。準備してはまた延期し、と。全部が賽の河原の石積みみたいな感じですよ。そうしたら「何をやってもあかんやろ」と思いがちのところ、で、「絶対に無駄になりません。引き出しを増やしているんですよ」というその言葉一つだけでも全然違う。そこで先生方は無駄にならない

なっているし、「まずはやっでござらん、あとはこっちが責任を取るから」というぐらいのリーダーの肝の座り方。準備が何度も無駄になったとしても、そっちの方がプラスに行ったと思うんですよ。保護者とかからすると、動いていないことに対する苛立ちが大きかったから。だから挑戦を取った方が、保護者からの信頼を得られるというフェーズであったと思う。そこを逆手にとってやれたかどうか一つ大きいと思います。

一三浦 ありがとうございます。会場では納得のうんうんと、うなづく先生方の顔がよく見えています。さて、ハリボテの話がありましたね、お願いします。

・ハリボテを作るのはとても上手です。ハリボテから一皮むけるために何が必要なのか、という疑問が出ました。

一石井 確かに子どもたちはハリボテをつくりますが、これはいいことだと思うんですよ。高校生にプレゼンをつくらせるとすごくビジュアルがいいものをつくりますよね。いいものというか、けっこうゴテゴテしたものです（笑）。女子大に勤めていたときに学生がけっこう面白いものをつくったりしていたんですが、中身はもう一つね、ということがあるんです。実際に九州のある自治体と関わっていて、ICTを使っている学校を回って行ったんです。そのときに「やっぱり学びの質を考えんといかんのやな」と思ったんです。生徒たちは歴史新聞をつくるということで、なんか自分たちでつくろうとしていたんですよ、スライドとか。そのときに一緒に回っていた先生、生活、総合のスペシャリストですが、言った言葉がなるほどと思いました。「これは調べ学習になってない」と。私は「どういうことですか?」、その先生は「これは集め学習です」。集めてきているだけ、調べ学習って視点をもとに整理するってことが必要ですよ。もっと言うと、私からすると大学生を見ていて思うのは、調べ学習はようやるけども、「で?」って感じです。結局深まっていないんです。深めることや論じることをあまりやっていない、ということです。よう集めてきましたね、調べましたね、それはわかる。「それで、あなたは何を言いたい?」と言ったときに沈黙するんですね。物知りでいろいろと調べてくるんやけど、

「で、あなたは何を言いたい?」「何のためにこれをやったの?」と、この当たり前のシンプルなところが、あまり問われていないんだらうな、と思います。このように学びの質を見ていくときに、ハリボテっていうことでいうと、調べることって多いと思います。それでいうと「集め学習」「調べ学習」「深め学習」といった言葉を持って生徒たちの姿を見ると、いろいろと見えてくるものがあるのではないかと思います。そこを先生方同士で見る目を鍛えていく、これが校内研修、授業研究です。

授業研究は授業の腕を磨くことよりも、むしろ学びを見る目を育てていく、そこが重要。つまるところ、総合学習や探究もそうです。「そこに学びがあるのかどうか」「深まっているのかどうか」を見極める教師の目が大事です。もちろんそんなに簡単に身につくものでもないけれど、

「なるほど、こうやって先生は見るんや」と、先ほどの私の感動の例ではないけれど、こういった隣人の知恵というか、先達の知恵を学んでいく中で、目が肥えていく経験を繰り返していくことが大事だと思います。

一三浦 ありがとうございます。こういったものがありました。

・二次元での個別最適化について、ストンと納得ができました。実際の50分の授業実践の中で、それを実現するコツなどがあれば教えてください。

これも今先生がお答えいただいた内容で十分ではないかと思います。では最後に会場とオンラインからの質問を無理やりに一つにまとめます。また最後の質問はすごくでかい話になりますが、何か先生からコメントなどをいただけますか。

- ・ICTを活用するからこそできる授業というものはあるでしょうか？
- ・教育の「弾力化」(履修主義・カリキュラムなど)を進めるうえで、これからの教育に必要なことは何ですか？

一石井 「ICTを活用するからこそ」というと、今までやって来たことを強化するということもありますが、教室の中でも、いつでも、どこでも、誰とでも、フレキシブルにやっていくことがやりやすくなりますね。次のスライド(スライド19)ですが、結局、生徒たちが自分たちの学びを可視化することで、お互いが何を考えてるかが見えるようになりますね。タブレットを使うことでできることの一つですね。

(スライド19)

一人一台端末による授業の構造変容の促進へ

- ・日本の、特に中等教育における、学校内外における一方的斉授業と宿題(ともに個別主義・自力主義)の構造



- ・ICTが入ることで、教室での「教師と学習者の一対一の関係の束」(鵜飼の構造)を強化する(一対一の机間指導の強化)か、逆に、学びを孤立化させる(機械的ドリル学習の効率化)か、あるいは、鵜飼の構造を解きほぐして学び合いを促し、教室の関係に横糸を通せるか(練り上げ型授業や協働的プロジェクトや個人作業の協同化の促進)。机間指導(見て回る)よりも膝下指導(持ってくる)。机間指導に子どもたちも参加。
- ・一対一の手厚い個人指導を理想化することの危うさ。

また、一覧で見たときに落とし穴なのは、先生方が個別指導をめっちゃしてしまうことです。これはあまりよくない。つまり授業って斉授業に見えて、斉授業って、集団と個の教師の関係に見えてもそれは違う。一対一の教師と生徒の関係の束です、実は。例えると長良川の鵜飼いです。そういう構造になっています。日本の学習は集団主義に見えて実は違うんです、個人主義です、私から見れば。もう徹頭徹尾個人主義。だから横糸が通ってない。その結果、見えちゃうと先生は手助けしたくなっちゃうんですね。で、そっちに行ってしまう。先生が一対一で救おうとすると生徒はどんどん先生への依存を深めますし、つぶやきがなくなっていきます。隣を見よ

うとしなくなる。そうすると結果としてセーフティーネットが張れなくなる。「学び合い」とか「協働的な学び」は何かというと、教室に横糸を通す取り組みです。そういう展望で考えていくことがまずは大事です。さらにそのときに一覧で見えるからこそ、先生が生徒のつまづきを活かすとか、先生が「こことここで考えてごらん」とやるのではなくて、ある小学校で実際にやっていることですが、生徒が「この子の考え方が聞きたい」とタブレットを持って教室内を歩き回るということが出来たりします。これはタブレットがあるからこそ、お互いの考え方が見えるから聞きたいところに行って学ぶという、ただ、一つ間違えると学級のしがらみや関係性が出てしまうのでその危なさもありますが、それとセットでやっていくと、生徒たちが学びたい人と一緒に学ぶ。これは何をやっているのかわかりますか。机間指導といったものを教師ではなく生徒たちに委ねているということです。そういうことがやりやすくなるな、と思いますね。まさに「タブレットは教師を学び超えていくための道具」ということは、そういうことです。生徒たちは学ぶことに関してえらい道具を手に入れているんですよ。それで先生を学び超えていく出藍の誉れみたいなことがありますけど、そういうことを大事にしていくことがポイントだと思います。

そして次に教育の弾力化云々ということですが、その先に考えるべきは今のような話です。スライド10でも、「変化が激しい社会だから」ということを話しましたが、変化が激しいといっても、全く見えないということではありません。例えば交通渋滞で背の高いトラックやバスが、渋滞をすり抜けていくのと同じ、視座が高くて視野が広がったら、先が見通せます。こここそ、大事にしたい。先を見通すことが大事になってくるだろうし、そのために教育の弾力化は、教師だけではなくて、地域の人や斜めの関係、縦割りも出てきましたが、部活動なら先輩後輩、もっと言うと、学校の外に同じ問題を追求しているホンモノがいるとしたら、そういう人たちとの関係をつくっていくぐらいの緩やかさを持つことによって、生徒たちの視座がぐんと上がって視野が広がる。だからそういうことにつなげていくことが大事だと思います。

一三浦 ありがとうございます。もう実は終わりですが、最後に会場の皆さんやオンラインの皆さんに先生から簡単にメッセージをいただければと思います。

一石井 はい。もうでも今の最後の方に言ったことが、スライドの最後と関係しますが、先生方の学びと生徒たちの学びはきれいに相似構造ですね。だからICTをやっていくときに一番大事なことは、これはアクティブラーニングも同じですよ。生徒たちに実現したい学びを、先生自身が、大人たち自身が、ちゃんと自分の体をくぐらせてやっているかどうかでことですね。それが一番です。ICTにしてもこうやって、共同編集もそうですし、書き込むってことが面白いなと。自分で学んでいて「これいいんちゃう」って思ったら、生徒に試してみたいと思うわけです。まさにここで学んでいる姿、そこから学んでいくことだと思います。自分自身の学びを見つめ直すことから生徒たちの学びの在り方を考えていく。これは授業改善、そこを学校改善につなげていくときに一番大事なことです。授業改善は教師の学びの改善です、つまるところ。学校論的視野で、授業改善を考えていくのが近道です。だから個人の手法云々ということよりも、教師がどういった学ぶ存在になっているのかが大事です。そうしたら、先生方、やはり学んでいたら楽しいんですよね。教材研究も、あれは研究ですよ、学んでいるんですよ、生涯学習ですよ。先生方が日々やっていることが楽しいなって思えるように、学ぶことって非常にクリエイティブな

んです。そういうことをたくさん経験できるといいなと思いますし、今日ここに集まってくださっている先生方はそういうことをされているのかなと思いました。以上です。

一三浦 大変ありがとうございました、会場の皆さま、オンラインの皆さま、石井先生にもう一度拍手をお願いいたします。ではこれでセッション1を終了します。

(終わり)

教育改革推進フォーラム岡山 Session2

【コーディネーター】

福岡市立福岡西陵高等学校 校長

和田 美千代 先生

なぜ福岡西陵高校は ICT の船を出せたのか？

本校にとっての令和 2 年度、3 年度

- 1 2020 年 4 月オンライン学習スタートから、2021 年 8 月校内 ICT 研修会まで
- 2 なぜこんなことができたのか？ 吉本先生との出会い

なぜ福岡西陵高校は ICT の船を出せたのか？

本校にとっての令和 2 年度、3 年度

福岡市立福岡西陵高校 校長

和田 美千代

1 2020 年 4 月西陵高校オンライン学習スタートから 2021 年 8 月校内 ICT 研修会まで

会場の皆さま、オンラインで見えていらっしゃる皆さま、こんにちは。中には 1 年ぶりにお会いする方もいらっしゃるんじゃないかと思います。私はここ数年この産業能率大学のフォーラムに登壇させていただいておりますが、本日は今までで一番気を楽にして参加することができました。本日の私の役割は、昨年（2020）の青森フォーラムの振り返りと、吉本先生の紹介でいわば前座です。10 分ほどよろしく願いいたします。

私のプレゼンのタイトルは、『なぜ福岡西陵高校は ICT の船を出せたのか？』としています。このあと吉本先生が『ICT の船を編む』というタイトルでプレゼンをするので、このタイトルにさせていただきました。昨年夏の青森でのフォーラムでは、令和 2 年 4 月 13 日に全国の学校が途方に暮れているような中で、福岡西陵高校がオンライン学習をスタートしたときの話をいたしました。そのときの問いは『福岡西陵高校はなぜオンライン学習をスタートできたのか？』という問いでして、その答えはひとことで言うとタイミングが揃ったからです。（スライド 1）

スライド 1

タイミングが揃った！

- **天の時** 2020コロナ禍 2018九大とSIP共同研究
- **地の利** 2018福岡市のICT環境整備
(普通教室にwi-fi プロジェクター配備、先生方に一人一台iPad配布)
- **人の和** 吉本悟先生zoomで終業式合格者説明会
zoomer校長和田着任 職員神業の動き

「天の時」「地の利」「人の和」のタイミング。「天の時」は、2020 年 4 月がコロナ禍であったこと。「地の利」は、福岡市立の福岡西陵高校に ICT の環境整備が整っていたこと。そして「人の和」は、生徒たちの学びを止めてはならないという先生たちの思いが結集したからです。私は校長として着任 2 日目に「オンライン学習をやりましょう」と言いました。今振り返ってもめっちゃめっちゃひどい校長だなと思います。皆さん方の学校で、いきなりやってきた校長がオンライン学習をするぞと言ったらどうでしょう。本当にひどいなと自分でも思います。おかげで私は西陵高

校の職員から「黒船」と呼ばれるようになりました。当時の副校長先生が皆さんをなだめるのに「もう黒船が来たけん、しょうがない」といった内容をよく言っていました。

昨年はコロナでの学校休業が明けたら、これでやっとオンラインから解放されると全国の先生方は思っていたんじゃないかと思います。ところが、GIGA 構想（スライド 2）が前倒しになって、1 人 1 台の端末が全国の小中学生に配られることになりました。福岡市には市立高校が 4 校ありますが、そこでも 1 人 1 台の端末を配布しました。これは 4 校の校長会で教育委員会に直訴したというか、お願いしました。小中学校でタブレット端末を使った経験をもつ生徒が高校に入学してくるのに、その高校に何もないというのはどういうことなんだ、高校にも入れてくれ、とダメ元でお願いをしたら、あっさりと入れてくれました。先ほどの石井先生のお話の中で、「挑戦する教育委員会が挑戦する学校現場をつくる」とあったのは、本当にそのとおりだと思います。

（スライド 2）



昨年（2020 年）の 12 月 5 日の地元西日本新聞朝刊に、吉本先生が考えられた『未来の創り手、成長中』というキャッチコピーが一面広告で掲載されました（スライド 3）。市立高校には 1 人 1 台のタブレットが配布されるというもので、市立高校では 1 人 1 台の iPad が 3 年間無償貸与です。そして 960 台が届いて昨年の 12 月 14 日に福岡西陵高校 iPad 導入に伴う全体説明会をしました。そのときに使ったスライドのタイトルは『新しい学びを楽しもう！～iPad が西陵にやってきた～』（スライド 4）でした。そして学校は劇的に変わったと思います。個別最適化、協働的な学び、主体的で対話的で深い学び等が ICT によって一気に促進されたと思っています。

(スライド 3)

12月5日(土)
西日本新聞朝刊



(スライド 4)

新しい学びを楽しもう♡
—iPadが西陵にやってきた—

福岡西陵高校iPad導入に伴う全体説明会
令和2年12月11日 校長 和田美千代

2 なぜこんなことができたのか？ 吉本先生との出会い

生徒は iPad を文房具の一種としていろんな場面で、授業や学習だけでなく生活の場面で使っています。生徒たちはそんなふうに使っていますが、生徒以上に先生方が使いこなしています。

先日の8月4日に校内 ICT 研修会がおこなわれました。この研修会では「私はこんなふうに使っています」という事例発表を5人の先生方にいただきました。この先生方は校内の ICT を推進している人たちではなく、正直に言いますと「えっ、この先生がこんなに使っているの」と皆が驚くような結構な歳のベテランの先生方ばかりがラインナップされておりまして、それを見ながら、本当になんかすごい学校になったなと思いました。

では、なぜこんなことができているのかと言えば、先ほどのタイミングについてのスライド1の中の「人の和」のところですが、吉本悟先生が Zoom で終業式や合格者説明会をすでにやっていた。吉本先生がいらしたからできたんです。吉本先生と私の出会いは平成27(2015)年7月に山口県で行われた産業能率大学のセミナーにおいてです。小林昭文先生がアクティブラーニ

ングについてお話をされたそのセミナーでばったりと出会いました。会場で「和田先生、こんにちは。お久しぶりです」と声をかけられました。実は吉本先生は城南高校の33期生なんです。当時私は城南高校の31期生をドリカムプランの1期生として学年主任をしており、彼はその時の1年生でした。セミナーで出会ったその当時、吉本先生は、福岡教育大学附属福岡中学校で研究主任をされていました。だからアクティブラーニングのセミナー会場にいらしたんですね。その吉本先生が平成30（2018）年、福岡西陵高校に異動となり、総合的な探究のプログラムを立ち上げられました。そして令和2（2020）年のコロナ休業が始まったときに「ICTのある学び」というサイトを立ち上げ、全国の先生方の支援をされました。そこに同年4月に私が校長として着任しました。私はとても幸せな出会いだったと思います。

「職員のボトムアップと校長のリーダーシップがガッチリと握手」というスライド5は、私がこれまで産業能率大学のセミナーでドリカムプランについて説明をさせていただく時に何回も使ったスライドですが、これを私は、今校長の立場で、そして職員の吉本先生がボトムアップをしてきて、私が「それを学校全体でやろう」と言ったからできたんだと思っています。

（スライド5）

職員のボトムアップと 校長のリーダーシップ がガッチリと握手

そこで本日は吉本先生の話を皆さんに聞いていただきたいと思います。校長の私が言うのもなんですが、ものすごい先生です。ときどき「この人はいったい何者？」と思うことがあります。こうやって私が吉本先生を紹介していると、もうめっちゃほめちぎっているのこの後本人はともやりにくいと思います。どうか温かい目で見てやってください。以上で終わります。

（終わり）

教育改革推進フォーラム岡山 Session2

【事例報告】

福岡市立福岡西陵高等学校 教諭

福岡市 ICT 教育特別研究員

吉本 悟 先生

ICT の船を編む

- 1 あたらしい島の話
 - 2 ICT への期待
 - 3 ICT が教育に与える変化とは
- ＜国語の授業編＞
- ①俳句ポストカードと短歌ポストカード
 - ②平家物語絵巻に解説動画をつける
- ＜学校での推進編＞
- ③2018 年 4 月福岡西陵高校へ
 - ④教師用の iPad
 - ⑤全生徒と ICT
 - ⑥学校全体の取り組みへ
- 【質疑応答】

ICT の船を編む

福岡市立福岡西陵高等学校 教諭

福岡市 ICT 教育特別研究員

吉本 悟

どうも皆さま、こんにちは。福岡西陵高校の吉本と申します。国語科です、よろしくお願いします。校長先生が置いていったハードルが高すぎて困っています。和田校長先生の話の聞くと、誰もが元気になるという不思議なエネルギーが耳から入るようになっていまして、できれば校長先生の話がメインだったと思っていただいて、余力で聞いていただければ充分かと思っています。はじめに国語科だと言っておかないといけないかなと思ったのは、私は国語科だとなかなか思われなくて、情報の先生だと思われるんです。もともとは中学校の国語です。高校への異動希望なども特に持っていなかったんですが、人事交流で高校に行けと言われて西陵高校に来て 4 年目になります。高校の先生方の前で話をするのはなんだかおこがましくて恐縮するところもありますが、ICT に関しては前から少し勉強をしていたので本日は話をさせていただきます。Apple Distinguished Educator というものがありまして、それで勉強をしています。

1 あたらしい島の話

とある会社の社員教育で使われる社内研修用の話なんですが、非常にいい話を聞きました。

まず ICT を今から進めていくにあたって、ICT をすでにバンバンやれている学校はもういいんです。私が提供できるのは公立高校で、どうやって ICT をうまく回してスタートを切れたのか、ということなんです。そういったことを悩んでいる方にはちょうどいい話だと思います。私が考えた話ではありません、さっき申しましたように、とある企業の社員教育の話をパクってきています。

これは完全な例え話です。「新しい島の話」というものです。ある島で皆が平和に暮らしている。いい感じでバランスが取れているときに、海の向こうに新しい島を発見してしまった。このとき人間は大きく三つのタイプに分かれると言われています。一つ目の A タイプは新しい島に向かって泳ぎ出す人です。ファーストスイマーといいます。変化に最も敏感な人、変化に対して柔軟な人でもある。すぐに行ってみようとするタイプですね。次の B タイプは周辺にサメなんかがいなかんとリスクを見定めようとするタイプです。シャークウォッチャーと言うそうです。もう一人の C タイプは、あんな島には行かないぞと、今まで守ってきた島の旗を必死で守ろうとする人、今いる島にしがみつこうとするタイプです。変化に対して最も慎重な人です。このように ABC の 3 タイプがありますが、ここの皆さまは、それぞれどんなタイプでしょう。本日はあまり大声で話せないなのでお隣の方と小声でお話いただければいいかと思います。前の方で笑われている方がいらっしゃいますが、うちの校長先生は聞くまでもなく A です、特 A です。飛び込んだ勢いで

もう島までたどり着いてしまうようなタイプです。これはどのタイプが良いとか悪いとかの話ではないんです。ここが大事です。

例えばこの A タイプの人しか存在しないとすると、新しい島に行った後にまたどこかにいきますから、いつまでたっても安定しませんから。また、B タイプの人しかいなかったら、結局新しい島に渡ることはないんですね。そして C タイプの人は何もしていないように見えるんですが、実はこの人たちがかなり重要で、この人たちがいるから今の島の旗が立っているんです。この人たちがこの島のこれまでの秩序とか安定をつくってきているんです。秩序や安定をつくるという仕事をおこなっています。今は ICT が入ってきて「向こうの島にみんなで渡るよ」という時代になっていますが、この C の人たちが新しい島に無事に渡ってくれないと新しい島は安定しないんですね。ですから ABC 全員を安心して新しい島に送り届けるような船が必要になってきます。こうやって皆で安全に新しい島に行って、向こうで新しい旗を立てて皆でやっていくというパターンですね。

大事になるのは C タイプの人たちを反対派呼ばわりしないことです。「反対派」ではなくて「慎重派」だと私は呼んでいます。一度反対派ということになると、その人は反対し続けなければならなくなるんですよ。慎重派というのは、いつか新しい島に渡ることは決まっているが、それがすぐ行くか、ゆっくり行くかの問題になります。この慎重派の人たちを大事にするのはとても必要なことです。ICT を進めるために校内でせめぎ合ってきた学校もいっぱいあると思います。推進派の人が慎重派の人に正直なところ、邪魔されているという感覚で苛立つこともあったと思います。でもいよいよ時代がタブレット 1 人 1 台となって、推進派の人はウキウキですよ。「やった、もう邪魔はさせないぞ！」みたいな感じですが、慎重派の人たちはもうひやひやしてるんですよ。今までの慎重派の言動も不安の表れだったと思ってください。不安な人を叩いたところで何にもなりません。いかに不安を解消してあげられるかが推進派の人の仕事なんです。「それ見たことか」ではありません。「今何に困っていますか？」と慎重派の人に声をかけることが推進派の人がやるべきことだと思っています。皆を乗せる船を用意することも推進派の仕事です。とにかく慎重派の皆さんを学校で大切にしてください。という例え話でした。

2 ICT への期待

いろんなことがやれる ICT ですね。皆さんはどんなことを期待しているのでしょうか。いろんなことができるから、いろんな期待が高まっています。たとえば、オンライン学習、個別最適化、協働化への期待が高まっていますね。それ以外にもまだまだいろんな期待がありますが、今の内容を簡単に説明すると、「オンライン学習」とは、休みの生徒に学習機会が与えられる、遠くの本物に出会える。インドの勉強をするときにはインドとつないだ方が、そりゃ本物に出会えます。これは実業系の先生方によく聞かれることですが「現場の技術者とつなぎたい」と機械科の先生はおっしゃいます。なるほどと思います。

次に「個別最適化」とは、同じ時間、同じ教え方で早く理解したらよくできる生徒、そして理解が遅いと落ちこぼれという構図がありましたが、これをなくそうということに期待が集まって

います。どの先生にも経験があると思いますが、この生徒はもっと時間をかければちゃんとわかるようにしてあげられるけど、「今日はもう次のページです」みたいな授業をせざるを得ない。これは一斉授業をやっているせいで、どうやったってそうせざるを得ないことがあったと思います。悔しかった、もどかしかったですね。あれは先生が悪いんじゃないくて、構造の問題だと思うんです。学校教育の構造がそうなっている。でも「それを大きく変える可能性があるぞ」と言われています。

そして「協働化」、一人でやっていくわけじゃない、先ほどの石井英真先生のお話にもありましたが、横糸を通すということです。そういったことをしながら誰かと一緒に練り上げていって考えを深めたり、ソフトスキルを身につけていったりすることも期待されています。

まだ、さらにあります。ビッグデータを取って生徒たちのわかり方を解析して、それを生徒たちにフィードバックするラーニングアナリティクスの分野、それによる学力向上。広い意味での学力の3要素を踏まえた学力向上もあれば、狭い意味ではテストの点数を追いかけてテストの点数が上がるという期待を抱いている方も実際にいらっしゃると思います。期待することは悪いことじゃないと思います。その他に、アシスティブテクノロジーを使って特別支援が必要な生徒たちの教育がしやすくなったり、それから正直なところICTを導入して「ICTをやっています」といった学校の特色にしていみたい、という気持ちでこの数年間進んできた学校もあったんじゃないかと思います。

何を期待するかがバラバラだとなかなかうまくいかないし、いろんなことができるから迷うんですが、自分が何を期待するかは整理しておく方がいいと思います。私の場合はすごくシンプルで「自ら学ぶ」です。自ら学ぶようになっていくために、ICTを使いたいと考えています。そう思い始めたきっかけは結構前になるんですが、2014年頃で今もその気持ちはあまり変わらないです。ここからはちょっと昔話になります。

そもそもICTに興味を持ったのは、iPadを買ってからです。私の場合スマホを持つよりiPadが先でした。スマホにはボタンが無いので、ボタンがない電話は信用ならないと公言していました（笑）。結構アナログ派でした。中学校に勤務していたんですが、授業を良くしたいという気持ちがあって、生徒たちのノートを机間指導中にパシャリと撮って前に映したいと思ったんです。学校にはモニターがついておりましたので。それまでは実物投影機といって、ノートを借りてきて映してまた戻す、ということをやっていました。でもこの作業は無駄だし、授業のリズムが悪くなると感じていて、「そうだ私がカメラを持っていればいいんだ」と。でも普通のカメラじゃもったいないので、電子辞書にも使えそうだからとiPadを買いました。これがスタートです。

そしてスタートとは全く違う方向に発展していきました。国語の授業で通信文を書く授業をしておりました。合唱コンクールという行事がありますが、その案内状を保護者に出すというものです。クラス全員が書いて一番よかったものを選んで校長名を印刷して保護者に配る、という授業です。そしたら、そもそも宛名は右上なのか、左上なのか、日付はどこかなどを生徒たちはがんばって考えてつくるんです。私は意地悪なもんですから、なかなか教えないんで、「よし書け！」としか言わないんですよ。生徒たちは机の中をガサゴソやって、昨日もらったけどまだ親に渡していない学校からのお便りみたいなものを見つけ出すんです。で、「ここに校長名やな」とか言い

ながら書いていくんですね。そんな中で「記」と書いた下が続くのは、まずは日付なのか、会場なのか、という話になります。そこでなぜそうなるかという理由を話していくと、スケジュールを押さえてもらうためにまずは日付が一番と生徒たちは気づいていくんですね。

「後の項目は何を書く？」「全部工夫してやっていいよ」となったら、日付、場所、入場無料とあって、それはあたりまえだろうと。そして後は何を書くのかとなったら生徒たちは面白いですね。自分が歌っている場所がわかるような工夫をする生徒がいたり、来てくれた方にはお帰りのスムーズに動いてほしいので、バスの時刻表を入れたいという生徒がいました。なんていい子なんだろうと思いました。

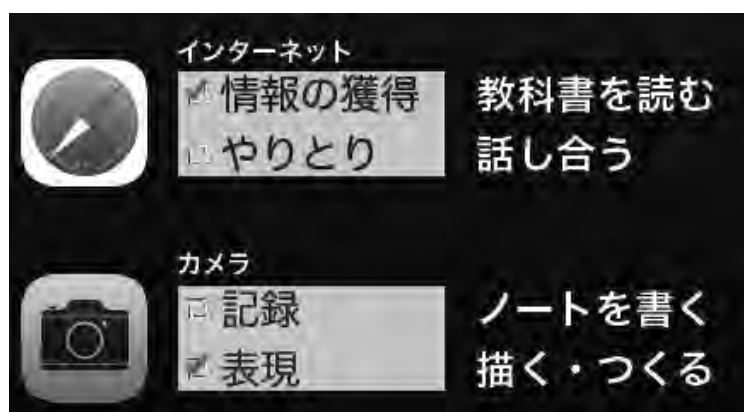
その生徒から「先生バスの時刻表を持っていますか」と聞かれて、持ってるわけじゃないじゃないかと思ったんですが、手元に iPad があったのでその生徒に iPad を渡しました。これが、私が授業で初めて生徒に iPad を渡した瞬間です。生徒は iPad でバスの時刻表を調べて書いていくわけですよ。これはすごいと思いました。例えば「これはいいアイデアだけど今はわからないから、授業の後で調べてごらん」と言った瞬間、授業と世の中はブチっと分断なんです。何もリアルじゃない。それがこんなにリアルにやれる、こんなに面白いことはないと思いました。学びが、授業が、教室内で閉じなくなる、ということを発見しました。それで、生徒たちに iPad を触らせないといけないという発想になりました。

3 ICT が教育に与える変化とは

ICT が教育に与える変化を突きつめると、私はこの二つじゃないかと思っています。インターネットとカメラです。インターネットは情報の獲得とやりとりを可能にするものです。カメラは記録と表現を可能にするものです。これを授業中の動作に当てはめると、インターネットは、要は教科書を読むとか先生の話聞くといった方法でしかできなかった情報の獲得を自力でできるということです。そして「話し合う」という活動でやってきたものを、もっと多くの量と文字でおこなうことができます。またカメラは「ノートを書く」ということでやっていた「記録」から解放される。ノートがいらなくなるとは思っていません、ノートは記録のほかに保存、思考の整理という仕事をやっていたと思います。だからノートは「思考の整理という役割」に全部振ることができます。そして表現ですね、今まで絵を描いたりレポートをつくったり工作したり、といったことをカメラが使えるともっといろんなことが可能になると考えました。特に、私が注目したのがこの二つ（スライド1）で、これが段違いに教育のかたちを変えてしまったと思います。これを使えば自分でどんどん楽しく勉強できるんじゃないかなと思ったんです。自分で学んだ方が楽しいし、印象に残るし、試行錯誤して成長すると思うんです。

こういったことをもっと授業に組み込みたいと思ったことが、iPad を使い始めてどんどん推進していく原動力となりました。それ以来、授業のかたちが変わっていきました。iPad 以外にもいろいろと授業に取り入れて試しました。

(スライド1)



＜国語の授業編＞

① 俳句ポストカードと短歌ポストカード

この写真は中学校ですが、タブレット端末を持っている生徒がいて、何かを撮影している生徒がいます。あと自由に使える付箋紙や、生徒がどこからか持ち込んだホワイトボード、さらに意外と人気がなかった電子黒板があります。席を立っている生徒は、他の班からインタビューをしに来ていますね。それから奥は図書室ですが、本を探しに行こうとしている生徒がいます。こういった風景が、そのころの私の授業のスタンダードになっていきました。生徒は立ったり座ったり歩き回っていて、パッとみると休み時間なのか授業中なのかわかりにくいと思います。ちなみに休み時間に写真を撮っても同じような写真になります。授業の前の休み時間から生徒たちが勝手に勉強を始めるといった感じで「この前の調べてきた?」「これやけど今日はどうする?」となって、チャイムが鳴ると一度それがピタッと止まって、黙想、礼をして、チャイムが鳴り終わって「はい、はじめ」となるとまた同じようになります。写真ではパソコンを使っている班もあれば、タブレットを使っていたり打ち合わせをしています。さて、彼らは何の授業をしているかというと、「いいプレゼン方法をまとめたプレゼンビデオをつくって提出する」というものでした。

「話す、聞く」の授業の中で話し方や間を勉強できれば国語科としては、指導要領上はそれでよかったんですが、生徒たちはそれを当然どんどんと越えてきます。プラスアルファ、プラスアルファと。中には私も知らない言葉をたくさん引き出してきて、「わあすごいな、実際にやって見せてよ」「そこはちょっとなんか違うと思う」「もっとこの方がいいけるかも」などのアドバイスをしながらの授業でした。

また屋外でも iPad を利用して撮影をしました。俳句の授業で「俳句をポストカードにしてみよう」というものですが、絵を描くと結構時間がかかっていたものが写真だと実際の景色でつくれるのでいいなと思いました。(スライド2, 3, 4)

「枯野にも 静かに灯る 生命かな」

「秋風や 石のぬくもり まもりつつ」

「今日もまた、ひとり。 おうおう。」

(スライド2)



(スライド3)



(スライド4)



私は種田山頭火などが好きで、自由律俳句などを扱っていました。最後の「今日もまた、ひとり。おうおう。」は自由律俳句を作ってくれたと思います。すごえなあ。

この日、生徒たちは相談しながら公園の中を歩いていました。いいなあと思いました。語感が素晴らしい句ですね。こういうのは短歌でもいけるので、2年生は短歌でポストカードづくりをやっていました。部活の写真を撮ってきたり、授業中に iPad を渡して「写真を撮っておいでよ」と言ったら「私のお弁当をここで開いていいですか」とお弁当の写真でカードをつくった生徒がいました。おもしろいですね。この生徒は尾崎豊っぽいのを作りましたね。(スライド5, 6, 7)

それらのポストカードを廊下に掲示したら生徒たちも楽しんでいました。こういった学習がひと通り終わると、単元の振り返りです。振り返りのようすは当時 Google フォームで集めていました(スライド8)。

(スライド5)



(スライド6)



(スライド 7)



(スライド 8)



まだ iPad が 1 人 1 台の時代ではなかったので、その後ワードに流し込んで、紙にプリントして生徒たちに返すということをしていました。こうしておく私の手元にもデータが集るので自分の振り返りにも使い勝手がよかったです。(スライド 9)

いえ、大体三つの場面に集約されています。ということは知られていない場面がたくさんあるということです。読んでみると実はけっこう面白いんですよ。そこでこの絵本を手に入れたので、イヤホンガイドのようなものができないかと思ってやってみました。課題は「平家物語の一場面ずつを朗読・解説した映像を撮影して 21 世紀にふさわしい絵巻物をつくりなさい」です。この絵に生徒たちが解説を入れる、それを全編通して皆でつくる。絵を渡して「あとはそれぞれの班でよろしく」です。各班ごとに担当する場面が違うので、調べる内容も班ごとに違ってきます。班でがんばるしかないんです。本を借りてきたり iPad で調べたりしながら、その場面の解説をつくっていきます。いろんな班がそれぞれのプランでやっていきます。ある班では 5 人のうち女子 2 人だけが教室にいたので、男子 3 人どこに行ったかと思ったら、「この場面演じてみるけん、撮って」と解説動画を撮っていました。そんなふうに教室からも出ていくようになります。そしてできた解説動画を埋め込みます。絵に iPad をかざすと AR で動画が浮かび上がるというアプリを利用しました。絵本をプリントして長い巻物状態にし、それを広げて iPad をかざしたら朗読と解説が流れたら面白くないか、と生徒たちに投げかけたら「それ面白そう」「じゃ、やろう」と。巻物の中の好きな場面を生徒たちに選ばせますが、絵だけなので一体どんな場面なのかはわかりません。テキストもない状態からですが、調べて解説をしてくれました。

平家が都落ちをする前の「月見」の優雅な場面がありますが、そこを担当する班は「うちの学校で一番、趣のある場所はどこですか？」と聞いてきたんで「銀杏の木かな」と言ったら「行ってきます」と授業中に銀杏の葉が降る中で解説動画を撮っていました。こういった学習（自らが必要な情報を獲得し、つなぎ合わせ、問題を解決する）がどんどんと可能になると思っています。つまりそれは教科が探究化していくことだと思います。

<学校での推進編>

③ 2018 年 4 月福岡西陵高校へ

以上のように一通り中学で授業をし終えて、2018 年 4 月から福岡西陵高校に行くことになりました。中学を終えたら、なぜか高校に來い、ということになりました。そこで私に与えられた使命は「ICT を進めたい、なんとかしろ」ということと、「総合的な探究の時間を始めたい、なんとかしなさい」とこの二つのミッションをいただきました。

当時の校長先生に「これをよろしく」と言われましたが、なんせこれまで授業を高校でしたことがありませんので、ICT と探究のことはわかりますが、「教科のことはおとなしくしておこう」「ああいった授業をいきなり展開したら、たぶん怒られるぞ」と思いました。案の定、一度教室から生徒を出してウォークラリーと称して国語の授業をやったら怒られたんです。「安全性は大丈夫ですか？」って言われました。いや、修学旅行でシンガポール自由行動とかをやってるのに、なぜ校内で自由行動をして怒られるのかと思いましたがね。ま、文化だなと思いましたが。いきなりはだめだろうから教科ではおとなしくして、ICT の件をまずは進めることにしました。

④ 教師用の iPad

同窓会の予算で職員に iPad を導入することを当時の校長先生が決めていたので、その iPad が届き、設定をして職員に配ることから私の仕事が始まりました。iPad を手にした職員の集合写真がありますが、表情はにこやかに写っているんですが、実際はあんまり歓迎されていたわけじゃないんです。校長先生がいきなり決めて「やりたい」と言っていたので、他の先生方は「何で？」という状態で、さらに「総合的な探究の時間もやりたい」と言っていたんですが、いわゆる読みかえなどを流行らせていたので、「どの時間で？」「それをやったらこれができないじゃん」とだいぶ言われたので、まずは時間づくりから 1 年かけました。そんな感じで iPad はあまり歓迎されてるわけじゃなかったんです。それでも実物が届くと触ってみたいという人はいらっしやるので、そこで「ちょっといい使い方がありますよ」という感じで自主研修会のようなことをやって、10 人～20 人ぐらいの参加で「楽しいね」「こんなことできるんですね」とやっていました。さらに生徒用の iPad を進路部の予算で 8 台購入し出願用ということで進路部に置き、その 8 台を借りて授業に持って行く。それから研究用ということで予算が特別に組まれて、8 台→80 台→160 台→956 台と増えていきました。1 人 1 台になる前、全校に 80 台のときは授業のたびに教室に 40 台持って行かないといけなし、他のクラスとバッティングしたら使えないし、やはりこの壁はすごく高くて、よっぽどやりたいのでないとできないですね。だから活用する先生が限られてくるし、それはつまり使うチャンスのある生徒が限られているということなので、iPad を使っている授業風景の写真は見栄えがよくても、学校の底力は変わらないと思えました。

⑤ 全生徒と ICT

そして翌年「総合的な探究の時間」のカリキュラムがスタートできたので、ここで各班に 1 台ということにして、これで全員が触れるようになりました。そして多くの先生が、自分の教室内で生徒が使っている姿を目にすることができるようにもなりました。生徒向けに放課後学習会を開催しました。「Next Lab for Students」、「HOUR OF CODE」、「放課後プチ留学」、プチ留学では画面の先にオーストラリアのセカンダリースクールとつないで交流活動をしました。これには Zoom を使いました。そんなこんなことをやっていたら、2020 年 2 月 27 日臨時休校がやってきました。「うわ！ しまった～、3 月に国際交流を入れてたのにどうやって Zoom をやったらいいんだ」と一瞬悩んで、次に冷静に考えて「あ、家からのほうがやりやすいじゃん」という結論にいたりしました。生徒たちはスマホを持っていますから、「自宅から Zoom ね」、となって「できるじゃん」となりました。それまでは学校で学校の iPad を使ってやらせていたんですが、このときは「みんな家からできる？」「たぶんできます」で、やってみたらできました。そして、この時期「放課後プチ留学」は「家からプチ留学」になりました。

⑥学校全体の取り組みへ

また休校中にちょっと補習的なこともやってみました。ここまでは割と個人的な取り組みです。休校中の学習支援は、3月は私しかしていなかったんですが、4月にあの「黒船」がやってきて、着任2日目にいきなりオンライン学習をやるって言うから、職員皆が「ええー」となるんですが、Zoom自体は知っていたんですね。生徒たちがやっているのを職員全員知っていましたし、Zoomで全校集会をやったこともありましたから。それで先生方も「じゃ、やるか！」と。4月の1週間は名前だけ担任だったので、「授業をする前にまずクラスでホームルームをしましょう」ということで、そのときに生徒に初めて会ったときです。ほんと元気になりました。

昨年の3月、4月、5月、あのときは皆さんも経験があると思いますが、先生たちは暗かったですよ。早く家に帰れるようになったのに、やはりさみしいんだなという感情がめっちゃ出ていたじゃないですか。暗いなあと思っていました。そしてこのオンラインが始まったとたんに、この日の終わりの職員室がめっちゃ明るかったんですよ。「生徒たちにやっと初めましてが言えた！」そう先生が言っていました。私たちは生徒とつながってなんぼなんだなあと感じた日でした。

これで、「もう皆全員でオンライン学習をしよう」となって、苦手な方もいるのでチームで取り組んでオンラインの授業をサポートしました。もちろん内容についてはまだまだ勉強が必要で、先ほどの石井先生のお話でも勉強させていただきました。

でもこのとき大事だったのは、先生方が「自分にもできた」を感じたことです。慎重派の先生を含めて「自分にもできたじゃん」と「便利じゃん」が浸透しました。これはチャンスです。さらに福岡市が1人1台iPadを導入すると言ってくださったので、冬には入ってくることになります。については「使い方を勉強せねば」となり夏期研修をしました。WEB上で学べるApple Teacherというプログラムがあるので「これを皆さんやってください。強制ではありませんができればよろしく」とお願いしましたら、校長先生がいの一番に取り掛かって、他の先生も「じゃあ、がんばります」と取り組んでくださいました。去年の夏は本当に忙しくて、休みが減っていたし、先生方にも休みが必要な感じでした。だから自主参加にしました。ガイダンスも30分程度にしました。あとは自宅でeラーニングで興味がある人はやってください、としました。校内で2回ガイダンスを開いて都合のいい方に参加してもらいました。また「参加できなかった方は参加者に聞いてください」というかたちです。先生方をサポートできるようにApple Booksをつくっておいて配信しました。そうしていたら、一方的に研修をするよりも、先生方がお互いに教え合ってくれたので仲間づくりが進んだように思えました。気がつくとはほぼ全員がApple Teacherになっていました。一部の先生がまずはApple Teacherになるんですね。そこでステッカーを配ったんです。そしたらiPadにそのステッカーを貼るんです。で授業に行くと生徒が「Apple Teacherなんですね、先生」と目ざとく見つけるんです。次の授業の先生が来たときに「先生もApple Teacherですか？」って聞くんです。そしたらその先生も「うん、明日ね」って。そんな感じでがんばってくれるんです。生徒たちの力ですね、やっぱり。

学習会のNextLabの参加者もえらく増えていい流れでした。この流れを追い風に若手10名で

推進チームをつくりました。そしてメンバーそれぞれが研修を運営し、研修会を同時に複数走らせました。同じ時間帯に複数の部屋で研修会をしました。これがけっこう効果的で若手はどんどん成長してくれましたし、皆さんもニーズにあった研修が受けられるということでした。さらにレベルアップしてもらうために次は校外の人とつながろうとして、学校外のフロントランナーとつなげました。「GEG Fukuoka City」を立ち上げ、うちの学校の先生を無理やりスタッフに入れて、いろんな校外の方と交流してもらって、先生をどんどんアップデートしていきました。

生徒たちはこっちが手を打たなくてもどんどん成長していくのすごいなと思っていました。去年担任をしていたクラスで学級委員が「先生、今日から時間をください。ぼくがクラスのみんなに勉強を教えます」と。毎日彼がプレゼンをつくって、帰りの会で10分間授業をしてくれました。秋から3月までずっとやってくれました。彼がずっと授業をしてくれるから当然帰りの会はその分遅くなっていくんですが、他の生徒は文句も言わずに「うん、ありがとう」とやっています。こうなると私ができることはひとつで「では先生お願いします」「よし、お疲れさん」しかなくて、連絡もなにもさせてくれないですね。担任を取られましたね、彼に。それで放課後もそういうスタイルが習慣化していきました。期末テスト前に「勉強を教えて」と言われた生徒が「うん、明日ね」と言ってプレゼンをつくって翌日放課後に教えるという状態になっていきました。

そしてついに冬に1人1台のiPadが届き、それぞれに貸与しました。

そして2021年の春休み、数か月前の3月のことですが、学校の廊下に自習スペースがあるんですが、なんかちょっとうるさいんで覗いてみたんです。そこにiPadを手にした女子バスケットボール部の女子2人が机に向かってiPadを覗いて座っていたんですが、何をしているのかわかりますか？ お隣の方と小声でどうぞ。(スライド10)

(スライド10)



私はものすごくうれしかったです、彼女たちは体育祭の実行委員会をZoomでやっていたんです。先生がやれと言ったわけでもなく、勝手にやっているんですね。彼女たちの手元のiPadの画面の中はそれぞれの生徒の自宅で、その中に先生は入っていませんでした。

2人のうちの1人が実行委員会をやっているんですが、彼女がこうやっているのは、探究プロ

グラムに理由があります。実はこの生徒は若者の体力低下について探究していて、その問題を何とかしたいと考えて、原因は運動嫌いの人がいることだと、またその原因をさらに考えると運動が苦手な人がいるんじゃないか、苦手だから楽しめないのがよくないんじゃないか、ということは、誰もが楽しめる体育のやり方をすれば運動嫌いが減って、若者の体力低下問題も解決するのではないかと。そう考えて体育教官室に行って「体育のやり方を変えてください」と言って、そのときは、けちょんけちょんに怒られたわけです。「お前が口を出すことじゃない」と。まあその通りです。「私の探究は終わってしまいました」と打ちひしがれて帰ってきたんですが、ときを同じくして、2021年の体育祭は例年通りにはできないので、やり方を変えなければならない。については種目など全部を考え直す必要があり「アイデア募集、実行委員を募集します」と生徒会から声がかかったんです。そこはチャンスだと「私はこっちで行きます」と彼女は自分で考えた種目を提案しに行きました。そしたらいつのまにか実行委員の長のようにさせられて「しょうがないんで私ががんばります」と実行委員会を組織して、この日は廊下で、iPadでzoomをしていたんですね。この生徒が考えた今年の体育祭の種目はこれでした（スライド11）。

（スライド11）



めちゃくちゃ面白かったですね。ぶつかるんですが「これは密ではない、一人密です」と。終わった後は消毒をしていました。誰もケガをしませんし。リレーは足が速い人だけが出られるが、これなら出れるという人もいます。「これは見ても楽しいからメイン種目にもなります」とその生徒は言ったんですが、物が要るんですね。こんなものはそもそも学校に無いので、「いったいいくらするの？」「1個2万円で8個必要です」「そんなお金は急に言われてもないよ」となりませんが、その生徒はがんばってプレゼンをつくり、同窓会にそのプレゼンを見せて予算が取れて、なんとか実行できました。そのプレゼンをつくったこともICTをやっていてよかったなと思いました。

うちの校訓は「誠実、協力、創造」です。この姿（スライド10）もまさにそれを表しています。他の学校では電源を入れるのに先生の許可があるところもありますので、今年異動で来られた先生方は、生徒たちが廊下でこんなふうになっている姿に驚かれるんですね。そのときに「ダメだろ」なんて言われたら機会が失われてもったいないので、先にこのスライドを見せて「これが校訓で

す、その姿です」と見せると皆さんもう納得です。この姿を奪わない、これをもっと増やそうとしています。些末な問題はいっぱい出てきますが、そこはその都度対応しながら、ルールを移動させながら、でもこの姿が消えてしまうようなことにはしたくない。この姿をもっと増やしたい、ということでうちの高校は進んでいったわけです。さらに受験期になったらこんな姿で勉強をする生徒が出てきたらいいですね、という話をしました。

そして翌週の放課後、4月の第1週ぐらいのことだったと思います。職員室から3年生の教室に生徒が1人残っているのが見えたので、受験勉強にしては時期が早いし何をしているのかと覗いてみました。首の角度が下を向いていないので勉強ではなさそうで、iPadで遊んでいるのかなと廊下から教室を1枚パシャリと盗撮しました。前から見たら笑っていて楽しそうでした。「何しとんのかな」と画面を覗いたら、この生徒はオンライン英会話をやっていました。うちの学校で斡旋しているわけじゃないんです。勝手にやっていました。これが勝手にできるというのが本校の良さだと思います。この生徒は1・2年生のときに担任をしていましたが、入学3日目ぐらいに将来の夢を聞いたときは、それは国際結婚だったんです。「それって夢なのか」と思いましたけどね。英語に興味があって英会話を勉強していたようで、個人でされている英会話の先生の夫がカナダ人で国際結婚をされていた。そのカナダ人が、カッコよくて、そこに憧れて、自分もカナダ人と国際結婚をしたいと最初将来の夢を言っていました。「まあいいんじゃない」みたいな話をしていました。この生徒と一緒に探究などを勉強していくうちに、だんだん興味が変わっていくのがわかりました。最初はカナダ、イギリス、アメリカなどのG7に出てくるような英語圏に憧れていましたが、しだいに東南アジアやアフリカなどの発展途上の国々に興味がいくようになり、「そういった国々の支援をしたい」「それを将来の自分の仕事にしたい」と言うようになりました。そして探究の時間に他の生徒とチームを組んで、学校に行けない子どもたちに文房具を送るプロジェクトを始めますと言いました。「それは面白い、やってみよう」と私も言いました。この生徒はiPadでNGOの方とつながり「どうやったら送れますか？」と相談したら、「短期的に物資の支援をすることはやめてくれ。むしろマイナスだ。現地環境を崩すだけだ」と教わりました。もし短期の支援をするならお金の支援でないとダメだとも言われ、お金はないので「先生、募金活動をしてでもいいですか」と。「うちの学校では募金活動はさせられないんだ」「じゃあ他の方法でお金を集めます」と。そしたらこの生徒は学食と掛け合ったんですね。学食のいつものメニューにちょっと上乗せしたゴージャスなメニューをつくって、売り上げもちょっと上乗せしてもらって、「そのちょっとの部分を私にください」と言ったんですね。学食もコロナ禍で利用者数も落ち込んでいたので、この案は起爆剤になるかもしれないとコラボレートしてくださいました。当初の予定で80食の計画が、けっこう人気が出て200食以上の売り上げになりました。その売り上げの一部をこの生徒が支援に回すことができました。

そんなことをしているうちに、大学は国際的に学べるところに行きたいとオンライン英会話も続けました。そのときに「どうなの？」と聞いたら、「正直なところ、オンライン英会話には人件費が安い国の先生がいらして、発音はちょっとどうなのかなと思う日もあります。たぶん私のテストの点数は上がらないです」と言うんです。「でもやるの?」「はい」「何で?」「いろんな国々の賃金の安い国々の文化を知ることの方が私の将来に役立つと思うから、これを使って毎日違う

先生と話したいと思っています」そう言いました。めちゃめちゃ育ったと思いました。最初は国際結婚をしたいと言っていた生徒でしたから。でも彼女の活動をずっと可能にしてきたのは、自由に使える ICT 環境だったと思います。

探究の時間を軸にしているので、1 人 1 台になっても生徒たちは仲間と一緒に使っています。もちろんプレゼンにも使えるのでこの前、発表会もしました。校外の方にも参加していただいてアドバイスをいただいたりしています。

もちろん授業中もいろんな先生方が iPad を使うようになっていて、探究を軸にスタートを切ってきましたが、先ほど和田校長がお話しましたようにいろんな教科で使われていて、校内研修会で「すごいな」と思いながら聞いていました。学習での使い方を今までのところ統一したことがないので、本当に先生方が創意工夫でやっていますが、学校として目指す方向性、育てたい生徒の像はシェアできているから、いい感じで流れているんだと思います。

今年も海外には行けませんが、生徒向け放課後学習会の「プチ留学」は継続しております。行けない分、非常に人気コンテンツになっています。インターネット上で「プチ留学があります、申し込みをどうぞ」とフォームを投げると、30 分以内に埋まってしまいます。皆がこの ICT を窓にして世界とつながろうとしている熱を感じます。放課後の自習スペースでも生徒が ICT を使っている姿を見るようになり、思っていたより早いスピードで生徒たちは適応していつている気がします。

次の例ですが、この生徒は元給食専門委員長で「私の給食指導が間違っていました」と言い出しました。意味がわからないですね。探究の一環で食について勉強していくと給食の目的や、役割が時代と共に変わってきていることを学んだらしく、「自分は違ったな」と思ったようで、このあと、この生徒はどうしたかというと、中学校に行って、校長先生と教頭先生に「私に後輩に話をする時間をください」と直談判したんです。中学校ではコロナ禍の中で対面での給食を黙食にしているので、その時間を使って正面のスクリーンに Zoom でつないで話をしているよとなつて、その時間に「こんにちは、後輩たち。給食をおいしく食べてる？」とか言いながら話をしました。コロナ禍でかつ ICT 環境がなければ、せいぜい手紙を書いて送るのが関の山だったと思いますが、やれることの可能性がどんどん広がってきていると思います。福岡西陵高校はこんな感じで ICT を職員皆で使おうという方向から、生徒たちが自由に使って伸びていくという感じに変わってきています。

私の話はひとつのケースのご紹介です、ありがとうございました。

【質疑応答】

一三浦 それではお二人の先生に聞いていきたいと思います。柱は三つでいきたいと思います。皆さんの反応が一番大きかったのは機器管理の問題。今日の話には入っていなかったんですが、「壊れたらどうするのか?」とか「保険はどうなんだ?」という問い合わせは多々いただくのですが、こういった機器管理というところからまずお話していただこうと思います。では吉本先生、お願いいたします。

一吉本 はい、機器管理ですが、まず壊れたらどうするのか。基本的に3年間の貸与にしているので、卒業時にピカピカで返してくれたらそれでいいと言っています。逆を言うと、卒業時に壊れていたら弁償になります。うちも貸与なので市の持ち物なんですけど、その物品が壊れたときに、どうなるのか、誰がお金を払うのか、というのはぜんぜん降りてこなかったんですね。去年、「機器が学校に冬に入る」と言われたのが夏の7月で、それがいくらぐらいの品物で壊れたらどうするか、というのは何も言われませんでした。当然市教委もてんやわんやでそこまで決められていないだろうと想定できたので、言われてないからと文句を言っているヒマはないと思い、学校で勝手にやっちゃった方が早いと考え、動産保険をいくつかの会社にあたり、その中で状況に合う保険を選び、「任意で入りたいご家庭は入ってください」というかたちで対応しています。

たとえば個人賠償責任特約があります、なんか私は保険屋さんのようですね(笑)。生命保険などに付帯しているやつですが、あれで賄える保険会社もあれば、賄えない保険会社もあり、貸与されている物がカバーできるケースとできないケースがあるそうで、そういったこともいったんご家庭で調べてくださいと言っています。一番早い生徒は、貸与して10分後に画面を割りました。貸与した日に「今日から持って帰っていいよ、さようなら」って言ったら、「先生、画面が割れました」と。これはかわいそうでしたね。でもそれぐらいでしょうか。iPadが壊れてしまった生徒もときどき発生しますが、中身が壊れた物に対しては生徒たちに責任はないということで、学校側で責任を負担するようにしています。iPadでするので中身が壊れることはほとんどなくて、基本的には画面が割れることしかないんですが、956台中1台だけが中身がエラーを起こしたので、それだけ学校で対応しています。こういったのは、全部MDMで管理できますので、その点は一円でやっています。もし盗難にあった場合も、こちら側から一円でロックがかけられるので、リセットしてもインターネットにつないだ時点で、こちら側から「これは盗難デバイスです」と表示することが可能なので、生徒たち同士でも盗難の心配はありません。とにかく「大切に扱ってね」と言うだけです。

一三浦 ありがとうございます。電源の問題はどこの学校でもご苦労されているようですし、iPad900台以上がいきにあるという姿はなかなか想像できないんですが、吉本先生は、にこやかに話されましたが、これはおそらくすごくがんばっていると思います。

では端末を使わせるということにおいて、生徒にどのように使わせるか。先ほど「どんな使い方をしていますか?」というのが質問に入ってきています。使い方ルールだとか、「こっそり遊んでいる奴はいますか?」とか、これは必ず出るんですね。「ずっとYouTubeを見ているんじゃないですか?」とかが質問に出てくるんですが、その辺りはどうでしょう。もちろん学校ではiPad

は文房具だというプレゼンもありましたが、その意識をどう徹底させるかというのを教えてくださいませんか。

—吉本 ルールは職員で話し合いをして決めました。このケースだったらどうだろうか、というのを皆で Google ホームで出し合って、声大きい、小さいは関係なく、皆がどう考えているかを職員で出し合ってみて、原案を生徒育成部に立てていただきましたが、決まったルールはシンプルに二つです。「トイレ・更衣室での使用は禁止」。盗撮は防がないとしょうがないので、これは絶対にダメだとしています。もうひとつのルールは「SNS への投稿禁止」。iPad で撮った校内のようすなどを投稿するのは禁止です、どこでどんなふうに危険が降りかかるかわからないからです。あとは、「学習の邪魔をするような使い方をしないでね」と言っています。こっそり遊んでいる生徒はたぶんいます、いっぱいいますね。でもこっそりと遊んでいるのを、そのことを止めたからといって、今度はスマホでこっそり遊ぶだろうし、こっそり遊ばせてもらえない人生は自分も嫌です。制限のせいで、さっきみたいな生徒たちが、もっといいことをやろうとしている生徒たちが、できないとなってしまうことの方が、マイナスが大きいと考えています。出てきた問題にはその都度ちょっとずつ対処しています。

—和田 ちょっと私からも補足します。「こっそり遊んでいる生徒はいませんか？」の質問でしたが、こっそり遊んでいる先生、います（笑）。本校では研究開発で 2018 年から先生たちは iPad を持っていたわけですよ、オンライン学習を始めるまでの 2 年間、先生たちはたっぷり遊んでいました。おもちゃを貰ったって先生たちは言っていましたね。でもその遊んでいた 2 年間があったから、2020 年の 4 月にオンライン学習がスタートできたんです。あと、「YouTube 見たりしていませんか？」の質問ですが、私は YouTube 見てよかろうもんと思います。大人がやりたいことは子どももやりたい。大人が許されるんだったら、生徒も許されていいんじゃないかなと、そこへんは目くじらを立てていない。

それから生徒は、iPad を最初に手に入れたらワクワク期があります。その次にやらかし期が来ます。その次におさまり期が来て、これが正しい発達段階だと思っています。先生たちでいうと、ICT に対して嫌悪期があり、次に攻撃期が来て、それから諦め期があるな、まあそんなものだろうなと思っています。遊びと学びの境界はないのです。それから使い分けについては「スマホをプライベートで使ってね、iPad は学習道具でパブリックな物よ。その使い分けだけはしてね」といった言い方をしています。

—三浦 校内での個人のスマホはどうなっていますか、NG ですか？

—吉本 はい、電源を入れることを禁止しています。だから以前はいただいたチラシを教室に貼るんですがそこに QR コードがついていて、でも生徒はどうやって見るんだっていう状況で掲示物を貼っていました（笑）。でも今は生徒たちが自分で QR コードをつくったりするようになったのでだいぶ世界が変わりました。

—三浦 校内では Wi-Fi ですか？ MP ではなくて。

—吉本 はい、Wi-Fi です。

—三浦 すごいですね、956 台が同時接続できる環境にあるということですか。

—吉本 一応できます。やはり最初は弱くて、導入して初回は失敗がありました。説明会で「電

源を入れましょう」って言ったとたん止まるということが。それで校内放送に切り替えて「今止まりましたね」って言いながら説明を続けて、すぐに業者の方に来ていただいて実測してもらい、この夏前に改善しました。

一三浦 素晴らしいですね、全国の学校ではおそらく「止まっている」というのが今「学校あるある」じゃないかと私も思っています。では次の質問です。「休み時間に生徒がゲームや SNS をするというのは許されるということですね」。これは本当ですか？

一和田 いや、しているかもしれませんが（笑）。だからと言って、iPad を取り上げるのかというと、取り上げません、というようなところです。

一三浦 おそらくいろんなことを生徒たちはするんだけど、「学習」と「規制」の間に不等号記号を入れるとしたら、学習の方のメリットが大きいうふうに私は理解しました。

では次に和田先生にお聞きしたいのですが学校管理上の問題で、iPad に関して先ほど先生方は、最初は「ヤッホー」という状態から始まって、今は使う道具に変わったというお話がありましたが、先生方に関して、非常勤の先生への貸与とか細かい話でご苦労された点があれば教えてください。

一和田 非常勤の先生たちも 1 人 1 台端末を持っています。ID も持っています。それで、先生たちの各授業での使い方については、全くのフリーにしています。「使いたい人は使ってください、お好きにどうぞ」です。ICT が学校に入ったことで一番変わったのは、個別最適化が進んでいるということです。先生たちの授業のやり方も個別最適化が進んでいます。「それぞれが自分のやりやすいかたちで、授業をやってください」としています。ある国語の先生は「自分はわざと紙と鉛筆で授業をやる、国語として文字を書くという文化を受け継がなくちゃいけないと思っているので、私はわざと使いません」とおっしゃる先生もいらして、私は、それは立派な見識だと思っています。ですから、先生方に一斉に使ってくださいということではなく、使わなくてもいいですよと。昨年、オンライン学習が始まる時に「しなくてもいいですよ」と言って先生方に安心感を与えたという、しなくてもいいですよとか、まあオンライン学習は失敗は当たり前です、失敗から学べばいいから挑戦してくださいと。つまり、端末の授業での使い方も失敗 OK ということです。失敗 OK というのがあるから、先生方もあんな使い方こんな使い方にチャレンジができていていると思っています。

それから職員研修ですが、先ほどの話の中の「新しい島」の A さん、B さん、C さん。この C さんに対する思いやり。吉本先生たちがされる研修はここが本当に温かいんです、そして一律とか一斉というのはなくて、先生たちは希望制で自由参加です。1 週間に 1 回のソフティ研修会というのがあり、そこには週ごとにテーマがあって、そこも参加したい人はどうぞという感じで強制をしません。こうあらねばならないということを先生たちに強制しない。それぞれができる範囲でできる速度でやってくださいという感じです。

一吉本 研修は 2 パターンやっていて、一つは自由参加で好きなときだけ参加できるというのと、二つ目は一斉でやって失敗もできるチャンスがあるというタイプで、そこにはいくつかコースがあって選択制というものです。選択制というのは、担当は私だけじゃなくなるんです。ここがすごく大事で、若手の先生に担当をよろしくと言うと、すごくがんばってくれて研修のために事前

に自分で授業で試したりして、その人がどんどん伸びていくんです。それから、私とはちょっと距離がある先生も、他の研修担当の先生と仲が良ければそこでなんでも聞ける。選択制研修のあとに先生が職員室に戻ってくると、「あっちの研修にも出たかったな」「私受けてきたから教える」と井戸端研修が始まるんですよ。これがすごく大事で、授業と一緒に思うんですよ、選択肢がある方が前向きになるし、「任されると伸びる」という感じだと思います。

一和田 「教科で全教員が、生徒の自ら学ぶ力を引き出すために ICT を使っているんですか？」の質問ですが、そこはやる先生、やらない先生、さまざまです。さまざまな生徒がいるように、さまざまな先生たちがいて、もういろんなグラデーションがあって、それが普通だと思います。むしろ皆が一斉に同じ速さで同じパターンで進んでいると、それはかえって危ない気がします。

一三浦 ありがとうございます。黒船と言われてもちゃんといろいろと考えられているというところが、ぼくは大切だと思います。人間はいろんな、外見的なところで判断されることがあるんですが、本質のところで言うと、ですね。

「外で使うとき、Wi-Fiは不便ではないですか？」外の環境はどうなっているんですか？

一吉本 もう不便です、セルラーの方がいいなと思っています、でもいただいたものは Wi-Fi なので大事に使います。

一三浦 ではグラウンドで使うということはない、ということですか。

一吉本 学校で市からモバイルルーターを数台借りているので、どうしてもものときはそれを使います。

一和田 今日話を聞かれて皆さんも思ったことだと思いますが、絶妙だったと思うのは、「総探」を始めた開拓学年と ICT が入ってきた学年がセットだったということですね。これは絶妙なタイミングだったと思います。それにコロナがあったので、もう新しい様式をつくらなくちゃならないという、それらのタイミングが揃ったなあと思っています。

一三浦 はい、ありがとうございます、そろそろ時間がなくなってきました。最後にお二人にお願いしたいと思いますが、「福岡西陵高校のこれから」について、校長先生には学校経営にどういう志だとか思いを持っておられるのか。そして吉本先生は ICT 活用をどう広げていくのか。これからについて、ひと言ずついただいて、このセッションを終わりにしたいと思います。

一吉本 先ほどちょっと出たんですが、遊ぶように学ぶことをどう考えるか、というのですが、これはぼくの個人的な夢ですが、「遊ぶ」と「学ぶ」を類語辞典に載せるというのが夢です。今は福岡西陵高校にいますが、福岡市の中学の教員でもありますので、福岡市全体の生徒たちが遊ぶように学べて、「遊ぶ」ぐらいに「学ぶ」が楽しくてっていうか、「学ぶ」のほう楽しいじゃんとなって、勉強好きになって問題解決ができるようになって、いつでも成長できるようになって日本全体を豊にしていってくれたらいいなと思っています。そのために西陵高校でやっていることを皆に伝えていくというのが今ぼくが考えていることです。その分、西陵高校は、このままどんどん突っ走っていいなと思っています。以上です。

一和田 福岡西陵高校は今、先生たちも生徒たちも、どんどん自分で走っているんですよね。そういう自走する環境をつくる管理職でありたいと思っています。先生たちがどんどん走っていくのでついていくのは大変なんです、先生たちが楽しそうなんです。楽しんで学ぶというのを

その先生たちの姿で見るのが一番の教材だなと、いい教材になると思っています。

それから私のスライドの最後に、「職員のボトムアップと校長のリーダーシップ」と書きましたが、この私たち 2 人に共通していることは何かというと、学んでいるということです。私たちはそれぞれに学んで産業能率大学のセミナーでばったりと出会いました。やはり学び続けることが大事で、管理職として先生方にそれを要求しようと思っています。時代はずっと変わっていくから、そのためには私たちが学ばないといけないと思います。私たちは学びを教える仕事なので、私たち自身、教員が学ぶこと、これが一番大事なことでそれを先生たちに言い続けたいと思っています。以上です。

一三浦 お二方、本当にありがとうございました。会場の皆さま、オンラインの皆さま、拍手をもう一度お願いします。

皆さんありがとうございました。全ての質問にこたえきれていないところがありますが、オンラインにもたくさんのチャットをいただいております。何らかの形で紹介できればと思いますが、これでセッション 2 は終わりにします。ありがとうございました。

(終わり)

教育改革推進フォーラム岡山 Session3

リクルート Ed-tech 総研 所長

前『キャリアガイダンス』編集長

山下 真司 氏

未来の学校は“今日”の中にある

～『キャリアガイダンス』7年6か月の編集を通じて～

- 1 あなたが描く「未来の学校」ってどんな姿ですか
 - 2 生徒たちがこれからの社会を生きていくために今、できることって何でしょうか？
 - 3 どこか他人事な社会課題 校則ですら変えた経験がないのに
 - 4 本当に自分で決められない？行動できない？
 - 5 新しい学習指導要領を振り返る
 - 6 総合的な探究の時間とは？
 - 7 探究における「個別最適な学び」と「協働的な学び」
 - 8 「指導と評価の一体化」をあらためて考える
- 【質疑応答】

未来の学校は“今日”の中にある
～『キャリアガイダンス』7年6か月の編集を通じて～
リクルート Ed-tech 総研 所長
前『キャリアガイダンス』編集長
山下 真司

温かい拍手をありがとうございます。皆さまこんにちは、よろしくお願いいたします。めちゃくちゃ緊張しています。数々のこういう機会をいただきますが、石井先生と西陵高校の和田先生、吉本先生のお話を聞いたあとに話すというのはすごくプレッシャーですが、自分の務めをしっかりと果たさなければと、気持ちを新たに、この時間を皆さんと一緒に学びの時間にしていきたいと思えます。どうぞよろしくお願いします。

本日はこのタイトルでお話させていただきます。

未来の学校は“今日”の中にある
～『キャリアガイダンス』7年6か月の編集を通じて～

副題がついていますが、あまりウエットなお話をするつもりはなく、これまでどんなことが語られてきたのか、そして先生方が今まさに現場で子どもたちと向き合っていく中で、どんな学びにこれから取り組んでいくのか、というところだと思いますので、そこに向けて用意いたしました。ご存知のように私は大学の研究者でも、実践者でもありません。いち編集者だった人間ですので、『キャリアガイダンス』でこれまで数々の情報を届けてきましたが、その情報を紡ぎながらお話させていただきます。

自己紹介は割愛いたしますが、今何をやっているのかについてお話します。先ほどからお話に出ている「GIGA スクール構想、小中学校で一人一台端末」ということで、現場の先生が奮闘されている状況ですが、そこでの新たな学びとはどういうものか、ということのを少し研究していくというか、学んでいく部署です。本日はスライドを 95 枚ご用意しましたが、これをしゃべり切ろうと思っていますので、ほぼ一方的になりますがご容赦ください。ジェットコースターに乗っているような気分でお付き合いいただければと思います。

思い起こしていただければこの一年、突然の一斉休業など振り返ただけでも大変だったんじゃないかと思います。「学びを止めない」をスローガンに、先ほどの吉本先生の実践報告にあった ICT の活用を含めてどうすればいいのかと先生方が知を結集して取り組んできた、そんな一年だったと思います。あえてメッセージをさせていただくと、そもそもそれ以前から学びって本当に動いていたのかどうか、ということも問われたのがこのコロナ禍だったんじゃないかと思います。

弊社の調査で、コロナ禍によって進路指導にどんな影響があったのか、を調べておりますが、進学校と進路多様校ではともに上位に「オープンキャンパス指導が十分にできなかった」「進路ガイダンス・進路相談などの行事の中止・延期」があがっています。さらに進学校で見ますと、「外部模試の受験回数が減った」「大学側がオンライン入試に変化したので指導が難しかった」、大学もぎりぎりまで対応変更を迫られていたという状況だったと思います。そして進路多様な学校で

は、「インターンシップが十分にできなかった」「高卒就職のスケジュールも1か月ずれる」とか、本当に大変な状況だったと思います。それ以外にも新しい学習指導要領への対応、指導要録の様式が変わっていったりもしましたね。1月には「令和の日本型学校教育構築を目指して」の答申も出て、またその一方で働き方改革も問われる、といった一年間を「激動」という言葉で片づけるには、語りつくせないほどの大変な時間だったんじゃないかなと思います。

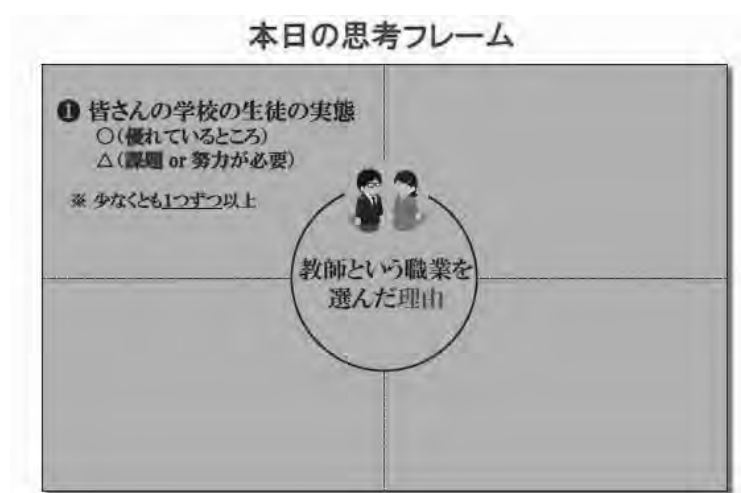
1 あなたが描く「未来の学校」ってどんな姿ですか

そんな中で、これからの学校、未来の学校という表現がいいかどうかは別として、どんな姿を描いていくかを考えていくことが大切だと思っています。ぜひ本日はこの問いを頭の片隅に置きながら話を聞いていただけたらと思います。考えるヒントとして、「今の学校にはなくて、未来の学校にはあるモノ・コト」もしくはその逆。そんなことを考えながら、「これからの学校って」ということをご自身の頭の中で考えていただければと思います。

本日、会場の皆さんにはお手元にA3の紙が配布されています。大変恐縮ですが、四つ折りにしていただいて、中央に円を描いてその中に「教師という職業を選んだ理由」をお書きください。オンライン参加の先生方はご自身のノートにお書きください。十分なワークの時間が取れませんので、1分ほどでお願いします。キーワードなどで結構ですので書き出してみてください。次に左上のマスの、先生方のそれぞれの学校の生徒たちの様子を思い返していただいて、生徒のこういうところがいい、こういうところは課題だ、それぞれあると思いますので本日の思考フレームの一つとしてお書きください（スライド1）。

まだまだ作業中だと思いますが作業をしながらお聞き下さい。先に進めさせていただきます。この後残りのマスの質問もいたします。

（スライド1）



2 生徒たちがこれからの社会を生きていくために 今、できることって何でしょうか？

改めて言うまでもないんですが、こういう世界、【社会の変化】Society5.0/AI、【ライフスタイルの変化】人生 100 年時代、【ビジネスモデルの変化】グローバル化の中で、コロナ禍という本当に大変な状況の中で私たちは過ごしています。VUCA World（Volatility 変動、Uncertainty 不確実、Complexity 複雑、Ambiguity 曖昧）という言葉を目にする機会が増えましたが、まさにこうした状況の中でどうやって生きていくのか。ここで思考停止に陥らないようにするにはどうすればいいのか、そういうところが問われているんじゃないでしょうか。これからの社会を生きる子どもたちにどんな資質や能力をつける必要があるのか、まずはそこを考えていく必要があります。

例えば将来の人口。今の世界人口は 71 億人、これが 2050 年になると 95 億人ぐらいになると予測されております。日本の人口は 2013 年 10 位ですが、2050 年はランク外になり 10 位にはフィリピンが入ります。日本はどこまでランクを落とすかということ 20 位です。

さらに、GDP 推計ですが、2010 年日本は 4 位、9 位にインドネシアがランクしていますが、2030 年になると日本とインドネシアは 4 位と 5 位でほぼ同じぐらい。2050 年になると追い越されてインドネシア 4 位、日本 7 位で、それはナイジェリアと同じぐらいといった予測が出ています。

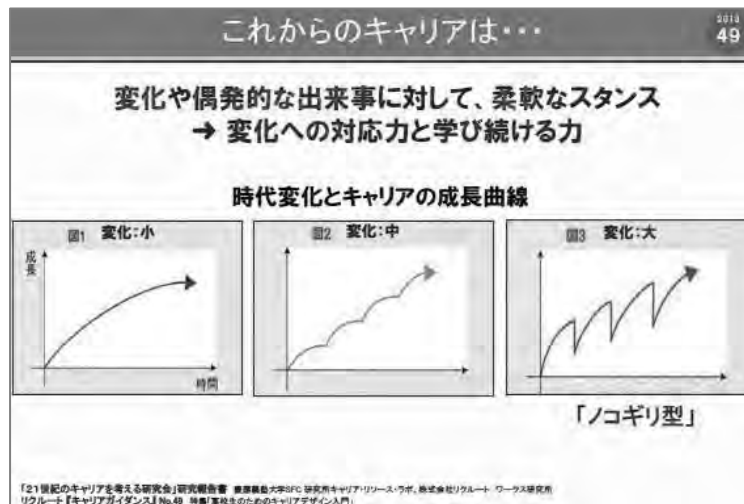
さらに世界の時価総額ランキングです。平成元年は世界の上位 50 社の中に日本企業は 32 社ありました、銀行をはじめとした金融機関が上位にたくさん入っています。これが平成 30 年にどうなったかということ、上位 50 社にはたった 1 社だけです。上位の顔ぶれはいわゆる GAFA と呼ばれる企業群。ただ 1 社入っている日本企業はどこかおわかりになりますか？ そうです、トヨタなんです、そのトヨタの社長曰く「終身雇用を守るのは難しい」と話しています。先生方のような専門性の高い職業は別にすれば、多くの生徒たちは人生の中でキャリアをチェンジしていかなければならないということですよね。

ところで、会社の寿命はどのぐらいかご存知ですか？ もちろん定義の仕方がいろいろありますが、では 3 択でいきます。①18 年、②23 年、③30 年、いかがでしょう。せーので手をあげてください。はい、さすがですね、こういうところにお集まりになるような方は感度が高いですね。①をあげられている先生が大勢いましたが、そうなんです。18 年ぐらいだと言われています。③をあげられていた方もいらっしゃいましたが、その通りなんです、一昔前はこうだったんです、1983 年頃です。だからたくさん勉強して良いと言われる大学に行き、良いと言われる企業に勤めれば一生勤め上げることができる、というようなことが言われていたんです。でももはや違いますよね、企業の短命化です。企業はイノベーションを起こして、成長し続けなければいけない、そんな人材を求めています。個人に視点をあてても、人生 100 年時代ということを考えれば企業の寿命よりも人の寿命の方が長いわけですよ。そうするとキャリアをどう変えていくのかというのが、大切になってきます。

一昔前で言えば、経験でキャリアが積みあがっていくという時代でしたが、今はスライド 2 の一番右のノコギリ型です。知識や技能はすぐに色褪せてしまう。そういう中でいかに変化に対応

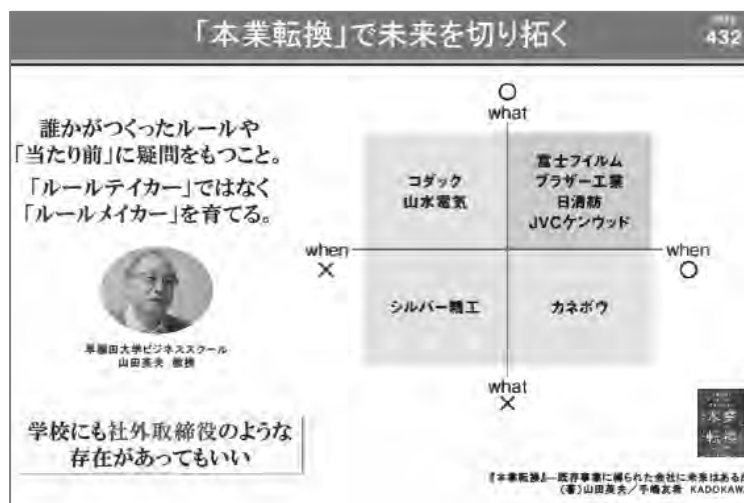
していくのか、学び続けることができるのか、ということが今問われているのだと思います。

(スライド 2)



スライド 3 は実際の企業の事例です。富士フイルムとコダックは有名な話です。いかに新しい価値を創造していくのか、本業を捨ててでも変化していかなくちゃいけないと問われている。その意味では「ルールメイカー」をつくれるような人材をどう育てていくのか、というのが今の課題だという話も山田英夫教授はお話をされていました。

(スライド 3)



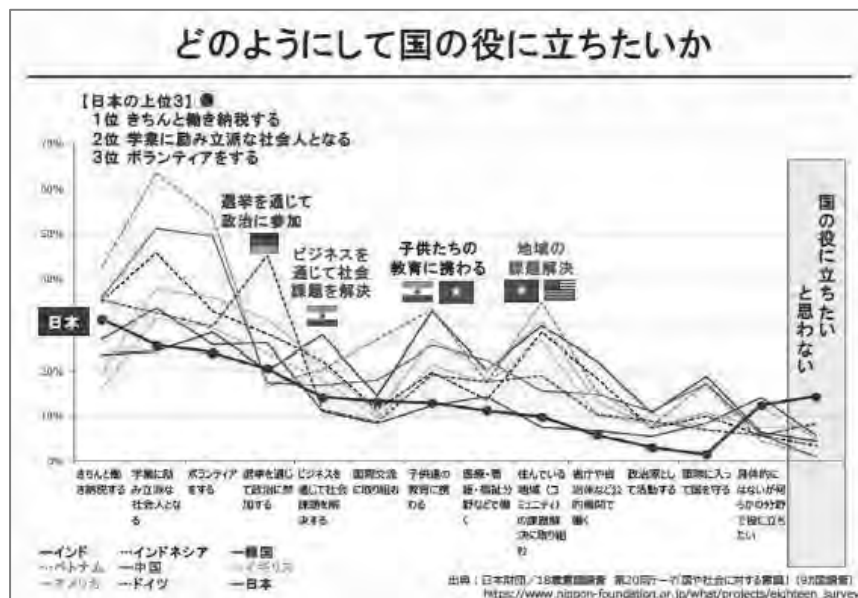
では企業は採用選考でどのような人を求めているのか。何を重視しているのでしょうか。上位 1 位、2 位、3 位について、フィジカルディスタンスを保ちつつ、お近くの方と一緒に話し合ってみてください。

上位 3 つは上から、「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」でした。こちらは

実際にある企業の面接で問われた設問ですが、「あなたは大学生までに打ち込んだエピソードを教えてください」→「打ち込んだきっかけは？その体験から、あなたが学んだことは？」、「失敗・挫折したときのエピソードを聞かせてください」→「その失敗・挫折から、どう立ち上がってきたか聞かせてください」。そんなところを尋ねています。京都大学の特色入試も高校までにどんなことを学んできたのかを踏まえて、京都大学で何を学びたいのかという「学びの設計書」を書くと思いますが、まさにそれと近いことが企業の採用選考でも問われるわけです。学習歴ですね。

こちらのデータをお考えください。皆さんもいろんなところでご覧になられているかと思いますが、これは日本財団が調べた「18歳意識調査 第20回社会や国に対する意識調査 要約版 日本財団 2019年11月30日」です。この調査の中で「社会課題」について「自分で国や社会を変えられると思う」「自分の国に解決したい社会課題がある」「社会課題について家族や友人など周りの人と積極的に議論している」ということについての項目では、上位に挙がる国は、インド、インドネシア、中国、アメリカ、イギリスなどの国々。では日本はどうなっているかというと、残念ながら最下位です。さらに「自分の国の将来についてどう感じているか」という問いでは、中国、インド、ベトナムが「将来よくなる」と捉えているのに対し、日本は10人に1人しかそう感じていない。そればかりか、4割近くはむしろ「悪くなる」と悲観的に捉えている。さらに、次の「どのようにして国の役に立ちたいか」という問い（スライド4）です。

（スライド4）



上位に挙がるのは先の国々で、それぞれの国の事情に応じて例えば「選挙で政治に参加したい」とか「ビジネスを通じて社会課題を解決したい」、「子どもたちの教育に携わりたい」などの項目があるんですが、日本はどのスコアも低いんです。唯一日本が他国よりもスコアが高いのは一番右端の「国の役に立ちたいと思わない」なんです。皆さんはどう思われるでしょうか。

3 どこか他人事な社会課題 校則ですら変えた経験がないのに

多くの生徒たちにとって社会課題はどこか他人ごとなんですよ。そりゃそうですよね、校則ですら変えたことがないんですから。世の中の社会課題を解決するというモチベーションはなかなか起こりづらい。これって必ずしも生徒が責められることじゃないと私は思っています。取材時に先生方に生徒の姿を伺うんですが、よく出てくるのは「うちの生徒はまじめで、素直で、おとなしいんですよ…」というフレーズ。「まじめ」も「素直」も「おとなしい」もそれぞれ素敵な言葉なんですが、この3つがセットで語られるときは何かモヤモヤとしたものが残ります。特に、語尾の「…」に何かがありそう。ここにどんな思いが込められているのでしょうか。

一方で、こんな生徒像はどうでしょう？（スライド5） 素晴らしですよ。こういう生徒を育てたいな、というところもあるのかもしれませんが。「とってもええやつだ」とお話して下さったのはAPUの出口学長です。ご存知のようにライフネット生命保険の創業者でもあります。出口学長はさらに「多くの企業の人たちと話をすると『でもね、こういう人たちばかりじゃ困るんだよ』という話を聞きます」と、エピソードを紹介してくれました。

（スライド5）

皆さん、どう思いますか？

- ① 学校の成績がいい。偏差値が高い
- ② 素直である
- ③ 我慢強い 「ええやつ」
- ④ 協調性が高い
- ⑤ 目上に従う。先生のいうことを聞く

↓

- ① 学校の成績を上げることよりも、自分の好きなことに夢中になる
- ② 常識や、大人のいうことを疑う
- ③ 我慢せずに、やりたいことをやる
- ④ 周囲に付度せず、自分の道を進む
- ⑤ 目上の人に対しても、おかしいと思ったことは、おかしいと口にする

チェンジメーカー



立命館アジア太平洋大学 (APU)
学長 出口 治明

『キャリアガイダンス』Vol.436 (2月10日発行)

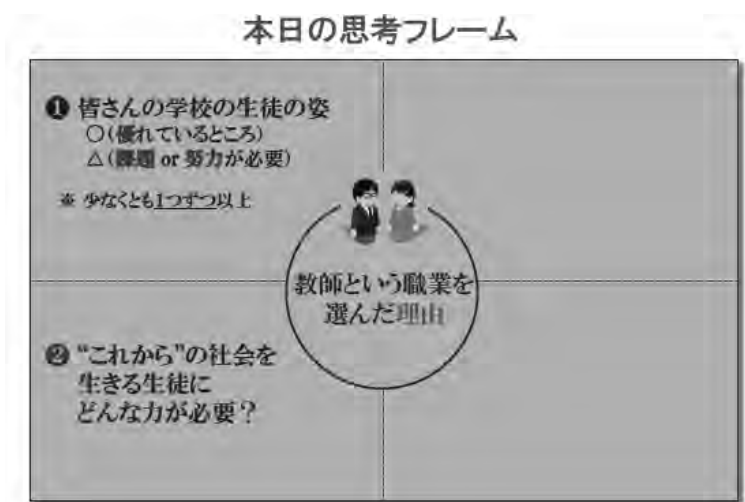
ある意味こういう生徒像とは真逆の、どちらかという成績を上げることよりも自分が好きなことに没頭するとか、常識や大人の言うことを疑うとか、我慢をせずにやりたいことをやるとか、付度しないとか、もっと言えば、おかしいと思ったことは口にする人たち。今なんか心が痛くなるぐらいの、私たちも身の回りにたくさん経験していますよね。まさにこういう人たちの中から「チェンジメーカー」と言われるこれからの社会をつくっていく人たちが生まれてくるんじゃないか、という示唆もいただきました。

4 本当に自分で決められない？ 行動できない？

では高校生たちって、本当に自分で決められないんだろうか？ 先ほどの西陵高校の生徒の姿も本当に素敵でした。私もこういう高校生がたくさんいると思っています。自ら考え、行動している生徒がいましたよね、コロナ禍でも。宮城県の高中生は「僕たちだってオンライン授業を受けたい」と県教育委員会に直訴しました。長野県の高中生は「大切な文化祭がこのままでは中止になってしまう、どうしたらいいんだろう」と、先ほど体育祭の話がありましたが、オンライン生徒総会を開いて無事オンライン文化祭を実施したとか、さらには若狭高校の生徒ですが、時短営業に苦しむ飲食店向けにテイクアウトサービスの情報サイトをつくったり、アプリをつくったり、九州の熊本県の被災している子どもたちのために隣の宮崎県からランドセルや文房具を届けたり。「今、自分たちができることって？」「何ができるんだろうか」ということを考えて行動できる生徒たちだってたくさんいますよね。

改めて、皆さんはどんな資質・能力を育んでいけますか？ A3用紙の左下のマスに本日の思考フレーム2として先生方のお考えでけっこうです、書き込んでください。(スライド6)

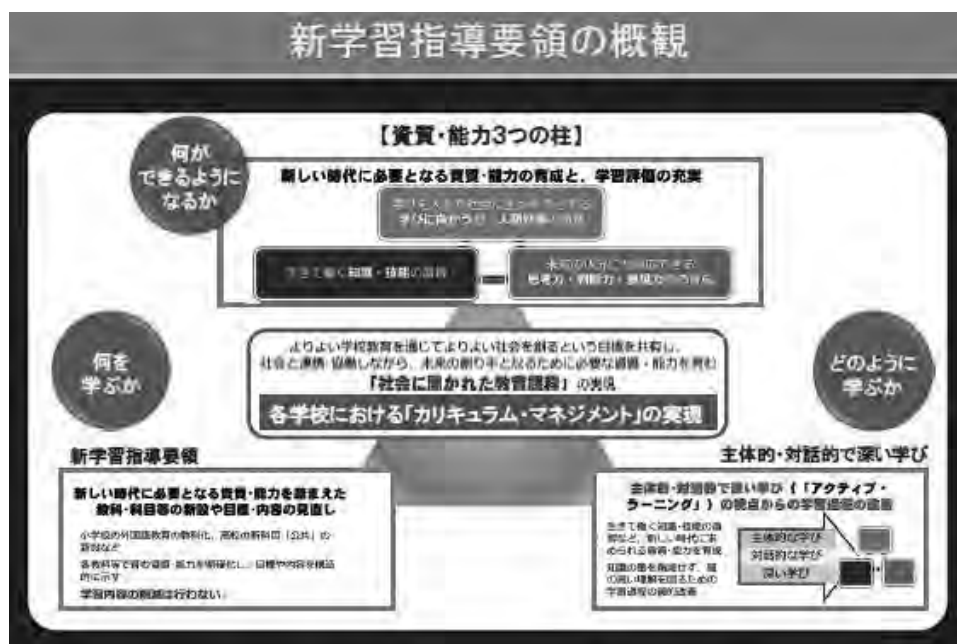
(スライド6)



5 新しい学習指導要領を振り返る

いよいよ来年度から新学習指導要領が始まります。各学校でカリキュラムの検討準備で大変だと思いますが、改めて説明するまでもなく、この話(スライド7)が起点だったと思います。

(スライド 7)



ご自身の教科はもちろんのこと、総合的な探究の時間であるとか、特別活動、いろいろと学習指導要領をご覧になられているんじゃないかと思います。では、ここでクイズにいきましょう。数ある教科科目の中から無作為に8つ抜きだしました。それぞれの教科科目の「目標」の一部を抜き出しています。さて、これらがどの教科科目なのか、お近くの方とフィジカルディスタンを保ちつつ、オンラインの方はご自身で考えてみてください。ご自身の担当教科が入っていたらすぐにわかりますね。

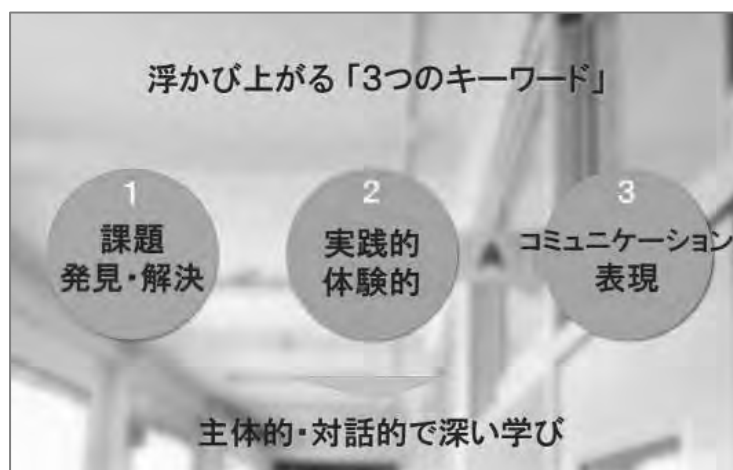
では答え合わせにいきます、正解はこちら（スライド8）です。もちろん全部はなかなか難しいと思いますが、いくつかはおわかりになられた方もいると思います。

(スライド 8)

総合的な 探究の時間	横断的・総合的な学習を行うことを通して、 自己の在り方生き方を考えながら、よりよく 課題を発見し解決していくための資質・能力 を次のとおり育成する。	保健体育	課題を発見し、合理的、計画的な解決に 向けた学習過程を通して、心と体を一体と して捉え、生涯にわたって心身の健康を保 持増進し豊かなスポーツライフを継続する ための資質・能力を次のとおり育成する。
外国語	聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの 言語活動及びこれらを結び付けた統合的な 言語活動を通して、情報や考えなどを的確 に理解したり適切に表現したり伝え合ったり するコミュニケーションを図る資質・能力 を次のとおり育成する。	情報	情報技術を活用して問題の発見・解決を 行う学習活動を通して、問題の発見・解決 に向けて情報と情報技術を適切かつ効果 的に活用し、情報社会に主体的に参画する ための資質・能力を次のとおり育成する。
家庭	実践的・体験的な学習活動を通して、様々な 人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、 男女が協力して主体的に家庭や地域の生 活を創造する資質・能力を次のとおり育成 する。	特別活動	様々な集団活動に自主的、実践的に取り 組み、互いのよさや可能性を発揮しながら 集団や自己の生活上の課題を解決するこ とを通して、次のとおり資質・能力を育成す る。
理数探究	数学的な見方・考え方や理科の見方・考え 方を組み合わせるなどして動かせ、探究の過 程を通して、課題を解決するために必要な資 質・能力を次のとおり育成する。	地理歴史	課題を追及したり解決したりする活動を通 して、広い視野に立ち、グローバル化する 国際社会に主体的に生きる平和で民主的な 国家及び社会の有為な形成者に必要な公 民としての資質・能力を次のとおり育成する。

上段の左は簡単だったと思いますが、左下は難しかったかもしれません。このスライドをなぜご用意したかと言いますと、他の教科の学習指導要領を読み込むことって、正直なところ時間的にもなかなか難しいですよね、でもこうして見ていただくと、何か気づくことはありませんか。浮かんでくる語句があるんですよね。教科科目はもちろん違いますが、共通しているキーワードがあるんじゃないかと書き出してみました（スライド9）。こういった要素が主体的・対話的で深い学びにつながっていくんじゃないか、そんなふうにも私は捉えています。

（スライド9）



6 総合的な探究の時間とは？

今回の改訂で目玉だった「総合的な探究の時間」ですが、なぜ高校だけが「探究」に変わったんでしょうか、という話を私は探究の研修会ではよくお尋ねしています。先生方には釈迦に説法かもしれませんが、これまでの「総合的な学習の時間」では、「課題解決を通して自己の生き方を考えていくもの」に対し、今回の総探については、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく」と示されています。もっと言えば、スライド10の右側の文章ですね。

「自己の在り方、生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していく」。この文章は私たち大人でもとても重いです。新学習指導要領の解説には「初等中等教育の総仕上げとして」という一文が綴られています。多様な高校生たちがいる、卒業後すぐに社会に出ていく高校生もいることを考えると、この総探にどう取り組むのか、ということが問われているのだと思います。

(スライド 10)

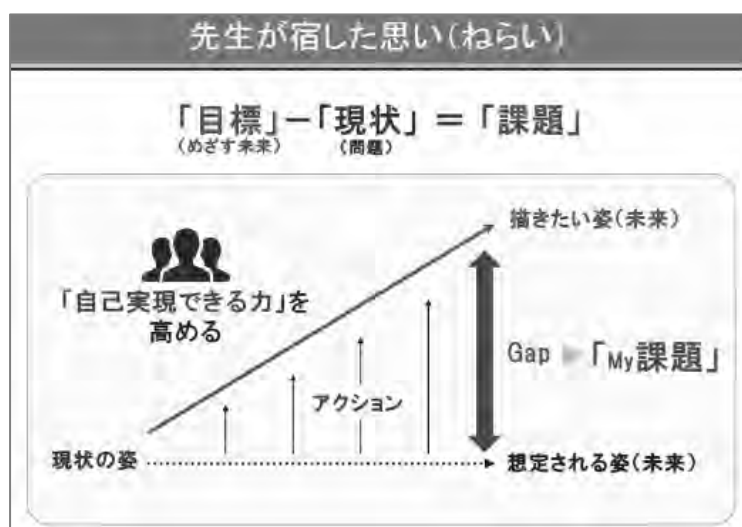


7 探究における「個別最適な学び」と「協働的な学び」

「個別最適な学び」については本日もずっとキーワードとして上がってきていますが、探究学習においては、そもそもは「個別最適な課題に取り組む」ではなかったでしょうか。学校側が用意した課題に取り組むのではなく、それぞれ、一人ひとりの生徒の興味関心にもとづいて取り組むのが探究ですね。だからこそ「なんでそれをやりたいんだっけ？」というところの内発的な動機形成が欠かせないんだと思っています。そのためにも「自分ごと化」すること、まさに自分で問いを立てることが欠かせないんです。ずっと『キャリアガイダンス』の記事でも追いかけておりましたが、この『大船渡学』、岩手県立大船渡高校のお話をよくさせていただきました。探究学習をすることが目的ではなく、「自分ごと化をどのようにさせていくのか」、「地域を学ぶのではなく、自分が学びたいことを地域の課題を通して学ぶ」というふうに設定されていたと思います。

担当された先生方の思いはこんな感じでした(スライド 11)。先ほど登場した生徒像の「まじめで、素直で、おとなしい」という生徒像から、どうやったらその一步を踏み出せるのか、自分たちで描きたい未来は何なのか、ということを考えて、一步でもいいから踏み出してみる生徒を育てたい。このギャップに着目し、探究課題を設定するということに取り組まれていました。

(スライド 11)



いきなり「社会課題」を考えて取り組むことは難しいので、まずは自分の興味関心は何なのか、何を学びたいのか、そうやって自己との対話から始めるんですね。自分が学びたいこと、関心をいっぱい書き出しながらも、それを大船渡という地域の課題と結び付けながら取り組んでいく。何を学びたいのか、ということは何度も何度も再構成しながら、自分のテーマを決めていく。起点となるのはやはり自分の興味関心。でもそれが“孤独な学び”にならないように、ときには生徒同士で考えて一緒にグループを組んで協働的な学びを取り入れて学びを深めていく。教科の学習では見通しを持つことはとても大切ですが、探究においては見通しがないからこそ、「どうするんだっけ」「なんでこのテーマに取り組むんだっけ」という自己対話が起こり、内発的な動機が醸成されていくような気がします。

実際に1年間探究をやってきた生徒たちのリフレクションを見ますと、まさに「大船渡学は面倒、大変だと思ったが、行動していくうちに楽しいと思うようになった」とか「自分の力でじっくり、しっかり考える」「教えてもらうことばかりしない」「単純な問いではなく、深く」というふうに、自己との対話を通じて学びを深めています。

けれども、多くの生徒は「面倒くさい」「わからない」「普通に授業をしたい」「できればやりたくない」「本当にやりたくない」「絶対に結果を出せない」といったように、自己肯定感が下がっていくような感じ。さらには、「興味があることが必ずしも社会に役立つとは限らない」「ほっといてくれ」、「社会に貢献したいわけじゃない」。まさにここですね、社会課題につながらないところ。さらに、「自分たちが課題を発見しても地域のためにならないと思う」「自分たちの力で解決できることはすでに偉い人達がやっている」。やる前からあきらめる、一歩踏み出せない、ここをなんとかしたい、ということで探究に取り組むんですね。生徒たちが本気で夢中になれるようなテーマが見つかったときには、高校生ともなれば、もう手がつけられないほど自走していく。そんな状況だとも思います。

ただ、そういう生徒ばかりじゃないです。だからこそ先生方の関わりがとても大切で「なんでそんなことに興味があるの?」「え、どう思うの?」といった先生との対話を通じながら、課題が

明確になっているのか、どんなふうに解決の方策を立てようとしているのかなど、「問い磨きのルーブリック」を活用しながら壁打ちをすることによって、生徒自身が気づいていく、そんなような仕掛けをしていくわけですね。そして先生だけでなく、地域の人たち、それから大学生だったり、今はオンラインという手段がありますから、海外の人たちとの対話を通じて、さまざまな考え方、価値観に触れるということが新たな気づきを生み出していくわけですね。こういった創造的な対話がとても大事だと思います。

もう一つキーワードになっているのは、この「協働的な学び」です。今回の学習指導要領の「総合的な探究の時間」のこちらの文章がとっても素敵だなと思っていますのでご紹介します。一部読み上げます。『複雑な現代社会においては、いかなる問題についても、一人だけの力で何かを成し遂げることは困難である』。そうですね、今まさにコロナ禍において、どうするんだという、さまざまな問題が出ています。『例えば、他の生徒と協働的に取り組むことで、学習活動が発展したり、課題への意識が高まったりする。異なる見方があることで解決への糸口もつかみやすくなる。』なるほどこういう考え方もあるんだ、と気づくということですね。

それから『単に協力して事に当たるという意味ではなく、それぞれのよさを生かしながら、個人ではつくりだすことができない価値を生み出すこと』が協働的な学び。さあ、一緒にグループワークをしましょう、という話では決してないということです。もちろんそこも含めてですけども、目指すところはここなのかなと捉えています。

この「個別最適な学び」は、探究においては「個別最適な課題」、これを協働的な学びによって、創発的・創造的な対話を通じて、より個人の中での課題意識をアップデートすること。もっと言えば新たな気づきや学びを得ること、それによって、先ほどの3行（スライド10の右側）にどう迫っていくのか。これが総探だと私は捉えています（スライド12）。

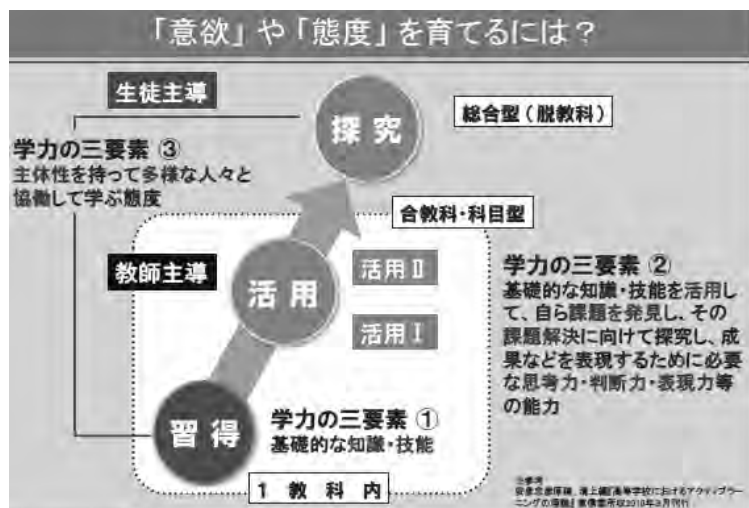
（スライド12）



奈須正裕（上智大学総合人間学部教授）先生は、「生徒自身がテーマを選んだとき、それまでの生き方や在り方が関わっている」、必ずそこに表現されているはずだと。質の高い問題解決者を育てるんだ、ということが今求められている。個人的にはこれこそがキャリア教育につながっていくのかなという思いでもあります。

習得、活用、探究。まさに探究の領域とは、生徒自身が自走している状態、そんなふうにも思っています（スライド13）。

（スライド13）



けれど1週間に1コマですよ。総探は大きく舵をとるひとつのトリガーになると思いますが、やはり日々の先生方の「授業」が勝負だと思っています。先生方の専門の教科でどうやって生徒たちを育てていくのか。多くの先生方の授業実践を、この『キャリアガイダンス』で取材させていただきました。今日は時間の関係でご紹介できないのは残念です。

改めて学習指導要領を見たときに、習得・活用・探究という学びの過程においては、『各教科等で習得した概念や知識を活用したり、身に付けた思考力を発揮させたりしながら知識を相互に関連づける』というようなことが書かれ、情報を精査して何が問題なのかを自分で考える、それを基にして新たな創造・価値を生み出していく。こういったプロセスを通じて資質や能力が育まれていくと記載されています。さらには『どのような視点で物事を捉えて、どのような考え方で思考していくのかという、物事をとらえる視点や考え方も鍛えられていく』というようなことが書かれていて、それぞれ先生方の専門の教科の特質にに応じているんだ、ともあります。ご存じのようにこの言葉ですね。その教科ならではの思考の枠組み、「見方・考え方」を活かす。

この間ちょっとだけ残念なことがありました。ある公開授業を聞く機会があったんですが、「見方・考え方を教える」というのがテーマでした。そうではなくて、生徒たちが見方・考え方を活かしたくなるような場面をどう授業の中でつくっていくか、ここが先生方の腕のみせどころなんじゃないでしょうか。そういった力をつけることによって、大人になっても生きて働く上で役立っていくものになるんだというふうに、次期学習指導要領の答申（2016.12.21）に記載されてい

ましたよね。

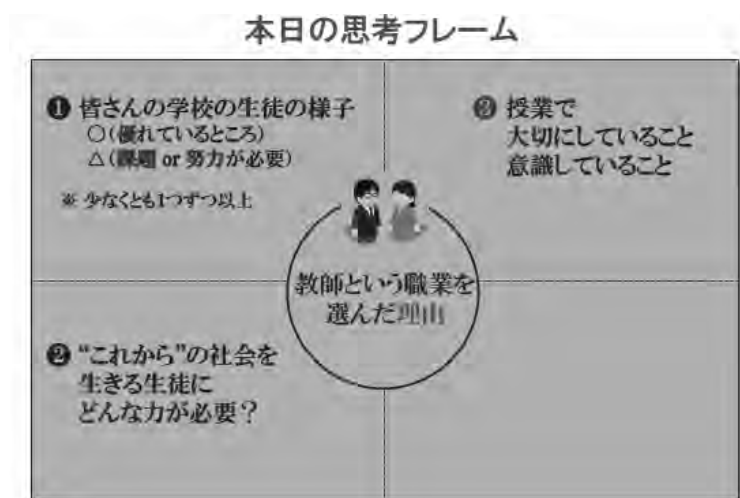
石井先生の前で、ご本人の著書のお話（スライド14）をするのはとても緊張します、くみ取っていただければと思いますが、知っていること・できることだけでなく、わかるレベル。さらに目指すところはその一步上のところですね。これまで考えてきた概念や方略を活かしながら、どうやって日常の場面でそれを応用することができるのか、活用することができるのか、というところも整理されておりますので、ぜひご質問は石井先生に、という感じで私はこのぐらいにしておきます（笑）。

（スライド14）



改めて先生方の教科科目で、生徒たちにどんなことをメッセージされているのか。もっと言えばこの単元で何を伝えるのか、どんな力を育みたいのか、ということイメージしていただければと思います。ということで三度ワークです。先生方が授業において大切にされていること、あるいはこだわっていることを、右上のマス（スライド15）にお書きください。1分時間をとります。よろしくお願いいたします。

（スライド15）

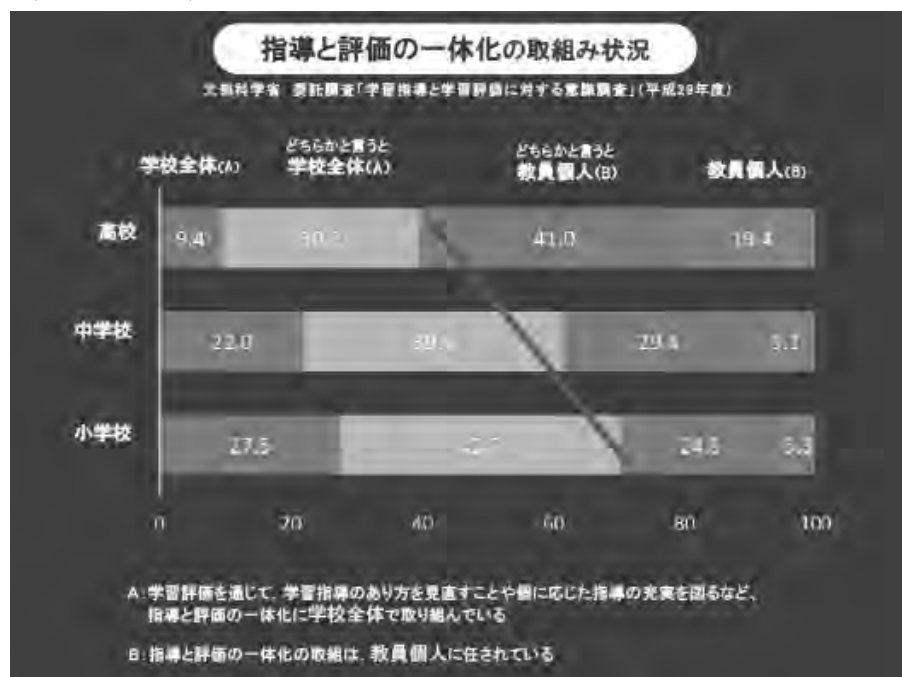


8 「指導と評価の一体化」をあらためて考える

引き続き石井先生のお話をします。石井先生にはこれまでの『キャリアガイダンス』で何度もインタビューにご協力いただいておりますが、直近ではまさにこのコロナ禍の状況で「授業をどう考えればいいのか」という内容でインタビューをさせていただきました。その中で「これまでの授業の在り方を再認識する、問い直すきっかけになったんじゃないか」（『キャリアガイダンス VOL.423』）というお話をしてくださったり、また過去の号では、これからどういう学力が求められるのか、資質・能力を含めそれをどうやって育みどう評価をしていくのか、というのがテーマだということをお話いただいております（『キャリアガイダンス VOL.418』）。

次のスライドは文部科学省が行った調査ですが、今言われている指導と評価の一体化の取り組み状況です（スライド 16）。残念ながら高校は組織的にということを前提に置くと、小中学校に比べると、もう一歩かな、という結果も出てきております。

（スライド 16）

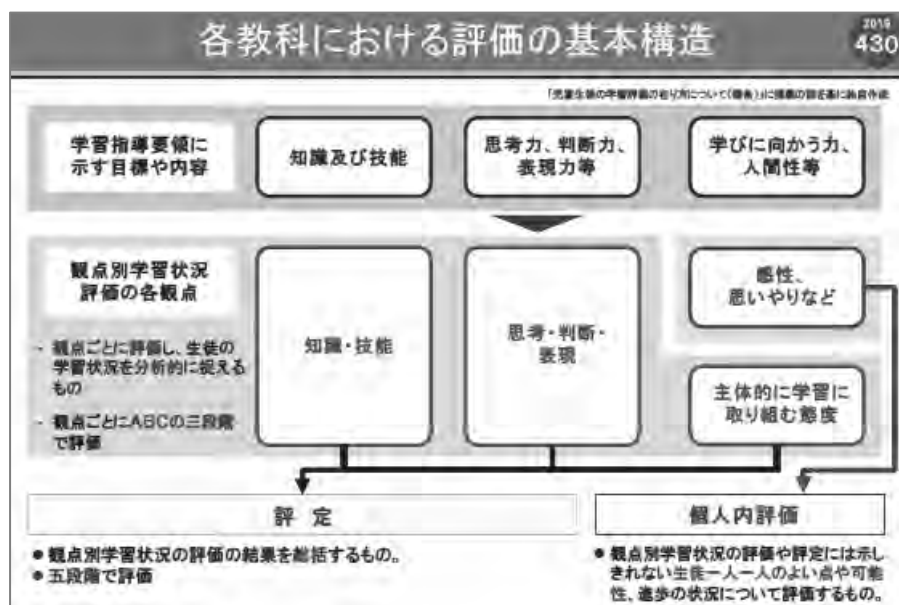


次のスライドもまた文字がたくさんあって恐縮ですが、こちらは次期学習指導要領の答申資料（2016.12.21）の60ページ、学習指導要領改訂の基本的な方向性「学習評価の充実」という点を少し復習しようと思います。『指導と評価の一体化を図るなかで、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストにとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人ひとりの学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどう伸びているのかを、例えば日々の記録や、ポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにする』ということが綴ら

れていました。

今回の資質・能力の3つの柱をもとに、観点別評価ですよね、ここ。先生方にはこの夏休み中にいっぱい宿題を出されているのではないかと思います、どう評価をしていくのか。ただし、感性や思いやりみたいなものは評価に値するものではないということです、これは切り出して評価して評定をする部分と個人内評価をする部分に分かれていましたよね（スライド17）。こまでは大丈夫ですよ。

（スライド17）



ここで気になるのはこちら観点別学習状況の評価と評定ですよ。各教科を3観点でどう評価するか。ABCの何をもってAとするのか、Bとするのか、そしてこの3観点からどうやって評定を導き出すのか。それぞれの先生方の学校のお考えが、もっと言えば先生方同士の対話も含めて、組織として考えていく必要があるんですよ。目標に準拠した評価をどう取り組んでいくのか、ということは今一度考えることが大切だと思います。

そして総則の「第3款教育課程の実施と学習評価」で示されているのは学習評価の充実です。そこには『生徒のよい点や進捗の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにする』とあり、だからこそ評価の場面や方法を工夫して、指導の改善や学習意欲につなげ、そして資質・能力の育成につなげるとなっていました。評価って値踏みするためのものじゃないですよ。さらには、学習評価の妥当性や信頼性が高められるように、組織として、私はではなく、学校としてどう取り組んでいくのか、ということが今、先生方のそれぞれの学校で大変な状況なのだろうと思っています。

ややもすると、これまでは「評価＝総括的評価」になりがちだったんじゃないでしょうか。そういう意味では診断的評価、形成的評価、そして総括的評価の3つの評価をどういう場面で切り分けて運用していくのか、ということが問われていることだと思います。「この生徒はダメだよ」

とは先生方は思っていらないと思いますが、でもそうならないように、単なる評価者ではなくて、そもそも先生とは何なのかという原点も問われてきます。そして評価そのものを先生も指導改善に活かし、生徒自身の学習意欲の向上につなげていくためにどうしていくのかということ。生徒と一緒にこの評価基準を考えたり、もしくは示したり、ということも場合によってはあってもいいんじゃないかと、個人的には思ったりします。国立教育研究所から学習評価に関するハンドブックが出ています。8月中には各教科の実践事例も公表されると思いますので、ぜひご覧いただけるといいのかなと思います。

改めて、「豊かな学び」×「豊かな評価」は、先生方のこれまでの取り組みによってそれぞれの学校や教室でたくさん行われるようになりました。先生方のこれまでの努力の賜物だと思いますし、当時の私からすると「こんな授業、たくさん受けたいなあ」と取材に行くたびにいつも思っていました。けれど、もう一方で問われているのは「豊かな評価」です。今一度、指導と評価の一体化と考えていただいて、生徒たちにどういう資質・能力を育んでいくのか、ということをもう一度点検していただけるといいなと思っています。

今回の学習指導要領は、言ってしまうと次に示されることだと思います。「何を、どのように学び、何ができるようになるか」。ちょっと乱暴ですが、「3つの資質・能力」という話はもう何度も何度も繰り返し出てきていますが、その言葉というより、その言葉を表現するこの四角の中の言葉が大事だと思います（スライド18）。

（スライド18）



何のために知識・技能を習得するのか。思考力・判断力・表現力がなぜ必要なのか。なぜ学びに向かう力・人間性を醸成するのか。一言で言ってしまうと、Well beingなのかもしれませんが、まさにこういった力を意識して取り組むだけでも、各学校の取り組みがもう一段アップグレードするんじゃないかと思っています。

私はよく扇の構造を使って説明をしています（スライド19）。高校はどうしても教科主義になりがちですが、教科間の連携をどうやっていくのか。今回の共通テストの内容を踏まえても、

もう一段ここは考えていきたいところだと思いますし、教科横断のところ「総探」があります。そして扇の要の部分に相当する「特別活動」をどうするか。特に高校における特別活動の在り方はもう一段考えてみてもいいのかなと思っています。

今回の学習指導要領の改訂でいくと、「ホームルーム活動(3)」ですよね。「一人ひとりのキャリア形成と自己実現」、この項目で小・中・高すべてが貫かれましたので、「キャリア・パスポート」に体系的に取り組むということが示されたんですよね。

(スライド 19)



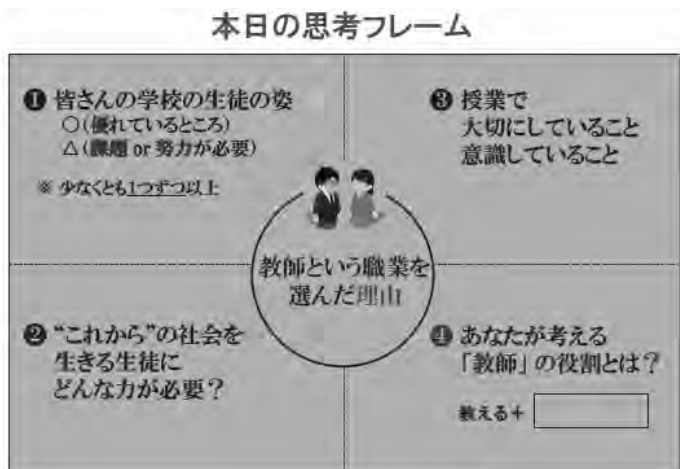
生徒たちの学びをどう未来につないでいくのか、キャリア・パスポートの在り方も、改めて捉えていただければと思っています。

では、先生方にとって教員とは何でしょう？ 次の四角には何が入りますか？

教員＝「教える」＋[]

これから求められる教員の在り方ということで、本日の思考フレームの最後のマス（スライド 20）にいきます、④あなたが考える「教師」の役割とは？ 1分差し上げます、よろしくお願いします。オンライン参加の先生方もいろいろ書き込んでくださっていますね。

(スライド 20)



『キャリアガイダンス』の記事の中で、先生方にアンケートを取ったときには、このようなキーワードが出てきました。支える、ファシリテーター、寄り添う、コーディネーターなどがありました。特徴的だと思ったのは、次です。

・教員＝「教える」＋「極める」

最近2周くらい回って、やはり「教える」は大事だと思います。

・教員＝「教える」＋「教わる」

プラスマイナスゼロという感じで、いないのにいる存在、教師としての理想的な姿（不在の在）、そして、生徒自体が皆教師になる状態が最もいいかと思います。

・教員＝「教える」－「教えない」＋「問いかける」×「一緒にみんなで考える」

教師の「問いかけ」に対して、どれだけ子どもからの「問いかけ」が生まれるか？ 子どもからの応答としての問いかけがたくさん生まれるほど、深い学びにつながっていくと思います。

もちろんこれには正解ありませんし、それぞれの先生方が、ご自身のこれからの教員としての在り方を考えていただくことになればいいのかなと思い、少しご紹介させていただきました。

また安彦忠彦先生（神奈川大学特別招聘教授／名古屋大学名誉教授）にインタビューさせていただいたときは、次のようなメッセージをいただきました。「子どもたちを客体ではなく、主体として扱う場を増やすこと、これをプロデュース、クリエイトしていくのが先生の役割だ」と。もっと言えば、「先生は人生のモデルであり、活動自体がカリキュラムだ」と。私自身はこの言葉の読み込みがまだまだ浅いんですが、とても感銘を受けたことを覚えています。

そして「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の答申（2021.1.26）です。本日の冒頭に石井先生からの解説にもありましたが、高校では次の3つが気になったところだと思います（スライド21）

（スライド21）

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～

答申
2021年
1月26日

高校生の学習意欲を喚起し、
可能性及び能力を最大限に伸長するための
各高等学校の特色化・魅力化

①各高等学校の存在意義・社会的役割等の
明確化（スクール・ミッションの再定義）

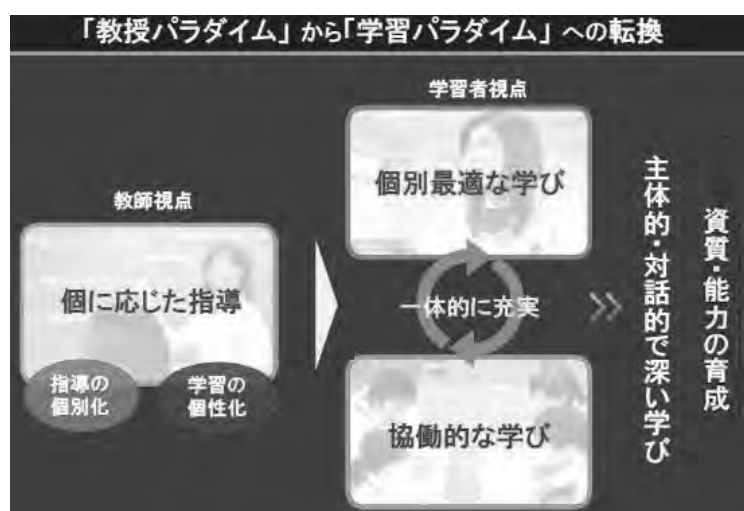
②各高等学校の入口から出口までの
教育活動の指針の策定
（スクール・ポリシーの策定）

③「普通教育を主とする学科」の弾力化・
大綱化（普通科改革） など

①スクールミッションの再定義。私立高校には建学の精神がありますが、公立高校は特に②を考えていけばいいのかなと思っています。③についても②の中に含まれると思っています。それぞれの学校で、3つのポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、そしてグジュエーションポリシーですね。卒業時の生徒たちの姿をどう描くのか、どんな力をつけるように育みたいのか、そのためのカリキュラムポリシー、アドミッションポリシーだったと思います。

そして次（スライド 22）です。石井先生からお話ががあったので私が説明するまでもないんですが、中間まとめでは、「往還する」という表現でしたが最終的に答申になると「一体的に充実」という表現に変わりました。

（スライド 22）。



どちらかを取るといような別々のものではなく、これらを一体的に取り組むというものにより強くメッセージをされていますが、これは先生方が何十年来とずっと大切にしてきたスライドの左側部分と、メッセージとしてはなにも変わっていません。ただ、教師視点から今回言われている学習者視点に置き換えをしたということと、もっと言えば今回の学習指導要領を読み解いていくための補助線だと思っておりますので、目指すところはやはり「主体的・対話的で深い学び」であり、やはり「資質・能力」をどう育成していくのか、というところなんだと思います。

ただ、この答申の副題は、後でご覧いただきたいのですが、「個別最適な学びと協働的な学びの実現」と表現されていますので、どうしてもこれがゴール（目的）のように見えてしまうのがちょっと気になったところではあります。けれど、これまでの学習指導要領ですって言われている「主体的・対話的で深い学び」を目指していくことには何ら変わりはない。

コロナ禍で、ICT の活用によってオンライン学習が求められる中、むしろその可能性が広がっていくと捉えることができるのではないかと思います。

少し古い資料ですが、ちょっと引用してみました。『日本の教師につたえたいこと』（大村はま 筑摩書房 1995）

『ひとりひとりの力を育てるために、グループ活動があるのです。』

『グループもクラスも、束にして育てることはないはずです。』

『ひとりひとりを育てるには、まず、ひとりひとりを知ることです。』

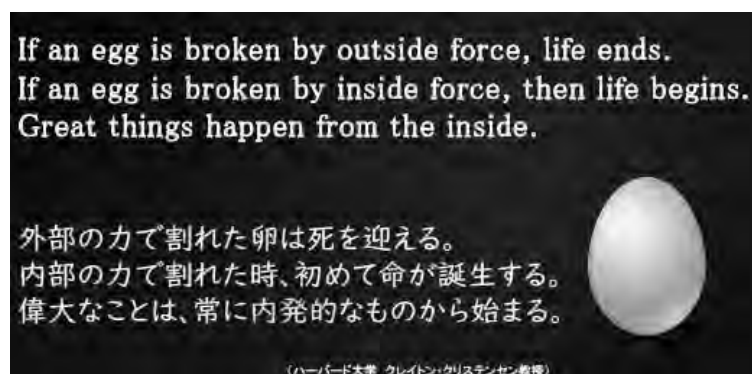
そうですね、やはり一人ひとりをしっかりと見るということ、何のためのグループ学習なのか、協働学習なのか、ということをもう一度捉えていくことが必要な気がしています。

今日は本当に乱暴なくらいの短い時間で先生方に「本日の思考フレーム」を通して考えていただきました。それぞれのマスの意図は、①生徒の実態をしっかりとらえること、②どんな力を育てていくのか、③先生方の授業観や教材観、そして④教師としての在り方・スタンスを考えていく。けれど一番の原点になるのは、最初に書いていただいた中央部分の「教師という職業を選んだ理由」だと思います。なぜ教職を選ばれたのか。そのときの思いは今実現できているのかどうか、もう一度ご自身に問いながら、それぞれを考えていただくことが「未来の学校」をつくっていく第一歩になると私は捉えています。

「あそこは特別だから」私はこの言葉が無くなればと思っています。今日ご参加いただいている先生方はそんなふうには捉えていないと思っています。先生方の思いの中に既に「未来の学校」が描かれているのではないのでしょうか。

最後に、弊社の研修会でもよく最後に出てくるんですが、このスライド（スライド 23）をご紹介します。

（スライド 23）



これをやりたい、こんな学校にしたい、こんなふうに生徒たちになってほしい、そんな思いが先生方のそれぞれの学校を今よりもアップデートしていく。急に大きく変わるわけではないかもしれませんが、大切なことのような気がしております。その意味ではすべてはここだと思っています。「思うは招く」です。どんな思いなのか、それを先生方同士で対話をするということ、それぞれの教育観を乗り越えて「こんな学校にしたいんだよね」と、今の状態ではなく未来の状態を語り合うことが、立場、役割を越えて新しい学校を創造していけるような、そんな場面になって

いくんではないかなと思っています。

というわけで、ジェットコースターに乗っていただいた気分はいかがでしたでしょうか。お腹がいっぱいかと思いますが、私の話はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(講演終わり)

【質疑応答】

—三浦 先ほど山下さんの話にあった、石井先生のご本の「学力・学習の質的レベルと知の構造」という山下先生のスライド14について石井先生に解説していただこうと思います。

—石井 社会に開かれた教育課程というところで、資質・能力ベースといったときに、「どういう学力を目指していけばいいのか」ということですね。

要はこの「知っている・できる」「わかる」「使える」の三層は、例えば教科の学習を考えたときに、社会科でいうと「三権分立」という内容がありますね。その三権分立をどうやって学んでいますか、っていう話なんです。例えば「三権分立の三権とは何か?」「司法、立法、行政です」と、そらで答えられる生徒がいます。これは「知っている・できる」です。ギリギリで覚えときゃいいやん、そんな感じね。でも社会科が得意な生徒はもうちょいましなことを考えますね。それこそ三権分立の三権とは三角形で、お互いに牽制し合っているんやでと。図にも描いたりして説明するわけです。社会科が得意な生徒はそういう概念として学んでいるかもしれません。そのように社会科が得意、好きだと言っている生徒が実際にニュースを見ているときに、「国会軽視の総選挙」という言葉がぽっと出てきたときに、引っかかるかどうかですね。さらっと流すのかどうか。もっと言うと、東大王みたいなクイズ番組がめちゃ好きな社会科が好きなやつ、だけどニュース全然見ないとか興味ない、だから結局、社会科は好きやけど、社会にはそんなに関心がない、ということになってはいないか、ということです。

(スライド14)



逆に言うと、社会科嫌いが社会嫌いを生み出しているんじゃないか。これは藤原和博さんの言葉で核心をついているなと思いました。それは国語嫌いが言葉嫌い、本嫌いを生み出しているということも一緒やし、理科嫌いが自然嫌いを生み出しているという話ですね。それもさることながら、社会科、理科、数学は好きだけど、一番大本の社会が好きかどうか、関心があるかどうか

か、そこにつながっているかどうか。つまり概念として学べても、それこそ社会や世界を見るための眼鏡として学べていないということです。

だから、今言ったように「知っている・できる」からといって、「わかっている」とは限らないし、「わかっている」からといって、それを「使いこなせる」とは限らない、ということです。それにそれぞれ対応して、実は中身、知識といったものが対応する。

「知っている・できる」ということで言うと、事実や年号を覚えているかどうか、そういうことが対応する。そして「わかる」は概念です。さらに言うと、「使える」のは、概念を見方・考え方、いわゆる眼鏡として学んでいるというふうな状態ですね。だから知識と思考は一体だということを表しています。

教科の目標を考えていくとき、日々の一時間の授業のメインターゲットをどう絞っていくかというときに、例えば歴史でいうと、墾田永年私財法の発布 743 年というような事実みたいなものを内容上のゴールにしていますか、ということです。そうではなくて、古代の土地制度が、公地公民、班田収授みたいなことから荘園の成立に至るという「公から私への流れ」というのが概念ですね。そういうことを日々の授業において大事にしていく。自分の日々の授業の中身に即した目標を立てていくときに、知識のタイプの違いをふまえて、どこを意識していきましょうかということです。

もっと言うと、「知っている・できる」「わかる」「使える」というのは、評価方法と対応しますので「知っている・できる」レベルの学力を育てるならば、穴埋め問題、客観テストでいいですよ。だけど「わかる」レベルをみたいんだったら、ペーパーテストもひと工夫したいです。三権分立が本当にわかっているんやったら、それを確かめるにはどんな問いかけをするのか。「例えば三権分立がもしも成立していなかったら、どんな問題が起こりますか？」のように問いかけたら、わかっているかどうか分かる。

さらに言うと、実際それでものごとが判断できるかどうかはやらせてみないとわからないよね。だからパフォーマンス評価をするということなんです。実践的な場面でやらせてみて評価するのがパフォーマンス評価ですよ。大本にあるのは、バスケットでいうと、ドリブルやシュートの練習がうまいからといって、実際にゲームでプレイできるとは限らない。この当たり前のことなんです。もっと言うと、この休校期間中に東京の方でありましたよね。バスケットを指導するときにドリブルやシュートだけにしなさいと。そうすると体育の先生は言いますよ。「そんなんじゃバスケットを指導したことにならないよ」と。もっと言うと、ゲームをしないとドリブルやシュートという個別の技能も定着せえへんし、伸びないよ、ということです。当たり前でしょ、そんなの。だけど今までの、よう考えてくださいよ、技能系の教科だとそれは当たり前。だけど 5 教科のように認識系の教科は常にそんな状況じゃなかったか。本物知らず、ゲーム知らず、だから伸び切らない、となっていたんじゃないか、ということですね。

ですから毎時間毎時間「使える」レベルということではなくて、使えるレベルはまさに観点別評価に関係しますが、これは学期の節目の単元とか、中間、期末とかで舞台を設定して節目をつくるんですよ。これは部活でいうところの練習試合と本番みたいな感じです。そういった節目があるからがんばるわけでしょ。学びの舞台づくり、これが観点別評価です。で、舞台がしょぼか

ったんですね、今まで。学びの舞台をつくることが観点別評価であり、それで日々の授業においてはそこに向けて「わかる」を大事にする。わかってへんから結局、比例と反比例と一次関数、二次関数といったものを別々にやっているから、まったく定着しないし積み上がらないですね。関連づけてそれは全部関数ですよと考えられる生徒は得意になる、積み上がっていく。つまり「わかる」がちゃんと保障されていないことが大きいということです。

そうすると、「使える」レベルの学びがあるということになると、ゲームがあると日々の練習の仕方も変わるでしょってことです。だから学力を3層で考えていくってことが教科学習をバージョンアップしていくときに大事やないかということですし、それがまさに観点別評価をやっていくと、学びの舞台づくりをしていくということですね。という感じでこの表をつくっています、長くなってすみません。

一三浦 ありがとうございます、皆さま拍手をお願いします。いきなりの無茶振りで申しわけありませんでした。

というふうにすると、ちゃんと質問が入ってくるんですが、今度は和田先生に登場してもらおうかな。山下さんに学校になるための条件というのも酷な話なので。

・(質問) 教員の在り方、生き方まで変わるような学校になるための条件はどういうものでしょうか

・(質問) 学校って要るの?と聞かれたときに「要るに決まってるやん!」と言いたいけど、なぜ要るかをド直球で説明できないモヤモヤに包まれています

という超弩級な無茶振りなんですけれども、ちょっとですね、感想も含めて和田先生に語っていただこうと思います、和田先生お願いします。

一和田 教員の在り方、生き方まで変わるような学校になるための条件…。

一三浦 西陵はなんかそんな気がしますけどね。

一和田 あの、そんなにいきなり自分の価値観の大転換は起こらないんじゃないかな。そんな変化って、もし、教員の在り方、生き方まで変わるような学校になったら、私は逆に、それってめちゃ大変な学校になってしまうんじゃないかと。教員の在り方、生き方って常にずっと変化し続けるもの、じわじわと変わっていく、そしてあるところが節目で「あ、そうだな」とショックを受けるようなことがあって、それでじわ一つと変わらざるを得ない。そういうような、その意味ではある意味とても受け身的なものじゃないかなって。コロナの休業があって、生徒にこれまでの授業ができない、そんなときに私は福岡西陵高校の先生方に、「福岡に住んでいるからといって、うちの生徒たちが就職や進学で不利になることがあったら私は我慢できません」と言ったんですが、それは先生たちも同じ思いで、「これは何とかせないかん」と言って夢中になっていった結果として学校が変わっていった。だから質問の教員の在り方、生き方まで変わるというのは、何か起きたときに気がついたら変わっていた的なもので、それを無理して起こそうとしなくてもいいんじゃないかなと、私は思います。

一三浦 はい、ありがとうございます、皆さま拍手をお願いします。あと学習観、教員の指導観が変化していて、さらに保護者の学習観もあって、いろんなところで齟齬が起こっているという指摘と、その齟齬をどんなふうと考えていったらいいのか、といったあたりだとか、そんなとこ

ろかな。では担任をされている、保護者を持っているということで吉村先生お願いします。齟齬が起こっていることを将来的にうまくまとめていったり、在り方を照らすようなお考えがあれば。お示しいただければいいんですけど。

一吉村 そんな大したことは言えないんですが。あ、その前に便乗して先ほどの質問ですが、私は学校づくりとかはできないんですが、先ほど和田校長先生は言われなかったんですが、校長先生が昨年うちの学校でよくおっしゃってくださったのが、「生徒にうちの学校で成長できてよかったな、と言わせたいのと同時に、同じくらい職員にうちの学校に勤めていて成長できてよかったなと思える学校にしたい」と。そう言われて皆がやる気が出たんじゃないかと思います。

さて、質問の話ですが、生徒の姿というのはやはり大きいなと思っておりまして、この前、生徒の探究の発表を小中学校の先生方が来てくださって見ていただいたんですが、その後に西陵に自分の子を通わせたいって言ってくださったんですよ。で、「ああ、これ伝わった〜」って思いました。うちはトップ校じゃないんですが、もしトップ校にいける学力があっても、そっちじゃなくてうちにいきたいって言われるような公立高校にしたいと思っていて、そういうので選んでくれるような学校にしたいと思っていて、でもこれってなかなか保護者には伝わりにくいなと思っていました。でもやはり生徒の姿を見ていただいて、伝わるものがあるんだと思いましたので、保護者の方にもどんどん生徒の姿を見ていただきたいと思っています。

一和田 すみません、ちょっとしゃべりたくなってしまって（笑）。あの、齟齬は大きくあるんですよ。でも、それって個人差。人が歩く速度が違うみたいなもので、例えば携帯電話が暮らしに入ってきたときに「俺は絶対使わんぞ」ってめっちゃ威張っている人がいました。その人が20年後にどうなったかという、バリバリ使っています。そんなもんだと思うんです。そのときそのときで、変化を受け入れる皆の速度が違う。それで齟齬が起きているように見えると思います。齟齬は、その意味では皆が同じ速度で受け入れるわけではないから、少しタイムラグはある、でも10年、20年のスパンで見ると、皆が使っているじゃんって。そうやって齟齬が収まってしまいうんじゃないかと私は思います。

一三浦 ありがとうございます、皆さま拍手をお願いします。ということで、質疑応答を山下さん抜きでしてきましたが、最後にスペシャルサンクスということで、もうちょっとだけ語っていただき、このセッションを終わりにしたいと思います。では山下さん最後によろしく願いいたします。

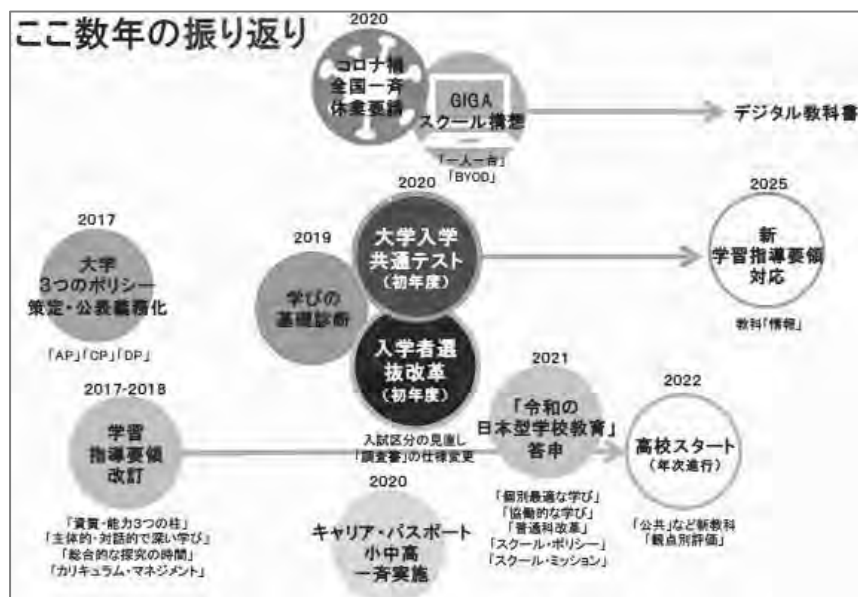
一山下 「最後に思いのたけを」とメッセージの機会をいただきましたので、最後に10分ほどいただいてこの7年半を振り返りたいと思います。どうか最後までお付き合いください。

私が編集部に着任したのは2013年10月、実際に記事づくりが始まったのは2014年ですので、ちょうどその頃から高大接続改革が叫ばれ、新しい学習指導要領の答申が出たりということで、まさに先生方とこの激動の時間をご一緒させていただいたと思っております（スライド1）。ただ残念なことにいろいろなことが叶わないというか、拙速な状況もあったんだろうと思いますが、この高大接続改革の議論のように私自身も迷いながら進んできた状況です。

少しだけ『キャリアガイダンス』を振り返りながらお話しします、そのときの時世が見えると思います。最初に手掛けたのが2014年402号「なぜ学ぶ、なぜ働く」（スライド2）。本日、酒井先

生（立命館宇治高等学校）もご参加されていらっしゃると思いますが、一緒に授業開発をさせていただいたところから始まりました。またこの年からアクティブラーニングの特集を組んでおり、日本中がざわついた、そんなときでしたね。

（スライド1）



（スライド2）



そして翌年の2015年から2016年にかけては、探究やリーダーシップ教育についてとりあげています（スライド3）。そして2017年から2018年にかけて高大接続議論が一番熱くなってきたところで「選抜から選考へ」という話を含めて何を問うのか、それから「ポートフォリオによる主体性評価」、そして再び「探究」ですね。あまり多くは語りませんが、いろいろと大変な頃だったように思います（スライド4）。そして2019年、『キャリアガイダンス』創刊50周年号を迎え（スライド5）、429号ではじめて表紙にマンガが登場しました。これは前田先生（当時 熊本大学

教職大学院准教授)の人気漫画のイラストを表紙に活用させていただきました。そして 2020 年頃からは、先ほだのご質問にもあったように「組織づくり・学校づくり」にどう取り組んでいくかというテーマが多くなってきたように思います(スライド7)。

(スライド3)



(スライド4)



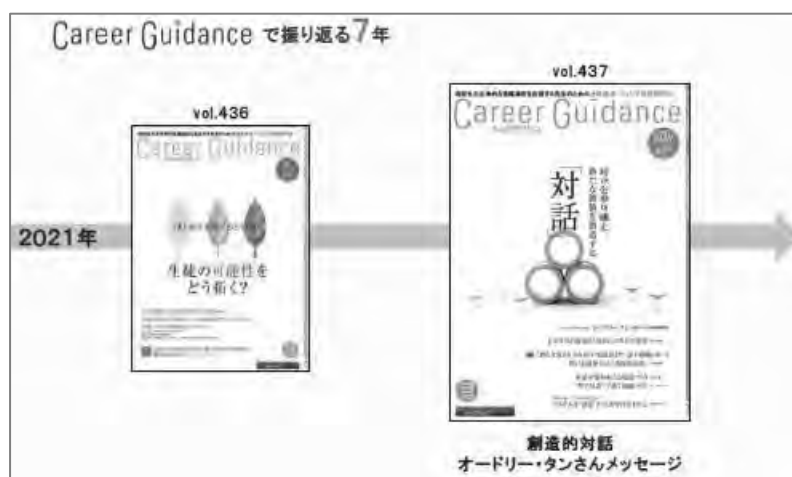
(スライド5)



(スライド 6)



(スライド 7)



そして 2021 年 437 号の「対話」の特集号が私としては最後の号になりましたが、混沌とした社会の中でそこで思考停止するんじゃなくて、どうやってそこから一步を踏み出していくのか。その意味において創造的な対話は、いろんな価値観の人たちと対話をすることで乗り越えていくという願いをこめて、この企画を特集しました。

今回のコロナ禍もそうですが、きっと想像を超えるような変化はこの先まだまだあるんだろうなと思います。そのときに正解はわからなくても、立ち止まってもいいから思考停止に陥らないような状態になるといいかなと思っています。おそらく、この後の GIGA スクール構想は、高校は相当大変だと思います。端末が入る、入らないという問題ではなく、大きく学び方も変わっていく。けれど大切なものは見失わないようにしなければならない。小中学校がまさに大混乱の中にありますが、高校もそこに入っていきますよね。その意味ではどうあるべきか、じゃなくてまずやってみる。先ほどの西陵高校の実践発表にもありましたが、まず先生方同士が力を合わせてやっていく。

この「Agile」という言葉が今われわれの中でもキーワードになっています。元はシステムなど

の開発用語で、きちっと計画書を立てて開発をするのではなく、まずちょっとつくってやってみてダメだったら元に切り戻す。この「Agile」型の人材育成が叫ばれたりもしています。早くチャレンジし、早く失敗し、早く学ぶ、そして早く成長する、といったことをどうやっていくか。そのためにはマインドセットですよね。失敗するのはやっぱり嫌ですから。私たちが住んでいる社会は、どうしてもスライドの左側（スライド 8）の世界に引っ張られ気味です。

（スライド 8）



できれば教室の中は右側に切り替えていくことが大切だと思います。でも、そんなに人は強くないかも、というのも本音だったりもします。私もそう思います。私自身がずっと大切にしているのは次の言葉です。

「計画された偶発性（Planned Happenstance）」。まずは目の前にあることをしっかりとがんばってやってみる、というところから次のキャリアを生み出す可能性を引き出していくのではないかと考えていました。いきなりチャレンジするのは難しいです。何でもかんでもがむしゃらにやるってことではないとも思っていて、バスケットボールのピボット（Pivot）の話をよくします。まず自分の強みである軸足をしっかり持つこと、そしてもう片方の足をどこに踏み出せばいいのか、踏み出しはチャレンジです、踏み出してダメだったら元に戻せばいい。そしてまた次の一步を違う方向に踏み出す。このためには軸足が必要です。その意味では先生方が学校現場で行われているのは、この軸足と、探究を含めてのチャレンジの両方を生徒たちに対して実践されているのだらうと捉えています。

キャリア教育の話ではよく「山登り型」と「筏下り型」という話が出てきます（スライド 9）。ときどき「川下り型」という表現もありますが、川下りというただ流されるイメージがあるのでここでは筏下り。川の流れを読んでいく、というところで今の状態をしっかり捉えて、自分で判断して行動するのが左側だと思います。二項対立の話をしたわけではなく、ある意味、大谷翔平選手とか、右側の人ももちろんいらっしゃいますが、おそらく多くの生徒たちは左側だと思

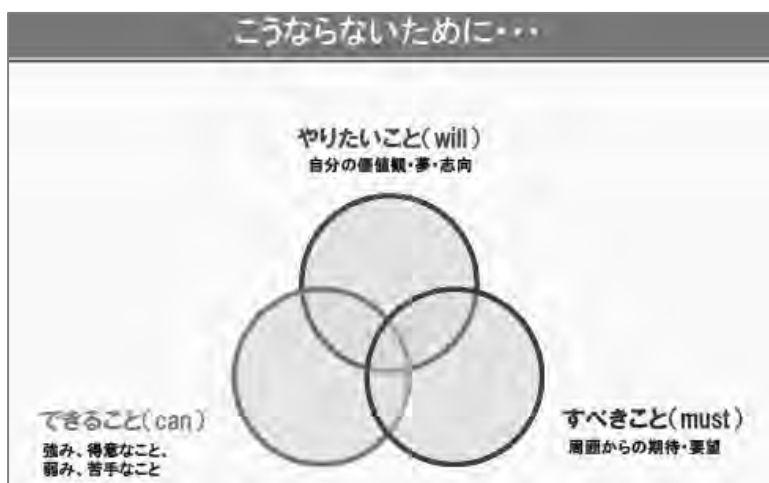
います。でもそれでいいのだと思っています。

(スライド 9)



ただ、ずっと左側じゃ困りますよね。個人的な感覚ですが分岐点があるのは 40 代半ばだと思います。先生方もご自身のことを考えながらご判断いただければと思いますが、ただ私自身はちょっと遅すぎたかなと思っています。ただただ目の前のことを一所懸命にやってきて、いざ自分がこれからどうすると問われたときに、まだちょっと自分がモヤモヤしているのが本音です。つまり放っておくとこうなっちゃうんですね、スライド 10 の三つの円のバランスが崩れてしまいます。三つの円が均等ではなく「やりたいこと (will)」だけが小さくなってその分「すべきこと」が大きくなってしまいます。学校も企業も同じだと思います。こうなるととても辛いと思いますので、「will」を描き続けることを、改めて自分自身に今問いかけているところです。

(スライド 10)



そのときに孤独感がどうしてもつきまってくるのですが、人とのつながりが大切だと思っています。私の場合、本当に多くの先生方とこの7年半、さまざまな場面で学ばせていただきました。飲み会ばかりしてるんじゃないかとも言われたりしますが、取材や講演などの場を通じてたくさんお話をさせていただきました。最後に思いのたけを綴りましたので、お読みいただけたら嬉しいです。

高校のことはよくわかっていなかった7年半前。
誰も知り合いの先生もいない中、
記事なんて創れるのか、最初は戸惑いばかり。

とにかく「現場」に学びに行く。
企画の種はそこにあるに違いない。
そう思いながら、走り続けました。

くしくも、高大接続改革、新学習指導要領・・・
日本の教育が大きく変わる時代の変わり目。
私たちも先生方と一緒に走り続けよう、
編集部メンバーと語り合ってきました。

誌面を通じて、先生方に何がメッセージできるのか。
大変な時だからこそ、「大切なものは」何かを問いながら、
1 ページ、1 文字 1 文字に思いを綴りながら、
記事づくりをしてきました。

『キャリアガイダンス』は、実は先生方の思いに
触れることが原動力だった、ということに気づきました。
先生方との“つながり”がすべて。

全国各地の先生方の実践を取材して、記事にして、
そして、講演の機会などを通じて、
全国の先生方に届けていく。
そう、ミツバチみたいな存在だったのかも。
蜜を運んでいるつもりが、
逆にたくさんのエネルギーをいただきました。
「感謝」しかありません。

今、世界中が終わりのない不安に包まれています。
真っ直ぐじゃなくても、立ち止まることがあっても、
キャリアをしっかりと切り拓いていけるように。

先生方の実践の数だけ、生徒たちの未来が拓ける。
教育こそがすべて。
これからも、ご自身の健康を最優先に、
思いっきりチャレンジしてください。

これからも応援しています。

山下真司

というわけで、これまで大変お世話になりました。先生方と過ごしてきた充実の 7 年半、心から感謝の気持ちをこめて、また最後までこういった貴重な時間をいただきましたこと、産業能率大学の林さんをはじめ皆さまに感謝をしてこの場を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

一三浦 ありがとうございます、もう一度拍手をお願いします。セッション 3 まで無事に終わることができました。それでは私も任を終えることにいたしまして、最後のエンディングに入っていただこうと思います。

(終わり)

第14回キャリア教育推進フォーラム Session1

学校法人札幌慈恵学園 副理事長・法人本部長

前 札幌新陽高等学校 校長

荒井 優 先生

教員集団の自律とチームビルディング

- 1 自律する組織に Facebook
 - ①思いを伝えるために発信ツールを使う
 - ②自分の思いを伝え、他者も意識する発信をはじめてみませんか
 - 2 学校の IR は Internal Relationship、つまり「中への説明」が大事
 - ①2019 年 4 月、「開くチーム」をつくるために先生たちに説明した資料
 - ②学校の外に発信しないと学校は変らない
 - ③外に発信することはメタ認知力を上げます
 - ④一人で見学にいらしても効果は出ません。管理職たちが背骨になれば期待大
 - 3 財務目線で見えてくる学校の激変
- 【質疑応答】

教員集団の自律とチームビルディング

学校法人札幌慈恵学園 副理事長・法人本部長

(前札幌新陽高等学校 校長)

荒井 優

1 自律する組織に Facebook

① 思いを伝えるために発信ツールを使う

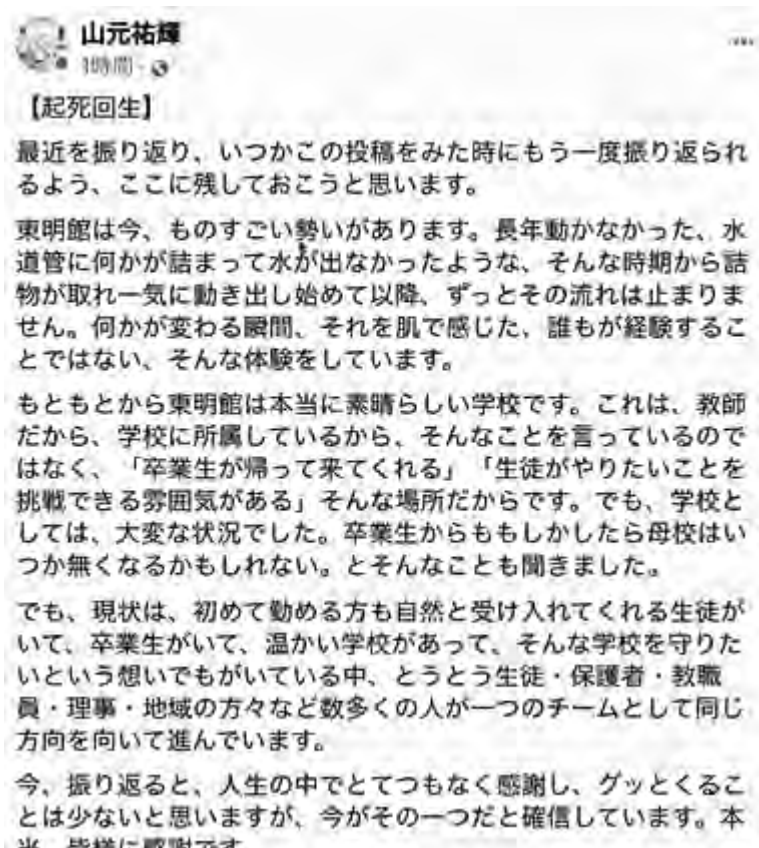
こんにちは荒井です。今日はオンライン開催となって本当に残念でしたね、私も皆さんに会えたら嬉しいと思っていました。3月まで札幌の高校の校長をやっていましたし、今は九州の学校の理事長もやっていますが、東京に行く機会がどんどん減っています。新陽高校の校長のときは夏休みなどに、学校の先生方が集まる場に呼んでいただいたり参加させていただきながら、そこで人の輪が広がったという経験がありました。よく考えたらこのコロナ禍の2年間は、オンラインが増えてリアルで集まることが減っていることを実感しています。ひょっとしたら今年はリアルで開催されるかと皆さんも期待されていたと思います。でもこういう場をつくってくださった産業能率大学の林さんはじめ、スタッフの皆さん、本当にありがとうございます。

今日はセッション1で話させていただくのですが、私の立ち位置は理解しています。全ては第3部の工藤先生のためにあると思っています。工藤先生の話私も聞きたいです。先生の話を楽しみにしながら、私はファーストブレイクという感じで先陣を務めていきたいと思っています。

ところで自己紹介をする前に、こんな言い方をすると大変失礼になるんですが、先に言っておきますと、実は選挙に出ようと思っているので、自分の知名度を知りたくてこんなことを聞きます。リアクションボタンをお願いします。私のことを何となく知っているよ、という方はボタンを押していただけますか。ありがとうございます、まあ半分ぐらいですね。次に私の Facebook (以下 FB) を見ている方は、ハートマークを押していただけますか。パッと見た感じで 1/5～1/4 ぐらいでしょうか。中にはフォローしていただいている方も、相互にフォローしている方もいるようです、ありがとうございます。

今日は「**どうやって学校が自律するのか**」とのテーマで話をしてほしいということでしたので、結論から話をしていこうと思います。ちょっと画面の共有をさせてください。今日まさに FB に UP したのですが、ご覧になっていない方もいると思いますので少し見てください。

なんとなくでいいです、ざっと読んでいただけたらいいです。筆者は私が理事長をしている東明館学園の先生で、まだ30歳前の若い先生です。



文中の東明館という学校は佐賀県にある 30 年ほど続く学校（学校法人東明館学園 東明館中学校・高等学校）ですが、この 10 年は経営が非常に苦しくなり、2 年前（2019 年）の 7 月にぼくが理事長を引き継いだときは毎年 1 億円の赤字で、現金が後 2 億円しかなく、つまりあと 2 年で現金がなくなる、という状況でした。

FB の内容はオープンスクールの宣伝でもあるんですが、でも筆者の山元先生の思いは皆さんにも伝わっていますでしょうか。山元くんは東明館で最初に先生をやり、その後、佐賀早稲田に転職され、数年前に再び東明館に戻ってきました。私と同じく東明館の一番苦しい時期を知っていて、佐賀早稲田のような名門校の状況もよく理解している、そういう先生です。2 年生の担任であり、探究コースのコース長をしています。2 年前に私が東明館で探究コースを立ち上げると決めたとき、九州で生徒募集をしていて、山元くんも一緒に来てくれて、九州ではほとんど探究コースが理解されない中で、ぜひ自分は探究をやりたいと言ってくれました。その彼が FB にこんなことを書いていました。

もう一つご紹介したいのは、「先生の学校」というサイトです。これはどなたでも見ることができるサイトです。ここに私が校長をやっていた札幌新陽高校の先生が 2 人登場しています。まさにここも数年前まで存続が危ぶまれる経営状態だったのですが、それを打破したのは「開く学校づくり」だったということで、この 2 人の先生が学校についていろいろと語っています。高橋励起（こうき）先生と高石大道（だいどう）先生です。励起先生は私が行く前からずっと先生をされて、大道先生は私が行ってから民間企業を辞めて就職してくれました。

「よういく」を探究し、創造する

先生の学校とは [読む](#) [学ぶ](#) [つながる](#) 雑誌「HOPE」 [ログイン](#)



「本気で挑戦し自ら道を拓く人の母校」をスローガンに教育改革に挑む札幌新陽高校は、約800人の生徒が在籍する私立高校だ。

生徒に「出会いと原体験」の機会を届ける同校は、数年前まで存続が危ぶまれる経営状態だった。そのような状況を打破したのが、「開く」学校づくりだった。

2016年2月に民間出身の荒井優さんが校長に就任し、多様な大人を学校運営に巻き込み、多くの見学者が同校に訪れるようになったことで、生徒にも見られる意識が生まれ、すごい大人と関わることで成長し、生徒の意識も先生

札幌新陽高校は東明館高校と違って、本当に荒れていて「大変な学校だった」という話をこのサイトでしています。経営危機のときは、学校が買収されるのではないかと噂もあり、私が行ってからも実際に若い先生は転職されていきました。偏差値も最底辺の学校だったので、高校に行くところがなかったら最後は札幌新陽高校、そこで「最後の砦」と中学の先生から真剣に言われていました。着任してからは入学金無料などをはじめいろいろやりました。サイトで励起先生が言っていますが、経営危機の打破へのきっかけとして「一番大きいと感じたのは開く学校づくりでした」「どんな状況でも開くし、見せるし、たくさんの大人を学校に連れてきました」。それで生徒が増えてきたということ話をしていますね。映画『ビリギャル』の小林さやかさんもインターンで来ていました。また、「開く」というのは、最初は怖さも伴うので「生徒がいきいきと学んでいる姿を見せたいから開く、それは自分の授業も見られる、それも怖いですよね」と言っています。

② 自分の思いを伝え、他者を意識する発信をはじめませんか

この二つの記事をご覧になって、皆さんはどんなふうに思われましたか。今日のタイトルは、「自律する組織のつくり方」（教員集団の自律とチームビルディング）ですが、今日ここに集まっているのは学校関係者が多いと思いますので一つ申し上げたいのは、紹介した情報は二つとも先生たちが発信しているということです。最初の山元くんは自分のFBで自分の思いを述べていますし、励起先生も大道先生もサイトでは取材に応えていましたが、2人ともけっこうFBを使っています。今日冒頭で、私のことを知っていますかということで、「私のFBを見たことがありますか」と質問をさせていただきました。FBを使っている先生、使っていない先生が両方いるのもよくわかっています。そして使いこなしている先生がいるのも、そうでもない先生がいるのもよくわかります。

私からの今日の一つの結論は「自律する組織のつくり方」はすごく簡単で、「FBを使ったらいい

いんですよ」というのが私の結論です。先生方はこう言われたらどうされますか？ FB アカウントを持っている方はそのまま使えばいいと思いますが、FB アカウントを持っていない方はこう言われたらどう思うのでしょうか。私に関わっている二つの学校は私立高校ですし、当然 SNS の使い方のルールは私の着任前からありました、私が一番破っていますね（笑）。公立の学校でしたらさらに教育委員会から SNS は使ってはいけないと言われているところもあると聞きますし、ニュースによると SNS のトラブルもあって「SNS をやってはいけない」という報道に接したこともあります。LINE や Messenger など確かに直接にやり取りをすることの危うさなどもあるかもしれませんが、でも自律する組織にするためには、FB は欠かせないツールだと私は思っています。もう一度聞きます、このように言われたら先生方はどうされますか。

ここがポイントだと思うんです。究極のところ FB じゃなくてもいいんですよ、なんでもいいんです。どんなものでもいいんです。でも例えば自分のところにはない仕組みやシステムの話をしたときに、皆さんは「うちの学校、うちの組織では無理だな」と思っちゃうんですね。今日私は皆さんに「優（ゆたか）さん」と呼んでほしくてそう言いますが、「優さんはうちの校長じゃないし、理事長じゃないから」ってまず思うんですね。「まして教務主任や教頭先生がそんなのを絶対に許すはずがないし」と思っちゃうわけですね。

でも本当に大切なことは、組織・チームにある難しさ、人間関係にある難しさを突破することを覚える、生徒たちも覚えることが教育機関として一番大切なことだと思うんですよね。なぜなら、われわれは常に他者と一緒に暮らして、一緒に生きていくわけです。それは男性、女性、LGBT、先輩、後輩、野球が好きな人、野球が嫌いな人、日本人、日本人以外の人、常に自分とは違う人と暮らしていく中で、どうやって自分の思いを伝えていきつつ相手の思いをしっかりと受け取っていくのか、というのが大事ですよ。FB じゃなくても全くかまわないんです。でも自分のチームや組織に「こういうツールは難しそうだな」と思った瞬間から、先生方のマインドセットはもうそれ以上広がらないわけですね。だから FB を使っていない先生は FB を使わないんです。でも、使ってみたらいいじゃないですか。恐る恐るでもいいし、もし使うことが何かに抵触するんだったら、抵触するルールを変えるところに一步一步踏み出してみたらいいんじゃないですか。新陽高校や東明館高校の事例を使っていた方がいいですよ、構いません。私は今日明確に言いましたから。新陽高校も東明館高校も学校の経営がこのように V 字回復したのは、ハッキリと言いますよ、私が FB を使っていたからです。そして先生方にも「どうぞ FB を使ってみてはどうですか」と何回か言ってきたからだと、私は思っています。

2 学校の IR は Internal Relationship、つまり「中への説明」が大事

①2019 年 4 月、「開くチーム」をつくるために先生たちに説明した資料

もう一つの画面を共有しましょう。今日はこんな話でもいいのかな、でもいいんですよ、今日のちゃんとした話は工藤先生（セッション 3）がやってくくださるから（笑）。私の話は皆さんの気持ちをアウトブレイクするような感じです。

紹介するのは、2019 年 4 月の新陽高校の職員会議で先生たちに説明した資料です。つまり「開くチーム」をつくっていくには、校長が何を考えているのか、理事長が何を考えているのか、というものを常に説明する必要があります。一般的企業では IR（Investment Relationship）は「投資家への説明」というものですが、もう一つの IR には Internal Relationship があります。

学校においてはこの IR（Internal Relationship）つまり「中への説明」が非常に大事だとずっとと思っています。

基本的には全ての情報を共有して説明していく。この説明していく技術がすごく求められていくと思っています。ちなみに私は新陽高校でも東明館高校でも、公立の先生には少しわかりにくい話かもしれませんが、経営が苦しい時期の私立学校のトップに立つときに最初にやることは、財務状況を全てフルオープンにすることです。どれほど苦しいのか、ということを含めて話します。その上で「でも私が何とかするから大丈夫ですよ」と説明を始めます。学校の先生は財務の話には非常に疎いですね。でも公立の先生たちも財務に対してはしっかりと理解していけないと私はいけないと思っています。

ちなみに写真は新陽高校の以前の職員室です（スライド1）。もうこれぐらいしか手元に残っていないんですが、現在の職員室はこんな感じじゃないです、すっかり変わって IT 企業のオフィスのようになっています。でも元々はこんな感じでした。これでもきれいにした後の写真ですね。普通に机と席が固定されていて、皆さんの職員室もなんとなくこんな感じじゃないでしょうか。そのあと職員組合がお金を出してくれて、自分たちで変えていくんですが、資料の表紙に使わせてもらいました。2016 年 4 月から校長に着任したので、2016 年、2017 年、2018 年と 3 年間校長をやり、その翌年の 4 年目に入っていくときです。3 年目が終わったので、新陽高校の経営も一気に成長軌道に乗ってきたという実感が自分にもありました。

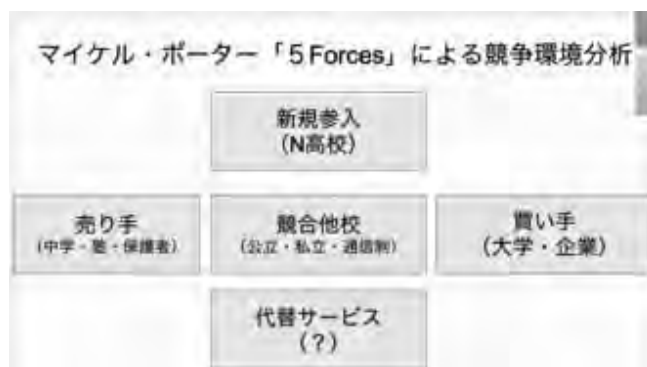
（スライド1）



ちなみに東明館高校も今年（2021 年）が終わると次は 3 年目に入ることになります。学校の立て直しに関しては、東明館高校は財政的にはまだ赤字ですが確実に黒字になりますので、私の実感は 2 年目で立て直せるという実感があります。新陽高校は進路多様校、学力でいうと底辺校といわれる学校で、東明館高校はもう少しレベルは高いのですが、そこはそこで難しさがあります。でも 2 年で立て直せます。そのコツは先ほど話したように「FB を皆さんが使えばいいんですよ」ということを今日皆さんに申し上げています。そしてだんだん順調になり始めてきたときに、「教育のリノベーション」をしていくんだ、という話を先生たちに 4 月の時点でしました。それをかいつまんで紹介していきます。

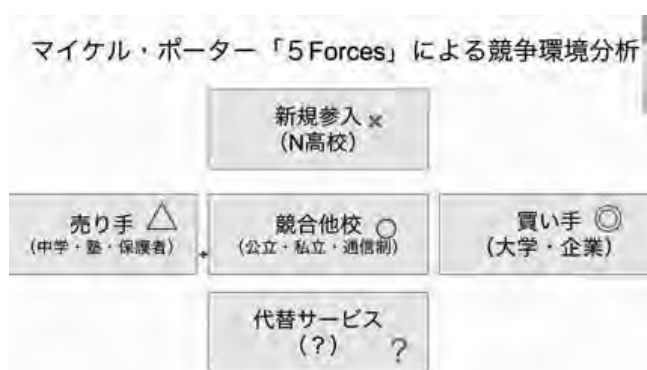
マイケル・ポーターの「5 Forces」(スライド2)はご存知でしょうか。経営学とかMBAをやると最初にやる競争環境分析ですが、5つの力で競争関係を分析するというものです。

(スライド2)



経営学をやると、初歩的に話が始まっている感じです図の中央は自校を取り巻く「競合他校」があります。上に「新規参入高校」があります、これはN高校です。3年前までは多くの人が色物の学校のように見ていました。5年前、私が新陽高校の校長になったのと同じタイミングでN高校が始まっていますが、このN高校がもし化けてしまったら、新陽高校は大きな草刈り場になってしまうのではないかと実は一番恐れていました。結果的にN高校のスピードにはもはやかきませんが、私は勝手にライバルだと思っています。それから下方の「代替サービス」です。「高校に行かなくてもいいんじゃないか」というもので、今後出てくるだろうと。そして左の「売り手」です。中学や塾や保護者から学校がどこまで理解されるか。そして右の「買い手」は大学・企業等、進学先です、こういった競争関係を見ていきます。そうするとこの図のような感じでしょうか(スライド3)。

(スライド3)



新陽高校は、そろそろ「新規参入」ではN高校にはかないにくくなるかな。「競合他校」との競争では新陽はだいぶ勝ってきました。今後の「代替サービス」はどうなるか、といったそんな話をしたり、それから現状分析ですね。テストの点数が伸びていることを話して、さらに「今後は学ぶものが教える者を超えなければ意味がない」という話です。(スライド4)

(スライド 4)

「学ぶものが教える者を超えなければ意味がない」
(ハーバード・ビジネス・レビュー2017年11月号、濱口秀司)



そして学校経営における「ビジョン」を話します。このときのタイミングでは、学校における「星野リゾート」を目指すという話もしました。今の東明館高校でやっていることはそれに近いのかもしれませんが。そして、「日本一に本気で挑戦する」「新陽高校は日本一の高校になります」という話もしています。(スライド 5・6)

(スライド 5)

**日本一に
本気で挑戦する**

(スライド 6)

近大付属高校の先生方へ

**新陽高校は日本一の
高校になります！**

そういう中でやはり「出会いと原体験」が大事で、2019年に初めて先生たちに「FBはある種こういった新しい学校みたいなものだと思っている」と話しました。また、業務として命じたわけではないんですが、

＜「出会いと原体験」がFBによって実現すると思うので、「今年度のキーワードは知的好奇心」というものを掲げていきますから、先生たちもプライベートで使ったらどうですか？＞

という話をこのときに申し上げました。

2019年のタイミングで学校の経営が少し順調になってきたところです。それまでは私だけが

情報を発信していて、FB で『校長日誌』をずっと書いていました。そこで「先生たちもやっていいんじゃないですか」と伝えました。それは別に「入試広報のために」とかではなく、「知的好奇心を満たしたり、いろんな人とつながっていくのに FB っていいですよ」といったことで、3年目に伝えました。

確かに私はこういった「ツールを使うことにポジティブな学校の責任者だ」という言い方もあるかもしれませんが、皆さんはこういった言い方をされるとどのようにリアクションされるんでしょう。

ではここまでのところで、皆さんがどんなことを思われたかを、チャットにコメントを書いていただいていいですか。この人数なので全員は追いきれないと思いますが。皆さんの表情が見えないので、どのように届いているのか、私も不安なんです（笑）。友達もいるので大丈夫ですかね。あ、そうですね画面を ON にしていただくと私が場違いな話をしているかいないかがわかりそう。

—皆川 ここまでの感想をぜひ皆さんチャットに入れてください。

—荒井 おそらく「その話はもちろんわかるんだけど、学校のレギュレーションが厳しいんだよね」といった話になるんじゃないかなと、私はここで勝手な想像しています。組織の誤謬のようなところがあって、そうやって皆がある種、勝手に付度をしちゃう。だからもう一度言いますが、新陽高校と東明館高校は私が FB を使ったから学校の経営が V 字回復したんです。これは間違いありません。本当に間違いはないです。

だったら、「やってみたらいいんじゃないですか？」という話です。アクティブラーニングとか iPad を入れてとか、なんとかかんとかという手法を導入するとか、そういうことに関しては学校の先生たちは一所懸命に研究して、導入して、某社のなんとかツールがいいとかやりますけど、いやいやそんなに難しいことをやらなくていいんです。先生たちが FB を導入して、「自分が思っていること」「やっていること」「感じていること」を発信すれば学校はよくなるんです。

・学校のことをどれくらい書いたらいいのか。

はい、そうですね。組織で「モヤッ」としますよね。まさに組織でやるのはちょっとモヤッとするんですが、なので私も「組織でやろう」とは新陽高校でもひとことも言ってきてないんです。「個人でやったらどうですか」という話です。生徒と先生が SNS でつながって不祥事が起きて、そういう SNS はダメだと教育委員会から、文科省からお達しが出たのは、正直なところ立ち位置上げっこう苦しくて、「私は相当直接やってるな」と思うのでニュースを見なかったことにしながら続けてきました（笑）。

②学校の外に発信しないと学校は変らない

きっと、学校って今ここに一番の課題があると私は思っています。もう一つ、今日は言いますね。今日のこの場は学校の先生の集まりですからいいんです。いいんですが、本当に本質的に大事なことは、さっきの FB の話と同じで、「学校の先生たちだけで集まっても、学校は一向によくならない」ということですね。やはりわれわれは、それを感じなければいけないですね。

これを別の面から言うと、私は選挙に出ようとしているので、いろんなところでいろんなことをやっているんですが、その中に地域の集まりのようなものがあります。そしてそういった地域

の集まりに、ほぼほぼ学校の先生って来ないんです。あれって、どうしてなんですかね。

例えば私はこの2か月くらいは、月1回くらい教育のことを語る集まりを札幌で細々とやっていて、毎回30人ぐらいがきてワークショップのようなことをやっています。そういった「教育のことについて語り合おう」といった場をつくると、面白いほどに学校の先生はまず来ないんです。新陽高校の先生も来ません。でも生徒や保護者、卒業生は来ます。あと塾の先生、教育についてモヤッとしている大人も、若者もやってきます。でも当の当事者の学校の先生は一人も来ないんです。どうして先生たちは来ないんですか。皆さんは。

たぶん、「大変なことになる」って皆が思っているんですよ。もし「教育について考える」という会に行って、自分が某学校の先生だと知られたら、一方的にいろいろと聞かれるのがわかってる。「何で学校ではこんなことをやってるんですか」とか、ひょっとして教え子や教え子の保護者がいたりして、「ええ、そもそも」みたいに。つまりこういうことですね、そこには二つのスタンダードがあるわけです。先生方は仕事ができる方々だし、もちろん子どものことをよく考えてくれている、よくわかっています。でも、先生たちが一番わかっているんですね。学校には学校のロジックがあって、そのロジックがどうも一般のロジックとは組み合わないと自分で思っちゃっているから、だから、まさに今日の学校の先生たちの場ではいいんです、一緒にブレイクアウトルームをやっても。皆が同じ思いをしているから。同じ思いというのは実はWスタンダードです。まず一つは学校としてのスタンダード、そしてもう一方で個人としてのスタンダード、個人として「これちょっとどうかな」「これおかしいよね」と思っているというWスタンダードを皆わかっている人たちが今日ここに集まっていると思うから、ブレイクアウトルームでも自分が思っていることを話せるわけですね。

でも一方、そのWスタンダードを理解していない一般の人たちは、それは生徒のこともあるし、保護者のこともある、地域の人もある、大学の先生のケースもある、例えば皆川先生は大学の先生でもあるけど同時に高校の先生もやられていたわけですね。これもWスタンダードが要求される。でも普通の大学の先生は「なんで高校がああなのか」というのはよくわからないわけですよ。きっと多くの人が、このWスタンダードのところに学校の先生の代表としてのこのこ出かけて行って、ありとあらゆることの質問攻めにあって、答えに窮しちゃうことになるのを、おそらく皆が恐れているんじゃないか、と思っています。

それがきっとFBを使うことに関してのモヤッとした感じ。「自分が何を食べた」とか「子どもがこうだ」というプライベートなことは書けても、いざ学校のことを書こうとすると、いろんな所からいろんなことがくるんじゃないかと恐れてしまうのではないかなと思うんです。そこを乗り越えられるかどうか。そこが結局、今学校が求められていることじゃないかと私は思います。

もう一度言います、今日のこの場はセーフティな場です、われわれのね。でもここがどんなにセーフティな場で、この二つのスタンダードがあって、という話をしている限りは皆さんの学校はよくならないし、私は教育者ではないから申し上げますが、本質的には教育活動だってよくなるとは私は思っていない。

新陽高校も東明館高校もさっき申し上げたように、情報発信は最初は私しかしていませんでした。だけど私がしているうちに、だんだんと先生たちも「こんなふうやっていけばいいのかな」となっていく。もちろんいろんなことが起きます、私もまずかったなと思うことを経験し、トラブルになることも当然ありました。それでもやり続けるからこそ、ああやってたった2年で学校

って変わるんです。特にどこかの学校に視察に行ったわけでもありませんし、すごいシステムを導入したわけでもありません。私が FB を使って、先生たちがそれを真似して、としているうちに自律する組織になっていったのは、それは自律したのではなく、外のことを意識するからこそ自律せざるを得なくなってくるわけですね。

③ 外に発信することはメタ認知力を上げます

工藤先生がおそらく今日話される本、『自律する子の育て方』（SB クリエイティブ）、あの本は本当に素晴らしいと思いますが、その中で「職員の心理的安全性」と「メタ認知」の二つについて言っています。「職員の心理的安全性」はわかりやすいテーマですし、いろんなやり方があります。これはけっこう組織のトップの人たちが頑張らないといけないところだと思います。もう一つのテーマの「メタ認知」をどうやって磨くのかというのはなかなか難しいことだと思われるかもしれませんが、私からすると難しいことじゃないです。それはみなさんが開けばいいわけです。開くというのは、申し上げたように「だったら FB を使ってみたらどうですか」、「だったら普通の会議に行って、私は教師です」と言って始めてみたらいいじゃないですか。今教育について悩んでいるお母さんはごまんといいます。悩んでいるお母さんたち同士で話していくと必ず、「だから学校がダメなんだ」と学校がどんどん批判されるんですが、そういう場に行って「いや、われわれもこうなんですよ」、「それはちょっとおかしいですね」と。それは本来は PTA がそういった役割だったのにそういう機能をしてこなくなっているという課題があるんじゃないかと思っています。

さて、どうでしょう、皆さんの意見は出ましたでしょうか。今日はちょうどこの辺りで時間の折り返しですね。

・外に開けば必然的に自律する。

本当にそうですね。まさに開いていくことで自律するし、学校の先生たちだけで傷をなめ合っていたり、諫め合っていたりしても生徒は一向に自律しません。

④ 一人で見学にいらしても効果は出ません。管理職たちが背骨になれば期待大

今日は、私が校長になる前からそもそも友達の N 先生がいらしてます。N 先生どうもこんにちは。N 先生とのきっかけはちょっと面白いんです。ソフトバンクにいたときに震災復興の仕事をしていて、それこそ FB がきっかけです。「福島に少しつながりがあったので何か復興に関わるサポートをしたい」ということで、福島の人たちがやっているイベントに来ていただいて、そこで知り合った友達です。私が新陽高校の校長になるとき、そもそも私立高校の先生の知り合いというのがいませんでした。それで N 先生に「私、高校の校長になるんだけど」と相談に乗ってもらいました、覚えています。そもそも教員免許はありませんし、学校のことをこれっぽっちも知らなかった。学校に勤めたこともありませんでした。でもおじいさんがつくった学校が潰れそうになっていたのを勤めたんです。校長になってからは毎日ポチポチと『校長日誌』を書いていました。やっていた理由は、学校のことを広報するお金がなかったからです。ふつうの学校がやるような新聞や雑誌に広告を出すお金すらなくて、自分で書いていたら N 先生が「なんか新陽高校、だんだん面白くなってきているね」とメッセージをくれました。落ち込んでいるときに書いていたところは「大丈夫？」と送ってくれてサポートしていただいていた。「新陽高校が

イケてきているんじゃないか」と感じるようになったころ、あるとき、N 先生が「うちの学校ももっとよくなる必要があるから一度新陽高校を見に行きたいんだけど」と連絡が来ましたが、私は断ったんです。「一人でいらしても、学校は変わらないから止めた方がいいですよ」と言いました。多くの学校の先生たちが、いい学校の視察に行きたがりますね、夏休み期間中とか。でも視察を受け入れる側ってけっこう大変なんですよ、その間は手が止まっちゃうから。それで本当に有料化を考えていたんですが、コロナで止まっちゃいました。視察を受け入れるときは私がやるのではなく先生に頼むので、その人の仕事が止まっちゃうんですね。そういうコストがかかるということと、もう一つはマインドセットです。視察を望む先生は「自分の学校はうまくいっていない、けど何とかしたい」という先生がほとんどです。ポジションは別として、なんとか自分でやっていきたい、ということですね。当時の N 先生も新陽高校から何とかそのエッセンスを得たいと思ってくれていたと想像しています。でも視察は断って、アドバイスをしました。「先生が最初にやらなきゃいけないことは、一人で来て、新陽高校はこういう所が素晴らしいとか、校長がわかってくれるとか、民間出身だからとか、校舎は意外とおんぼろだとか、そういうことを持って帰るよりも、まずは自分の学校の校長、教頭、教務部長と自分の 4 人で、『札幌の学校を見に行きましょう』と口説くことから始まると思いますよ」と言いました。多くの先生たちはこれを言われるとくじけちゃうんですよ。「ああ、うちの校長は無理だ」と思うんですね。でも私の経験ではこれまでに 2 人、2 校、それを実現させた人がいます。N 先生ともう一人の先生です。今説明したメンツで学校を視察をすると、だいたいその学校は変わっていくと思います。私立の場合はそこに理事長が加わると無敵ですね。理事者と校長、教頭、教務部長と本人の 5 人。理事長と校長先生と一緒にいらしてくれたら、見学科くださいなんて言える筋合いじゃなくなりますし、逆に歓待で 2 時間フルアテンドします。もちろん細かな質問にも答えます。私が想像するのは、皆さんは見学の後にそのメンバーで「すすき野」に行ったりして感想を話すじゃないですか。「すごかったね」という話と「あそこはダメだったね」という話と。先生って基本的に他の学校を批判するのが好きなような気がしますので「新陽、思ったほどじゃなかった」とでも言いながら飲むんだと思います（笑）。でもそういう時間の中で、じゃあ自分たちだったらどうできるのか、という話になっていくと思います。これは FB を使うという話じゃないですよ。組織そのものはそれぞれの機能があって、それぞれの立ち位置があって、理事長や校長先生だけでは学校は変わらないわけですよ。なぜなら生徒と向き合うのは先生たちで、校長は生徒とほとんど向き合いませんから。だから「学校を変えよう」というときに中心となる先生たちも必要。校長だけが旗を振ってもついてくる先生たちがいなければ学校は変わりません。一方、下から小さく旗を振っていても誰も見てくれなかったり、校長がそれを受け取ってくれなかったりしたら進まないです。つまり学校は、校長、教頭、教務部長そして現場の先生。そして私立の場合は、さらに理事長と法人局長が加わってしっかりと背骨のように真っ直ぐにぎゅっとつながっていたら、学校組織は必ずうまくいくようになると思っています。画面の向こうで頷いていただいているので、内容が伝わっているなと感じます。

こういうことだろうと思ってやっています。そしてちょうど今朝ですが、冒頭に見ていただいた東明館高校の山元先生の FB の投稿です。私がお願いしたわけじゃないです、おそらく彼は自分の FB が皆さんの前に晒されていることを全く知らないと思います。でもいいんです、FB ってそういうものですから。私が皆さんにシェアしたわけですが。まさに 2 年で本当に学校は変わ

るんですね。学校は変わるんだということを信じるのがすごく大事だと思います。

3 財務目線で見えてくる学校の激変

今日は学校の先生たちが多いと思いますが、最初の方で申し上げた「財務」についてです。これは公立の先生も私立の先生もちゃんと理解していた方がいいです。特にこれからの時代は、学校のお金の回り方がどうなるのかを理解する必要があります。特に 20 代・30 代の先生はぜひ理解した方がいいと思っています。

表は学校の 카테고리&アセットです（スライド 7）。私はこのように思っています。今日は少しお勉強っぽい話もします。項目は左から、「カテゴリー」「アセット」「トピック」「検討主体・機関」「KPI」「視野」

（スライド 7）

学校のカテゴリー&アセット

カテゴリー	アセット	トピック	検討主体・機関	KPI	視野
教務	生徒	・募集 ・教育方法 ・進路 ・生活問題	学校	・生徒数 ・進路結果 ・出欠数	1～3年
マネジメント	教職員	・給与 ・教員募集 ・教員養成 ・労務管理 ・コンプライアンス	法人	・P/L ・残業代 ・労働時間 ・給与 ・福利厚生	1～3年
財務	校舎	・基本構想 ・設計 ・施工 ・資金調達 ・担保 ・返済計画	理事会	・B/S ・資産 ・負債 ・担保資産 ・返済財源	10～30年

この表は 3 階建ての建物だと思ってください。3 階で、学校の先生たちは、カテゴリーの「教務」のことを当然担当されています、右のアセットつまり、持っているものは生徒ですね。そしてトピックとしては生徒募集、教育方法、進路、生活問題があります。主に先生方が検討していて、KPI は生徒数、進路結果、出欠数で、視野は 1 年～3 年です。多くの学校の教員免許を持っている先生はこの最上段に主眼を置いています。

そして 2 階です。管理職や学校の事務方になるとカテゴリーはマネジメントになります。アセットは教職員となります。トピックは給与、教員募集、教員養成、労務管理つまり働き方ですね。それからコンプライアンスです。検討主体・機関は法人です。KPI は P/L（Profit and Loss Statement 損益計算書）で黒字か赤字か。それから残業代はどうなっているか、労働時間がどうなっているか、給与体系をどうするか、福利厚生。視野は 1 年から 3 年です。

私は学校を経営してきて 3 年目にわかってきたんですが、次がすごく大事です。

ここは1階です。財務というカテゴリーがあって、そのアセットは校舎です。トピックは基本構想、設計、施工、資金調達、担保、返済計画。検討主体・機関は理事会がやります。KPIはB/S (Balance Sheet 貸借対照表)、資産、負債、担保資産、返済財源。視野は10年から30年。こういう表です。

多くの先生たちが一番見ている教務の部分は3階ですね、生徒と一緒にいます。学校の経営者や管理職になってくるとこの2階をどうしようか、となってきます。そして理事会とか理事者には財務の校舎の問題が出てきます。ちなみに校長も理事者になります。もしくは公立高校の場合は、教育委員会などもそこに入ってくると思います。

皆さん、校舎ってどのぐらいお金がかかるかご存知ですか。だいたい高校の場合は一つの学校で20億円から30億円ぐらいかかります。公立でも私立でもほぼほぼ同じです。私の感覚としては、もうこの20億とか30億をかけて校舎を直せる時代は来なくなっちゃったと思います。おそらく皆さんはけっこうおんぼろな校舎を使っているか、もしくは数年前に校舎を建て替えた学校もあると思いますが、学校の財務、B/S (バランスシート) から見ていくと、これから20億円をかけて校舎を建て替えていくとしたら、私立ではそのお金を返済しながら建て替えていくのは学校の、もしくは子どもたちの数に合わせていくと尺に合わなくなってしまうというのが現状だと思います。おそらくN高校のように通信制の学校にどんどん巻き取られていく、という怒られるかもしれませんが、そういうかたちになっていきます。つまり今の、あのコンクリートの校舎を使った学校教育というものは、財務的にはもう時代遅れの教育方針だということをよく理解しておいた方がいいと思います。間違いなくそういう学校は破綻していきます。

例えばグラウンドがありますね。その広さは学校の設置基準で決められているんですが、ほとんど何のバリューも生み出していませんね。体育の授業ではもちろん使いますが、あとは野球部とサッカー部しか使っていない。経営的にはROA (Return on Assets 総資産利益率)、資産がどれだけ回転しているのかという視点で見たときに。校舎はほぼ生徒が始終使っています。でもあれも週末や夏休みは校舎を誰も使っていなかったりするんです。特にグラウンドはほとんど使っていないわけです。こういうふうと考えていくと、本当に今のあのかたちを維持できる学校は、おそらくこれからは大学付属の学校や、宗教の付属の学校だけがしばらくは続いていく。でも大学の付属校もどこまで維持していくかは今後大きなテーマになります。子どもの数は減る時代に確実になっていくからです。

一方公立の学校も存続の問題は同様で、私立の学校が存在しているのになぜ「公」で学校を運営していかなくちゃいけないのか。大阪は政策的、政治的にちょっとそういう思考が強くなってきています。ここでは大阪のやり方の良し悪しは議論の外に置きますが、私が私立の学校を任せてもらえれば最底辺の学校だって元気な学校にできるし、そこそこの学校だって元気な学校にできた上で、ちゃんと先生たちのお給料をコントロールしながら、サステナブルに回していくことを何とかできる自信がありますが、公立の学校はまずそれが難しいですね。学校運営全般における費用で人件費の比率は、私立高校はおおよそ65%だと言われています。公立高校はどのくらいご存知ですか？ 大阪が調べたことがありますがおおよそ9割でした。つまりほとんどが先生たちの人件費です。例えば北海道の教育委員会の場合、ゆえに先生方のパソコンのWindowsを更新するお金がない、そんな話が常につきまとっています。つまり、これからは教育は大事なのに、教育にけるお金が無いという議論になっていくし、でも私から言わせれば非常に非効率な

形で学校の財務運営をやっているというのが今の学校なんじゃないかと思っています。

「私に任せてくれたら、もっとうまく回しつつ、先生のお給料も上げながら、よりよい教育ができる自信があります」という人たちがこれからもっと必要になってくると思います。

ゆえに学校の先生たちに、財務がどうあるべきなのかを理解してほしいです。一つの校舎の耐用年数はだいたい 30 年から 40 年ですので、つまり 20 代の先生がいるうちにもう 1 回校舎を建て直さなければならないという状況が必ず出てきます。今日お集りの先生はその担当ではないと思いますが、教育委員会はものすごく苦しんでいくと思います。なぜなら財源が無いからです。

私がすごく感じているのは、多分 10 年から 20 年ぐらいで今の学校の在り方というのは激変していけないと今の日本の教育はもたないと思っています。それは校舎の問題からもたなくなってくると思っていて、小学校と中学校は義務教育学校のようになって校舎が一つになっていくと思っています。それでも教室が余って、そこは地域の人たちの公民館のようにっていくんじやないか、余る教室をパン屋さんや花屋さんが使うこともあるかもしれない。つまり、ゆくゆく学校は、物理的に地域に開かざるを得ないと思っています。

学校の校舎はいい立地であって、そこは人が集まりやすい場所です。一方で先生方が感じられるように子どもたちだって、地域のいい人たちと触れ合っていけばものすごく伸びていくわけですよ。地域のお祭りや活動に触れて。今はすべての教育の方向性も地域と共に教育課程をつくっていくとなっていくので、次のステップではおそらく、校舎を学校の子どものためだけに使っていては建て直せなくなってくときに、一つの理由としては地域の公民館や地域のアセットとして、学ぼうと思う人全て、社会人、大学生、高校生、そういう全ての人が集まるところが学校なんだ、と建てつけていけると、そもそも 20 億円をかけて子どもたちだけのためだけ、というのは財政的に賄えないという時代がもう来ています。そういうとき、学校の先生は否が応でも子どもだけの対応だけではなくて、地域の人たちとも対応していく。そういうことを含めると冒頭で話したように FB で常にいろんな人とつながって行って、地域の人からも相談されたり、地域の人に「じゃあ、あのおばちゃんに会ってきたらどう？」と言えるような先生たちになって、そういう先生が学校のリーダーとなって、校長先生になってほしいと思っています。そんなふうにしたぶん学校の仕組みが変わっていくんだと私は思っています。

また、政治家になってそういうことを進めていきたいと思っています。もちろん私の考えが嫌だと思ってくれると思いますが、私はそうなることがよりよい教育になっていくと思って一所懸命にがんばっています。

いちおう 50 分程話しました、よろしかったでしょうか。皆川先生どうぞ。

—皆川 ありがとうございます。では一回ここで区切らせていただきます。

さて、質問を入れる時間や互いに考えを共有する時間をこれから〈グループセッション〉としてとっていきます。ではグループセッションにどうぞ行ってらっしゃい。

〈グループセッション〉スタート

—皆川 ここからはグループセッションに参加されてない方もいるので、少し（荒井）優さんにお話を伺いたと思います。

—荒井 こういう話でよかったのかな。自律する組織。

—皆川 大丈夫です。今日のテーマ、タイトルとしては、「**教員集団の自律とチームビルディング**」で、先生方がどのように自律していくか、そこを校長先生・理事長としての立場でこれまでどう見てきたかというお話だったと思います。

—荒井 いろいろ考えてみました。いいんです、本当の要所は、ちゃんと工藤先生がバチッと「今日来てよかったな」という話で決めてくださるから。

—皆川 荒井先生は教員中心の自律の話で、この後の小野澤先生は生徒の自律に関して話していただき、最後に工藤先生が全体をまるっと、という流れになっています。

—荒井 そうですね、工藤先生のメタ認知、まさにメタ認知力をどうやって上げるか、という点で実は **FB** ってとてもメタ認知力を上げるものだとは思っているんです。実際にいろんなことを私が書くときに、「あの人はこれをどう読むんだろう」ってものすごく考えます。その意味であらゆる角度から見られているというのを意識しながら、何を書くのかということを考えさせられるので、その練習としても割といいなと思います。

—皆川 そうですね。一方的に発信するというよりも、誰かが読んでくれている、誰かが聞いてくれていると、誰かを想定していて、コミュニケーションのような感覚で発信するという感覚ですね。そうすると外を意識しますね。自分とのズレや共感を感じられていくという。

—荒井 まさにそうですね。あ、こんな話をされていていいですか。工藤先生の先日の **FB** に、横浜創英が『『コロナ禍の夏休み明けの対応をこうします』という文章を校長名で発表しました』というのがあげられていたんですが、あの文章を読むと、結果として私と似ていることをされているなと思いました。工藤先生が書かれていた「コロナがこういう理由だからこういうふうで、こうします」という書きっぷりは、実は私も学校に来てびっくりしたんですが、多くの学校はそういうふうには書かないんですよ。それはハッキリ言うと、理由を明確に書かないんです。読んでいるといろんな疑問符がわいてきちゃうんです。「これってどうしてこうなってんの?」「ああいう場合どうしたらいいの?」と。学校から送られてくるプリントって、「日ごろから教育活動にご支援いただきありがとうございます。さて、」の以降の文章は一方通行で「こう決めたから来週は授業をしません」みたいな話になっている、という感じで、読んでみるとまさにメタ認知力が低い文章がよく出てくると思うんです。でも、「学校だって苦しいけれど悩みながらこういう判断をさせてもらった」、「でもこれだってもっとこういうふうを考えていけるケースもある」、といったこちらのいろんな思いを伝えようとする努力をしたのかどうか。それって努力して伝えようとしたら実は保護者にすごく伝わると思っています。工藤先生の文章にはそれがすごくにじみ出ていて、私も書くときは常にそこを意識します。それがメタ認知だと思います。

—皆川 工藤先生は早い段階で公開されていましたよね。私が前にいた私立高校の場合は、杉並区のエリアの校長先生たちが、災害などがあるとまず教頭先生と連絡を取り合うんです。どこが最初に判断するかを駆け引きしながら、これから休校にするとかの判断をするシーンをちょくちょく見ていました。なんで自分のところで決めないんだろう、どこかがやったからうちもやるという流れでした。あるある話で、あたりしますか?

—荒井 ありますね (笑)

—皆川 工藤先生に、誰か他の学校の先生が聞くんでしょかね、「どれを採用しますか、2 学期は」って。でも自分のところで決めて発信すればそれはそれで、いろんな意見が聞こえている

んな見方もできるはずなのに、ってところですね、そこは。

—荒井 本当にそうですね。

—皆川 今残っている方々もいるんですが、何か呼びかけたいことなどありますか。聞いてみたいことなども。

—荒井 セッション2で講演される小野澤先生とリアルにお会いするのを本当は楽しみにしていたんです。呼びかけてみます。小野澤先生がどんなふうに聞いてくださっていたのか（笑）。

—皆川 小野澤先生はミュートを外していただけますか。

—小野澤 どうもはじめまして。

—荒井 小野澤先生とお会いするのを楽しみにしていました。

—小野澤 私もお会いしたかったです。こんな状況なので次の機会が楽しみです。非常に共感するポイントが多くて、一番刺さった言葉と次に私の話につながる場所では「外に開く」という言葉がキーワードになりました。私も外に開いたことによっていろんな可能性が舞い込んできて、それまでとは違う動きができるようになりましたので、「外に開く」ということがズバリ、これをつなげていくことができるなという思いで、勇気とそれから自分も同じ方向を向いていたという安心感も得られました。ありがとうございました。

—荒井 やはり「開く」こと自体に先生たちはカルチャーというか、別にそこは学校は「開くな」と言い続けているはずはないが、何かもう開いちゃいけないものだと、何かこう、学んできちゃうんじゃないかと、それがすごくもったいないと思うんですね。

—小野澤 そうですね、学校ってどうしても閉じられて、組織もそうですし、教室もそうなので、次のプレゼンでも私は言いますが、ブラックボックスを開けないと光が入らないので、そこを開ける必要があると思っていて、それができる時代になってきたので、それをまずは現場からやりたいという思いがあります。それと、どうしても新しいことをやろうとすると、四面楚歌じゃないですけど風当りはかなり強くなって「こんなことやってちゃいけないのかな」って思うけど、外に開いて外とつながっていると勇気をもらえるというか、「あ、これはやっぱり正しいな」という確信も得られるので、風当たりが強い中にも負けない軸ができるというのが、私が外に開いてよかったと感じた力です。

—荒井 ホント、おっしゃる通りだと思います。開いてつながってよかった例ですが、特にオンラインで授業をするようになって、新陽高校でもけっこうたくさん出てきましたが、画面には生徒しかいないんですが、画面の横でお母さんが聞いていたりするケースがありますね（笑）。そうすると最初のころ、けっこうクレームがありましたね。「こんな授業やっているんですか」的な話とかね。それで、実は私もずっと気になっていたんですが、ある先生は生徒たちに対してずっと「お前ら」「お前たち」って言い方をするんですよ。私もそれを聞いていて、言ってしまうと、不快感、「お前たちとかお前らって普通使わないよ」って思っていた。けど、私もしょっちゅうその場面に遭遇するわけじゃないし、職員会議で「お前たちって言うのは止めましょう」という話でもないし、言葉遣いとして違っていることがおそらく身についてきてしまっているのだと思うんです。案の定、授業がオープンになったことで保護者から指摘されました。ここみたいにオープンで Zoom の会議をしてみたら、「なんでうちの子たちに、先生が『お前』『お前ら』って言っているんですか？」って。そういうふうに言われると私も説明しやすいわけですね。「こういうふうに保護者が言ってるけど、私もそう思っていたよ」って。まさにこれも「開いた」か

ら動いたんですね。先生もクセというかそんなものだと思っている程度で、悪い先生じゃないから直したと思っています。一応私は指摘する機会ができたと思っていますが、まさにこれもメタ認知かと思います。「開くこと」ってやはり大事だと思います。

—小野澤 ありがとうございます、せっかくの機会なのでもう一つ。気になったフレーズなんです、私立と公立の存続の話で、私立が学校運営をやっているのになぜ「公」でやらないといけないのか、という所です。東京には私立学校がいっぱいある中で、私は都立でやっていて、その私の肌感覚で感じているところですが、世の中の変化は1周遅れでそれは私立にやってくる、そして公立には2週遅れでやってくるというイメージで公立ってめちゃくちゃ遅いんですよ。外に開いて得た情報を自分の学校でやると、一見タイムマシーン戦略のように新しいことをやっているように見えますが、実はもう新しくないというか一般社会では古いけど公立ではまだ効くという程度で、そんな中で学校は生き残っているんです。それで、なぜ公立で教育をやらないといけないのかというところをもう少し教えていただけたらな、というものです。

—荒井 わかりました、それはすごく重要なテーマなので、このあと全体で話すときに話させてもらってもいいですか。でも一つは高校は、公立による学校の運営はたぶんどんどん減っていくと思っています。義務教育は別です。高校に関しては相当難しくなっていく時代になると思っています。そして僻地校に関しては、完全にN高校に巻き取られると思っています。良し悪しはわかりません。また、設置主体は別として、それを公立でやれる時代がくると、通信を中心として、もっと意味のある運営スタイル、N高校だけじゃないかもしれませんが、そういう時代になると思います。それは教育のDX (Digital Transformation) という意味で言うと、必然だろうと思っています。ですから、質問に答えると、現在5,000校の高校があって、そのうち2,000校が私立高ですが、私立は学校とはいえビジネスでもあるので、簡単には潰れないわけです。でも公立は教育委員会が判断して、まずはクラス数を減らしたりして縮小します。私の出身の神奈川県の高校もいつのまにか隣の県立高校と合併して消えています。そういうことを上からやることができますので、間違いなく県立高校は統廃合が進みます。そうなればなるほど私立が学校運営をやらざるを得なくなっていくと思います。

今後の20年間の子どもの数の減り方はすごく、2050年には人口は9,000万人ぐらいになっていると思うので、子どもの数も当然減っている時代なので、高校の数は今ほどいらぬ、ということになります。そして校舎がそもそも建て替えられないので、県立高校は校舎の問題で存続を諦めていくという気がします。これは財務っぽい話からです。

でもそこは暗い話ではなくて、現実的には私立高校も9割ぐらいは、税金で賄われているんです。特に消費税が10%になってから私立高校は世帯主の年収590万円以下は無料になっています。これだと約40万円まで支援を利用できるとなっています。東京や都市部以外は皆年収590万円以下でカバーされちゃうわけです。つまり私立高校で民間だと言っても、実質は公費9割で運営されているみたいな形です。だからどこからお金が来ているかという、ほぼ税金ですということです。こんな説明でもよかったですか。

—小野澤 その通りですね、東京都内でもそれは起きていますので、目の前で起きていることを感じます。

—荒井 私も公務員の家で育っているので、公務員に関しては基本ポジティブな捉え方ですが、一方で新陽高校は変われたけれど、公立の底辺高で、それを変えられないと思ってしまったら、

もう変えなくていいになってしまっている。ここをメンタリティとしてやれるかどうかはさすがこれから問われていくと思います。私が校長をやらせてもらえたとしたら、言っときますがもう大変なのでやりませんが、変えられる自信があるかな（笑）。公立高校はやったことがないからわかりませんが、仮に公立の設置主体を私立に切り替えてもらって、私立として運営するとしたら、そこそこの条件がそろっていたらたぶん経営できるだろうと思います。でも私立にしても絶対に経営できない場所があるのは事実なんです。例えば北海道の僻地にある学校は一学年 20 人程度の高校が 100 校ぐらいあります。財務的には生徒 10 人に対して先生 1 人の割合でないとそもそもまわりませんので、そのときに、全校生徒 60 人の学校には先生が 6 人しかおけなくなる、でももっと教科の先生が必要なので 1 校当たりでは採算が割れてしまいます。そのときに N 高校のような通信制の学校として設計ができていくなら、運営出来ます。これからそうならざるを得ないだろうと思います。

—小野澤 私も N 高校にはかなりの可能性と恐怖を感じています。おそらくここにいらっしゃる先生方もそうだと思います。自分の学校の生徒で進路変更を余儀なくされる生徒の行き先で、圧倒的に選ぶ先が N 高校です、それはもう 90% と言ってもいいかもしれない。公立学校だと、どうしても横並びで同じようなかたちでいくので、そこに合わない児童・生徒というのは、これは言葉を選んで言いますが、ギフテッドのような生徒は天才の卵ですが、それを全部手放してしまってそれを全部 N 高校が連れて行って天才として育て上げる。そして社会に出して活躍させる、そういう構図ができてるように私は思っていて、そうやってきたら学校という立場として、どっちが選ばれるのかなとなったら、自分の娘が小 4 なんですけど自分の娘で置き換えて考えると、本当に自分がやっている公立高校に入れたいのかと、常にそれを思いながら考えているんです。だから今の授業を変えないといけないといった思いでやっていますが、本当に N 高校というのは脅威です。

—荒井 私も福島でとても尊敬する教育者のお子さんが、小学校のときからがんばっているお子さんですが、自分で選んだのが N 中（N 中等部）だったんです。小学生のときから地域ではピカ一だったんですが、N 中に行ってとても楽しそうにやっています、もう高校生かもしれません。教育者の子どもにもそういう選択肢があります。今まで福島だったら、付属中、福高、東大という流れがひとつありましたが、もうそうではない流れが小学生ぐらいから選択する動きが出てきている。足元ではもうこの N 高校の勢いには追いついていないと思っています。それこそわれわれ自体が 5 周ぐらい遅れているかもしれない。それを自覚した上で、通学することの意味、今はコロナ禍で通学できないわけですが、通学することのよさはそもそも何なのか、ということをもっと真剣に考えていくということ、脅威を感じている人からやっていくこと必要性があると思います。

【質疑応答】

—皆川 そろそろ<グループセッション>から皆さんが帰ってきました、お帰りなさい。ではこれから質疑応答にうつります。

・なんでSNSの中でFBなのか。

—荒井 中高生たちは「FBはおじさんたちの難しいやつでしょ」といった感じで嫌だと言いますが、ときどきそういう中高生にも言っているのは、「友達同士なら Tik Tok でも Instagram でもいいんだけど、投資家を集めたいとか大学入試に有利にするために何とかをしたいとか、そういう大人との接点を持つなら、大人は FB を使っている率が高いから、だから FB で投稿をしていたら、例えば私が『いいね』や『シェアする』を押したら、会社社長が見ていたり、皆川さんが見ていたりするとつながりやすくなる。だからつながりを意識するなら戦略的に FB を使うのもいいんじゃないか」と中高生に言ったりします。もちろん親の許可を得てです。また、先生たちが使うとしたら、何を使ってもかまいません。

・自律する組織にするために、FB を使うことがまだよくわからない。もう少し詳しく教えて。

—荒井 先ほど申し上げられたらと思っていたんですが、逆に FB を使わないと自律する組織になれないわけじゃないです。また何を使うと自律する組織になれるかというのは言えないんです。少なくとも、「他者を意識することによって、自分を律することができてくるんじゃないか」と僕は思っています、とまずお答えさせてください。そして、FB の投稿というのは、「メタ認知力」を鍛えると思っています。私自身書くときに、「先日、私が注意したあの生徒はこの文章を読んでどう思うかな」とか「保護者が見ていたらどう感じるかな」とか「あの地域の何とかさんはどうかな」と、いろんな人を思い描きながらその人がどう読むかを考えます。投稿した後でも読み返して「この書き方だと誤解を招くかもしれない」と思ったら修正します。こういう意味でメタ認知力を上げていくと思っています。そしてメタ認知力を上げるには、ある程度の他者の目線を感じながらやっていくのが、自らを律する自律につながるものだと思います。それで FB をやってみたらどうですかとお薦めしています。

—皆川 自分の考えを他者に開いていく、ということですね。

・地域に開くことができない学校の原因は何でしょうか。

・マインドセット的部分は理解できましたが、制度、法律ではどうでしょうか。

—荒井 学習指導要領でも「地域に開かれた教育課程」とまさに言っていますよね。そこでいうと制度や法律は開くことを促しているわけですね。そうすると、学校に染みついているカルチャーのようなものが頑としてそれを変えさせないのだと思います。私は震災復興の仕事を通じて文部科学省の人たちと仲良くさせていただいて、辞められた前川喜平さん、寺脇研さんなど文科省のど真ん中でやってこられた方々や、今回の改訂された学習指導要領がまだ内部で揉まれていたときに、そんな話を聞きながら、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校の創立にも関わってきました。その間にすごく感じたのは、文部科学省が思っていることは私が感じていることと変わらないということです。でも文部科学省は結局それを文章で提示して、「地域に開いた教育過程をやってください」ということしか言えなくて、実践にはなかなか遠い。例えば高校に校長を送り込むようなスキームはありませんからやれないわけです。そしてまさに学校がめんめんと閉じてしまっているから、文部科学省から来た文章に対して「こんなことできない」「国はわ

かっていない」と撥ねつけてしまう何か組織のカルチャーのようなものが、学校が変われないものをつくってしまっているんじゃないか。それを、うまい説明ではないかもしれませんが、まさに工藤先生は「職員室の心理的安全性」と「メタ認知力」を高めることによって、変えられるようにする、できますよ、ということを著書で説明されています。私もやってきたことは全くその通りでした。うまい説明になっていないですが。

—皆川 次の質問も関係してくると思います。

・FB の活用で目指しているものは、自己開示するマインドを育てることなのか、対生徒に先生自身のことを知ってもらうことなのか、先生同士のつながり・広がりを目指してのことなのか、どういった目的があるのでしょうか。

—荒井 どれもいいんじゃないでしょうか。どれもあっていいと思います。一点言うと、学校の先生はわりと顔写真を出すことを厭う人がいます。背景にどういう気持ちがあるのかわかりませんが、FB の成り立ちは顔写真とプロフィールを載せるというものから始まっていますが、FB の顔の部分に顔写真でなくアイコンをつけるメンタリティは、学校の先生特有な気がします。なにか自己開示を「やっちゃいけないことなんだよな」とか思いながらやっているような気がします。もちろんそれがダメだと言っているわけじゃないです。そのあたりに、先生たちの少しかわいそうなところを感じます。FB の目的はどれも指していると思います、この質問者のおっしゃっていることはどれも含まれていると思います。これでいいですか。

—皆川 はい、ありがとうございます。FB や SNS を使って発信するというのは手段だと思うんですが、荒井先生は FB 以外で何か教員に促したことはありますか。

例えば「FB だとハードルが高いかもしれないから、こういうことをしたらどう？」ってことで。

—荒井 私からは無いんですが、先日新陽高校の若い先生から「優さんは Tik Tok をやっていないんですか？」って言われました。新陽高校では今年のオープンスクールから学校の広報に、生徒たちのアドバイスで Tik Tok も導入したら、断然 Tik Tok の反応が高くて先生たちがびっくりしていて「今や中学生・高校生は Tik Tok ですが、優さんは選挙に出るのにそんなのもやってなくてまずくないですか」って言われました、まだやっていませんが。

—皆川 学生がよく使っていますね。

—荒井 まさにまさに。

—皆川 そこに関係した質問です。

・外に開くことと危機管理の線引きが難しく感じっていますが、せめて教員間の情報共有は必要だと思います。この辺について組織として何に注意すべきでしょうか。

—荒井 私が学校に行って職員会議で感じた議論のスタイルというのが、まさにこういう話で、物事が決まらなくなるというものです。私が「こんなことをやりたい」と言ったら、「こんなことが起きちゃったらどうしましょう」「起きたらどうするんですか」という問いかけがある、こういうマインドセットがある。これが学校に特有のカルチャーだという感じがありました。先ほど話した「日本一を本気で挑戦する」を掲げた理由を一つ思い出しましたが、「やってみないとわからないんだから、やってダメだったら元に戻したらいいんじゃないですか」というもので、もし SNS を使ってトラブルが起きたら、もう学校としては SNS を使いません、といったかたちでもいいから、まずはトライアルしてはどうですか、というのをまずは学校のカルチャーにしたいとやってきました。新陽高校も私が着任したときの職員会議は、開くと 3~4 時間かかってい

ました。例えば教務部から「こういったことがこのようになります」と一つ出ると、いろんなところからワイワイと「こんなことが起きたらどうする」、「いや、想定していません」となって、「ではもう一回教務部で揉み直ししましょう」となる。こうして話が決まらないまま続いていくわけです。そこで「いったんまずはやってみたらいいんじゃないの」とそう思って、私は校長でしたから、「現場でやってみたいならやってみた上で、それでだめだったら私が謝りますから」と言ってきたと思っています。質問のように確かに線引きは難しいですし、最低限のルールは決めた方がいいと思います。そこに私がとやかく言うというよりも、まずはやってみた上で、例えば3か月やってその結果を皆さんでフィードバックしながら、「こうしたらどうかな」「これはさすがにダメかな」と議論してはどうでしょう。こんな感じでいかがでしょうか。

—皆川 先生たちの心理的安全性が確保されているかどうかによって、かなり違ってくる話ですね。「失敗を許す」というのが工藤先生の本にありましたね、チャットにも今流れてきました。

・失敗を許さない、それが教員のカルチャーのような気がします

まさにそうですね。ところで今の話しの中で「日本一を本気で目指す」という言葉がありましたが、これは優さんから提示したものなんですか。

—荒井 そうです、そうです。

—皆川 そこに対してボトムアップのようなものはあったんですか。

—荒井 失敗を恐れるカルチャーを脱したくて、「本気で挑戦する」とまず言いました。それから先生たちが自信を失っていたので、それを取り戻そうとしました。私が着任したときの話なんですが、若い男性の先生たちが合コンをしたときに、「どんなお仕事をされているんですか」「高校の先生です」「公立？私立？何高校？」って女性に言われると、皆途端に学校名が言えなくなっちゃいました、というのが当時の新陽高校でした。「新陽」と言ったらその場が凍りつくという、そんな学校だったんです。そんな中で1年目に「本気で挑戦しようよ」とビジョンをつくり、その後ある程度いろんなことをやってみようとなってきたときに、次はある程度高さを見せたかったんです。もう「とりあえずやってみる」だけでなく、われわれが目指す高さは「日本一」に引き上げていこうとなりました。私は日本一の企業で働いてきたというのがあったからもうちょっと頑張れるんじゃないか、と思っていた。「ここまででいい」のか、「さらにもう少しやってみる」のかは、そこは「とりあえずやってみよう」とは違うと思ったんですね。それで目指す高さが必要になった。「日本一」としか言っていない。そしたら生徒たちから言われました。「校長先生が言っている日本一って、二つありますよね」と。「ナンバー1 とオンリー1。それぞれがあると思います」と生徒から言われました。ぼくも「全くその通りだよ、ナンバー1 でもいいし、オンリー1 でも構わないよ。でも自分で何か日本一を目指せるといいよね」と生徒から手紙でもらったやりとりを全校集会で言いました。

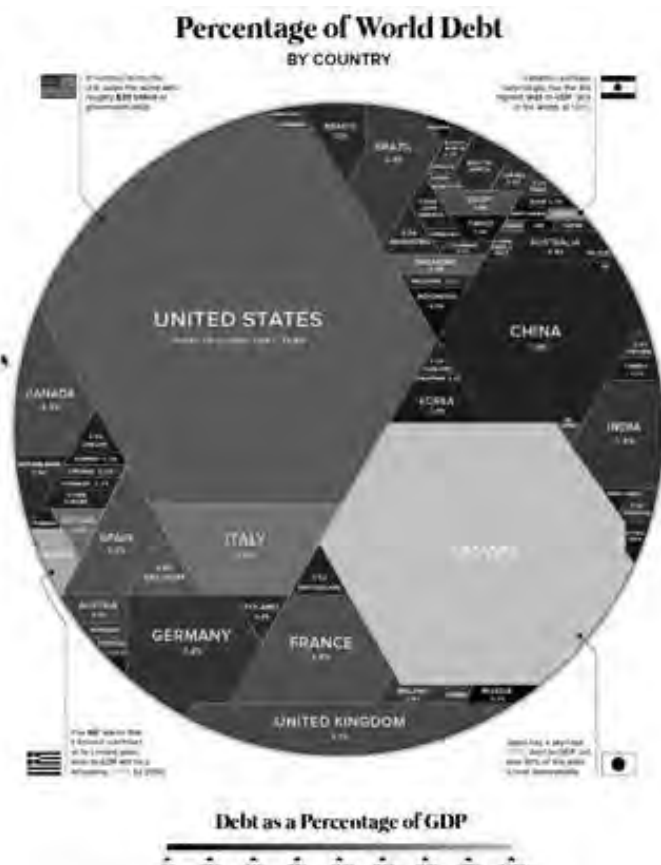
—皆川 日本一って何でもいいんですね、自分で決めるということですね。

—荒井 はいそうです。

—皆川 先ほどの皆さんのアウトブレイク中に小野澤先生から質問があって話されていた、公立の学校の存在の意味をもう一度皆さんにもお話いただけますか。

—荒井 はい、では画面の共有をします。見えますか、最初の話のときに飛ばしたページでもあるんですが、Percentage of World Debt、各国の国の借金です。(スライド8)

(スライド8)



この円全体が世界の負債だとしたら、UNITED STATES がこのぐらい、 JAPAN がこのぐらいと大きさで見えます。日米同盟で約半分の Debt（負債）を持っている感じです。図の下に Debt as a Percentage of GDP とあって、GDP における Debt（負債）の割合の色分けがあり右側の端の黄色は 200%です。日本はその黄色になっています。つまりこの図は日本とアメリカが負債が多い、そして日本は GDP 以上の負債を抱えているというのが現状だ、という図です。そして左の黄色いギリシャも同じだったんです、この国はご存知のように一度財政破綻しました。そのときに何をしたのかというと、公務員をリストラの対象にしました。公務員には、警察官、消防士、役場の人などがいます。でもよく考えたら消防士ってリストラできないですよね。民間委託ができるのかな、なかなかできなさそうですね。警察官はさすがに民間委託はできませんよね。そうやって考えていくと、「じゃあ、学校の先生ってどうなんでしょうか」って私は思っていて、これはあくまでも仮の話です。義務教育はさすがに民間委託は難しいとして、高校の数は日本には 5,000 校あって、そのうち 2,000 校が私立です。つまり 3,000 校が公立ですが、財政面から見ていくと、もし仮に財政が破綻したときに、公務員をリストラするとしたらどこから手をつけるかということを考えると、実は高校はよし悪しではなく手をつけやすい領域なんじゃないかと問題提起としてあげておきます。先ほど皆さんがブレイクアウトルームにいたときに話したかもしれませんが、財務状況で言うと私立高校の場合は収入の内の 65~70%が先生の人件費です、経営効率がいいところは、それを 60%台にするとほぼ黒字と言われます。つまり 30%ぐらいはどうしても学校運営を維持するのに必要なお金です。水道光熱費や校舎の修繕費とか、どうしても必要なものに 3割かかるんです。

なので、まず必要な 30%をよけて、次の 70%近い人件費をなるべく抑えて、抑さえた残りで

利益を出していき、これを 30 年間貯め続けて次の 30 年後の校舎をつくる頭金にする。ローンと同じだと思ってください。一方公立はどうなっているかというと、私が聞いたのは、大阪府、長野県、北海道でもそうでしたが、先生の人件費は公立の場合はほぼ 9 割です。もう少し話しますと、2 年前に新陽高校に北海道庁の監査委員の方が来ました。私立高校も北海道庁から国のお金、税金をもらっています。さっき話したように 9 割方が税金で運営されているので、当然行政機関に対して、ちゃんと財務状況の報告を出す必要があります。そうやって税金を使っているところに北海道は監査を入れる仕組みを持っています。約 10 年に一度ぐらいは監査が入ります。監査委員は 4 人いますが、新陽高校はちょっと面白い経営をしていたので一人が見に来られました。監査委員は教育委員会の教育員のような人だと思ってください。その方に私から質問したんですが、「公立の病院、県立とか市立とか町立病院の赤字の病院があると、市長選挙や町長選挙で赤字の病院をどうするのかと、しょっちゅう問題に上がりますね。でも、県立や道立の公立高校の一枚あたりが赤字か黒字かが議論されない理由は何ですか？」と聞いたんです。そしたら、「そうなんだよね、病院の場合はそもそも公会計基準、企業会計の仕組みがあるのでそれで指標を見ている。それで議会で議論もできる、こんな赤字では経営は続けられないじゃないかと」。そして「公立の学校に関しては企業会計の仕組みが入っていないので、一枚あたりが黒字か赤字かが表になることが無いんです」そう言われました。そうだろうなと思っていました。でも現実的に日本中の高校の 2/5、40%の学校は私立学校で、私立は企業会計で、財務の PL (Profit and Loss Statement 損益計算書)、も BS (Balance Sheet 貸借対照表) も企業と同じようになっていて、私立の 4 割の学校は赤字だと私は思っています。だからこれから潰れていかざるを得ないと思います。そして公立高校がこれまでのように黒字か赤字かわからないまま、ずっと運営が許されていくかということ、もう今地方財政は厳しくて、かつ老朽化した校舎を建て直すという話が乗っかるか、というのは難しいと思います。どうなるかわかりませんが、私は公立高校の意義はすごく感じています。公立が私立化すればいいとは思っていません。そして私立の学校の先生は、公立の学校の先生のレベルは高いと思っていますので、ぜひ頑張っていきたい、という思いもあって、ここには有権者はいないとわかっていて言いますが、だから選挙に出てちゃんと教育のことを考える政治をしたいと思っています。こんな説明でよかったでしょうか、伝わりましたか。

一皆川 ありがとうございます。さらに質問がありますが時間がきました、荒井先生の講演はここで終わりになります。どうもありがとうございました。

(終わり)

第14回キャリア教育推進フォーラム Session2

東京都立富士高等学校・附属中学校教諭

小野澤 信一 先生

都立高校の挑戦！コラボ授業で変わる授業

“ごっこ”が“リアル”になる瞬間

～格闘英語の実践から～

自己紹介

1 Fuji Global Smart

①Global 部門

②Smart 部門

感じている課題

1 加速している時代の変化に教室はついていけない

2 トランスフォームしないといけないもの

①STUDY・・・STUDY から LEARN へ

②STUDENT・・・STUDENT から LEARNER へ

③TEACHER・・・TEACHER から EDUCATOR へ

④受験英語・・・受験英語から格闘英語へ

解決のための実践

1 コラボ授業1 奈良市立一条高校（奈良県）

2 コラボ授業2 Neihu 高校（台湾）

【質疑応答】

コラボ授業で変わる授業

～格闘英語の実践から～

東京都立富士高等学校・附属中学校教諭

小野澤 信一

自己紹介

東京都立富士高等学校および附属中学校の英語科教員 小野澤と申します。今回はこのような機会を設けていただきありがとうございます。教育界のビッグネームのお二人の間に挟まれて、非常に恐縮しておりますが、全力でやりたいと思います。よろしくお願いいたします。

私の話では、学校の現場の最前線で生徒と向き合いながら、どのような変革を起こせるかを皆さんと共有したいと思います。そして自分なりの一歩、さらに二歩に近づけて前に進んでいけたらと考えております。皆様から色々なご意見をいただき、参考にしながらぜひ議論をしていきたいと思っておりますので、批判的な意見などもいただけるとうれしいです。「そうは思わない」という意見があってはじめて話が面白くなりますので。忌憚のないご意見をお待ちしております。

本日のフォーラムタイトルは「自律型学習者を育てるために学校教育ができること」。
そしてこれが私の結論です。

「コラボ授業で変わる授業、～格闘英語の実践から～」。

この中のキーワードは「コラボ授業」「格闘英語」、これがメインとなりますので、頭の片隅に置いていただきながら聞いてください。

私は都立高校で教員をやっております。教員になって 10 年目です。主な仕事は海外研修事業、海外大学進学などで、ICT 活用実践、起業家育成、こんなところが私の仕事になってきます。

大きく 3 つに分けてお話させていただきます。**1 自己紹介**、**2 感じている課題**、**3 解決のための実践**です。そして 2 が終わったところで、グループに分かれてブレインストーミングをして、いろんな意見を吸い上げたいと思います。

1 Fuji Global Smart

はじめに、私の学校の紹介が 5 分の YouTube 動画になっていますのでご覧ください。

(YouTube 動画)

私が勤める都立富士高等学校および附属中学校で中高一貫校です。東京都には約 10 校の公立の中高一貫校があり、その 1 つです。一般的な公立の学校ですが、この中高一貫校というところ

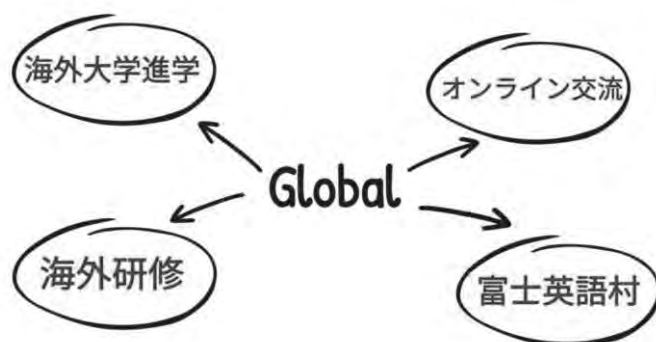
が他の都立高校と違うところになります。私は富士に赴任して今年で7年目になりますが、今まで感じてきたことや改革したいこと、変革を起こしたいことを皆さまでここで共有していきたいと考えています。今年度から Global Smart 開発部という分掌で主任になりましたが、何からやったらいいのかといった手探りの状態からスタートしております。Global Smart 開発部の構造は、Global 部門と Smart 部門からなります。

① Global 部門

まず、Global 部門では次のようなことをやっています。

「海外大学進学」「海外研修」「オンライン交流」「富士英語村」(スライド1)ということで、この学校でもだいたい海外事業でやっていることだと思いますが、それにさらに磨きをかけて、新しいことをやっていきたいと、様々な挑戦をしています。

(スライド1)



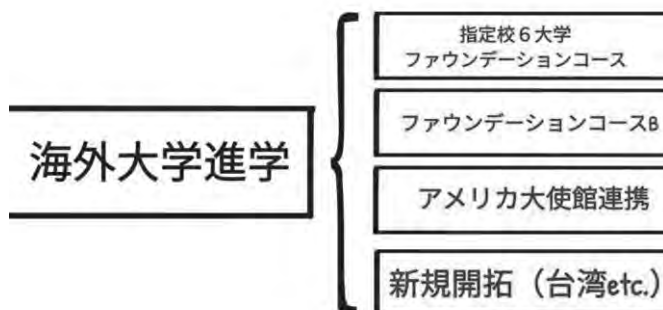
まず「海外大学進学」です(スライド2)。指定校6大学とは、英国立のバンガー大学をはじめ、6大学と指定校提携を締結し、生徒が指定校として海外大学に進学できることを昨年(2020年)度コロナ禍の中で実現し、今年9月に第1号の生徒が行く予定です。その他の海外プログラムも充実していきたいと考えております。

「海外研修」はこちらです(スライド3)。シリコンバレー、バンガー大学(イギリス)、オーストラリア、そして生徒自主企画として、これは将来的にですが、生徒は中1から探究の授業をしていますので、その中で自分のテーマに基づいた海外研修先をチームで決めて自主企画で行く、といった流れをつくりたいと考えています。

次は「オンライン交流」(スライド4)です。こちらは本日のメインになると思いますが、オンラインで授業をするのは今ではもう当たり前になり、この数年で一気に景色が変わりました。オンラインの利点を最大限活用して、この他にもどのようなことができるかを探っていきたいと考えています。スライドの上段の台湾のネイフ高校は後から紹介しますが、本来は修学旅行で訪ねる相手校です。今年は訪問が叶わなかったのが、代替案として、何を、ではどうやったのかという話をします。それ以外にはスライドのようなオンライン交流をしています。

「英語村」(スライド5)では校内に英語オンリーの部屋をつくり、ちょっとした留学体験ができる施設を整えております。

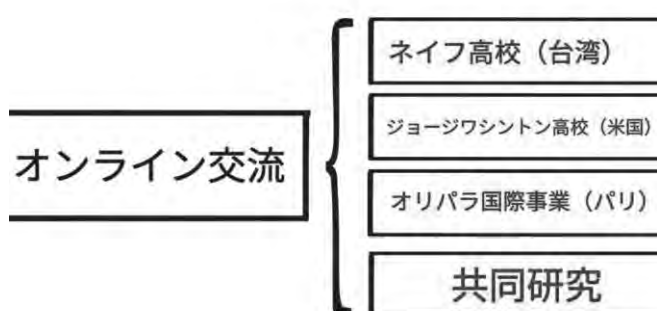
(スライド2)



(スライド3)



(スライド4)



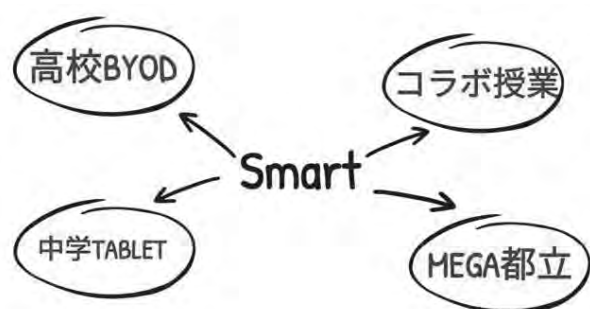
(スライド 5)



② Smart 部門

次は「Smart」部門です。「コラボ授業」「高校 BYOD (Bring Your Own Device)」「中学 TABLET」「MEGA 都立」があります (スライド 6)。この中の「コラボ授業」は、本日皆さまに伝えたいメインになります。今年から一気に学校のスタイルを変える挑戦をしています。

(スライド 6)



「高校 BYOD」(スライド 7) で、生徒たちは授業内でスマホを自由に使えます。スマホの文房具化です。そしてコロナ禍のオンライン授業により対面授業が叶わない中で、教員が動画をつくり、生徒はそれを家で見えてインプットのための学習をし、学校で対面授業をするときはディスカッション中心のアウトプット型といった反転学習を心掛けています。また一斉授業から相互授業への転換も目指しているところです。教員は 1 人で 40 人の生徒に話すということから、相互に教え合うようなものを目指しています。さらに相互評価は私がスタートさせたもので、まだ一部の先生方だけですが、自分の授業が終わった後に、生徒に匿名で評価をさせます。教員としては非常に嫌なことかもしれませんが、これを乗り越えないとリアルな生徒のフィードバックが返ってこないと考えております。

次に「中学 TABLET」です (スライド 8)。タブレットが貸与されて、タブレットの文房具化をはかり、そのタブレットを授業内で使う。そして中学でも自分が持っているスマホを授業内で使わせることを本年度から始めました。そして「教えられる→自分で学ぶ」、「教員による制限の制限」ということで、どうしてもわれわれは、スマホを生徒たちに握らせるとゲームをやっ

うと条件反射的に考えがちですが、そこを一步乗り越えて、その古い「制限」を制限して、生徒がどのように使うのが効果的かというのを探っています。

(スライド 7)



(スライド 8)



そしてメインの「コラボ授業」(スライド 9) です。校内での教科横断型授業。また校外では奈良県の奈良市立一条高校と英語のコラボ授業をやりました。この後詳しく説明いたします。

(スライド 9)



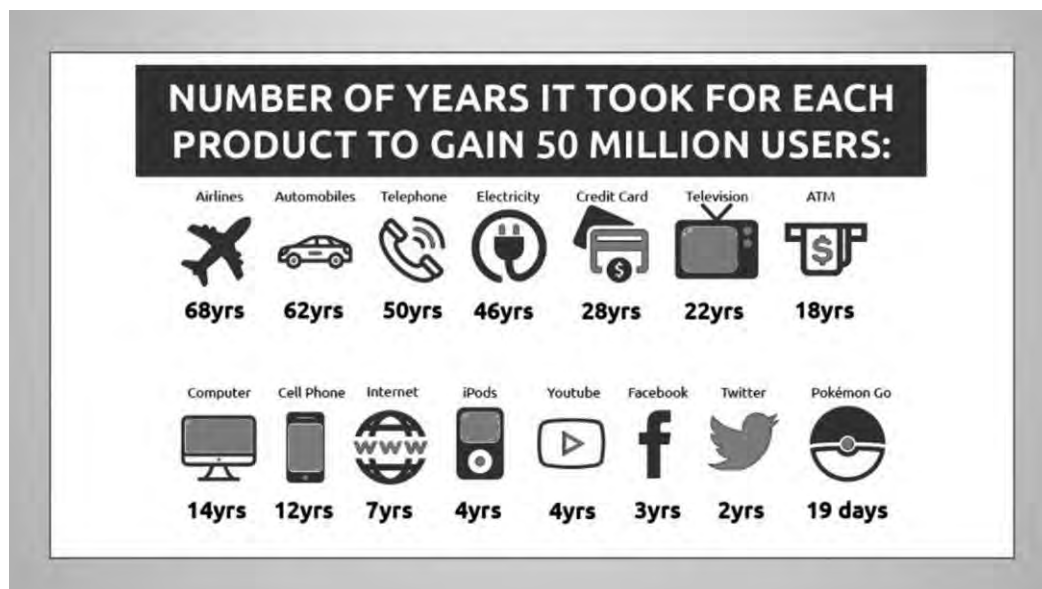
そして「MEGA 都立構想」という壮大な挑戦をぶち上げています(スライド 10)。「GIGA スクール」でタブレットが中学生に配られました。高校生もおそらく BYOD から始まり、多くの学校



できるはずだったところ、急遽自宅からの配信スタイルに変わり、当たり前のようにそういったことが日々起こっていて、明日何が起こるかがわからない状況です。それが日常になっています。

スライド 12 をご覧ください。

(スライド 12)



タイトルにあるように「世の中で 5,000 万人のユーザーを獲得するためにかった年数」です。左上の飛行機は 68 年をかけて世界で 5,000 万人のユーザーを獲得。続いて車、電話、電気ときて、注目していただきたいのは右下の「ポケモン Go」です。これはもう 2 年ほど前のデータになりますが、たった 19 日でそれを獲得しました。言いたいのはこのスピード感です。物凄いスピードでいろいろなことが起こっている、目まぐるしいほど物事は変わっていく。

そして次のスライド 13 をご覧ください。これは 1900 年のニューヨーク 5 番街で、円の中にあるのは T 型フォードです。その他は馬車です。その馬車がスライド 14 の 1913 年になると一掃され路上は全て T 型フォードになります。時代の変化を表している写真です。

(スライド 13)



(スライド 14)



次のスライド 15 は 2005 年のローマ法王の就任式、スライド 16 は 2013 年の就任式。たった 8 年でこの変化が起きました。さらに今はローマ法王のアプリ「Click to Pray (祈るためにクリックを)」があり、オンラインで法王と一緒にライブで祈りを捧げることができます。このような世の中に今はなっているということです。

(スライド 15)



(スライド 16)



さらにわかりやすいのは、スマホ登場前までの電車内の風景はこうでしたが（スライド 17）、今はこうですね（スライド 18）。紙の新聞を読んでいる人は探してもなかなかいません。毎日の電車の中でそのように感じています。

（スライド 17）



（スライド 18）



次は 100 年前の日本の教室です（スライド 19）。そしてすぐ後に本校のホームページに載っている切り抜き一枚で、中学生です（スライド 20）。

（スライド 19）



(スライド 20)



100 年前と今の変化を見ていただくと、手に持っているものは紙からタブレットになっています。その変化はありましたが、フォーメーションは全く変わっていません。このフォーメーションで 100 年間やってきて、これが普遍的なものなのかどうか、私は一つ大きな疑問を持っています。現在、教室ではプレゼンをしたり、協働学習をしたりしていますが、100 年かけてもこの変化しかなかったのか、というのが正直なところです。紙からタブレットの機械に変化しましたが、「機会」の提供はできていません。自分自身への自戒の念を込めて言っていますが、「機械の提供はできましたが、機会の提供が必要です」。機会=チャンスをどのように使うか。ここに変革する意味、必要性を非常に感じています。

そして次(スライド 21)は、私が理想とする教室はこのようなものではないかと思います。私は勝手に「教室 2.0」と名づけていますが、そこにはリサーチしている生徒たちがいて、ディスカッションしている生徒たちがいる、タブレットで学ぶ生徒がいて、オンラインで授業を受けたり、一人で何かをやっている生徒がいたり、一つの教室でも別々のこと、個別最適化とも言われていますが、このようなものが未来の教室になっていくんじゃないか、そしてこのようになるべきだと信じています。

(スライド 21)



アメリカに High Tech High という有名な公立校があります。そこでの PBL 学習でもこのようなことは起こっていると思いますが、いよいよ日本の公立でもこのようなことが起こっていかないと厳しいと感じています。先ほどの荒井先生の話もそうですが、いろんな種類の学校が出てきていますので、公立学校が均一に、100 年前の学習スタイルから、スライド 20 への変化だけでは、もうついていけないと言うか、時代に完全に置いていかれると感じています。

2 トランスフォームしないといけないもの

そこで私が感じる変化、トランスフォーメーション (transformation) と今日は呼びますが、トランスフォームしないといけないものをキーワードとして 4 つ挙げます。

① STUDY ・ ・ ・ STUDY から LEARN へ

まずは「STUDY」という概念を「LEARN」にトランスフォームしないといけないと思っています。皆さんに質問です。皆さんの中で STUDY と LEARN の違いが何かありましたら教えてください。

- ・受け身と主体性
- ・習うと学ぶ
- ・主体的な研究、学習者としての学び
- ・「教えられる」から「自分で学ぶ」への変化
- ・学ぶものがあらかじめある、自分で学ぶものを決める

ほぼ同じ考えを持っている方もいますね。嬉しいです。これを生徒によく聞くんです。

「Do we STUDY English?」 と 「Do we LEARN English?」

STUDY と LEARN の違いを生徒にも問いかけていていろんな意見を聞きます。多いのはやはり受動的か能動的かというところで、捉え方はいろいろあると思いますが、私自身も LEARN を能動的に、目的があって、それを達成するために、自分から学びに行くという能動的なものを感じています。アクティブラーニングと言われたりしていますが、それは LEARN に近いと思っています。

② STUDENT ・ ・ ・ STUDENT から LEARNER へ

次は「STUDENT」の概念もトランスフォームすべきで「LEARNER」だと思います。これはどういうことかというところ、パッと表すとこれ (スライド 22) かな、と思っています。このイラストは自動運転を表しています。アメリカのイーロン・マスクのテスラモーターズをはじめ、電気自動車が主流となって、当たり前のようにサンフランシスコのシリコンバレーでは多くの自動運転が実証実験されており、日本でも近い未来、自動運転になっていくのかなと感じています。そして生徒も STUDENT から LEARNER になるときは、「ただ学ぶのではなく、“学ぶこと”を学ぶ」ということで自動運転になる必要があるのではないかと思います。どうしてもありがちな

のは、もちろん自分も今もやっておりますが、「自分だけが答えを知っていて、生徒に答えの出し方を教えて、最後に生徒に答えを伝える」そういうものはちょっとキツイ言い方をすると、今後いらなくなるのではないかと私は思っています。というのは、スマホ検索一発で答えは出てきますし、そこへのアプローチは一つではないと思いますし、そこで自分がどのように取り組むかという、学ぶのではなく「学ぶこと自体」を、教えていけないと感じております。

(スライド 22)



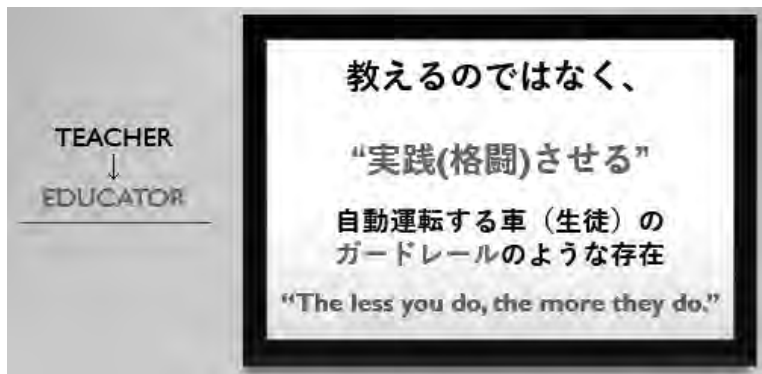
③ TEACHER . . . TEACHER から EDUCATOR へ

次は「TEACHER」です。私も、本日聞いてくださっている先生方も、われわれ TEACHER も絶対に変わらないといけません。「TEACHER から EDUCATOR」に変わる必要を強く感じています。教室 2.0 (スライド 21) もそうですが、あれが私が考える EDUCATOR の立ち振る舞い、やるべきことだと感じています。

EDUCATOR の関連語 EDUCATION の語源は「EDUCERE」というラテン語です。英語では EDUCE という言葉になっていますが、ラテン語が語源です。意味は「潜在している物・能力などを引き出す」、それが EDUCATION。つまりそれをする人が EDUCATOR。「TEACHER の教える」という役割から、生徒の力を引き出す役割がこれからの教員という職業に求められてきているのかなと私は思っています。

そんな中で「教えるのではなく、実践させる」ということで、教室の中で座って受動的に知識を詰め込む、よく言われがちですが、インプットというよりも試行錯誤しながら生徒に実践させる、私は実践を格闘と言っていますが、生徒に格闘させる。つまり自動運転する車のガードレールのような存在、それが教員であるべきだと私は思っています (スライド 24)。生徒が自動運転している中で、われわれ教員はガードレールのような存在で、脱線するとか、事故が起こりそうなときに軌道修正をする。そのような能力が求められていると思います。これは私が好きなフレーズですが、“The less you do, the more they do.” you を教員に置き換え、they を生徒に置き換えると、「教員がやることが少なければ少ないほど、生徒がやるが増える」ということです。このような機会の提供、つまりはガジェットだけでなくチャンスと一緒に与える。そのチャンスをつくるのが教員なのかなと私は感じています。

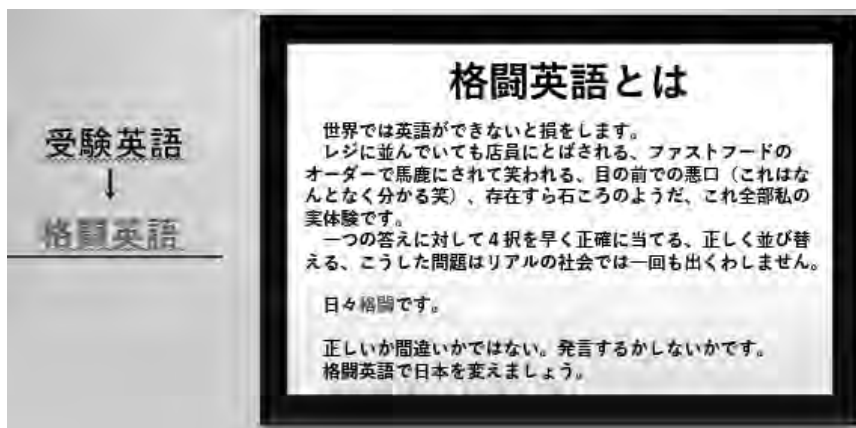
(スライド 24)



④ 受験英語・・・受験英語から格闘英語へ

最後は「格闘英語」です。受験英語から格闘英語へのシフト、このトランスフォームを全力でやっています。そもそも格闘英語とは何かというと、実は私が定義した言葉です(スライド 25)。

(スライド 25)



スライド 25 のように、でかいことをぶち上げていますが、これは私の実体験からです。コアな部分にあるのは、私と関わった生徒、もしくは私と一緒に英語を学んだ生徒は、英語が理由で不利益を被らない(バカにされない)日本人に育てたいという思いです。そこをブレずにいろんな改革を起こしたいと考えています。10年以上英語を学んでもなかなか世界では通用する英語になっていかない。これはずっと言われていることですが「変わってこなかった」というのが原因です。それを一都立高校の教員が変えようと思ってもなかなか変わらないとは自覚しております。そんな中で何かできることはないかと模索しながら、今はその光が少し見えてきたところです。

さて、この「格闘英語」に関連する例ですが、一つは3日前の『大谷翔平選手に差別的発言でTV局解説者炎上』というニュース、知っている方も多いと思います。もうひとつは、『英語が話せない大谷翔平は、野球の顔とは言えない』発言のアメリカジャーナリストが謝罪』。この二つのニュースが意味することは、残念ながら、ベースボール界の超スーパースター、史上最高のプレーヤーでも英語ができないということでこのようなことが平気で起こる、ということです。これ

をなんとか打破したい、変えたいという思いが心の底にあって、さまざまなことを試行錯誤しながらやっています。

「受験英語から格闘英語」を端的に表すとスライド 26 になります。偏差値教育はイラストの Think inside the box です。

(スライド 26)



その意味は模試を受けて、偏差値がちょっと上がったことに一喜一憂するというだけで、このままでは頭にかぶった箱、教室という箱から出られない。そのように私は思っています。ではこれをどうするのか。Think outside the box にする。このマインドを生徒、教員、学校関係者および日本の教育をになう政治家の皆さんに期待する、変わってほしいと願っています(スライド 27)。

(スライド 27)



「Think Outside the box」ですが、その意図は「既成概念、〈既存の枠組み〉にとらわれずに物事を考える、これまでとは全く違った観点で考える」ことです。

私は自分がやっている授業の中で、本当に草の根の一步ですが、こういったことをやっている途中です。夢は大きいのですがぜひ皆さんと協力して、英語ができずにバカにされる日本人という状況を撤廃したいと本気で思っています。そして格闘英語でこれまでの英語教育をディスラプトのきっかけにできないかと本気で考えております。

ここまでで私の**感じている課題**は終了です。そして次は**解決のための実践**になりますが、その前に、私が感じている課題について、いったんグループに分かれて少し皆さんに議論・お話しただきたいと思います。特にスライド 21 の「教室 2.0」についてこういったものが「本当に日本の教育に適応されていくのか」とか、「そもそも必要なのか」とか、私が表したトランスフォームですが、「機械から機会」やトランスフォーム①～④が、今日本でやっていく必要があるのかどうかなども含めて、皆さんの率直な意見を聞きたいと思います。

トランスフォーム

- ①STUDY・・・STUDY から LEARN へ
- ②STUDENT・・・STUDENT から LEARNER へ
- ③TEACHER・・・TEACHER から EDUCATOR へ
- ④受験英語・・・受験英語から格闘英語へ

<グループセッション>スタート

一皆川 ではこれからグループに分かれてのセッションになりますので、ブレイクアウトルームに移っていききたいと思います。

小野澤先生から問題提起がございました「教室 2.0」について、またトランスフォーム①～④について皆さんはどのように考えるかを意見交換していただき、なお質問を slido に入れてください。そして最初に小野澤先生からありましたように批判的意見もぜひ挙げてください。さっそく slido に意見が入ってきました。

- ・英語ができないことが問題だとは思いません。

こういった形でどんどんご意見や質問を入れていただけると嬉しいです。ではよろしく願いいたします。

一皆川 ここまでお話しされていかがでしょうか。

一小野澤 一方的にしゃべった観があります。学びの協働と言っていながら、これこそ一方通行だったと思っています。

一皆川 STUDY、LEARN については皆さんチャットにも入れてくださっていますね。反応としてはどうでしょう。

一小野澤 皆さんも同じ方向を向いていると感じました。

一皆川 さっそくまたチャットにきましたね。

- ・さまざまな生徒がいる現在、教室 2.0 は共感できる。
- ・教務室にも 2.0 を。

という意見が上がっていますね。教員の話ですね、これは。

一小野澤 教室を一步出るとそれは社会に出る、という意味ですが、社会人は教員も含めて皆が

同じことをやっているという仕事というものはないので、必然的に LEARN になっている。むりやりそうせざるを得ないです。ずっと STUDY でやってきたのをいきなり LEARN でやるということ強いられて「どうしたらいいかわからないんですけど」という問題もあるのかなと思います。教務室 2.0 って面白いですね、必然的にもうなっているんじゃないですかね。それぞれのことをやって、わからなかったらファシリテーターや分掌主任や上司に聞いたりして、自分の仕事を最終的には自分で責任を持ってやるということで。これが中学、もしくは高校で、高社接続で、社会とつないで課題解決をしていくアプローチができればいいなと思います。やっているとかできるという話ではなくて、今は完全に理想論で語っていて、かなりのビッグマウスですね。

一皆川 小野澤先生の同僚は先生の発信にどのように反応していますか？

一小野澤 正直に申しますと、最初は完全に放っておかれました。「はいはい、またあいつがなんかやってますね」って感じです。その中で一人二人と興味を示してくれるありがたい方がちょっとずつ現れて一緒にやったりしていますが、「いいですね」とか「皆でやりましょう」とかには間違いなくなっています。ただしそれは、新しいことをやっていることに対するリトマス試験紙の反応だと思っていますので、「まっいいか、進んでいこう」と思っています。これからは一人でも多く賛同者を増やしていったって、荒井先生のように「外に開く」方式で、今日は教育界のフロントランナーの皆さんとつながれるので、次の章でこれを一気に宣伝をしてつながりたいという下心がありますね。(笑)

一皆川 チャットには、観点別評価との関係ということで意見が入っています。今公立では観点別評価が入るということで、公立の先生方は用意されているところでしょうか。

一小野澤 これを本気でやるとなると、本当に大変です。私は中高一貫校の中学でやっていたので、それをある程度高校にトレースすればいいかという感じがあるのですが、いきなりこれが高校に降りてくると、「何これ？」だと思います。観点別評価をするときは STUDY だけじゃ測れない、LEARN の過程で、どのようなアプローチでたどり着いたのか、という過程を見ていかなきゃわからない。それをアセスメントする何かの方法が必要で、例えば単語の小テストだけじゃ、そこは拾いきれない、評価しきれないようになっている。そこで例えばテクノロジーを使って、動画による生徒のプレゼン発表や、リテリングの動画を生徒に自分で撮らせて、それを吸い上げて評価する、などを実験的にやっていますが、そういったテクノロジーで効率化していかないと一人ひとりでは無理です。そのような方法は必要かと思っています。第 3 部でそれも紹介したいと思います。

一皆川 観点別評価は、そもそもは先生方の授業改善につなげたいというのが大本ですからね。STUDY した成果が悪いからおまえはダメだという話ではないですからね。LEARN がどれだけでできていて、それを生徒がどう実感して、逆にできていなければ先生はどうやって授業をしなければいいのかに、本来的には目が向かなくちゃならないとこですからね。でもそのマインドセットがなかなか転換できないというのがあるんじゃないでしょうか。まさに小野澤先生が問題提起されたことだと思います。このマインドをどう先生方が転換させていくか、というところですが、見通しとしてはどうでしょう。こうやってマインドを刺激していけばいいとか、教員レベル、生徒・保護者レベルで。当然生徒・保護者レベルでは STUDY の成果は、受験につなげることをマ

インドにしている人はまだまだ多いと思いますが、そのあたりはどうでしょうか。

—小野澤 鋭くて非常にいい質問だと思います、ありがとうございます。それへの答えとしては、両方を平行してやっていく、というのが私の答えです。つまりテストで測る部分も必要なもので、それを撤廃するというではありません。これまで通りにやるところはやる。そして新たに付け加えなきゃいけないところがあって、そこも平行してやっていく。それらが対立構造になるのではなくて、共存していく構造になっていくことで、向いている方向が一緒だということがわかってもらえるのかな、と思います。

観点別評価は高校に降りてきて、外圧的にやらざる得ない状況になっています。それで「このようにできますよ」と提示するのが私の分掌の仕事だと思っていますので、「テクノロジーを使って、このようにやったらパフォーマンス評価ができますよ」等々をやっています。まず共存で、1か0ではなく、足し算でやっていって、いい落としどころを見つけないと思っています。でも、なかなか現場では難しいですね。それを許可してもらっているという環境があります。管理職の力が強いというのもあります。「やってよし！」と長崎の出島のような感じでやらせてもらっています。

—皆川 管理職の先生方にはどのようにアプローチしているんですか？

—小野澤 先ほどの荒井先生とまさに同じで、ある程度、外の方とつながって、実績とはまだ言えない状態でもいいから「こういうことをやれます、こういうことをやっている」、とやり始めてしまっ、ある程度始めて走り出したところでプレゼンをして、「これができますよ」と。たぶん管理職が目指したいところと私が目指したいところの落としどころを見せることによって、では「やっていいですね」と感じにする、卑怯なやり方ですね。(笑)

—皆川 どのぐらいの割合で話は通りますか？ どのぐらいの割合で通らないですか？

—小野澤 皆さんの共感を得られないと思いますが、一教員の立場から一步步皆さんに呼び掛けて、審議にかけて、職員会議で決定する、というアプローチ方法は何度もやって失敗しているんです。これではもう時間がもったいない。めまぐるしいスピードで変化が進んでいる状況なので、こんなことやっている時間がないという半ばあきらめでして、先ほどの卑怯なやり方、トップダウンで一気に、という方法に辿り着きました。

—皆川 そこは非常に共感できます。私も高校教員時代にとりあえず校長室に行って2時間ぐらい話すという方法で管理職を納得させてトップダウンでお願いします、とやっていました。

—小野澤 これは本望じゃないけど(笑)。

—皆川 そうですね。皆でわかって、皆でやりたいですね、本来的には。そうならないのがもどかしいですね。いざやってみると、意外とやってみたい方っていたりしませんか？

—小野澤 一人ひとり個別で聞いていくと「共感できるところ、ありますね」となる場所もありますね。

—皆川 そこをうまく引き出したいですね。先生方から引き出したいところがあるけど、引き出しきれないというか。

—小野澤 そうですね。地引網の一網打尽は無理なので、ちょっとずつ、ちょっとずつですね。

—皆川 またチャットにきましたね。

・外とつながるためには？

―小野澤 今日先生方はかなり意識が高いと思うんです、無料のセミナーがある中で有料でも参加するというのは。私も同じようにいろいろな場にかなり参加してきました。コロナ禍の前は企業向けセミナーにも参加して、中には Google に生徒たちが訪問できるように話をつけて、本社が森ビルにあった頃に連れて行きました。生徒をだしに使うというか「生徒が行きたがっています」と言うを入れてくれます。そういったところとつながっていき、次は学校に招いてプレゼンしてもらいました。そういう複数の外部の連合をつくって、「今新しい、こういうことをやっています、そして外部とはここまで進んでいます」と言う、だいたい学内は通ります。

―皆川 せっかくなので英語教員同士で米元さん、どうぞ。

―米元 感想です。英語の授業についてですが、他にも英語を担当されている先生がいると思います。まずは同じ教科の先生の巻き込みだと思うんですが、その工夫はどういうことを意識されていますか？

―小野澤 答えづらいところがあるのですが(笑)、せっかくなので包み隠さずに話します。去年、今年と英語科の教科主任をやらせてもらっていて、本当はまとめないといけない立場ですが、正直なところ全員を巻き込もうとは思っていません。いろんな先生のやり方をディスるわけではなく「こういうやり方もありますよ」とちょっとずつ示し理解してくれる先生も少しずつ増えてきて、邪魔はされないという構図はできました。次は回数を重ねることで、「こんなことができましたよ」、「こうすればできますよ」という仮説の検証ができれば、次はいろんな方にやってもらえるのかな、というフェーズです。だから「そっちはダメです、こっちがいいです」とは絶対に言わないし、お互いに得意を活かしたところをやっていきましょうというアプローチです。

―米元 いきなり巻き込んでというよりは、小野澤先生が実践されることで、生徒が変わっていったらそれはどの先生がみても、「それってなかなかいいことがありそうだな」と伝わるというのが、生徒の変化が実証だというのが、先生の実践のイメージとして大きいところでなんですね。

―小野澤 きれいごとに聞こえるかもしれませんが、生徒の意見は必ず吸い上げるようにしています。コラが授業が終わったときに、生徒はどう感じたのかを聞きます。なかには「もうこういう授業はやめたい」とか「しんどい」とかの意見も出てきます。そういうのもちゃんと見て、「こういう意見もあります」と、ちゃんと出したうえで全体として方向はおそらく間違えてはいないのでまだ進めます、という感じですね。「90 パーセントの生徒がいいと言っています」なんていうデータも出てないし、模索中です。試行錯誤しながら苦しんでいるという私の姿を生徒に見せながら、生徒も私と一緒に苦しむという過程を味わう、そういうことです。

―米元 生徒と一緒に授業をつくるという視点はすごく大事だと思います。生徒にも理解してもらう必要もあるし、先生方にそういうスタンスで生徒たちと一緒に授業をつくっていきましょうよと伝えていることも価値があると思いました。ありがとうございます。

―皆川 ということで、そろそろ<グループセッション>が終わります。この後また小野澤先生に講演を再開していただきます。参加者が続々と戻ってきました、再開をお願いします。

<グループセッション>終了

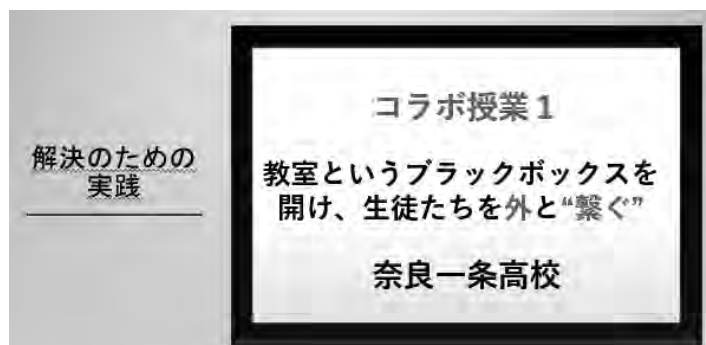
解決のための実践

1 コラボ授業1 奈良市立一条高校（奈良県）

ここからの第3部が本日のメインになります。忌憚のない意見をお待ちしています、よろしくお願いします。解決のための実践です。今私がやっていることを皆さんと共有したいと思います。それはズバリ、コラボ授業です。教室というブラックボックスを開けて、生徒たちを外とつなぐ。どうしても教室は閉じられた空間で、正直それって触れてはいけないアンタッチャブル感が出ています。これまで私自身も、そういうものなのかな、と思っていたのですが、「待てよ、なんでここだけ開かないのかな」と思い、そのブラックボックスをこじ開ける試みをやってみました。これに関しては批判もあると思いますが、今はとりあえずやってみて、その結果を検証しているところです。そしてさらにその先のタブーに切り込む、ということもやろうとしています。

奈良市立一条高校（奈良県）と第1回目のコラボ授業をやりました（スライド28）。こちらは元校長先生が藤原和博先生（教育改革実践家）で、つながりもあって実現しました。実践内容を知るには動画を見ていただくのが早いので用意しました。どうぞご覧ください。これが全て物語っていると思います。

（スライド28）



（スライド29）



(動画) 下記 URL・QR コードから動画をご覧ください。

<https://youtu.be/j06XXxIsWzA>



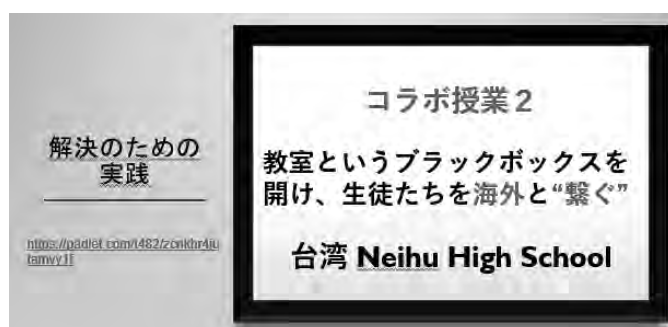
はい、ありがとうございました。ご覧いただいたのが一条高校とコラボしたときのまとめ動画です。動画の最後に出ましたが株式会社 NETMAN の C ラーニングというツールを使っています。これは LMS です。今まで本校では Classi というツールを使っていましたが、一条高校とコラボ授業をするにあたって、一条高校が導入しているツールを試験的に使ったところ、使い勝手が非常によく、しかもいろんなコンテンツもあり、これまで使ったものの中でも段違いに安いということで、今年度より本校で実証実験として導入しています。

動画の中で生徒が語っていた「授業以外のところでも学ぶ場が増えた」とか「めちゃくちゃ楽しかったの」と、ありました。これに限るのかなと思います。もちろんこれは参加した生徒全員ではありませんが、一部の生徒でもこう感じた生徒がいたのは、学びの自動運転がここでは起こっているのかなと思い、ここに可能性を感じて、このコラボ授業に賭けていろいろ実験しているという状況です。

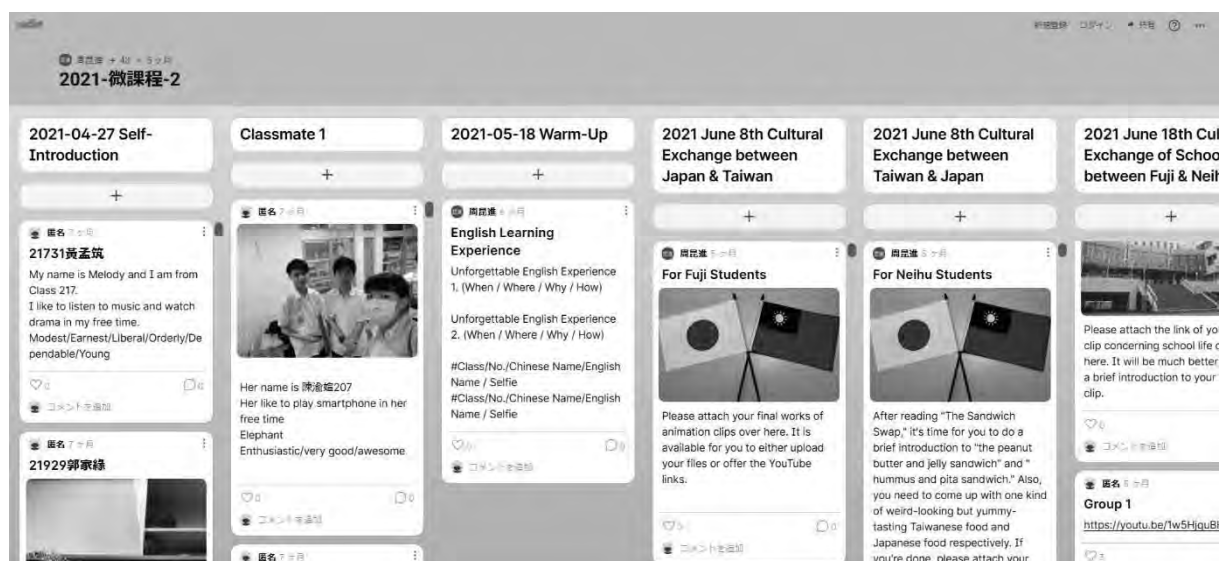
2 コラボ授業 2 Neihu 高校 (台湾)

次はコラボ授業 2 です。こちらは「教室というブラックボックスを開けて、生徒たちを海外とつなぐ」目的で、台湾の公立の高校の Neihu (ネイフ) 高校とコラボ授業をしました (スライド 30)。ここは修学旅行で行く予定だったのが行けなくなってしまった高校です。そこでコラボ授業でつながっているいろんなことができました。この取り組みを少し紹介します。

(スライド 30)

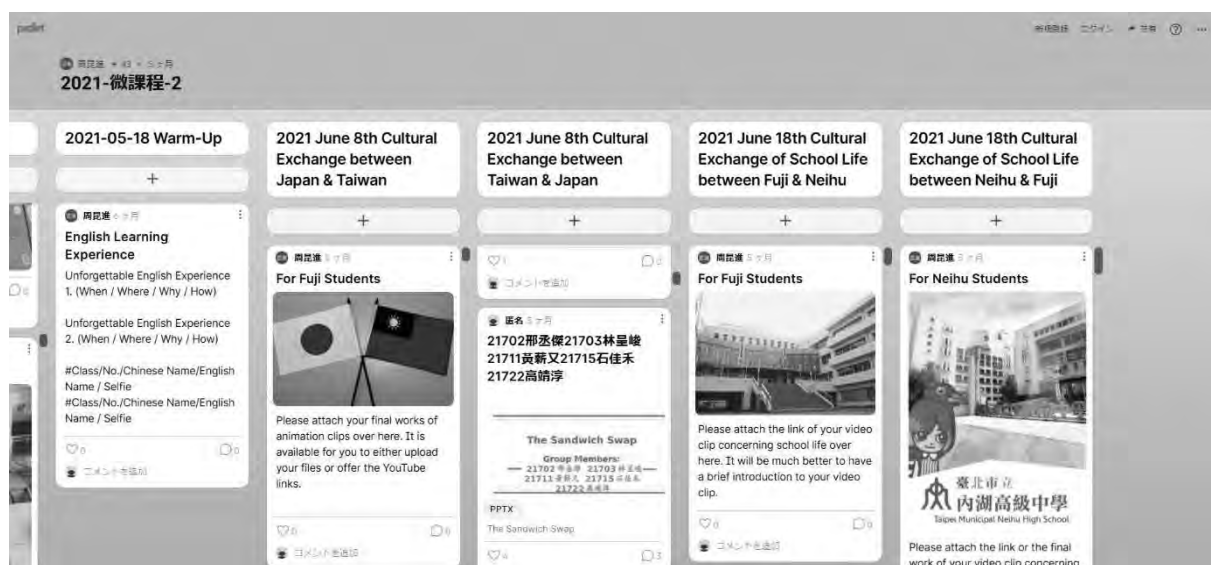


ここでは Padlet というツールを使って台湾の Neihu 高校と交流をしました。一番左側は画像つきで自己紹介をどんどん書ける自由なスペースがあり、別のスペースでは食文化の違いというカルチャーディファレンスについて、同じ絵本を読んでそれに基づくプレゼンを互いにして共有しています。



本校は2年生が「The Sandwich Swap」というタイトルで動画をつくっています。「peanut butter and jelly sandwich」と「pita sand」という食べ物を題材に、文化の違いでお互いに食わず嫌いだったものを実際に試してみたら新たな発見があった、という内容の絵本を見たうえでの各国の食文化に関する生徒たちのプレゼンです。このプレゼンスライドを共有し、両校の生徒たちがコメントをしあうスペースがあります。隣の別のスペースには、同じテーマで Neihu 高校によるプレゼンがあり、彼らがつくったスライドが見られます。同じ絵本についてのプレゼンですが、違った視点とアプローチがあります。先ほどと同様にプレゼンの下にはお互いにコメントできるスペースがあります。

さらに隣には「私たちの学校生活」というスペースがそれぞれあって、本校の生徒が1分程度の学校紹介動画を上げ、そこに両校の生徒がコメントし合います。Neihu 高校の生徒も同様に動画を上げて同じようにコメントし合っています。



時間の関係で本校の生徒が上げた動画は割愛しますが、この Neihu 高校の同じ高校 2 年生がつくった学校生活動画のインパクトが強いので共有します。

（動画）

ご覧いただいたように動画による交流があります。Neihu 高校の動画は大学生みたいな仕上がりで、「同じ高校 2 年だよね」と私も驚きました。同じコロナ禍でも学校生活の中で「台湾ってマスクしてないの？」とかリアルな文化の違いを経験できたと思います。以上が台湾とやった交流です。

スライド 31 は、互いの動画やパワポなどを交換した後にやったライブリモートレッスンの参加者です。こちらの生徒 40 人、Neihu 高校も 40 人の合計 80 人で、1 グループ 8 人、計 10 グループをつくりました。1 グループは両校それぞれ 4 人ずつです。テーマを教員側でつくり互いに考えていく、というものです。リモートレッスンの最後にこのように顔合わせをしました。また、今回 Neihu 高校は Tony 先生、本校は私でしたが、次回やるときは先生を入れ替えることまで話は進みました。

（スライド 31）



スライド 32 と 33 ですが、何かわかりますでしょうか。これは交流の最後に Neihu 高校の生徒が本校の生徒に送ってくれたものです。一人ひとりからのコメントです。これはコラボ授業に対してではなく、タイトルの「Thank you for donating vaccine doses to Taiwan」とあるように、コロナワクチンが日本に最初に入ってきたときに、日本政府は一定量を台湾政府に送りました。そこに対しての Neihu 高校生徒たちの感謝の気持ちがこのメッセージでした。これは指導したわけではなく生徒たちが自主的に感謝の気持ちを書いたんだと、台湾の Tony 先生が伝えてくれました。こういった国の動きや世界の動きに対する意識の違いのようなものを私は感じました。そしておそらく生徒も同じように感じていたようです。生徒は最初「何？これ」という反応で、このニュースさえ知らない生徒もいたようです。でも、こういった意識の違いを肌感覚で知ることができ、こういったこともコラボ授業の可能性かと思っています。

実際の教室だけでは教えられないこと、教室のブラックボックスを開けることによっていろんな学びができる。私がやっていることは、つなげるためのインフラの設定、そこへの課題を提供

し、あとは生徒が自動運転で学び、自動運転でつながっていく、ということが起きています。ですからコラボ授業への可能性をすごく感じています。

(スライド 32)



(スライド 33)



コラボ授業の実績はこれまで、奈良市立一条高校、米国 George Washington High School、台

湾 Neihu High School と一緒に行うことができました。そして来月 9 月から桐蔭学園高校を予定しています。そしてまだ調整中ですが、米元先生のおかげで産業能率大学の大学生と一緒にコラボ授業ができるとあって、ありがたいことです。

そして、ここが皆さんに一番伝えたいところになります。

(スライド 34)

皆さんも一緒にコラボ授業やりませんか？



<https://www.netman.co.jp/collaboration-class>

私はまずは英語の授業でやっていますが、英語の授業でなくても構いません、御覧になってくださっている先生方の学校でぜひ一緒にコラボ授業をやっていただけませんか。この QR コードを読み取っていただくと、コラボ授業ができるサイトに飛びますので、こちらでぜひつながりませんか。これが本日お伝えしたいことでした。

コラボ授業は本校で使っている LMS の株式会社 NETMAN の C ラーニングを使いますが、もちろん無料です。「コラボ授業やりませんか」のサイトでは本日ご覧いただいた動画もご覧いただけます。見るだけでも構いませんし、コラボ授業のプロセスを共有していただける先生がいらしたら、どうぞポチっとお願いします。そうすると私の「格闘英語」の欄に飛び、私宛のメール送信もできます。ぜひ一緒にやっていただきたいと思います。

長くなりましたし、最後はめちゃくちゃ自分の宣伝もしましたが、ぜひ多くの先生方と一緒に日本の英語教育を変えたいと思っています。「英語で舐められない日本人の育成」というところに共感していただける先生、もしくは英語だけでもかまいません。学校で何か一步新しいことに踏み出したい先生がいらしたらぜひ一緒にやりましょう。以上となります、ご清聴ありがとうございました。

(講演終わり)

一皆川 ありがとうございます。ちなみにこのサイトは C ラーニングさんがつくったものですか？

一小野澤 そうです、ちなみに本日 C ラーニングの方も参加しています。東京都とも一緒に一回やっているの、怪しいところではありません (笑)

一皆川 slido にもコメントが入っています。

・MEGA 都立、興味があります。小野澤先生にどんな形でコンタクトをとればいいのでしょうか。

都立の教員です

—小野澤 先ほどの QR から入っていただいて、フォームに入ってポチッと押していただくと私宛のダイレクトメッセージが届く仕組みです。返信します。もう一点ですが、先ほどの荒井先生のお話に「外部とのつながり」とありましたが、このように外部とつながって、いろんなプラットフォームとつながることで「こんなことができますよ」というものがまさに今の例ですね。

—皆川 そうですね、数年前には考えられなかったことですね。「学校もネットにつながって」という状況で今できることなので面白いですね。ちょっとでもお話を聞いてみたい、意見を聞いてみたい、ということであれば連絡を取っていただくという形で大丈夫ですか。

—小野澤 質問もぜひどうぞ。何でもお答えします。

【質疑応答】

一皆川 ではここから質疑応答タイムに入っていきます。slido の上位に多いのはいずれも共通して出口に関するものです。

- ・大学入試との関係で小野澤先生がやっているような授業は本当に大丈夫なのでしょうか。

といったご意見・質問があり、また一方で

- ・英語だからそれができるよね。

という意見もあります。

- ・単語や文法の知識がないのに、こんなことができるのか。

といった、出口や基礎知識とのかかわりについてご意見・質問が上位にきています。いかがでしょうか。

一小野澤 最後の基礎知識に関しては、結論ですが、単語をたくさん知っていて長文が読めて、試験に対するパフォーマンスが非常に高い生徒、そういう生徒が本校には多いのですが、でもコラボ授業というのは「発言できるか、できないか」。コラボ授業は成績とはまた別の話だということなのです。結局思ったことをパッと言えるかどうか、そこだけなんですよね。そんなに知識が無くてもなにかしら知っている単語はあるはずで、知っている単語を反射的に言うか言わないか、だけだと思います。これが受験英語から格闘英語への変換の一番の違いだと思っています。「言うか、言わないか」。ここを磨くためのものだと考えています。

皆さんも部活でご経験があると思いますが、部活なら他校と練習試合をするのは普通なのに、授業だと練習試合はタブーな雰囲気がありますが、敢えてそこに切り込んで授業の練習試合をやりませんか、ということです。部活の練習試合でたまにレベルが違いすぎてボコボコにされて「やられたぜ」という経験もありますが、それはそれでいいと思うんです。私はバスケ部の顧問ですが、相手がたった 5 人の相手チーム校に 20 人のチームで行って一方的に負けた、という経験があります。そういった経験も含めて「コラボ」だと思います。内容がどうこうというより、とりあえずつながってそこで何か発言するかしないか、そこを鍛えたいと思っています。つまるところ、基礎知識はなくても大丈夫と考えています。

次に出口確保についての質問ですね。わかります、これは逃げて通れないというか、本校も一応進学校としてやっていますので、受験英語は大事なことです。ただ中・高 6 年間、もしくは高校 3 年間、全部を受験英語に捧げる必要はあるのですか、と思っています。しかし、実際は入試改革とずっと言われてきても、このザマです。変わらない、変われないものがあるのも残念ながら事実です。ある意味こうした日本特有の普遍的なものが変わらない限り、生徒が最低限越えなきゃいけないものはありますから、最悪高 3 はそのために犠牲にする年だとしても、高 1・高 2 ではもっといろんなストレッチができる時期だと思います。私も実際に高 3 ではこれはやっていません、できないです。ですので高 1・高 2 のときに自分のマインドのストレッチをすることによって、受験を突破したときの進学先でどのようなパフォーマンスができるか。3 年間、受験対策だけで培った力ではなく、先程共有したような体験をすることで、必ずいつかどこかで芽が出る

と思っています。芽が出るのはいつかわかりません、先行投資です。社会人になってからかもしれません。40代を過ぎてからかもしれません。でも根っこにあるのは、日本人が国際社会で堂々と自分が考えていることを発言して、堂々と議論ができ、一目置かれるような人になってほしい。今の生徒にそうになってほしいという願いでやっています。そこらへんは先行投資だと思って、正直私もどこまでやっていいのかわかりませんが、絶対にやる必要があると思ってやっています。だから高1か高2でコラボ授業をやって、高3ではそこは触れられていません、というのが正直なところですよ。

一皆川 はい、ありがとうございます。次の質問です。

・教科書の授業とコラボ授業の割合は？コラボ授業の進度や時間の取り方などはどうバランスをとっていますか？

一小野澤 年によって違っていますが、かなりナイーブなことをお話しします。私はこういうことをしているので、組んでいただく先生には、「やりづらいらるうな、申し訳ない」と思っています。昨年は完全に別メニューでやっていました。教科書をペアの先生にやっていただき、私はコラボ授業やエッセイを中心に授業をしました。考查テストでは紙の辞書を持ち込み可としてテストをして、エッセイを書かせるといったことも独自にやっていました。

今年はこの4単位を昨年と同じく2単位ずつ2人で全クラス持っていますが、1学期は私が教科書をやり、2学期はペアの先生が教科書をやる、といった感じで入れ替えながらやっています。割合でいったら、私は教科書1割でそれ以外が9割です。一応教科書に触れていますという感じです。

一皆川 他教科との関わりはどうでしょうか。

・英語は常にトピックがテストに出てくる教科だと思います。常に教材研究を求められる教科だと思います。総合（人間と社会や探究）で、ぜひともチャレンジしてみれば他教材とチームになるのかと思いました。英語でバカにされないのも大事ですけど、人間性や社会性って「一番の根底だ」思うので。

一小野澤 ごもつともです。実は、探究について本校は、かなり前から力を入れていて、今年からは6年間、一貫通した探究活動をします。さらにSSHにも指定されているので、いろいろなことをやらないといけません。それで高2で探究論文は全員英語で書く、そして高3では英語で発表ということを掲げていますので、探究と英語は、もうつながっていきます。理科に関しては、サイエンスオリンピックをはじめいろいろなものにエントリーしていて、そこでも英語の論文が必要になるので、理科ともちょっとずつですがコラボできています。次にやりたいと思っているのが数学です。台湾の先生も言っているのですが、数学は言語が違ってほしいやっている内容が一緒なので、できるんじゃないかなと向こうの先生も反応をしてくれています。そういった感じで、できることからやっています。

一皆川 これからという感じですかね。

一小野澤 今のところ英語でしかやっていません。だから募集は英語に限らずどの教科も歓迎です。動画は英語でやっていますが、まずは見ていただいて、「こんなのだったらできるんじゃないですか」と一緒に考えていきたいです。同じ組織にいたら、私とつきあうのが「うん？」ってな

るでしょうけど、離れた組織ならそんなこともないでしょうし、うまみだけ取っていただいで構わないです（笑）。

一皆川 次は個別最適化の質問です。

・教室 2.0 について、個別最適化な学びが実現すると、学年という区切りが適切でなくなるように思います。

とあります。学年の捉え方はどう思われますか？

一小野澤 学年に関しては、教室がどうしても学年で区切られちゃって、カリキュラムもそうなっていますから、授業の中で学年をまたいでやるというのはかなりの大仕事で、ある程度計画してからでないといけないと思いますが、次のコラボ授業は桐蔭学園とやりますが、桐蔭学園は高 1 でこちらは高 2 です。こういう異学年交流もできます。

もっと言うと、これは話が脱線するかもしれませんが、学年並びで同じ学年を 1 教室に入れるというのは今後なくなると予想しています。おそらく、頭プラスや Qubena といったコンテンツがわれわれの一方通行の知識をインプットするものを一掃していくと思います。AI による個別最適化の学習は、特に数学では顕著に始まっています。私の娘は現在小学 4 年生ですが、タブレットが配られてその中には Qubena がさっそく入っていました。インプットに関しては、それでやることで時間が 1/3 に短縮されて、残った 2/3 で探究をやったり、コラボをやったりして、リアルとつなげていく。そうになっていくんじゃないかなと思っています。

一皆川 学びの進度が、人それぞれに変わってくるということですね。

一小野澤 はい。MEGA 都立という言い方も、かなり危険を伴った言い方ですが、この意味は、都立高校に入ればどの高校でも、どの先生の授業でもオンラインで受けられるようになるというのが最終目標です。例えば日比谷高校に入りたかったけど、残念ながらチャレンジできなくて富士高校になっちゃったという生徒でも、日比谷高校の授業を受けなければ受けられる。もしくは入学時には全く勉強に興味がなかったのが、ある先生と出会って、めちゃくちゃやる気になった。そんな先生がその高校の先生ではなかったとしても、都立という括りの中でつながって、MEGA 都立構想で私立に対抗していこうというのが最終目標ですね。

一皆川 今ちょうど質問が入ってきました。

・GIGA スクール構想により ICT 化が進んでいきますが、他者との交流や社会性も養われると考えてますか？

一小野澤 私は 39 歳になりますが、自分の感覚だと、対面でリアルタイムで、それこそ飛沫を飛ばしながらやることで、一体感が生まれると個人的には思います。その方が人間性あふれる話もできると思うのですが、今の中学生・高校生が果たして同じように感じているのかな、というのが私の中の一つの疑問です。仮説としては、彼らが最初に社会人と触れ合うのは、もしかしたらリアルじゃなくてゲームの中かもしれません。オンラインコンテンツで初めて社会とつながるという経験をしているんじゃないのかなと思っています。それで、われわれの当たり前とか一般論をトレースして考えるのは危険じゃないかな、と感じます。常に自分も生徒と同じ目線に立てるように気をつけていますが、やはり感覚はかなり違うので、彼らの目線でいうと、社会性というものが、もしかしたらそこで培われているのかもしれないと思います。これはあくまでも、かも

しれないという話です。

一皆川 次は素朴な質問です。

・個人的な興味ですが、宿題（夏休み・普段）はどのように出されていますか？

一小野澤 宿題はオンライン上で全部出しています。先ほどから登場する C ラーニングというコンテンツを使っています。これにレポートという形で提出させています。私が出した課題はスピーキング、ライティング、全てアウトプットの活動です。スピーキングの課題は、生徒がネイティブの先生のインタビューを受けて答える様子を動画で撮影して UP するというものです。そしてその動画を私が見て評価する、というものです。

一皆川 先ほど「都立間の授業を一緒に」という話がありましたが、今チャットに、「私立も一緒にしちゃいましょうよ」ときました。桐蔭学園と計画中和のことでしたが、私立と関わっていくのはどうですか。

一小野澤 もちろんですよ。先ほど荒井先生との話でもしましたが、私は社会の流れというのは、1 周遅れて私立の学校に入ってきて、2 周遅れて公立の学校に入ってくると思っていますので、私立の先生方が走られていることをいろいろ教えていただきたいという思いがあります。

最後に冒頭にあったコメントについてご意見をお願いします。これです。

・英語ができないことが問題だとは思いません。

一小野澤 はい。これについては何百回、何千回と生徒に答えてきました。これは非常にありがたいコメントです。できるだけ角が立たないように話したいと思います。「英語ができないことはどういうことか」というのが日本内であまり共有されていなくて、どうしても TV ニュースがメインコンテンツになっている方々が多い気がします。生徒たちは、TV はあまり見ません、YouTube のようなコンテンツを見ます。ご自分のスマホの中に英語で一次的に情報が入ってくるものはどのぐらいあるのでしょうか。おそらく多くの方の情報源の 99% が日本語で入ってきていると思います。そうすると、どんな情報操作をされてもわからない、そのニュースの通りだと思い込んでしまう。でも英語で情報を同時に取っていると、世界情勢がリアルに見えてきて、それこそ批判的な視点でも見られます、「これって本当かな」と。現在はコロナ禍でさまざまな批判があると思いますが、「政府が言っているから」「YouTube が言っているから」ではなく、「いろんな世界情報を取った上で自分は言えているのか」と、そういった力を養うことで国際社会において活躍できる人材は育つのかなと思っています。日本で流れるだけの情報を信じるというのは非常に危険なのかもしれないと常に疑っています。世界の情報は一次的には日本語では入ってこない、だから世界のその一次情報をとるためにも結局は英語なのです。その情報を「知りたいか、知りたくないか」で、知りたくないと言ったらそれまでになってしまいますが、「知りたくない」では済まない時代が確実に来ますよね。先ほどの荒井先生の講演にもありましたが、人口がどんどん減って子どもが減っていくと、国力はどんどん弱っていきます。年配層のシルバー民主主義というか、そちらだけに偏った情報だけを見せられているのではないかと。そうならないために、自分への武装として英語を学ぶ、というのを次の世代を担う生徒に伝えたいです。だから格闘しないといけないのです、そこで格闘英語の出番があるというわけです（笑）。

一皆川 今日お伝えしたいことをまとめられたようですね。先ほど産業能率大学とのコラボは調

整中ということでしたが、実際にコラボするために小野澤先生からは、まず産業能率大に、どういことを聞いたりするんですか。

—小野澤 まずはお互いに win-win になるようなテーマを相談して何にするかを決め、それを英語でやるということです。例えば社会課題解決といった大きなテーマでもかまわないですし、その場合はそこで大学生が感じるものと高校生が感じるものを英語でやる。あくまでも英語はツールで、テーマは何でもかまわないです。ちなみに今度、桐蔭学園とやるときは、バンクシー（現代アーティスト）だったり、浮世絵だったり、それらの絵を見て、VTS (Visual Thinking Strategy アメリカ発の美術鑑賞教育法) をやろうと思っています。美術鑑賞です。何でもありです。そこは互いにマッチングをさせながらやっていきましょう、ということです。ちなみにこの本は桐蔭学園が使っている教科書で、浮世絵を扱っているののでそこに合わせています。

—皆川 そうすると、英語の要素以外の内容がかなり入ってきますね。

—小野澤 はい、英語はあくまでもツールです。そういうふうになりたいです。

—皆川 そうすると教科の枠は外していけますね。米元さん、今の話を聞いてどう交渉していけますか。

—米元 よろしく申し上げます、英語に限らず他の授業を含めてもっともっとオープンにできると思います。まずは産業能率大学の英語に関してはどう料理するかの選択肢はいくらでもあると感じました。うちの大学の該当学生にどういう力をつけさせたいかを整理して、それとマッチするやり方を小野澤先生と一緒に考えれば授業ができそうな感じがすごくしています。

—小野澤 学生の卒業論文とかを生徒に紹介していただいて、「大学生になったらこうなるんだ」という直近の未来の姿を見せるのもいいのかなと思います。

—皆川 大学でやっている専門のこと、英語をツールで使うこと、これがどうつながっていくか、応用はできそうな気がしますね。コミュニケーション系の授業、日本語でも英語でもいいですし、そういう所とどうつなげるか。高校生にとっても新鮮かなと思います。そろそろ時間がきましたが、小野澤先生、何かまとめの一言を。

—小野澤 コラボ授業をよろしく申し上げます。

—皆川 「国語、英語、言語教科がうらやましい」とチャットに入っています。今日は英語の話でしたが、コラボ授業はどんな教科でも、探究だったり、教科横断だったり、そういう格闘をどうしていくか、というお話だったと思います。これを機会に「他の教科でどんなことができるか」とお考えいただくと必然的に小野澤先生につながる可能性があります。こういったつながりを皆さんぜひ大切にしてください。外に開いていただければと思います。ということで、コラボ授業に興味がありましたらぜひご連絡を頂ければと思います。小野澤先生ありがとうございました。

(終わり)

第14回キャリア教育推進フォーラム Session3

横浜創英中学・高等学校 校長

工藤 勇一 先生

自律する子の育て方

- 1 はじめに 自己紹介と麴町中学で話題になった取り組み
- 2 社会の変化とこれからの学校の在るべき姿（学校教育の不易とは？）
 - ①「そもそも教育の目的って何？」
 - ②OECDの2030年バージョンの教育目標
 - ③背景は科学技術の異常なスピード、そして人類存亡の危機をはらむ時代
 - ④与え続ける教育が主体性を失わせた
 - ⑤教育界に蔓延する手段の目的化
 - ⑥自律型の教育へ
- 3 自律型の子どもを育てるには
 - ①自律型の人材を育てるポイントは心的安全性
 - ②失敗が許される環境づくり
 - ③環境に強い脳をつくる
- 4 学校を変える
 - ①マネジメントの基本
 - ②横浜創英の取り組み

【質疑応答】

自律する子の育て方

横浜創英中学・高等学校 校長

工藤 勇一

1 はじめに 自己紹介と麴町中学で話題になった取り組み

皆さまこんにちは、工藤です。よろしくお願いいたします。本日のタイトルは「**自律する子の育て方**」、最近出した本のタイトルと同じにしました。自律型の人材育成について話していきます。How to というよりは本質論としてお話ししていきます。

まず簡単に自己紹介をします。昨年（2020 年）に着任した横浜創英中学・高等学校は現在は共学ですが、元は女子校で創立 81 年目となります。全国のどこにでもあるような私立女子校で始まり、部活動を強化して、特別進学コースをつくり進学実績を上げ、20 年ほど前に共学に変え、さらに十数年前に中学を立ち上げました。中学はまだほとんど知られておらず、定員は 2 クラスです。ただ、私の着任前は定員割れをしていました。昨年に私が来て、中学は 1 クラス増えて 3 クラスになりましたが、来年からいよいよ本格的に横浜創英の教育を変えていくために今いろんな取り組みをしています。今日の話の中にも少しだけご紹介できるかもしれません。

全校生徒は 1,600 人ぐらいで、高校の平均的学級数は 12 ぐらいです。本日の話の内容は昨年 3 月までいた東京都千代田区立麴町中学校での取り組み（「定期考査・宿題の廃止」、「固定担任制の廃止」、「服装・頭髪指導の廃止」、「数学での一斉指導全廃」）と、横浜創英で今やっている取り組みをご紹介していこうと思っています。

私の著書の中には皆さんもいくつか読まれた本があると思いますが、麴町中学校で話題となったことをいくつか挙げると、例えば「3 年間宿題を全く出さない」。宿題を出さないどころか、日々の宿題も夏休みの宿題も全く出さない。さらに教員は「勉強しろ」という言葉を 3 年間言わないルールになっています。そして「定期テストを廃止」。でもテストそのものはたくさんあります。「固定担任制を止めた」ことも話題になりました。教員の立場でいくと、生徒たちをチームで見えていくことになります。生徒たち・保護者から見ると、逆指名で教員を選んで相談ができるということになりますね。中学 3 年になると進路相談がありますが、この進路相談の相手は 3 学年の教員だけでなく、学校中の先生の中から選ぶことができます。したがって面談で不満を言う生徒たちはすごく少なくなりました。

私は麴町中学校で 6 年間校長をやっていましたが、都内には公立中学が約 600 校あります。その中でも着任したころの麴町中学校は最もルール・校則が厳しい、面倒くさい学校だったと思いますが、3～4 年ぐらい経った頃はほぼ校則は全廃しました。そのころの生徒には茶髪、金髪、ブルーの髪もいるし、ピアスを開けているし、化粧もしてますね。でも、服装・頭髪の乱れと生活の乱れが直結するかというと、そんな相関は全くないことがすぐにわかります。外国と一緒にだということですね。元々が服装・頭髪の指導がとても厳しい学校であったので、もしかするとそこ

と相関があったのかもしれませんが、指導をしない学校では相関が無くなるということですね。意識の外にいく、と言ったらいいんでしょうか。

それから先ほどのセッション 2 でも似たような話題があったと思いますが、麴町中学校では数学の授業での一斉指導を全廃したので、3 年間、教員が教えることはありません。今の横浜創英も同じで、中学では数学は教員が一斉指導をしていません。学び方は生徒たちの自由ですね。横浜創英は麴町中学校のレベルにシステムとしてはまだ到達していませんが、イメージとしては、3 年間自習のようなイメージでしょうか。自習というと、ひとりで黙々とやっているというイメージを持たれるかもしれませんが、そこは全く違って、一人で学ぶ生徒もいれば、二人で学ぶ生徒もいれば、グループで学ぶ生徒もいれば、自由に先生を呼ぶ生徒もいます。自分が必要なときに人を呼びながら自由に勉強を進めていくという方法です。後からご紹介しますが、落ちこぼれが全く出ません。これは数学という教科の特性によるものです。もともと数学は大学 1 年生ぐらいまではほとんど古典数学、200~300 年前の数学を教えているだけなので、ものすごく体系化されていて、本来は問題解決型の学習なので教えるという手法がもともと合っていないのかもしれませんが、一斉指導をしてしまうと、すごくできる生徒とできない生徒が一緒の教室にいることになるので、できる生徒は待っていないといけないうし、できない生徒は置いていかれます。ターゲットがきちんと定まりません。もともと根本的な考え方が違うんです。これは本日のメインテーマになりますので、また後からお話します。

1 社会の変化とこれからの学校のあるべき姿（学校教育の不易とは？）

①「そもそも教育の目的って何？」

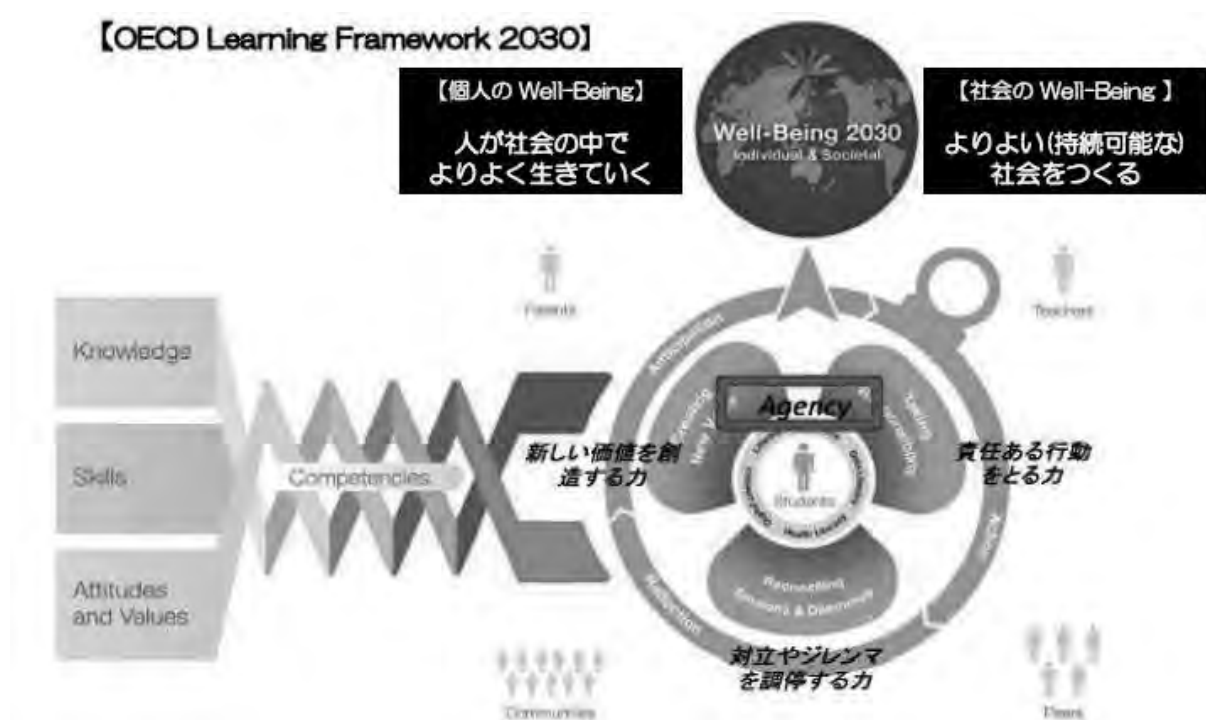
それでは本論に入ります。今日の参加者は高校の先生が多いと聞いたので、「いままで自分たちがやってきた教育は、本当にそれって正しいこと？」と自身に問う機会になればと思います。「そもそも目的って何？」ということを何度も何度も繰り返しながら私の話を聞いていただければありがたいです。もしかすると、自分が「これは成功した」「よかれと思ってやって来た」ことが、「違っているかもしれない」と思ってもらえるかもしれませんが、話を聞きながら「それは工藤、違うぞ」と怒りのようなものが生まれる方もいるかもしれませんが、めったにない機会だと思ってゼロベースで教育を考えてみる機会にさせていただけたらと思います。

まず頭の中で考えてほしいのですが、「学校教育の不易と流行」という言葉が使われます。私は教育関係に入ってもう 40 年近く経ちますが、教員を始めたときは山形県の農村地帯の松山町、当時はまだ酒田市ではなかった飽海郡松山町の人口 6,000 人ぐらいの小さい町で教育を始めました。町内には小学校が 3 校、中学校が 1 校で、この中学に赴任しました。当時から教育雑誌などには「不易と流行」という言葉が述べられていました。この言葉を使う方々はだいたい「流行に流されるな」という意味で使う方が多く、今も変わってないような気がしています。

「不易って何ですか？」と聞かれたら皆さんはどんなふうに答えられますか。「学校教育の不易」とは、実は世界中が「不易って何だろう」と探してきたんじゃないかと思います。今から 150 年ほど遡ると、明治維新以降、学校教育の目的は国民皆に学問を与えて、国が豊かになる、経済が豊かになる。そして外国と渡り合える国にするために、当然その当時は戦争に強くないとならな

いので、兵力を強くしていく、富国強兵が学校教育の目的になっていたと思います。でも、今でも日本はこれを引きずっているような気がします。相変わらず「欧米と比べて日本の教育は劣っている」とか「劣っていない」とか、「PISA の学力調査の結果は高いから日本の教育はまんざらでもない」とか「捨てたもんじゃない」とか、「日本は優秀だ」とか、常に海外と比べて教育を考えている。いまだに世界と渡り合える国にしよう、ということが学校教育の目的の一部のようにになっている気がするんです。その一方で、「日本らしい教育が大事だ」とか「日本型教育」という言葉もこの間の中教審の答申に出されましたが、私は何か違っているように思えます。「学校教育の不易」というのは、実は世界中が日本と同じようだったと思うんです。やはり自分の国を強くしようと思っていたために、学校教育を行っていたと思うんですが、どうもそれが変わってきた。十数年前から明らかに、特に欧米において学校教育の捉え方が確実に変わってきました。その象徴的なものがスライド 10 に表れていると思います。

(スライド 10)



②OECD の 2030 年バージョンの教育目標

OECD が 1997 年ぐらいから研究を始め、2003 年にいったん報告書を出しています。いわゆるキーコンピテンシーというものです。「これから人材育成をするために必要なキーとなるコンピテンシーは何か」と三つに整理しました。その後も研究は続き、スライド 10 は、2030 年バージョンの教育目標を示したものです。もちろん世界中からあらゆる教育者が、日本からも文部科学省が参加し、今後の時代の教育の在るべき姿について整理をしたものです。

今回の新学習指導要領の一つ前、前回の 2003 年の学習指導要領も実は OECD のキーコンピテンシーの影響を色濃く受けていて、そして OECD の教育目標 2030 年バージョンも今回の新学習

指導要領にもものすごく影響を与えています。「主体的で対話的な深い学び」というのも、この OECD の考え方を取り入れたものだと思いますが、ちょっとスライド 10 の図をよく見てください。私はすごくよくできていると思っています。「Well・Being」という言葉があります。簡単にいうと「幸せ」と言えばいいでしょうか。図の上部に Individual と、ソーシャルという綴りではありませんが同じ意味の Societal とあります。個人の Well・Being と社会の Well・Being を実現するのが教育だと書かれています。個人の Well・Being とは、人が社会の中でよりよく生きていく力。そして社会の Well・Being とは、持続可能な社会をつくっていくこと。これを実現するために、必要な力=コンピテンシーが書いてあります。

まず一つは、「責任ある行動をとる力」(Taking Responsibility)とありますが、一人ひとりが自分で考えて自分で行動できるような自律型の人間を考えたいと思います。

次は、日本の教育であまりクローズアップされていない部分です。対立やジレンマを調停する力。日本の教育では「知・徳・体」の徳や、心の教育のように思えますが、実は全く違うんです。もしかすると真逆と言ってもいいかもしれません。心は皆違っているし、利害も違っているから当然、世の中に多様な人たちが生きれば、対立が起きるのは当たり前だし、ジレンマが起こるのも当たり前。ということは、それを解決する力、調停する力が必要。なぜかという、「皆が勝手なことをしていると、もしかしたら持続可能な社会がつかれないかもしれない」ということが十数年前から専門家から強く言われるようになってきたわけです。つまり世の中のさまざまな問題は、きちんと対話をして対立やジレンマを解決していく力が必要じゃないかと。

三つ目は、「新しい価値を創造する力」とありますが、これが OECD が定めているいわゆる学力のことをいいます。日本の学力とはだいぶ意味合いが違います。ペーパーテストでどれだけ力がついているかと言うよりは、世の中にあるさまざまな問題・課題を解決するには新しい価値を生み出していくことが必要。例えば新しいシステムを生み出すとか、新しい技術を生み出す、そのことによって対立やジレンマを解決できないだろうか、といったことです。つまり学力というのは、社会に役立てるためにあるということです。

また、図の中央に Agency とあります。最近この言葉がよく使われます。例えば「生徒 Agency」などですが、この Agency の日本語訳が見つかりません。文部科学省もこの訳にとっても苦労しています。私も一昨年ぐらいに、OECD のアンドレアス・シュライヒャー OECD 教育・スキル局長が来日されたときに対談する機会を得て、麴町中学校の例を出しながら話をしました。そのときに Agency に意味合いが近いのは、一人ひとりが当事者意識を持って問題を解決していく、主体的に問題を解決していく、そういうイメージでした。当事者意識というのは直訳では違いますが、そんなイメージに捉えていただけるといいと思います。

③背景は科学技術の異常なスピード、そして人類存亡の危機をはらむ時代

さて、なぜこのような教育目標ができたかということで、二つの背景を取り上げてみたいと思います。

一つは何と言っても、科学技術が尋常ではないスピードで、人間が想像を絶するくらいのスピードで変化し始めたということです。あまりにも技術が進みすぎて、もしかしたら人間がコント

ロールできていないのではないかと。EUなどはこれにいち早く反応して、「AIを制御しないといけない」、「AIが勝手に人を評価するような仕組みは問題だからそれはつくらないようにしよう」、そういった新しい仕組みをつくって制御しなければいけないと反応しました。日本を見ていると新しい技術ができて、社会システムがそれに伴ってこないで、後手後手に回っています。今の世界は、自分たちの科学技術のコントロールが難しくなってきたので、きちんとコントロールしていくことが必要だとなっています。仕事についてもそうです。新しい技術が生まれたら新しい仕事生まれる。でもまた新たな技術が生まれたら、その仕事があつという間になくなって、次の仕事が出てくる、といった時代です。ですから子どもたちが大人になった時代は、一つの会社に就職して定年まで勤めるということはまずありえませんが、自分で起業したりまたは自分の意志で転職をしていく。もしかするとジョブ型の就職ができるような社会に変わっていかなければならないかもしれない。

この科学技術の背景だけでなく、もう一つの背景は、2030年に人類は存続できるかどうかの瀬戸際になる、分かれ道に立つのではないかと、この2030年を特別な年としていろんなメディアが取り上げています。きっかけとなったのは2015年に国連が定めたSDGsです。「今、世界中にはさまざまな問題があります。人口爆発、食料問題、環境問題、それから民族問題、宗教問題、戦争問題などです。新型コロナの問題も含め、どの問題も人間が勝手に社会活動をおこなっていけば、対立ジレンマはいつまでも解決しない。しないどころか人類そのものが存続できないような危ういところがあるんじゃないのか。だから自分の国だけでなく、世界中で問題を解決しなくてはならない時代がもう目の前、今そのものです」、という言い方をし始めたわけです。

その背景にある一番象徴的なものが環境問題です。二酸化炭素の排出による地球温暖化の現象、それに伴って氷が解けていく。グリーンランドだけで2019年に解けた氷の量は5,320億トン。これを東京23区に注ぎ込むと何と水位は800メートル上がる。スカイツリーも簡単に沈むぐらいの水量がグリーンランドだけで解けていることがわかっています。地球上の砂漠化もどんどん進んでいて、森林の消失も去年で日本の面積の1.7倍が消失しているというデータもあります。そしてさまざまな土地の開発が進んでいて、例えばブラジルでは人口爆発、人口問題に対応するべくジャングルをどんどんと開発していくわけです。写真は約30年前、1989年です。そして30年経ち開発された姿がこんな感じです。世界中で同じようなことが起こっています。さらに生態系が崩れたり、温暖化がますます進み、気候変動もあり、世界中で毎年のように自然災害がとて目立つようになってきました。それ以外にも海洋プラスチック問題、これはマイクロプラスチックが海中でどんどん小さく粉々になってそれを魚が食べ、またそれを私たちが食べているということもわかってきています。また新型ウイルス問題は、一時的なものではないと言われていました。例えばシベリア凍土の中には太古の強烈なウイルスなどがあり、凍土が融けることでそれらが地上に出てくるだろう、とも言われています。地球環境問題だけでなく、ますますさまざまな問題が、国際的規模で解決しなければならない事態になった。これを危惧してつくられたものが国連で採択したSDGsです（スライド19）。

(スライド 19)



日本ではファッション的に扱っている人が多いようですが、そんなものではない。どれか一つの問題を解決しようとしてもそれが他の問題に影響を与えることがあります。日本だったら、持続可能な社会をつくるためにエコ運動をしよう、マイバッグを持とうといった感覚があります。例えば「レジ袋をもらうのをやめましょう」なんて言ってます。なぜレジ袋をもらってはいけないかというと、レジ袋がリサイクルできないからです、これがゴミ問題につながるからです。でもリサイクルできる仕組みをつくったらレジ袋はゴミにならないですね。ゴミといわれているプラスチックが全て回収できたら資源に変わります。このような新しい技術が生み出されたら一気に解決されるかもしれない。つまり Sustainable Development Goals とは「持続可能な方向で、皆で開発していこうよ」という話です。

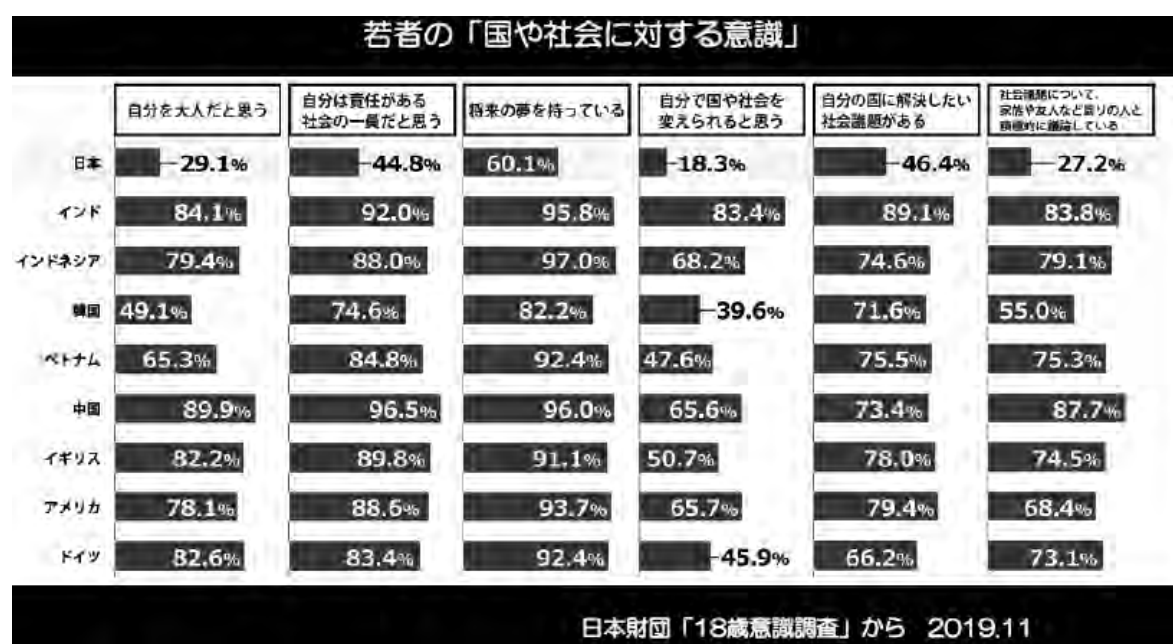
そこで再度スライド 10 を考えてみますと、持続可能な世の中をつくるために、「きちんと皆で対立やジレンマを解決する力をつけないか」「新しい価値を生み出す力が必要だよね」「責任ある行動をとる力が大事だよね」という話で、それを一人ひとりが当事者として進めていく教育が大事だ、ということが根本に掲げられるようになったと言えます。

これからの時代はますます子どもたちに自己決定をする力が求められるし、多様な人たちを受け入れて、対立・ジレンマを解決するための対話の技術が求められてくる。文部科学省の「主体的で対話的な深い学び」という言葉を取り上げましたが、文部科学省は学力を高めるために「主体的で対話的な深い学び」が必要だという感覚でこの言葉を取り上げているのかもしれませんが、OECD の教育目標からすると全くレベルが違うということです。OECD ではなぜ対話が必要かというと、地球的規模の持続可能な世界にするための問題を解決するために、対立・ジレンマを解決するための対話です。

世界が、特に欧米を中心としてそういう教育に転換しようとしている。だから、子どもたちには当事者意識を持たせて、主体的で対話的な子どもを育てようとしているわけです。そういう時代にもかかわらず日本の子どもたちの様子は、とっても不安ですね。

スライド 22 はご存知の方も多いと思いますが、一年半ぐらい前（2019.11）に、日本財団が「18歳意識調査」として世界 9 ヶ国の 17 歳から 19 歳の主に高校 3 年生を中心に意識調査をしました。日本、インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国のアジア圏と、イギリス、アメリカ、ドイツの欧米圏を対象に、質問は全部で 6 つあります。①「自分を大人だと思う」という質問では日本は 29.1%です。比較的に似ている教育をしているという韓国と比べても低いです。他の国々とは比べようがないくらい低いです。②「自分は責任がある社会の一員だと思う」の質問もとても低いです。③「将来の夢を持っている」も低いです。次はひどいです、④の「自分で国や社会を変えられると思う」は 5 人に 1 人にも満たない。日本以外にも確かに低い国もありますが、日本は極端に低いですね。⑤「自分の国に解決したい社会課題がある」、⑥「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」はひどいものです。とても若い高校 3 年生の姿が見えます。今日この場には高校の先生が多いので、ご自分の学校でやってみるといいと思います。ただ、今日は意識が高い先生方の学校なので結果はこれよりも高い結果が得られるかもしれませんが、自分の学校の生徒たちが自分を大人だと思っているのかどうか。もしこれが日本中の高校 3 年生の姿を象徴しているとして、信憑性のある数値だとしたら、日本の未来はもう無いと言っていいくらい、とても心配です。

（スライド 22）



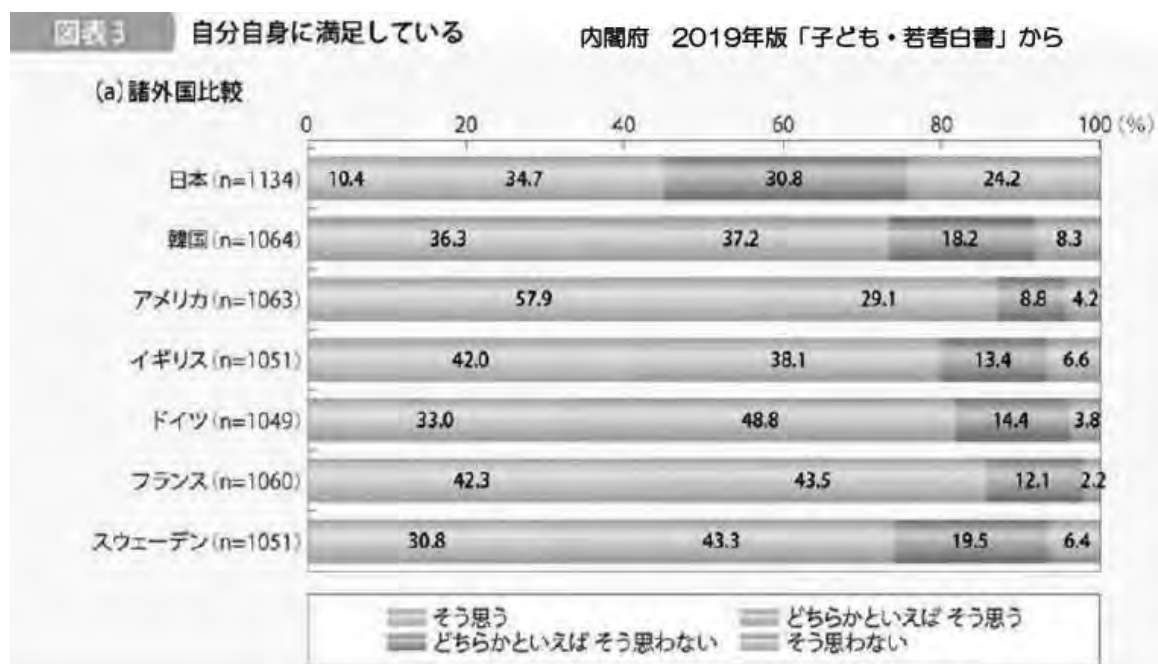
さらに他の調査も日本の結果はあまりよくありません。スライド 23 は、昨年（2020 年）に公表されたユニセフの幸福度調査です。世界の子どもたちを 38 ヶ国で調べたものです。子どもの幸福度総合順位は 38 ヶ国で 20 位、真ん中ぐらいですが特徴的な 2 点があります。まず体の発育や健康は世界第 1 位でした。一方心の幸福度は下から 2 番目の 37 位です。自分を幸せだと思えない子どもたちが育っています。

(スライド 23)



さらに内閣府が調べた 2019 年版「子ども・若者白書」では、「自分自身に満足していますか」という自己肯定感の調査（スライド 24）で、世界 7 ヶ国（日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン）の調査結果はダントツに低いです。

(スライド 24)



④与え続ける教育が主体性を失わせた

よく OECD の PISA の調査結果を基に、「日本の教育は捨てたもんじゃない」「日本型学校教育は今まで成果を上げてきたんだ」とおっしゃる専門家がたくさんいます。私は違うと思うんです。先ほどのスライド 22 の調査結果ですが、これは私が一緒にやっていた教育再生実行会議で取り組んでいた第 12 次提言を、この前、菅総理に提言しました。そこで最も注目された調査結果です。私はこの調査結果を使ってプレゼンもしました。やはりいろんな専門家たちが、「これでは、日本はずいぞ」となりました。今回の 12 次提言で何を出したかという、「この原因になっているものを取り去らなきゃいけない」と、そしてその原因は何かという、こういうことだと思います。「人は与えられることに慣れていく（サービス産業化した教育）」日本は全てがサービス産業化してしまった。「おもてなし」って素敵な言葉に感じますが、日本はおもてなしの国に変わってしまった。子どもたちはサービスを受ける側に変わってしまった。

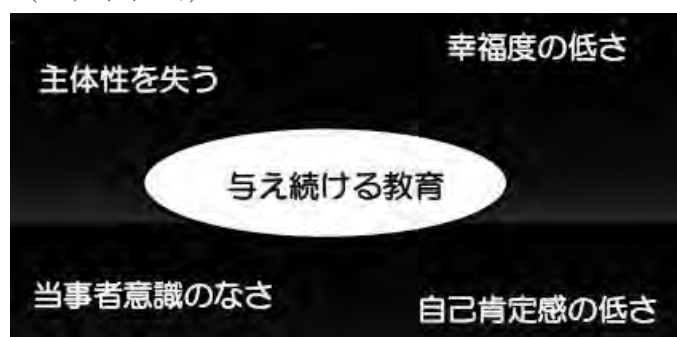
教育に特化して言えばそういうことです。行政サービスも何もかも、みんなそうですね。とにかく日本の文化は与えてもらうことに慣れていくんです。もっといいサービスをくれ、もっといいサービスをくれと。情報化社会ですからいろんな情報が世界から入ってきます。だから非常に比較しやすいです。それをもって、「なんでうちの市はダメなんだ」「うちの学校はダメなんだ」「うちの職場はダメなんだ」と皆が自分のところにダメ出しをするんです、そして評論家になります。当事者じゃない、ということです。常に何かと比べて不満に思っていくという社会ができて上がっていく。

教育の世界に注目すると、子どものころからとにかく手をかけますね、親も先生もよかれと思って早期によい教育環境を与えたいと思って「あれをきなさい」「これをきなさい」と指示を出す。もともと子どもというのは主体的な生き物です。自律しているとは言い難いが、主体的な生き物で、自分がやりたいことをやる、ということばかりを考えて生まれてくるのが子どもなのですが、それがいつの間にか、「あれをきなさい」「これをきなさい」「今はこれをしてはだめ」「待ってきなさい」ということが非常に多くなってくる。そうすると自分で物事を考えられなくなってくるんです。自分で考えて自分で行動するという自律の力がなくなってくる。自律の力が無くなってきた子どもには特徴があります。上手いできないことがあると、必ず人のせいにするということです。「自分の勉強ができないのは先生の教え方が悪いからだ」「勉強ができるためには優秀な塾に通ってスーパーティーチャーに習えばいい」といったことです。そういった子どもたちは主体性をどんどん失っていくので劣等感でいっぱいです。結局は、主体性のない子どもは劣等感だらけなんです。劣等感でいっぱいの子は人に対して優しくなれない、不幸な気持ちになる。

簡単にいうと日本の教育は与え続ける教育で、それを行うことでさまざまなものを失わせています。主体性を失う、当事者意識のなさ、幸福度の低さ、自己肯定感の低さ（スライド 27）。先ほど言ったのですが、数値を見ながら「日本の教育はまんざらでもない」という方がいますが、そんなレベルではない。20 年ぐらい前だと GDP が世界第 2 位で一人当たりの GDP はほぼ世界のトップでした。それから 20 年経って今は日本の一人当たりの GDP は世界で 27 番目辺りまで落ちています、ニュージーランドにも抜かれました。ニュージーランドは大学進学者がとても低い国です。大学に行かずに高校出の方が多いのですが、そのニュージーランドよりも一人当たりの

GDP は低い。そんな日本社会になってしまった。そして常に皆が不満を言って誰かに何かをやってよと、「政府はだらしがないじゃないか」と評論家ばかりが多い、そんな世の中になってしまった。

(スライド 27)

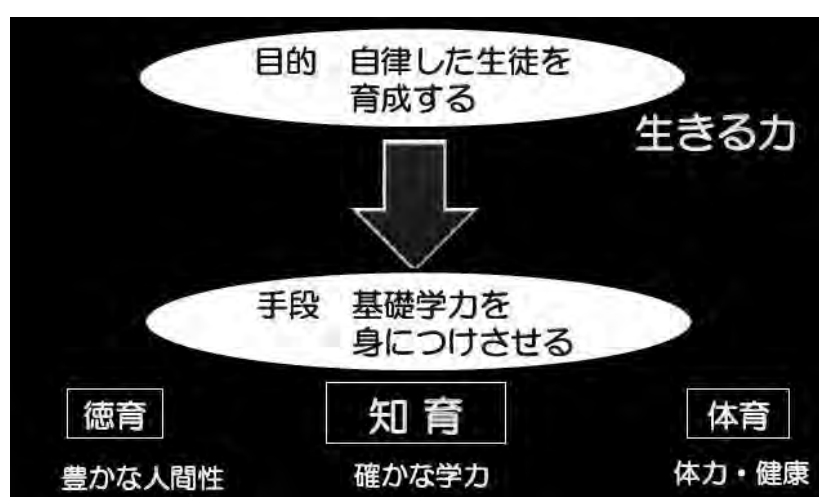


なぜそんなことが起こっているかと言うと、つまり本質論がわからなくなった。何のためにやっているかじゃなくて、How to ばかりが蔓延しているということです。

⑤教育界に蔓延する手段の目的化

学習指導要領の中心に書いてあることですが、「生きる力を育成するためには、確かな学力、豊かな人間性、体力・健康が必要だ」とありますが、この三つは手段です。生きる力を育成するための手段として考えられています (スライド 29)。これもとても日本的です。先ほどの OECD のコンピテンシーのつくりとはだいぶつくりが違いますね。OECD で「世の中を持続可能な方向にするためにはどんな教育が必要か」と、構造化されている教育とは、だいぶかけ離れているように思います。

(スライド 29)

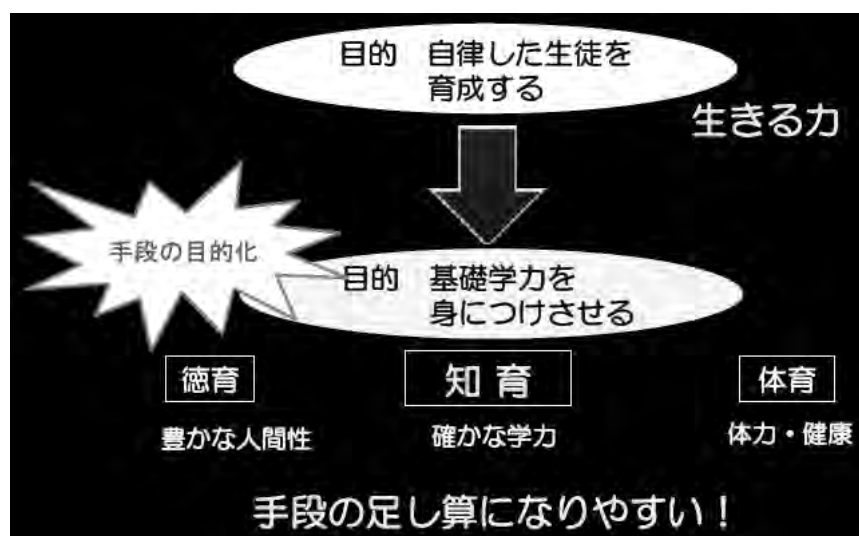


学習指導要領が言っている意味は、「勉強ばかりじゃだめだよ」「心の豊かさも大事」「体を鍛え

ることも大切」ということですね。確かに一見、本当っぽい、悪い言葉ではないと思います。しかし、マネジメントの視点からみると目標になり得ません。お判りでしょうか、足し算ですよ、どんどんとやりなさいと言っています。それも何をやれとは書いてないです。何をやっていいのかわからないです、「何のためにやっているのか」が抜けているんです。だから、ただかペーパーテストの学力をつけたいと思って必死になって補習をやり、復習をやり、課題を出し、とにかくペーパーテストの学力を上げる。なぜかといったら、高校にとっては大学受験があり、この大学受験は1点でも多く取ったら大学に合格できるという制度をいまだに日本や韓国は維持している。欧米圏では学力というものは大学入試の条件にそんなにならないですね。

でも日本は、違う力でいわゆるコンピテンシーで力を評価しようとする、「それは平等じゃないでしょ」「どうやって力を評価するんですか」ということがやたらと話題になり、皆が臆病になって、そちら側に踏み込めないということですね。皆が臆病になって結果的に、人間としてわずかに一部にすぎないペーパーテストの学力がどれだけついたかというところで、いまだに競争している社会だということです。この構造は、手段の足し算になりやすいということです（スライド31）。

（スライド31）



だから勉強時間を増やすことになり、いまだに高校でも、私が昨年着任した当時の横浜創英もそうでしたが、「とにかく勉強時間を増やせ」といった感じです。勉強時間を増やすと学力は上がるのでしょうか。本当は違うんですね。本当は自分で必要なときに必要な勉強ができる生徒に育ててほしいのに、勉強時間を増やすことが目的になったりして、公立の中学校なんかでは勉強時間調査などをします。家庭学習で何時間勉強したかどうかを調査します。まったくバカらしいことだと思いますね。

麴町中学校で全部宿題を止めたのにはさまざまな理由がありますが、宿題はそもそも自律を失わせる象徴的なものです。宿題を20問出したとして、わからなかった問題は2問だったとしま

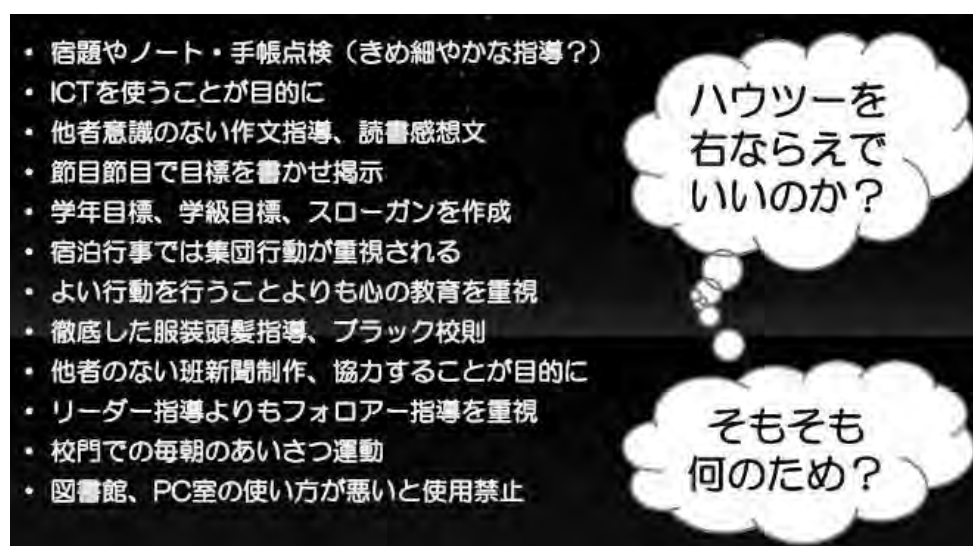
す、まじめな生徒は全部やりますね。わからなかったところは人に聞いて正解にして提出する。一見完璧のようですがすごく無駄があります。一般的な生徒のパターンはもっとひどいものです。宿題を提出するための手っ取り早い方法は、わからないところを飛ばして提出すれば最も早く提出できるので、その問題には手をつけない。当然その生徒は学力が上がりません。時間だけが奪われて学力は何も変わらない。先生たちはどれだけ生徒たちの時間を奪うか、ということで宿題を出している。極端に言えば、そんなことが起こっている場合があります。全てとは言いませんが、そういう場合がとても多いです。麴町中学校で「来年から宿題はゼロにするよ」と言ったときに、一番喜んだのは中学3年生でした。自分の受験勉強の時間が宿題によって奪われることがないからですね。やりたくない勉強をしなくてもいい、1日が24時間しかないというタイムマネジメントができる生徒が育っていれば、必要なものをやる。だから自律した生徒たちは宿題を出されなくても、自分がわからなかった2問を選んで勉強する生徒に育っていくというわけですね。

日本は小学校時代からとにかく宿題が多い。そして先生の指示をきちんと守る子になりなさいという育て方をしていますから、指示されたタスクをこなすだけの子どもが育っている。小・中・高、下手をすると大学までです。そうすると、この子たちが大人になったとき、自分の会社・自分の組織・自分の学校に問題があったときに、対話をして自分の力で変えようとする力は育っているでしょうか。

実は今の日本社会は学校の教室の中からできている、ということをわれわれは自覚しなければならない。社会を非難するというのは、自分の教室を批判することに直結しているのです。日本中の教室で育てている姿が今の日本社会です。

スライド39は麴町中学校で止めたことですが、誰も読まないような作文ありませんし、読書感想文も希望者だけにしました。

(スライド39)



- ・宿題やノート・手帳点検（きめ細やかな指導？）
- ・ICTを使うことが目的に
- ・他者意識のない作文指導、読書感想文
- ・節目節目で目標を書かせ掲示
- ・学年目標、学級目標、スローガンを作成
- ・宿泊行事では集団行動が重視される
- ・よい行動を行うことよりも心の教育を重視
- ・徹底した服装頭髪指導、ブラック校則
- ・他者のない班新聞制作、協力することが目的に
- ・リーダー指導よりもフォロアー指導を重視
- ・校門での毎朝のあいさつ運動
- ・図書館、PC室の使い方が悪いと使用禁止

ハウツーを
右ならえて
いいのか？

そもそも
何のため？

学年目標や学級目標もつくりません、そもそも生徒会が「学級目標をつくるのをやめよう」と

提案しました。なぜなら麴町中学校には「自律、尊重、創造」という学校目標があり、その意味が生徒たちに浸透していて、意味もわかっている。そうしたら「学級目標はいらないよ」ということになり、本当の目標があるんだからそれが最上位で、あとの目標はいらないよねという話です。

「団結」とか「心を一つに」といった、どうでもいいような学級目標はいらなくなる。日本はすごく情緒的で目標として成立していないスローガンのようなものをつくる習慣があるんですが、小学校時代から実現しなくてもいいような目標を立てたがる。例えば運動会では「優勝しよう」とか。「優勝できなくてもいいけど、目指そうよ」ということが目標になったりする。つまり何のためにその目標をつくっているのかがわからないような教育活動で埋まっているんです、日本の学校教育は。そういったものを一つひとつ見直していく作業がとても大事です。いよいよ日本型学校教育を見直す時がきたと私は思っています。

明治維新以降日本はずっと「①何を教えて（カリキュラム）」、「②どう教えるか（教え方）」、カリキュラムを国が定めて、それを教育委員会が学校へ伝え、それぞれの学校教師はどう教えるかの技術を研究してきました。つまり教える立場から見てきました。今の欧米はそういう考え方ではありません。どんどん転換しています。むしろ日本が江戸時代にやっていた寺子屋や私塾、藩校などの学習スタイル、先生が教えるスタイルではなく、学生たちが一緒になって学び合う、一人で学んだり、学び合ったり、対話をしたり、ディスカッションしたりするという学び方に変わってきている。

今までの学習方法はどんなに頑張っても実際は教授型ですから、主体性や当事者意識は育ちません。頑張っても、頑張っても、解決に向けた対話力も育たない。だから特に日本中の公立の小学校・中学校は主体的に学ぶ子どもの育成がテーマになるし、きめ細やかな指導の在り方がテーマになるし、わかる授業を実現することがテーマになったりする。そもそもなぜかという、この教師主導という学習スタイルがあるからです。ではそれを学習者主体で、子どもが学ぶスタイルに変えたらどうなるか。今欧米が進めている、特にヨーロッパの一部の国々を中心としておこなわれている研究が「1 何を学んで」「2 どう学ぶか」を子ども自身が選べるスタイルに変えようというものです。

その一例を挙げます。高校の先生が多いのでだいぶ昔の話の印象になりますが、本人の許可も得て小学校5年生のノートを借りてきました。今は6年生になりました。「夏と冬で降水量が逆になるのはなぜなのか考えよう」という授業を受けて、1時間の授業でたった2行しか書くことができなかったんです（スライド45）。

（スライド45）

五年生男児のノート



その理由はある特性があるからです。特に男の子に多いのですが、方眼ノートを使っているのですが、文字を書くのがすごく困難な子なんです。先生の話聞きながらノートをとることができません。ノートを取ろうとすると先生の話がふっとんでしまいます。小学校時代、特に男の子に多いです。女の子は、何かで調べると、動作性が速く、思考のスピードと動作性のバランスがいいので先生の話聞きながらノートをスムーズに取ることができたりしますが、男の子はそうではない子がいるのでなかなか苦労するんです。同じ障害を持った人で有名な人ではスピルバーグやトム・クルーズがいます。ディスレクシア（dyslexia）という障害です。スピルバーグはインディ・ジョーンズ、バック・トゥ・ザ・フューチャー、ジュラシック・パークなどの映画監督ですし、トム・クルーズはミッション・インポッシブルなどの主役です。ディスレクシアには読み書き障害があるので台本は読めないが、トム・クルーズは全然苦労しなかった。それは録音して覚えたからです。日本では「読解力を高める」ということが常に言われます。本を読まなくてはだめだと。この発想自体が欧米からかけ離れています。読解力を育てるために本をよまなければいけないと直結する人は、読解力を高めるためには文字が読めなければいけないのか。ではそもそも文字が読めなければ読解力は高まらないのか、ということになるんですが、全然違いますね。学び方は人それぞれで、トム・クルーズが録音をして台本を覚えたように、今の時代ならスマホで読み上げソフトがあるし、音声入力をすれば文字が打てます。そういったことが大事である。アメリカではディスレクシアがあっても特別支援学級に行くことはありません。いろんな支援を受けながらハーバード大学の教授になり、世界的遺伝子研究の権威となった方も実はディスレクシアだという方がいます。日本で、今の教育で、ディスレクシアでそうなれるでしょうか。

話を先ほどの小学5年生に戻します。この子のお父さんは心配して診断を受けさせ、ディスレクシアという障害名がつけました。それでお父さんは考えたんですね、鉛筆を持たせると字を書けないけれど、キーボードを打ったら字を書ける子がいるので、キーボードを使わせてみたらどうだろうと校長先生と相談しました。わずか数日でした。その子はキーボードを使い始めてノートを取れるようになったんです（スライド46）。

（スライド46）

五年生男児のノート PC利用(数日後)

9月7日(月) 単位量あたりの大きさ②
速さを求める式

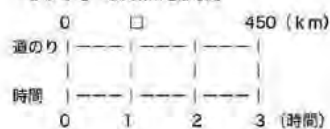
速さ=道のり÷時間

めあて

どちらが速い?

・はくたか号→450kmを3時間

・ひかり号→366kmを2時間



はくたか
 $450 \div 3 = 150$
A、150km進む

ひかり
 $366 \div 2 = 183$
A、183km進む

×3



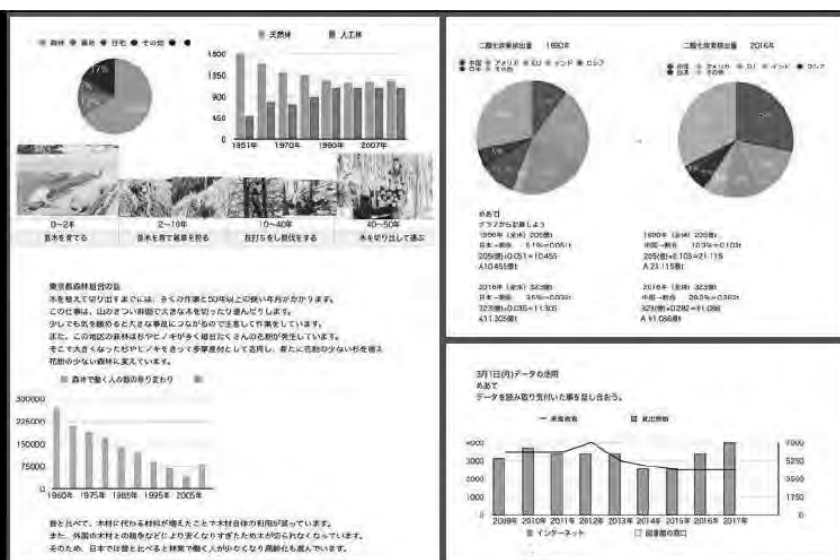
×3

時速→1時間あたり
分速→1分あたり
秒速→1秒あたり
に進む道のり
で表した
速さ。

自分でも驚いたそうです。劣等感でいっぱいだったこの子の授業の受け方が全く変わっていくわけです。キーボードを打つのもどんどん上手になります。わずか半年でこの子のノートはスライド47に変わりました。大人のノートと同じようになるわけですね。

(スライド47)

五年生男児のノート PC利用(半年後)



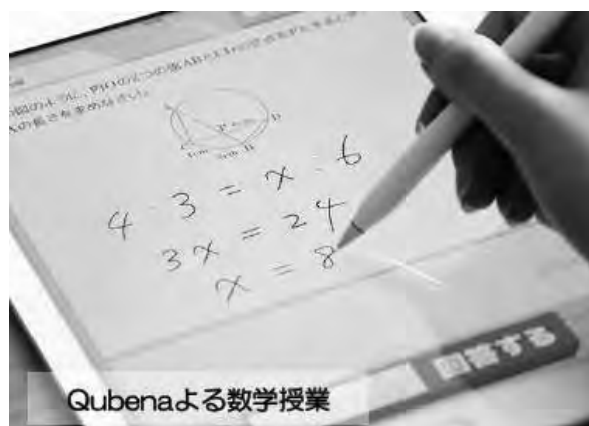
「筆箱の中には鉛筆を3本入れなさい、シャープペンシルはだめだよ」と言われている日本の子どもたち。「手はお膝の上、今は話を聞く時間、姿勢を正しくしなさい」と言われている子どもたち。子どもたちの授業規律・学習規律みたいなものがさんざん言われている日本の姿から、こういった小学5年生の姿は考えられないのではないかと、私は思います。

⑥自律型の教育へ

「学び方」=「将来の働くスタイル」。「学び方」は「将来の働くスタイル」にならなければならない。横浜創英では「スマホで写真を撮ってもいいですか?」といったことを生徒から聞かれます。そして、私が授業をするとき「録音してもいいよ」「写真撮ってもいいよ」「動画を撮ってもいいよ」と言います。「ただ、SNSに勝手に流さないでね、そこだけ頼むよ」という話です。将来、この生徒がどんなスタイルで生きていくのか、それを学べる場所でなければならない。私は数学の教員でしたが、欧米での数学は試験で電卓が使えるというのは普通のことでした。日本ではいまだに手計算でなければ大学受験ができない。それは「本当の目的は何?」ということが考えられない国だからこんなことが続けられているのだと思います。これからは学習者主体で、この生徒がどんなふうに世の中で生きていくかということを考えながら、「何を学んで、どう学ぶか」を考えていく時代になった。

先ほどのセッションでも Qubena のことが話されていましたが、麴町中学校も横浜創英も、数学は従来のように教師が教えてはいませんが、Qubena を使っている生徒もいます。学ぶスタイルは自由で、先生を呼んだり、学び合いですね、個別に学んでいるわけじゃない。今までの学習スタイルだったら、生徒の躓きを教員が気づかなければいけませんでした。この学習スタイルは、生徒が分からなかったら、「分からない」の瞬間を待ちます。(スライド 50)。

(スライド 50)



麴町中学校には、そもそも主体性を失った生徒たちがたくさん入学してきます。麴町中学校の1年生の姿は学級崩壊状態です。事実、私が赴任した1年目は、1年生4クラスのうち2クラスが学級崩壊。2年目も4クラスのうち2クラスが学級崩壊。3年目は4クラスのうち3クラスが学級崩壊でした。もうどうにもならなくて、リハビリを進めるための仕組みとして全員担任制という仕組みを考えて、学級崩壊が起こらなくなりましたが、そういう感じの生徒たちです。その生徒たちが、自ら学ぶというこの数学のスタイルによって、自分から質問するまでに7か月かかった生徒が麴町中学校にいました。でも自分の力で質問をした瞬間から学び方が劇的に変わって、わずか1か月半で1年生の内容を全部終えたという生徒がいます。

全くやる気を失っていた生徒が、復活をするまでにはそれなりの時間がかかるということです。

日本はわざわざ手をかけて、手をかけないと勉強しない子どもに育てる。さらに、その教え方が悪いと言われて、さらに教員たちはサービスをする。さらに当事者意識を失った子どもたちが育ち、という繰り返しです。つまりわれわれは自分で自分の首を絞めている。そんな教育を日本中が競争してやっている感じです。

3 自律型の子どもを育てるには

①自律型の人材を育てるポイントは心的安全性

残った時間で「自律型の子ども」を育てる方法について少しだけ具体的に落としていきます。

『自律する子の育て方』に書いてある一部を紹介します。

私は親向けに講演をするときに必ず言います。「お父さん、お母さん、子育ての目標は何ですか?」。そうすると皆さん悩みますが、私はこう始めます。「ひとことで言ったらこういうことですよ」と。「将来、人の力を上手に借りながら、自分の力で歩いていくことができるように育てていくこと」。そして「そのために、どんな力が必要かを考えているんでしょう」と。「でも最上位はこれですよ、どうやってこの子と離れるか、ということが目標なんですよ。この子を独り立ちさせていくことのために、どうやって手を放していこうか。その手の離し方が問題なんですよ」と言います。

でも、親って難しいんですね、私も子どもが2人いて、それぞれが家庭を持って自立して生活をしています、子どもたちが通り過ぎて行って初めて冷静に振り返ることができる。なかなか自分が親にいるときはわからないんです。頭の中ではわかっていてもどうやって手を離していけばいいんだろう、ということがわからなくなる。だからついつい人と比べて「うちの子は勉強ができないんじゃないか」「スポーツが苦手なんじゃないか」「バカにされるんじゃないか」といったことが先行して手を貸してしまう。頭でわかっていてもなかなかできない。

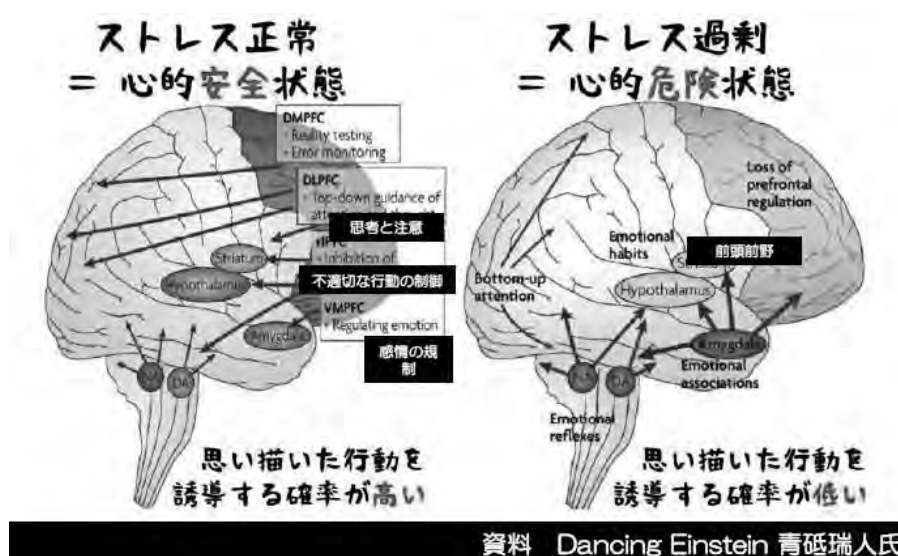
そこで麴町中学校もリハビリをするために、リハビリを阻害している仕組みそのものをいろいろと見直し、例えばテストは再テストが可能な方法に変えたり、宿題をなくしたりと、いろいろと変えていきました。何百項目にも渡りましたが、さまざまな仕組みを削っていきました。それでもどうしても苦手な部分がありました。すでにもう主体性を失った子どもたちを復活させるための技術がないんです。なぜかといったら、われわれ教員自身が子どもの頃から、がんばれ、がんばれと精神論で育てられてきているので、そのノウハウを持っていなかったんです。そこで利用したのは「脳神経科学」という理論的学問です。脳の研究は急激に進歩しています。本にも書きましたが、この10年だそうです、そのきっかけをつくったのはノーベル化学賞をとった下村侑博士（緑色蛍光タンパク質 GFP の発見と開発）です。その発見が医学世界で応用されています。脳神経科学でも応用されていて、脳のどの部位が活動しているのかが、脳の外から見て取れるようになったわけです。それによって分子レベルで脳が解明され始めています。「脳のどの部位がどんな機能を持ち、どんな環境アプローチでどう変化するのか」、または「短期記憶される場所はどこで、長期記憶に移るためにどこにその物質が移るのか」など、そんなレベルで脳が解明されつつあるわけです。だから精神論で「こうやればいいですよ」という職人技だった教員の技術が、完璧に理論的に解明されつつあるということです。特にヨーロッパ・アメリカを中心と

してその研究がどんどん進んでいる。企業もそうですね、それを基に人材育成が進んでいます。有名などころでは Google ですね。Google が、心理的安全性が担保されるとそのチームは創造的になるという研究発表をしたことはとても有名です。今日はその話を少しします。

スライド 60 は脳のモデル図です。左は心的安全状態で、右は心的危険状態です。心的安全状態のときに活性化しているのが、緑や青色の部分だといわれています。人間の進化の最後に得た大脳皮質や前頭葉といわれる部分らしいですが、そこにある機能は物事を思考したり注意を払ったり、不適切な行動を制御したり、感情をコントロールしたり、いわゆる最も人間らしい部分があります。ストレスが高まってくるとそういった部分が機能低下していく。特にある限界点を超えるとこの部分がまったく機能停止をするということがわかっているそうです。

つまり思考が停止し、不適切な行動も止められないし、感情もコントロールできなくなる。事実、大人でも最初は口喧嘩だったものが次第に興奮して、しまいには相手を殴ってしまうというのは、ストレス状態が極限までできてしまって、不適切な行動を制御できなくなる。「あんなに温厚な人間がなぜ手を出したんだろう」という場合は、それは脳がストップしたからです。極限状態までくると本能の脳に切り替わるそうです。スイッチが切り替わる。そうすると本能の脳は自分の生命を守るために攻撃性が増すか、または逃避する。大きくこの二つの特徴が現れてくるそうです。殴ってしまうのは攻撃性が出たということです。子どものころから怒鳴りまくる部活などで育てられた多くの子どもたちの脳は機能停止しやすい。「お前話聞いてんのかよ」と怒鳴る先生がいると思いますが、そういう状態は人間をストレス状態に持っていく。これが繰り返されると人間はだんだん慣れていくので、タフに堪える人間もたまにいますが、特に虐待を受けた子どもが大人になって虐待をするというのは、つまり子どものころから虐待を受けるとスライド 60 の右側の脳になりやすい。脳は何回も繰り返しているとそうなりやすくなるので、大人になっても自分の感情をコントロールしづらくなる。そういう人間になってしまいます。そうすると感情がコントロールできなくなるので、不適切な行動を制御できなくなって、例えば自分の息子を殴ってしまう。虐待が連鎖しやすいというのもこの脳の仕組みからわかってきます。

(スライド 60)



では、これは変えられないのかというと実は変えられるんです。そうなってしまった脳を変える力が実は教育にあるんですが、そこに話を移します。

これは Google が研究成果として出したものです。心理的安全性とか心的安全性、これがとても重要だということが最近いろんな本で言われています。それは今の脳の仕組みからも言えるわけです。心的安全状態は、脳が自由に活動する、成長しやすいということです。大きくそのポイントは二つありそうです。

一つ目は、家庭環境・学校環境が「失敗が許される環境づくり」をしているか。会社なら会社が、学校だったら職員室ですね。自分が働く場所は、失敗が許される環境づくりができているか。高信頼性組織という言い方をする方がたまに研究者でいます。ミスをしづらい環境づくりをするためには、実は日頃からミスが許される環境づくりの方が大きなミスがなくなる環境ができると、面白いことを言っている人がいます。チェルノブイリのような大きな事故が起きるときに、失敗を徹底的に許さないという環境づくりをするよりも、ある程度小さなミスが許される環境の中で、危険な状態をあぶり出すような仕組みを常に持っている職場の方が大きな失敗を起こさないということです。それも関係していると思います。

二つ目は、そうはいっても世の中はストレス状態で、いろんなストレスがある。その「環境に強い脳を育てることが大事」だ。それが人材育成のポイントになるわけです。

これは、子どもの育成もそうですし、部下の育成もそうです。私は校長だから職員を育てるときにこの意識を持っています。一つ目でいったら、人はミスをする、でもミスが起こった場合に、人がミスしやすい仕組みになっているから仕組みを責めろ、人を責めずに仕組みを責めろ、といった話です。ではそれぞれを詳しく説明します。

②失敗が許される環境づくり

まずは「失敗が許される環境づくり」の話です。ここですごく重要なポイントは自己決定です。子どもたちが自己決定をしているかどうかです。一斉教授型の授業はそもそも出だしから自己決定できないですね。何を学ぶかは与えられ、「今日はこれが大事だからこれを覚えろよ」となる。これでは主体的になりようがない。でも一斉教授型でもたったひとつ工夫するだけで変わります。授業の冒頭で「今日はこの1時間できみたちは何を学ぶの？」って聞くんですね。「何を学ぶ？どんなことを学んで帰る？」。そうすると、この1時間を自分がどういうふうに学ぶのかと意識されます。その次に「どんな方法で学ぶ？」と聞く先生がいます。私の知り合いに「教えない授業」で有名な先生がいますが、その先生はこのスタイルでよくやりますね。「今日はこの時間、この教材があるけど、今日は何を学んで帰りたい？ どういう方法で学ぶ？」って。学び方まで生徒たちに決めさせます。そんな方法をとっている人もいます。このように自己決定をさせていくことが大事です。先ほど言ったように麴町中学校のような学校ですと、小学校時代からすごく手をかけられているので、ある意味で、学校が大嫌いで、先生も信用できないし、信頼関係を失っていて、もう劣等感がいっぱいひねくれている。ひとことで言ったら、そんな感じの生徒が山ほどいます。

麴町中学校では、1学期は授業中に立ち上がる生徒はいるし、寝ている生徒はいるし、飛び出していく生徒はいるし、学校に破壊行為をする生徒もいます。受験して失敗した生徒が約8割です。さらに不登校だったり、転校してくる生徒が山ほどいる。毎年転校生が30人～40人出る学校です。外から転校してくるんです。そんな学校です。

そんな生徒たちの主体性を取り戻すために考えた三つのセリフ・言葉かけがあります。でもこれは教員がなかなか探しだせなくて、やっと絞り出して考えたのが次の三つの言葉です。

- ・ どうしたの？
- ・ きみはどうしたいの？
- ・ 何を支援してほしいの？

トラブルが起こるたびに「どうした？ 何か困ったことがあるか？」って聞くんですよ。

「君はどうしたいの？ 私になにか支援できることはある？」「何か支援してほしいことがあったら言って」と、この三つを繰り返すことにしました。教室を飛び出していった生徒が、「あの先生が気に食わなくてぼくは出てきたんだ」と話したら、「ああそうか。それでどうしたいの君は？」「これから教室に戻る？ 戻らない？」「そうだな、私だったら君に支援できるとしたら、別室を用意してあげることができるけど、どうする？」と。生徒が「じゃあ別室に行かせてください」と。小さなこんな自己決定でいいんです。教員たちは生徒に命令形ではなく、自己決定させようと工夫しました。この自己決定の積み重ねが脳科学的にも自己肯定感を必ず高めます。自己決定なしに、自己肯定感が高まらないということです。最近どこかの大学でも同じ研究成果を公表していました。

③環境に強い脳をつくる

次のポイントは「環境に強い脳をつくるためには」ということです。ひとことで言ったら「自分自身をもう一人の自分で見える力」、自分を俯瞰する力です。専門用語ではメタ認知能力と言います。そして「自分を責めない、他人も責めない」ことが大事です。日本は「自分を見つめて反省しろ」と言ってしまう。大事なのは反省する力じゃないんです。例えば今日ご参加の皆さんに、「自分で考えて行動していますか」と言うと、これは大人でも難しいんですよ。自分で考えて行動しているようで、実は違っている。無意識が自分を動かしている。ついついネガティブなことを考えやすい人がいます。ついつい失敗を思い出したがる教員がいるし、ついつい否定的に物事を捉えてしまう傾向があったり、やろうと思ったことができない。自分で考えて行動しているようで実はそうじゃない。わかりやすい例が「三日坊主」です。今日ご参加の皆さんで「三日坊主」になったことはない、という方はいないと思います。なぜかというと、人間は三日坊主になるからです。でも子どもたちは三日坊主になることをとっても嫌がっています。なぜかというと、日本はそういう学校教育の文化だからです。「何でダメなんだ」「何でできない」「もっとがんばれよ」みたいなことですね。うまくできないと、がんばっていないことになると紐づけてしまうんです。でも「自分を責めない、他人も責めない」という仕組みをきちんと教えると、子どもたちは変わっていきます。

麴町中学校でやった授業を一部紹介しますが、横浜創英でも同じ授業をやっています。私が直接授業をすることがありますが、それはこのような感じです。

「脳はもともと新しいことが大嫌いなんだよ。なぜかというシナプスがつながってないから。新しいことをやるための回路がもともとできてないから、すごくエネルギーを使うんだって。人間の脳ってというのは、エネルギーの25%を使うらしいよ。つまり人間ってものすごく省エネになっているんだな。それで10歳ぐらいまではこの回路は充分つながるんだけど、10歳を過ぎると新しい回路ができづらくなるし、使わない回路は切っていく。そんなふうに人間はできているらしいよ。だから、君らが三日坊主になるのは、君が悪いんじゃない」。

皆びっくりします。今まで小学校時代からずっと責められ続けている生徒たちで、自己肯定感が高まらない教育を受けていた。教師は常に精神論で教えているからです。

「でもね、行動を何度も何度も繰り返しているうちにシナプスはつながりやすくなるんだって。それはそうだ、電気信号で新しい最短の回路ができる。そうするとそのうちそこは太くなって行って、意識しなくてもできるようになる。例えばピアノで、楽譜を見ながら指を動かしていたのが、繰り返しているうちに楽譜を見るだけで勝手に指が動くところまで回路がつくられる。人間ってすごいね」

三日坊主って「続けられないこと」を言うけれど、「じゃ、克服する方法は？」。それは「続けるしかないってことでしょ。変だね」って話ですね。

「じゃ、どうすればいいんでしょう。うまい人間がいるんだな。例えばイチロー君」。今は「イチロー」と言ってもわからない生徒がいますが、「ルーティンって聞いたことはある？ イチローは、がんばれない自分を知っているからルーティンをつくるんだよ。では、大谷君は知っているだろう？」と。

彼は高校時代に「マンダラート」をつくり、自分が見えるところに貼っておいた。高校1年の15歳か16歳のときに彼は「将来ドラフト1位で8球団から指名されたい」という目標をつくり、それを実現するための8つの目標を立てた。その8つの目標それぞれに、さらに8つの目標を立てた。例えば「体をつくるために夜は7杯、朝は3杯のごはんを食べる」、「160キロの球を投げたい」と、すでに高校1年生のときに目標を立て、そのための方法も書いていました。また「運に強い人間になるために部屋の掃除やごみ拾いをする」とあって、メジャーリーグに行った今もごみ拾いをするわけです。彼がなぜこれを貼ったかという、忘れてしまう自分を知っていたからです。見て繰り返して行動に移すということを何度も何度もやっているうちに回路ができいく。それが自分自身になっていく。心が自分をつくるんじゃないくて、行動の繰り返しで自分をつくっていく。そこに気がついている人間こそが、スーパーになっていくということです。

私が大好きなダルビッシュ君も、自分を冷静に見るために機械を使います。最もいいフォームをつくるために、投げた球についてすぐに、回転、角度、スピード、回転速度、軌道、回転軸、

そういったものを瞬時に機械で分析し、それを見て、そのデータと自分のフォームと結びつけていく作業をメモしながら最もいいフォームをつくっていく、ということをしています。

それからこの本に書きましたが、佐官のプロフェッショナルになるためには通常 10 年かかる。「原田佐官工業所」では、ここに若者が就職してくるとわずか 2 か月で仕事を覚え、4 か月で現場に出ます。そして 3 年も経つと 10 年ぐらいのプロフェッショナルな技術を身につけます。それどころかデザイン性を重視する会社なので、さまざまな依頼に対して独自のデザインをつくりながら面白い佐官業をしているという会社です。この会社も機械を使います。熟練の職人の動きをビデオで撮り、それをスマホに入れて自分の姿と見比べながら最短で最もいいフォームを身につける。なぜ昔、日本の職人が 10 年もかかったかという、寄り道をするからですね。悪い癖がついてから、その回路を断ち切って、また新たな回路をつくりながら、職人技を身につけなければならなかったからで、それで時間がかかった。これはモデリングという手法です。

そのように生徒たちにとって大事なのは、自分を見つめて反省することではなく、ありのままを受け入れて、自分だけの仕掛けをつくっていくこと。それがとても重要な時代です。今のヨーロッパは脳科学を利用しながら、そういった教育を進めようとしています。

こんなことがわかってくると、例えば日本だったら「思いやりの心」で教えてきたことも実はスキルで教えることができます。行動を変えることです。

「でもね、行動を繰り返していると、悪いことでも意識しなくてもできるようになってくるんだよ。残念ながら人間の脳は自分に都合の悪いものに敏感にできている。例えばね、悪い経験を 1 回でもすると、それを何度でも思い出したがる。つまり記憶にとっても定着しやすいので、失敗経験が何度も思い出されるのでとっても臆病になりがちだ。それに、どうしても人と比べたがって、うらやましく思ったり妬んだりもする。人の悪いところも気になるから悪口を言いやすくなる。ついつい口から出る。友達同士で集まって人の悪口ばかりを言っていると、それが何回も何回も脳に繰り返されるので、そんなことを繰り返していると脳がネガティブになってしまうんだよね」

そうすると、「そういう自分にはなりたくない」って生徒たち皆が思うんです。

「ネガティブな行動はネガティブな無意識を定着させてしまうから、それを変えたいと思ったらどうすればいいか？ それは、仕掛けをつくり、望ましい言動を繰り返せばいいんだよ、そうしたら書き換えられるから。そういう仕掛けをつくっていくのが大事なんだよ」と言います。

繰り返しというのは、経験とスキルを積み重ねていって、それを繰り返していくと、その後の人生で再現できる力に変化していく。脳科学的にみたら、メタ認知能力とは、実は「自分を俯瞰的に見て、良い方向に上書きしていく」というところまで含めて捉えるのが正しい。私は脳科学を勉強する前までは、心理学でこの「メタ認知能力」という言葉に何回も出会っていて、メタとは「より高次なところから自分を見る」という言葉だとは知っていましたが、どうしても腑に落ちませんでした。でもやっとわかったのは、メタ認知能力とは「自分を俯瞰的にみてそれを反省

することではなくて、どうやったらそれを書き換えることができるかと、仕掛けを考えて繰り返していく、そこまでの力をメタ認知能力という」、ということです。

教員の仕事はとても面白い仕事です。自分のメタ認知能力が高くないと、子どものメタ認知能力を高められないんですが、子どものメタ認知能力を高めていく作業をしていると、自分自身のメタ認知能力が上がっていくという面白いことが起こります。だからすごく素敵な仕事だと思います。

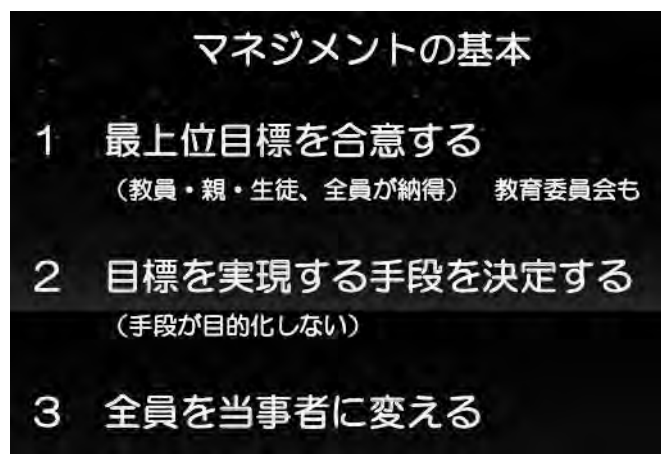
4 学校を変える

①マネジメントの基本

最後に「学校を変える」という視点で話します。皆さんは中堅どころでがんばっている先生方が多そうなので、この話をして終わりたいと思います。

横浜創英に着任して1年ちょっと経ちました。マネジメントの基本は、職員皆で最上位目標に合意することです。公立なら教育委員会もありますね。教員・親・生徒の全員が納得する最上位目標に合意することです。そして次は、それを実現する手段を皆で考えようということです。ただし手段が目的化してしまうこともよく知って、「だとしたら、これは間違っているから何らかの方向に変えなきゃいけない。手段を変えていく方法を考えよう」という組織に変えていくことです。これを全員でやる、この三つです（スライド 89）。この三つがあったら学校は絶対に変わります。

（スライド 89）



私にこう質問をする方がいます。「先生には逆風はなかったんですか？ 反対者がいっぱいいたのでは」と。そもそもその考え方はとても日本的です。人は皆、違っているんです。当然そこには対立もジレンマも起こる。一見意見が対立しているように見えても、日本は意見・考え方・価値観が対立すると感情の対立に直結してしまいます。おそらく子どものころから心の教育で教えられているから、「和が大事」とか、「心一つに」とか「きずな」とか、そういった言葉で片づけたくなるんですよ。「和」がないと仕事ができないと思っている人たちがいるんです。皆が仲

よくないと仕事ができないと勘違いする人がいます。もともと人は考え方が違って対立するのが当たり前だという原点に立たないと国際的な人間にはなれない。ましてや戦争をなくすようなことはできない。そこで OECD がつくった教育目標をもう一度思い出してください。「世界中の学校教育があのように変わったら、もしかしたら本当に平和がくるかもしれない」という話です。職員室でたかだか起こる対立を、対立だと思って合意ができないようなら、世界に平和なんかはくるわけがない。そういう意志を教員が持たなきゃいけないということです。そのために自分の教室で起こっていることが、未来の社会そのものだという自覚を持つことが大事です。今、横浜創英ではそのことを教員一人ひとりが意識し始めました。いろんなアイディアが出てきています。職員会議なんか、あっという間に終わります。運営委員会なんて開かれないときもありますね。毎週 1 回ですが、10 分もかからないときもあります。「今週は中止ね」といった感じです。なぜかという、自己決定権が教員に委ねられているからです。

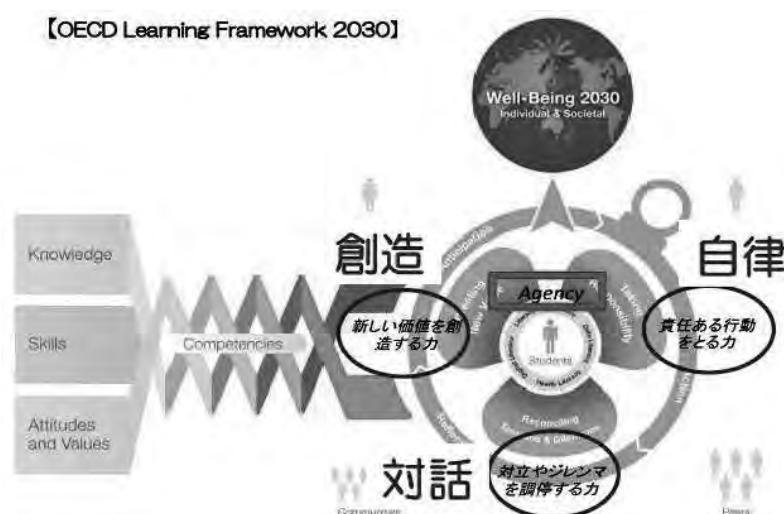
校長がやる仕事は、最上位目標の実現のために、一步でも後戻りをしたらストップをかけること。半歩でも前に進むなら私は全部 GO サインを出します。半歩でも進めることをやろうとするときに、職員の中に反対をする人がいたら、「それは対話をしなさい、一見対立しているようだけど、感情的にならなきゃいいだけの話しでしょ」です。ダメな学校は、職員会議で大声を出す教員がいます。怒鳴ればなんとかなる、マウントを取るといった教員がいたりするわけですが、そもそもそれは国際的ではありません。対立は当たり前で、対話をして合意する。それを冷静に考えよう。感情と考え方の違いを切り分けよう。よかれと思ってやっていない教員なんてただの 1 人もいないと思うんですよ。悪意を持っている教員は基本的にいませんね。皆がよかれと思ってやっているのだから、上位のところでは必ず握手ができるはず。こんなことを皆さんが考えていけば自分の学校を、どこでも変えていくことができると思います。

②横浜創英の取り組み

横浜創英は最上位の目標を 1 年かけて設定しました。OECD の目標をベースにして三つの目標を立て直しました（スライド 91・92）。

（スライド 91）

【OECD Learning Framework 2030】



(スライド 92)

教育目標	
自律	自ら考え、判断し、決定し、行動する
対話	多様性を尊重し、対話を通して対立・ジレンマを解決する
創造	問題を解決するために情報や技術等を活用し、新たな価値を生み出す

さらにこれを具現化するために、がんばったとか、壁を乗り越えたとかの精神論を削っていきう。精神主義で教育することを止めようと、生徒たちに向けて九つのスキルとして1年間かけてやっと整理しました（スライド 94）。

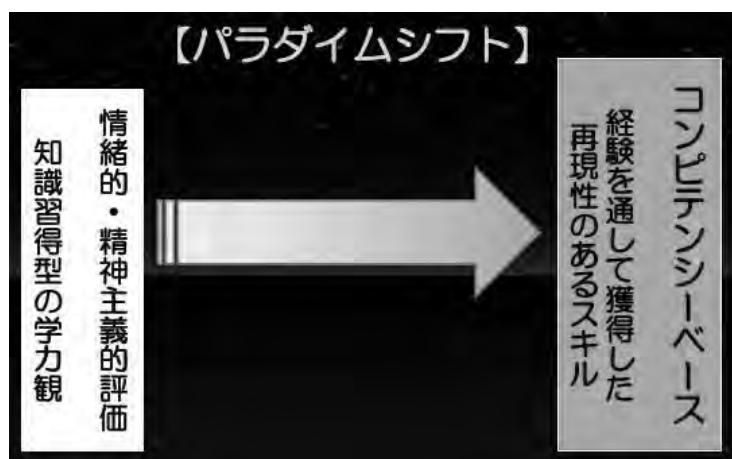
(スライド 94)

横浜創英が重視する9つのスキル	
【自律】	
目標の実現に向けて、見通しを持って計画的に実行する	(PDCA)
自らの思考・行動を適切に理解し、調整・工夫する	(メタ認知能力)
自らの感情と言動をコントロールする	(セルフコントロール)
【対話】	
他者の立場や考え方の違いを理解し尊重する	(リスペクト)
対話を通して他者との共通の目的を見つけ出す	(パブリックリレーションズ)
共通の目的の実現のために他者と協働する	(コラボレーション)
【創造】	
新しい価値の創造に向け、言語や技能を使いこなす	(クリエイティビティ)
本質を見極めるために自分や他者の考えを吟味する	(クリティカルシンキング)
信頼できる情報を収集・吟味し、適切に活用する	(情報リテラシー)

「自律」とはPDCAを回すこと、メタ認知能力、セルフコントロール。「対話」は相手をリスペクトすること、それから次の二つ目が日本語に訳がないんですが、「対話を通して他者との共通の目的を見つけ出す」という概念。日本語に言語化されていません、パブリックリレーションズという言葉にしましたが、その力。それからコラボレーションする力。「創造」としては、クリエイティビティ、クリティカルシンキング、情報リテラシー、といった力です。

今、横浜創英が進めているのは、「情緒的・精神主義的評価」「知識習得型の学力観」から、「経験を通して獲得した再現性のあるスキル」を何度も繰り返すことで、その後の人生で繰り返して実現できるスキルを言語化し、自分の言葉として認知できるといった生徒を育てようとしています（スライド 95）。

(スライド 95)



横浜創英は、もともとはサービス提供型教育の「手とり足とり」の学校でした。それを今は「自律型教育」に変えています。「足し算の curriculum」から「引き算の curriculum」です。そして、学校で受験勉強を完結させるために、学校の中で生徒の自由時間をどう生み出すのかを模索、研究しています。

最後に、日本財団が行った「18 歳意識調査」です。まだ横浜創英では調査をしていないのですが、麴町中学校でやった調査結果です。私が最後の年、今から 2 年前の生徒たちに調査したものにになります。中学 3 年生（15 歳）なので、18 歳には 3 年も早いのですが、次のような調査結果でした。

- ・「自分を大人だと思いますか？」の質問は中学 3 年生が 30.2%、これは日本の高校生の数値 29.1%を超えています。

- ・「自分は責任がある社会の一員だと思いますか？」中学 3 年生 53.3%、高校生は 44.8%。

- ・「将来の夢を持っている」中学 3 年生が 75.5%、高校生は 60.1%。

残りの 3 つがとても特徴的です。

- ・「自分で国や社会を変えられると思う」中学 3 年生 50.5%、高校生 18.3%。麴町中学校の 3 年生の数値が高いのはなぜかというと、学校運営の一部を生徒たちに与えているからです。「主権者教育をするために、政治教育を取り入れよう」と言う人がいますが、それは大きな間違いだと思っています。そのことが主権者意識を高めるんじゃないですね。主権者意識を高めるんだったら、学校運営を生徒たちにあげればいいだけです。自分たちが生きている社会を自分事にしてあげる作業こそが、将来自分で国や社会を変えられると思う生徒たちが育つということだと思います。

- ・「自分の国や社会に解決したい社会議題がある」中学 3 年生 83.0%、高校生 46.4%。

- ・「社会課題について、家族や友人や周りの人と積極的に議論している」中学 3 年生 57.6%、高校生 27.2%。

横浜創英もこういう教育にシフトをし始めたということです。以上で話を終えたいと思います。ありがとうございました。

(終わり)

【質疑応答】

一皆川 参加者からのご意見を拾いながら少しお話を伺いたと思います。

・目的を失わないように常に意識しているつもりですが、改めて考えなおしたい

ということですが、「目的を意識するマインド」はどのように考えていけばいいでしょうか。

一工藤 難しいかもしれませんが、そういう習慣がついていないからですね。例えばフィンランドの子どもたちは、ある本によると、小さいころから「ミクシー、ミクシー」って呼ばれているそうです。意味は「なぜ？ なぜ？」ということらしいです。小さい頃から常に「なぜ？」と言うし、教員も「なぜ？」と言う。「なぜそういうの？ 何のためにやるの？」という質問がとっても多いわけです。そうやって訓練されている子どもたちは脳にその回路が出来ますよ。

逆に私たちは「考えるな」という教育をしているわけですね。最短距離で、大学受験で合格できる方法を覚えろと言っている教育が、主流になっているわけだから、「言うことを聞きなさい」、「宿題をやりなさい、やらないと成績が落ちるよ」と脅される。つまり自律型の学習じゃないスタイルで学習規律を高め、生活規律を高めることを優先して、子どもたちが従順に言うことを聞くという教育を成り立たせるためのシステムづくりを行っているのだから、自律型の学習習慣はなくなってしまった。でも先生方がつくっている習慣は、実はなかなかうまくいかず、職員室での問題も「それは管理職が悪いからだ」という発想で終わってしまうんですね。質問の中にもいくつかあったんですが、例えばあることにこだわっている管理職がいて、「その方針は違うんじゃないか」と思っている職員がいる。この場合、職員が真っ向から「それは違うと思うんですよ」と言ったら、たぶん管理職は面白くないと思うから、感情的になって対立関係が深まるかもしれないですね。

日本の悪いところは、話し合いの技術を子どものころから学んでいないし、また小学校から真逆のことを教えていることなんです。例えば「対話」ということをどう教えているかというと、「相手の気持ちになって言葉を使いなさい」と、必ず思いやりの心をベースにしながら対話することを教えます。「人が話をしたら、うなずきながら聞きなさい」みたいなことも。「そうすると、相手が気持ちよく話せるよ」と。まあ、これらは心理学にもありますが、そういったことを重視しすぎるんです。そうすると考え方が違くとすぐにカーっとなる。それが嫌だから同質的な人間と集まりたがるわけです。同質の子どもたちが集まり、同じ悪口を言い、同じ話題で話す。そういうことになっていく。だから「心一つに」とか「きずな」という言葉を日本人が大好きなのは、そういった感情のもつれがとても嫌いで恐れているからで、同質的な人が集まる空間をつくりたがるわけです。つくっているのは、実はメディアだけでなく教員自身がつくっている、ということです。自分の教室でやたら「団結」ということを言いたがる教員たちは、とても日本的です。団結を求めるのは、自分の教室が自分を中心にしてしっかりまとまってほしいと勘違いするんですよ。「これが最高の教育環境だ」とずれていくんです。本当の目標は、自分の力で歩いていく子どもにしたいのに。固定担任制はその構造をつくりやすいのです。

対話には日本の場合二つの特徴があります。一つは、人間関係の折り合いをつけるための会話をしたがる。例えば6人のグループで話し合いをして1人がまとめて結果を発表するとき、6人

の意見が平等に、均一に入るようなまとめ方をする人が多い。もう一つは、その中にとっても面倒な人がいて、声がでかい、こだわりが強い人がいた場合で、さらにその人が力を持っていたりすると、その人の色をたくさん入れなきゃいけないと調整したりするんです。こういうのは、子どものころから「目的は何?」「何のためにこの話し合いをしてるんだっけ?」というところに戻って話し合いをする訓練ができていないからです。

それから民主的な考え方もそうなんですが、日本は戦後に民主主義的考え方を与えられたので、民主主義を自分たちで勝ち取ったという経験がありません。だから法律はお上が決めたもの、だから変えられないと思っている人が多い。例えば真夜中の道路の歩行者用赤信号で歩行者が立って待っている。車は一台も通らない。その場合に、「この状態の赤信号で待ちますか?」と言われたときに、日本だったら「待っていた方がいいかな」と答える人がけっこういると思います。外国では法律で「自己責任で渡ってもいいですよ」という国が多かったりします。その理由は、人間が安全のためにつくった法律だから、この法律は最終的には人間が選ぶことだから、安全だと判断したら赤でも渡っていいということになるんですね。一方で、日本人の場合は、自分はおかしいと思った、でも定めたものは、お上くれたものと考えます。全ての対立を調整するためにつくられるものが法律ですが、その法律は人間がつくったものだから自分たちで変えられるもの。自分たちが働きかけをすれば変えられるということを教えていかなきゃいけないんです。ですが、日本は小学校からまったく真逆なことをしています。

わかりやすい例ですが、このあいだ小学校の先生方を相手に講演をして、そのときに質問をしたんです。「自分のクラスで多数決を取ったことがある人」「自分のクラスで多数決を取ったことがない人」と聞きました。そしたら、小学校の先生は全員が多数決を取ったことがある、となりました。多数決を取ったことがない先生は一人もいませんでした。これはどういうことかと言うと、あることを決定するのに、話し合いが始まったら最後はみんなで多数決をとって、数が多い意見にまともだったらみんなで守ろう、と教えている。「それっておかしいってわかっていますか?」と聞きました。「多数決を取るというのはマイノリティを切り捨てることで、それを子ども時代から教えることになる。今の社会がもしマイノリティを切り捨てて数の論理で物事を決めていったら、おかしいですね、皆さんそう思わない? 自分の教室で、みんなで多数決で決めたことは守りなさいと言っているのは、そういう社会をつくりなさいと子どもたちに教えていることにならないの? 民主主義は数の力だと教えているんじゃないの?」と、言いました。多数決を取っていいのは、「A案でもB案でもどっちを選んでも全員がOKです」と、全員がそう思っているときだけです。それまでは徹底的に、誰一人取り残さないためにはどうするのが望ましいかと皆で対話をし続ける。

例えば、「A案に8割が賛成し、B案に賛成は2割だった。でもA案を取ると2割の人の利益を損ねる」としましょう。そして「この2割の人の意見を取ると、8割の人はNOではなくてB案でもいいや程度の人たちだった」とします。この場合、2割の人の意見を聞きながら、皆で対話をするのが、「対話」でしょ。つまり対話は折り合いをつけることじゃなくて、全員がOKなところを目指しながら、目的に沿って決定をしていく作業だ、ということを教えなきゃいけないんですよ。

日本は対話をするのが目的になっていたりします。今回だったら「主体的で対話的で深い学び」をするために対話をさせる場面をつくったりするわけです。探究の学習をするために探究をさせたりするわけです。目的を皆が見失っているんですね。「今から対話の場面です。対話をしましょう」ってことが目的になったりするということです。何のためにやるのかを見失ってくるということです。

麴町中学校の子どもたちは訓練されていて、それは概念化されています。言語化されているので言葉で出せます。中学3年生ぐらいになると生徒たちが、意見が割れてなかなか先に進まなくなったときに、「今おれたち手段にこだわっているから一度戻ろうぜ」「一回目標に戻ろうよ」って言います。「最初の目標に戻ってからこの話をしないか」って誰かが言ったりします。このように思考できるのは言語化されているからです。だからそういう言語化が職員集団にも必要だということです。

私が横浜創英に着任したばかりのころ、教員が校長室を訪ねてきて、「校長先生、これ止めましょうよ」って言いに来ました。そして一方でそのことを察知した教員が「止めようと言っている教員がいるけど、これは止めちゃだめだよ。これがうちの伝統だから」といった感じで言いに来ました。これは、どちらの教員もトップの私にその言葉を代弁してほしいという方法をとっているわけですね。これは未熟な組織です。「校長、学校としてどうするんですか？」って言うので私はこう言います、「学校って言うけど、きみも学校だろう」と。

そこでまずは最上位の目標を共有化するための研修を何回もやりました。何回も話し合いました。そして人間は感情的になるからそうならないための工夫もしようとして、「そこに有効的なのはブレストだよ。ブレインストーミングとKJ法はとても有効だからブレストはいつでもみんなで作ろう」と。そうすると意見を言いづらい若手もどんどん意見を言えるし、それをKJ法で取りあげていって、本質を見る訓練もできる。いつもブレストを中心にやろう、といったことを繰り返しているとだんだんと職員集団が慣れてきます。

さっきの2人の教員ですが、私のところにそれぞれが来ると、私はそれぞれにこう返しました。「それは勘違いだよ、管理職との間に対立軸が出来ているわけじゃないから。職員の間で対立してるんでしょ。でもそれは対立じゃない。だって2人とも良かれと思って言っていることだから。学校のために良かれと思って考えていることだから。一つ上に行ったら、一緒に手を握れるでしょ。たまたま考え方と手段が違うだけだよ」と。そして、「何か手段を変えるときは、必ず副作用とか副反応とかが出るわけで、それが出たときにどんな影響があるのか、それを課題解決するためにどんな方法が考えられるのかと、そこまで考えればいいことでしょう。それにはまず対話をして、とりあえずやってみようという集団にならないとダメよ」と返しました。その後1年も経たないうちに横浜創英の教員たちは、自分たちで対話をして決定することが出来るようになってきているんですよ。

こういった空間はわずか1年で出来るのだから、もし「管理職は、わからず屋だ」と思う先生がいたら、その管理職がNOと言わないところから始めることですね。直でいくと、もう感情的になってダメな人っているんですよ。戦略を考えなきゃだめです。どこからどういう聞き方をし

たらこの人を巻き込めるかと、戦略を練っていくとでも言うのかな。そんなことが大事なかなと思います。

―皆川 はい、ありがとうございます。

・本来の対話の手法（「なぜ・何のために」を大切にしたい話し合いの仕方・マインド）を組織に浸透させるために工夫したこと、働きかけたことはありますか。

この質問に対しては、先ほどブレストや KJ 法という紹介をしていただきました。

・「自律する生徒を育てるために、数学の一斉授業を廃止した」というお話がありました、Qubena のようなツールが無い学校でも同じようなことができるのでしょうか？

―工藤 問題ないですよ、出来ますよ。麴町中学校の場合は主体性、やる気を失った子どもたちをもう一回やる気にさせるために AI 型の教材は重要でした。中学 1 年生で Qubena を使っている生徒は 8 割いましたが、中学 3 年生は 2 割ぐらいしかいませんでした。中学 3 年になると、もう高校の内容をやっている子もいました。Qubena は高校まであるので使っていってもいいんですが、Qubena を使っている子もいれば、問題集を使っている子もいました。麴町中学校の 3 年生で塾に通っている生徒がいて、その生徒は塾の問題集を持って来て勉強をしていました。学校の授業では教材も自分で選べるので。そうすると塾の問題集であっても、それを使って一つの教材として学校で勉強して、先生に質問をして答えてもらったり、友達と相談したりして考えるんです。その生徒は塾でも同じ教材を使うので効率的で、無駄がないですね。一つの教材の中でわかるものとわからないものを整理していく、ということを生徒は考える。

数学の授業なら、紙ベースのものでも出来ます。中高一貫校だったら中学 1 年生からそういう習慣さえつけたら、特に数学は問題解決型の学習なので出来ると思います。自分で教材を選んで、自分でどんなふうに勉強するかを決めていけばいい。

―皆川 Qubena も一つの手段でしかない、ということですね。生徒たちが自分で今使いたいものを選んで勉強していくというのが基本ですね。

―工藤 理科や社会で同じようなことをやろうとすれば、例えば高校で物理や化学を同じ方法でできるのかというと、大学受験に勝つだけであれば、「教えない授業」はできるかもしれない。

でもやっぱり理科や社会は自然科学、社会科学を学んでいくものなので、理科ならある事象・ある現象に対して、なぜこれが起こったんだろう、ということについて、おそらくこうじゃないかと仮説を立てて、データや過去の資料などいろんな資料をもとに検証していく作業をする。一連の科学的な思考を学んでいく教科だと思うので、そうするとやはり複数の人間で協働して学ぶことでその学びは深まっていくし視野も広まる。拡散と収束が繰り返されて、その中で科学的思考を学んでいく。理科・社会においては数学のように単純化されたものではない。また、国語・英語においては言語なので、また学び方は変わってくると思います。

いろんな自律型の学びを研究している方々が日本中に増えてきていて、そういったものを駆使していくと、面白い授業ができるんじゃないですかね。

日本って、この授業を理解させるためには予習が必要で復習が必要でと、これをあたり前だと思っている先生が多いんです。でも子どもたちは授業をきっかけだと思っていて、この授業で受験勉強に必要なものを学んでしまおうと思う子は少なかったりします。授業時間にノートを取っ

たりもしますが、もしそのノートを将来見ないとしたら、このノートを取る時間はもったいないです。参考書があったら参考書よりも、りっぱなノートをつくれるわけじゃないですから。いい参考書があればそれで十分です。だったら、参考書をセットにしながら学ぶ、覚えてしまうという授業スタイルの方がはるかにいいかもしれない。勉強するというのを時間をかけることだと勘違いしているのかもしれないですね。それは非効率だと思います。

一皆川 そろそろ時間がきてしまいました。全部の質問にお答えできないのが申し訳ないですが、「いいね」が一番ついている質問を最後をお願いします。

・職員室の中でも同様、やらされる資格指導や補習など…経験のためだから何でもやれとおしつけてくる上司や先輩がいます。まったく納得がいかないので、何のためですかと繰り返し対話を進めようとする上司は感情的になり合意形成が断絶されます。このようなケース、工藤先生はどのようなアプローチが有効だとお考えですか？

一工藤 これはさっき教員の対立の話に出たものですね。「…な上司や先輩がいます」とあるので、この場合は本質論を話していない学校だからですね。つまり、質問者がこの意見が対立する部分だけ取り上げて戦ったら、感情的になる相手もいますよ。良かれと思って相手も言っているわけですから。「やらされる資格指導や補習」は、相手は「良かれと思って」いるんです。それが大事だと思っている上司や先輩に「それは違いますよね」と言ったら対立関係になりますね。また、この対立が単なる対立関係で終わる学校、そういう風土で心的安全状態が保たれた環境ならいいんですが、日本はこれがとても苦手なので、反対意見を言うことは「お前は同質ではない」となって、感情的なもつれになりやすいです。だからそうならないような訓練を集団としてやっておく必要がある。学校の中には研修担当といった教員がいますよね、その担当がどんな研修をするかがすごく大事なんですよ。管理職を巻き込んで、本質論が語れて、皆が気持ちよくやれて、反対意見を言ってもまったく OK だったという仕掛けをつくっていくことぐらいから始めるといいと思います。直接のところに戦いを挑んでいったら、だいたいうまくいかないですね。そこは戦略が要るということです。一番新しく出した本で、鴻上 尚史さんと一緒に書いた本『学校ってなんだ！日本の教育はなぜ息苦しいのか』講談社現代新書)の中でその戦略について書いています。もし興味がある方は読んでいただけたらと思います。

一皆川 ありがとうございます。では時間となりました。工藤先生のお話を聞いて皆さん自分のことを振り返って、いい方向に上書きしていく、メタ認知ができるひとつのきっかけになると思います。ぜひやっていただければと思います。工藤先生、どうもありがとうございました。

(終わり)

第14回キャリア教育推進フォーラム 報告書

「自律型学習者を育てるために学校教育ができること」

東京／自由が丘開催 岡山開催

発行日 2022年1月

発行 産業能率大学 入試企画部 企画課

〒158-8630 東京都世田谷区等々力 6-39-15

TEL03-3704-0731 FAX03-3704-9766

<https://www.sanno.ac.jp>

(禁無断転載・転用・複写)
